西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

――緊急発掘調査報告――

東方A・村岡北・村岡南
常輪寺下・北条遺跡

1975

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

序

最近，各地区で文化財保護思想の高揚がさけばれているなかで，伊那市西春近地区に於ても西部開発（畑地帯総合土地改良事業）が進められるにあたり，東方Ａ，村岡北，村岡南，常輪寺下，北条遺跡の緊急発掘調査が出来た事は誠に喜ばしい事でありました。

前述した五遺跡は国鉄飯田線下島駅より西方へ0.5㎞～2㎞の距離に含まれ，通称，長野県伊那市西春近小出地籍に属しているところで，西に権現山，小黒川をへだてた北側には経ケ岳が連らなっている景勝の地であり，また扇状地の発達した地でもあります。

北側は小黒川，南側は戸沢川の二河川にはさまれた地であり，水は豊富で，日当りも良好で，生活するうえで，極めて，かっこうな場所であったと思われます。

遺跡地指定への契機は，以前畑地を水田化する時に附近より相当量の遺物が発見されており，従って発掘の予測はそれらの遺物に関連した住居址群の内容を明らかにする事が期待されていた。

調査に当っては，仮換地という型がとられたために，地元，土地改良区役員の理解を得なければ調査は不可能であったが，数人の役員の方から，こころよく全面的な協力を得ることができたので，市としては　調査団長に　宮田村南割　友野良一先生をお願いすることにきめ，御依頼申し上げたところ，御多忙の先生が快よくお引受け下されたので夫々調査員を委嘱しました。

発掘調査は６月下旬～７月中旬と，10月中旬から12月にわたって行なわれ，前者はちょうど梅雨時だったので，連日雨に悩まされ，後者は寒さに悩まされたが，ここに調査報告書が発刊されたことは誠に喜ばしい次第であります。

発掘調査の成果については報告書の内容を参考にしていただきたいと思います。

最後に，後世に貴重な資料として調査報告書が発刊されるに当り，快よく御指導頂いた県教育委員会，並びに南信土地改良事務所，連日熱心に調査に当られた調査団の先生方，快よく発掘を承諾された地元役員の方々，調査に労力を提供下さった地元西春近地区作業員の皆様等の心からなる絶大な御協力があったればこそと，深甚なる感謝の意を表する次第であります。

昭和50年３月20日

伊那市教育委員会

教育長　松　沢　一　美

東方A遺跡

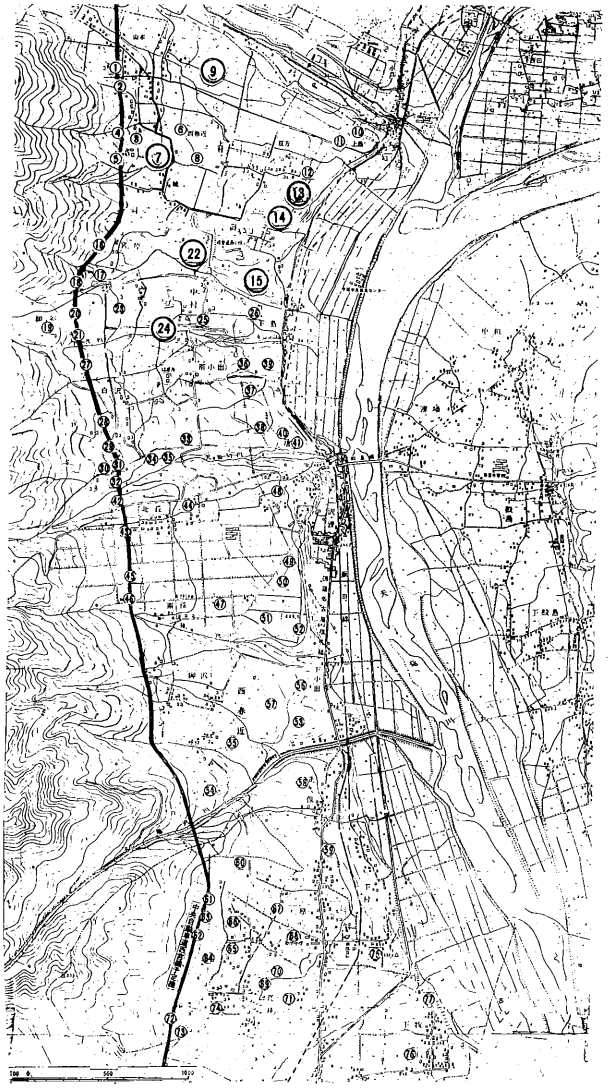
第Ⅰ章　まえがき　東方A・村岡北・村岡南・常輪寺下・北条遺跡の環境

第1節　位　　置

東方A遺跡は長野県伊那市西春近東方部落，村岡北・村岡南遺跡は西春近村岡部落，常輪寺下遺跡は西春近山本・城部落，北条遺跡は西春近山本部落にそれぞれ所在している。これらの遺跡地までの道順は飯田線下島駅で降り，西側の段丘を登り，北西へ0.5㎞～2㎞の距離に含まれる。

遺跡の名称

1	城平上	40	唐木原
2	城　平	41	唐木古墳
3	常輪寺	42	北丘B
4	宮　林	43	北丘A
5	山の根	44	北丘C
6	山　本	45	南丘B
7	常輪寺下	46	南丘A
8	上　村	47	南丘C
9	北　条	48	眼田原
10	上島下	49	山の神
11	上　島	50	上の塚
12	東方B	51	沢渡南原
13	東方A	52	下小出原
14	村岡北	53	天伯原
15	村岡南	54	南　村
16	大　境	55	東　田
17	中　原	56	天　伯
18	百　刈	57	下小出原
19	西垣外	58	井の久保
20	細ケ谷A	59	表木原
21	細ケ谷B	60	山の下
22	小出城	61	菖浦沢
23	宮ノ原	62	富士山下
24	浜射場	63	富士塚
25	中　村	64	広垣外1
26	中村東	65	広垣外2
27	山寺垣外	66	鳥井田
28	白沢原	67	高遠道
29	名　廻	68	西春近南小学校附近
30	名廻西古墳		
31	名廻東古墳	69	安岡城
32	名廻南	70	城の腰
33	児　塚	71	横　吹
34	鎮護塚	72	和　手
35	西古墳 鎮護塚	73	上手南
		74	宮入口
36	東古墳 カンバ垣外	75	寺　村
		76	下　牧
37	丸　山	77	下牧経塚
38	南小出南原		
39	薬師堂		



第1図　位置及び遺跡分布図

第2節　地形・地質

伊那谷に共通する大まかな地形は，西に木曽山脈（中央アルプス），東に赤石山脈（南アルプス）とその前山である伊那山脈とにはさまれた形で南北に細長く展開している。これらの両山脈の最下部には源を諏訪湖に発し，延々と二百数十kmを流れ，太平洋に注ぐ天竜川が各所にわたって蛇行しながら，満々と水をたたえて流れている。天竜川の両岸には数段にわたって河岸段丘や複合扇状地が発達し，伊那谷特有の段丘地形を呈している。

天竜川に合流する支流は竜西地区では北より，横川川，深沢川，帯無川，大泉川，小沢川，小黒川，犬田切川，藤沢川，大田切川，中田切川，与田切川，松川等であり，竜東地区では同じく北より，沢底川，一ノ沢川，棚沢川，三峰川，小渋川等である。

五遺跡地の所在する長野県伊那市西春近小出地籍は西は権現山塊（1749 m）をまともに仰ぎ見るのが可能である景勝の地であり，北は小黒川，南は戸沢川の間の段丘上と権現山麓より発達した山麓扇状地といわゆる複合扇状地上に位置している。

同台地は標高600 m～700 m で，小戸沢，犬田切川，藤沢川，大田切川等の連合堆積物であり，段丘は下島，沢渡附近は一段であるが，南部では二段に分れている。表面は東に向って18分の１と云う比較的急な傾斜を示している。現在，幼年谷に切開されて地表は幾つかの小さな耕地に分断されている。

岩石の点から調査してみると，小黒川と犬田切川は花崗岩，戸沢川はホルンヘルスが異々としていた。さらに遺跡地の微地形をみると，東方Ａ，村岡北，村岡南遺跡は天竜川と戸沢川の段丘上に，常輪寺下遺跡は複合扇状地上に，北条遺跡は複合扇状地と小黒川段丘上に位置している。

第3節　歴史的環境

東方Ａ，村岡北，村岡南，常輪寺下，北条遺跡について，考古学的な面と，歴史的学的な面とでメスを入れてみることにしよう。発掘調査以前に発見された遺物について述べてみよう。

東方Ａ遺跡は縄文後期と青磁片，村岡北遺跡は縄文中期，宋銭，村岡南遺跡は縄文中期，常輪寺下遺跡は縄文中期，土師器，須恵器，北条遺跡は須恵器，硯等である。

東方Ａ遺跡について青磁片の発見が注目できよう。その理由として常輪寺創建について，『寺傳古記録・常円寺誌』によれば，『当時，小出東形の地に大通院と称した古寺があってこれを再建し大通院常輪寺と名づけて，これに守本尊の華厳釈迦如来を安置し，開基となった』と記載されている。青磁の使用階級層を考えてみるに，当時では武士階級と寺社に限られているように思える。したがって，１片の青磁片ではあるが，前述した古記録の意義，内容といくらか関係があるのと推定できるように思われる。

村岡北遺跡について発掘前に古老の話をきいて参考に資したいと思い，きいてみるに古老の言うことに『この近くの水田は久根丘，久根下という小字名がある』ということであった。二つの小字名は館の近くに存在することは古くより知られていた。

また，明治10年頃に開田の際に掘ったという古銭について，唐木弥七氏宅を訪れ，古銭とそれを入れてあった壷を拝観させていただいた。古銭は全部で3300枚程出土し，開元通宝から朝鮮通宝まで各種にわたっていた。壷は美濃産の鉄釉であり，古銭と壷より，戦国時代あるいは桃山時代に埋められたものと思われた。発掘を実施してみると，我々の推察が的中して，濠が発掘され，館の存在が明らかとなった。

常輪寺全景

村岡南遺跡地の南端，戸沢川に面した段丘先端部にはあら城という小字名の存在が古くより伝承されていた。あら城に関しての調査は篠田徳登氏の『伊那の古城』によれば次のように記されている。『大戸沢の北岸台地高圧線塔のある所がそれで，ここから西，500m 位の所にある本城に対して新城であろう。来歴一切不明だが，館城だ。今は桑畑になり土塁のあとも定かでない。西の村道を下り戸沢川べりをさかのぼり城村に出る。堀を上って本城に登る。高さ5 m，三方を堀にかこまれ本城の周辺は土塁がぐるっとまわって入口は東にあった。今は約一反五畝位の平は桑畑となり，土手も大部崩されてしまっている。南は，深く恐わしい大戸沢川，北の屋敷を中城，ここにも堀があり，川が通っている。工藤地頭，地頭になる前の荘園の領主（荘官）の館址であったろう』

常輪寺下遺跡は西は常輪寺より東傾斜で展開した台地上にあり，南側は小出城と境を接している常輪寺創設，小出氏の居城であると推定される小出城との関係より中世遺構の存在性を重要視して発掘調査に着手したのである。

犬房丸の墓

発掘調査に取りくんでみると，期待した通り，各所にわたって柱穴がみつかり，遺物より柱穴群の時代背景がはっきりとしてきた。

遺物に関しては施釉陶器が多量に検出され，支配者階級の定住を確証できた。

中世における支配者階級としては武士か寺社に限られていると言っても過言ではなっ。

北条遺跡は古代，特に奈良時代から平安時代に至る東山道の道順として，あるいは倭名抄に記されている小村の郷と考えられている場所の一つと思われる。その理由としては調査員である御子柴泰正氏が数年前，当地より須恵質の円面硯を発見した点である。これを実現した名古屋大学助教授樽崎彰一氏の鑑定によれば，当地にはかなりの数の集落の存在性を指摘されていた。

（小池政美）

凡　　例

1. 今回の発掘調査は西部開発に伴なう，県営畑地帯総合土地改良事業で，第２次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。

2. この調査は，県営畑地帯総合土地改良事業に伴なう緊急発掘で，事業は長野県南信土地改良事務所の委託により，伊那市教育委員会が実施した。

3. 本調査は，昭和49年度中に業務を終了する義務があるため，報告書は図版を主体とし，文章記述もできるだけ簡略にし，資料の再検討は，後日の機会にゆずることにした。

4. 本文執筆者は，次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

友野良一　　小池政美　　御子柴泰正

○図版製作者

・遺構及び地形実測図　　友野良一　　小池政美

○写真撮影

・発掘及び遺構　　友野良一　　小池政美

・遺物　　友野良一　　小池政美

5. 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会があたった。

目　　次

序
凡　　例……（4）
目　　次……（5）
挿図目次……（6）
図表目次……（6）
図版目次……（6）

第Ⅰ章　発掘調査の経過……（7～9）

第1節　発掘調査の経緯……（7）
第2節　調査の組織……（7）
第3節　発掘日誌……（8）

第Ⅱ章　遺　　構……（10～17）

第1節　住居址……（10）
第2節　土拡及び柱穴群……（12）
第3節　竪　穴……（14）
第4節　溝状遺構……（15）
第5節　マウンド……（16）

第Ⅲ章　遺　　物……（18～19）

第1節　土　器……（18）
第2節　石　器……（19）

第Ⅳ章　まとめ……（20）

挿　図　目　次

第１図　位置及び遺跡分布図……（１）
第２図　遺構配置図……（10）
第３図　第２号住居址実測図……（11）
第４図　第１号住居址実測図……（12）
第５図　第１号土拡実測図……（13）
第６図　第２号土拡実測図……（13）
第７図　第３号土拡実測図　……（14）
第８図　第１号竪穴及び第１号溝状遺構実測図…（15）
第９図　第１号マウンド実測図……（16）
第10図　第２号マウンド実測図……（17）

図　表　目　次

第１表　出土土器の形状一覧表…（18）
第２表　出土土器の形状一覧表…（18）
第３表　出土土器の形状一覧表……（19）
第４表　出土石器の形状一覧表……（19）

図　版　目　次

図版１　遺跡全景……（21）
図版２　遺構配置及び遺構（住居址）……（22）
図版３　遺構（住居址及び土拡）……（23）
図版４　遺構（土拡，柱穴群，溝状遺構，竪穴）……（24）
図版５　遺構（マウンド）及び遺物出土状況 ……（25）
図版６　出土土器……（26）
図版７　出土土器……（26）
図版８　出土土器……（27）
図版９　出土石器……（27）

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査の経緯

西部開発事業（県営畑地帯総合土地改良事業）は昨年の上島，東方部落にわたって行なわれました。本年度は東方，村岡，城，山本部落にわたり，その面積は60数haに達している。

発掘調査は東方A，村岡北，村岡南，常輪寺下，北条の5遺跡が該当し，東方A遺跡と村岡北遺跡は夏に，村岡南遺跡，常輪寺下遺跡，北条遺跡は秋にそれぞれ実施されました。

西部開発（県営畑地帯総合土地改良事業）第9工区内の遺跡の調査を委託された場合は，受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり，おって南信土地改良事務所より，緊急発掘調査について委託した旨，市教育委員会へ依頼を受けたので，市教育委員会を中心に，東方A遺跡発掘調査会を結成し，この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

6月22日，南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節　調査の組織

東方A遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	松沢　一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	坂井　喜夫	伊那市教育委員長
〃	向山　雅重	長野県文化財専門委員
〃	木下　衛	上伊那教育会会長
〃	原　益久	南信土地改良事務所長
〃	辰野　伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	浦野　孝之	伊那市教育委員会社会教育課長
〃	保坂　九市	〃　課長補佐
〃	中村　幸子	〃　主事

発掘調査団

団長	友野　良一	日本考古学協会会員
副団長	根津　清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調査員	小池　政美	〃
〃	辰野　伝衛	伊那市文化財審議委員

調　査　員	清水　　満	長野県考古学会会員
〃	福沢　幸一	〃
〃	太田　　保	〃
〃	柴　登己夫	〃
〃	長瀬　康明	〃
〃	本田　秀明	〃
〃	堀口　貞幸	〃
〃	深沢　健一	〃
〃	丸山　弥生	国学院大学学生
〃	赤羽　義洋	〃
〃	石岡　憲雄	〃
〃	館野　　孝	〃

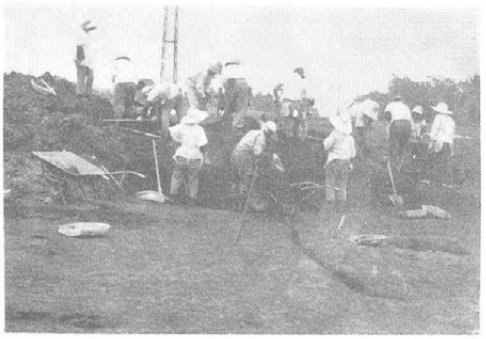
第3節　発掘日誌

昭和49年6月22日　遺跡地に発掘器材の運搬をし，発掘準備をする。

昭和49年6月23日　現地にグリットの設定をする。グリットの内訳は東から西にかけて1～10，南から北にかけてA～Zとする。グリット設定後，グリット掘りを実施してみると，遺物は縄文前期土器片が数片出土したのみであった。考えてみると，北から南への急傾斜地のために，遺跡立地条件からして存在しなくても当然であると思い，午前中一杯をもってこの地域のグリット掘りを中止する。午後，平坦面になりかけたところから，水田の中央部まで，表土剥ぎを実施すると，黒土の落ち込みがあり，これを第1号住居址とする。住居址のプラン確認と，掘り下げを行なう。

プランは四隅が丸い隅丸方形の形がくっきりと浮かび出て来て，初めて発掘に参加した作業員を喜ばした。掘り下げていくと，本址は弥生時代後期の座光寺原式と判明した。また珍らしい遺物として，有孔磨製石器が出土し，作業員一同，新らた弥生時代人の生活の知恵に一種の驚嘆を感じた。

昭和49年6月24日　第1号住居址の掘り下げと，ブルトーザーで排土した所を丁寧にジョレンや草カキでかき，遺構検出に力を注ぐ，第1号住居址の床面上にはこの時期としては割合に多くの遺物が出土し，ある作業員は遺物が発見されるたびに大声を張りあげていた。一応第1号住居址の完掘を終える。床面上に長円形状の柱穴が4隅に発見され，典型的な弥生時代後期の住居址となった。



発掘風景

ブルトーザーで押した所をかいていると，第1号住居址の北側に，小高くなったローム層がみられ，まわりは溝が回わっている模様であった。これはかの中央道で有名になったローマウンドと

考え，第１号マウンドと決めた。Ｖ２～Ｘ２にかけて，幅10cm，深さ10～30cm位の黒い落ち込みが南側に向けてコの字状に展開していた。これははたして何んであろうか，皆，頭をかしげるが，現在の所未知数であった。遺構に相違ないことと思い，一応溝状遺構と名付けた。溝状遺構の回っている中央より北によった所に円形状の黒々とした色の違いが判明し，これを第１号竪穴とする。

本日は遺構が次々と検出され，拡張してよかったという安心感に満ちあふれていた。

第１号住居址の西側に第１号土拡，北側に第２号土拡を検出した。第２号土拡の北西に第２号マウンド，その北側に第３号土拡を検出した。

昭和49年６月25日　本日は昨日検出された第１～第２号マウンド，溝状遺構，第１号竪穴，第１～第３号土拡の掘り下げを主たる作業とする。作業員達は手習れた人達だったので，みるまに仕上がっていった。溝状遺構を掘り下げていく途中で，北西の隅に炭化物が多く検出され，少し掘り下げてみると床面があり，しかも木炭や焼土が多量に認められ，遺構に違いないと思い，第２号住居址とする。ブルトーザーを入れれば簡単ではあるが，第２号住居址の南側に各種の遺構があり，それを入れると，破壊される危険性を生じるのを見込んで，人壊戦術にて北へ北へと拡張していく。作業員達の奮闘のかいであって，たちまちにしてプランの確認ができた。そのプランは円形で，直径は３ｍ程であった。掘り下げていくと，縄文前期終末期の住居址と判明し，上伊那地方でも数少なく，苦労のしがいがあったと思った。

作業員達の皆様にこの住居址の重要性を説明すると，コックリとうなずいてくれた一光景が誠に印象的であった。

昭和49年６月26日　第１号住居址，第２号住居址，第１号マウンド，第２号マウンド，第１号土拡，第２号土拡，第３号土拡，第１号竪穴，溝状遺構の清掃を終了し，写真撮影をすませる。

昭和49年６月27日　第１号住居址，第２号住居址，第１号マウンド，第２号マウンド，第１号土拡，第２号土拡，第３号土拡，第１号竪穴，溝状遺構の平面，断面実測をする。本日をもって，東方Ａ遺跡の現場作業を終了とする。　（小池政美）

第Ⅱ章　遺　　構

第1節　住　居　址

第２号住居址（第３図，図版２）

本址は発掘地区の最北端に，また南側は溝状遺構と切り合い関係という形で発見された。新旧関係は掘り下げていく段階で，第２号住居址が古く，溝状遺構が新しいことが判然とした。

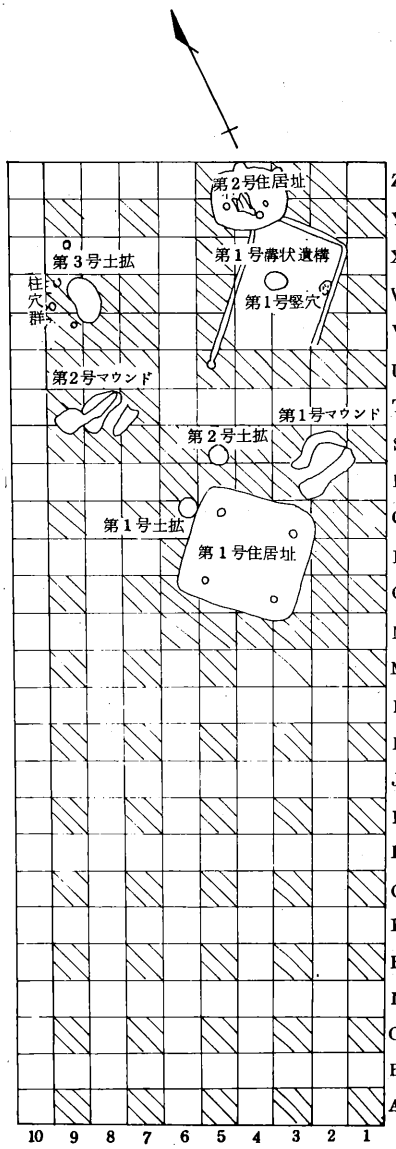
本址の表土は，ブルトーザーよる削平で既に存在せず遺物は褐色土層中に散在的に出土した。また住居址はローム層より切り込まれており，この層は当時の生活面と考えてよかろう。覆土中より出土した土器は縄文前期末葉から縄文前期終末に比定されるものが多かった。遺物出土の状況は下部からの出土が多く，床面からの出土は乏しかった。

本住居址の平面形は，北側で２カ所こぶ状に突び出してはいるが，大体円形を呈している。その規模は南北３m60cm，東西３m85cm程であった。壁はローム層より切り込まれており，壁面は緩傾斜気味であった。壁高は検出面よりほぼ８～15cmであった。

床面はローム層に設けられ，ところどころに凹凸が認められたが，大体平坦な面と考えてよかろう。状態は極めて堅緻であった。火災にあったとみえて，床面上に多量の炭化物が棒状に検出された。おそらく火災にあった際に棟木や桁のくずれた姿ではなかろうか。

焼土は２カ所において検出された。一つは住居址の中央部，もう一つは北側によったところである。前者は南北60cm，東西35cm，後者は南北15cm，東西12cm程である。前者のは炉と考えてよい程に厚く，中心部では15cm程もあった。炉としては地床炉の形態を呈している。

主柱穴は３本と思われる。それはP_1，P_2，もう一本は北側の炭化物の下にあると推定できえる。配置状態は３本の柱が住居址を取り回くように三角形状に設置されたと考えられる。したがって屋根構造は一般的に思索されている円錐形を呈していたと思われる。　（小池政美）



第２図　遺構配置図（1：400）

第１号住居址（第４図，図版３）

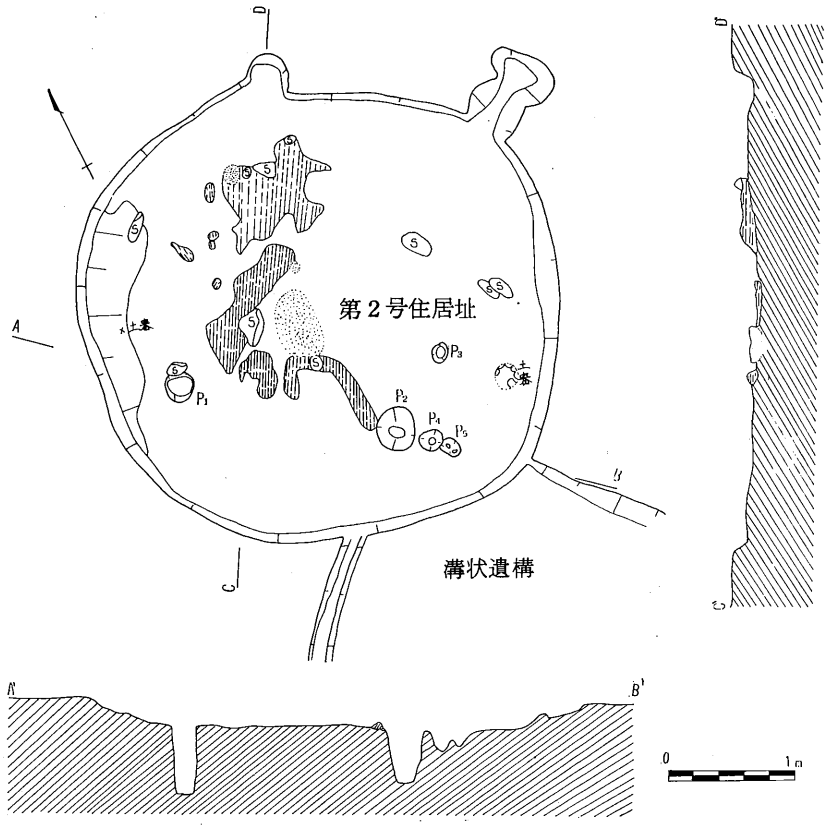
本住居址は検出された遺構のなかで最南部に位置するもので，第Ⅳ層ローム層を掘り込んだ竪穴住居址である。覆土は黒色土が充満しており，同色であったために，プランの判別は容易であった。

本住居址は南北６ｍ85cm，東西６ｍ５cm程の規模を有し，隅方丸形プランを呈している。壁高は遺構検出面から20～30cmを測り，面積は約40㎡である。状態は大体垂直に近いが，ところどころは内傾気味を呈していた。

床面はローム層の極めて良好な叩きであったが，炉周辺は軟弱であった。

また同面は各所にわたって凹凸がある。

炉は住居址中心部よりやや北寄りの地点に１カ所検出された床面を直径１ｍ10cm，短径65cm程の規模で円形状に10cm程掘り窪めた浅いすり鉢状のものである。炉址の床面は，かなり焼けた痕跡が認められ，焼土は炉址中心部に集中的に検出された。焼土粒子の散布範囲は炉址掘り込み外部にまで存在し，量も多い。この炉址の長期的使用は決定的なものと考えられる炉の南壁傾斜面と炉底焼土中に点在している石は全て硬砂岩であり，その大きさは拳大程であった。



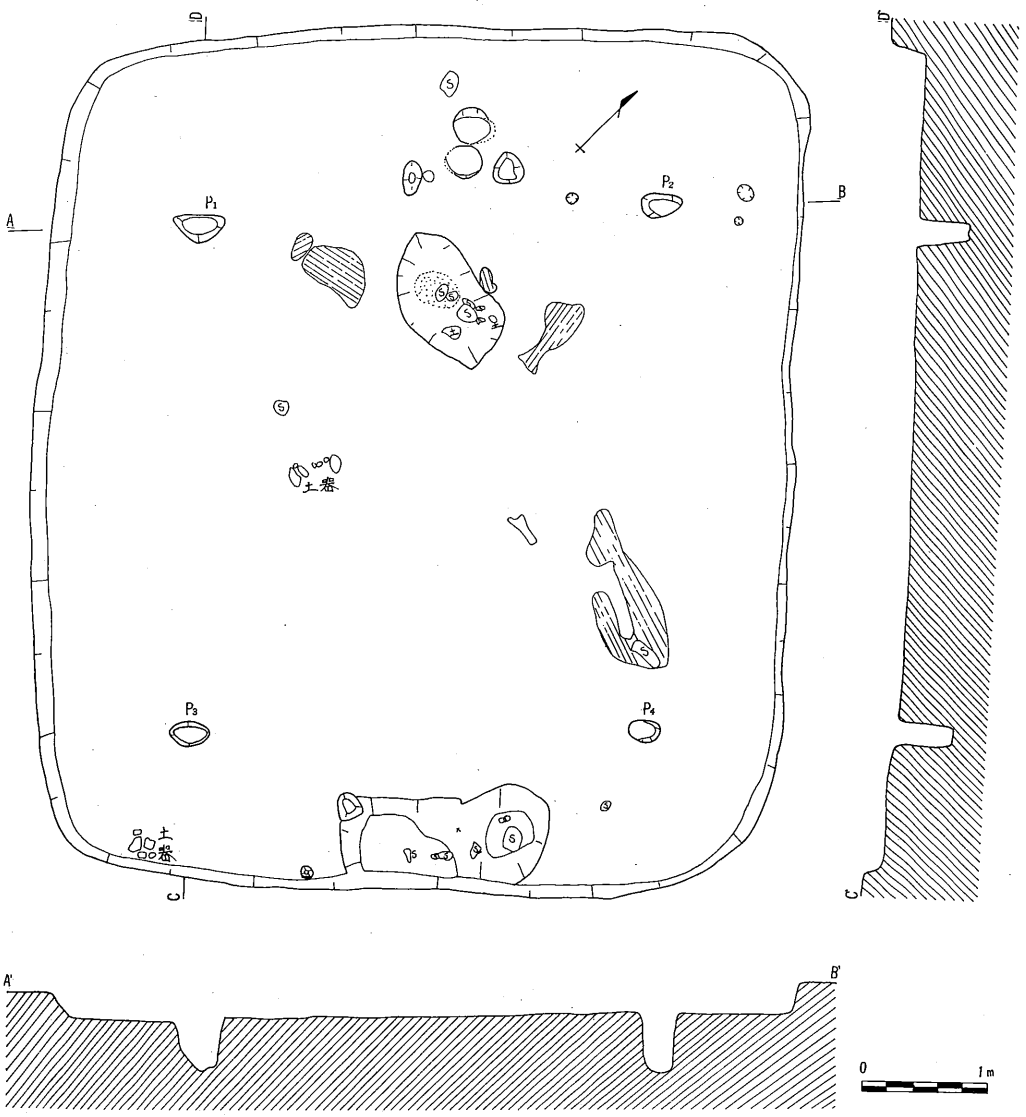
第３図　第２号住居址実測図

柱穴は住居址の四隅にそれぞれ１本づつみられ，その形状は東西に長軸を持つ円形状を呈している深さは40～50cm前後を計測できる。

床面上にはいたるところに炭化物が多量に検出でき，火災にあった事実を如実に証明できると思われる。

遺物は炉址内や床面上に多量の土器片が出土し，それは全て下伊那地方から伝播したと思われる弥生時代後期座光寺原式の土器であった。

（御子柴泰正）



第4図　第1号住居址実測図

第2節　土拡及び柱穴群

第1号土拡（第5図，図版3）

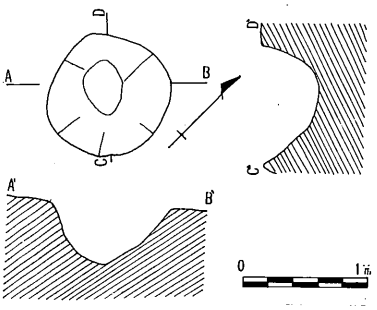
第1号住居址の南西の隅に近い位置に，壁に接して発見された土拡である。第Ⅳ層，ローム層を掘り込み，南北1m，東西90cm程の規模を持ち，ほぼ円形プランを呈している。壁高は40cm前後を実測でき，状態は急傾斜で内へ向っており，壁面には凹凸が顕著である。

床面は人為的な叩きは認められなかった。遺物は何も出土しなかった，したがって時代決定は不可能であり，少量の炭化物の検出をみた。　（友野良一）

第２号土拡（第６図，図版３）

第１号土拡，第１号マウンドにちょうどはさまれるような位置に発見された土拡である。

第Ⅳ層ローム層を掘り込み，築かれた土拡で，その大きさは，南北１ｍ，東西75cm程で，プランは不整円形を呈している。壁高は60数cmを測定でき，壁面の状態は内傾気味でありところどころに少さな凹凸が認められたが，叩き状にはなっていなかった。



第５図　第１号土拡実測図

床面はハードローム層に達しており，もともと硬いのであるからして叩き状の工夫は必要なかったと思う。全般的には水平であるが，ところどころにブロック状の凹凸が認められた。

遺物は何も出土しなかった。覆土中より少量の炭化物の検出をみた。　（御子柴泰正）

第３号土拡（第７図，図版４）

発掘地区の最北西部に検出された土拡である。ローム層を掘り込み構築され，その規模は南北２ｍ50cm，東西１ｍ55cm程であって，プランは円形状を呈している。

壁高は40cm前後計測が可能で，状態は内傾気味を呈していた。断面図で見る限りでは西側は段を有するほどに凹凸が認められる。

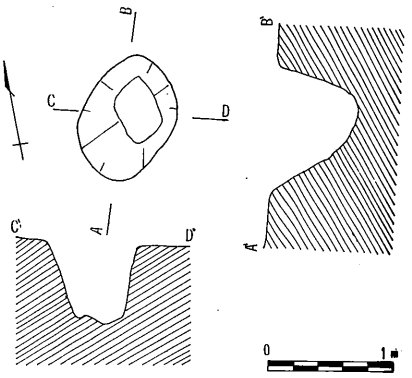
床面はわずかな叩きになっており，多少の凹凸が認められた。遺物は全く出土せず，覆土中には少量の炭化物が検出された。

（小池政美）

柱　穴　群（第７図，図版４）

第３号土拡の北から西，南へ半周するような形で検出された遺構である。柱穴の発見数は７カ所と少なかったけれども，一応柱穴群という遺構名でとらえることにした。P_1，P_2 は柱穴としてはもうしぶんないものであり，その配列状態は一直線状に並んでいた。P_3 は単独に１つ検出されたもので，どれとどれとが結びつくかは現在のところ不明である。

P_4～P_7は１カ所に集中しており，特にP_5～P_7は三連結式になっていた。



第６図　第２号土拡実測図

柱穴の大きさは実測により明瞭であるので省略するが深さはP_1は30cm，P_2は25cm，P_3は25cm，P_4は37cm，P_5は42cm，P_6は39cm，P_7は40cmの多種多様であった。

形状は円形や長円形が大部分を占めていた。結果論ではあるが柱穴群の全体や規模把握は全面発掘を行なわない限り不可能と思われた。　（友野良一）

第3節　竪　穴

第1号竪穴（第8図，図版4）

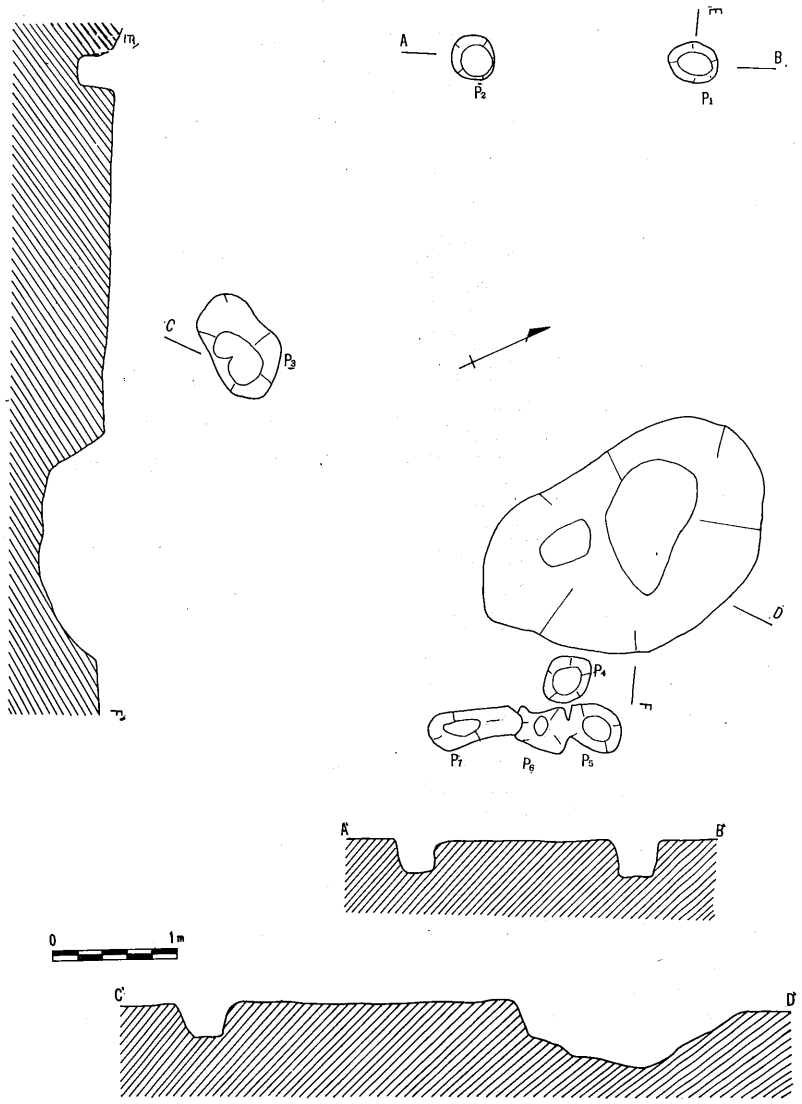
溝状遺構に取り囲まれるようにして，それのほぼ中心部に位置して発見された遺構である。第4層ローム層面を掘り込んで構築されており，円形プランを呈している。

規模は南北1m15cm，東西1m10cm程である。断面はフラスコ状を呈し，竪穴としては通例であると思われる。

壁高は西で72cm，東64cm，北南は70cmを測定できる。状態は内傾気味で，ところもち段を有している模様である。

壁面の下半分部はハードローム層に達しており，凹凸が著しい。

床面はもちろんハードローム層面につくられ極めて硬く，水平である。北東の壁面に密着している3個の石は花崗岩である。

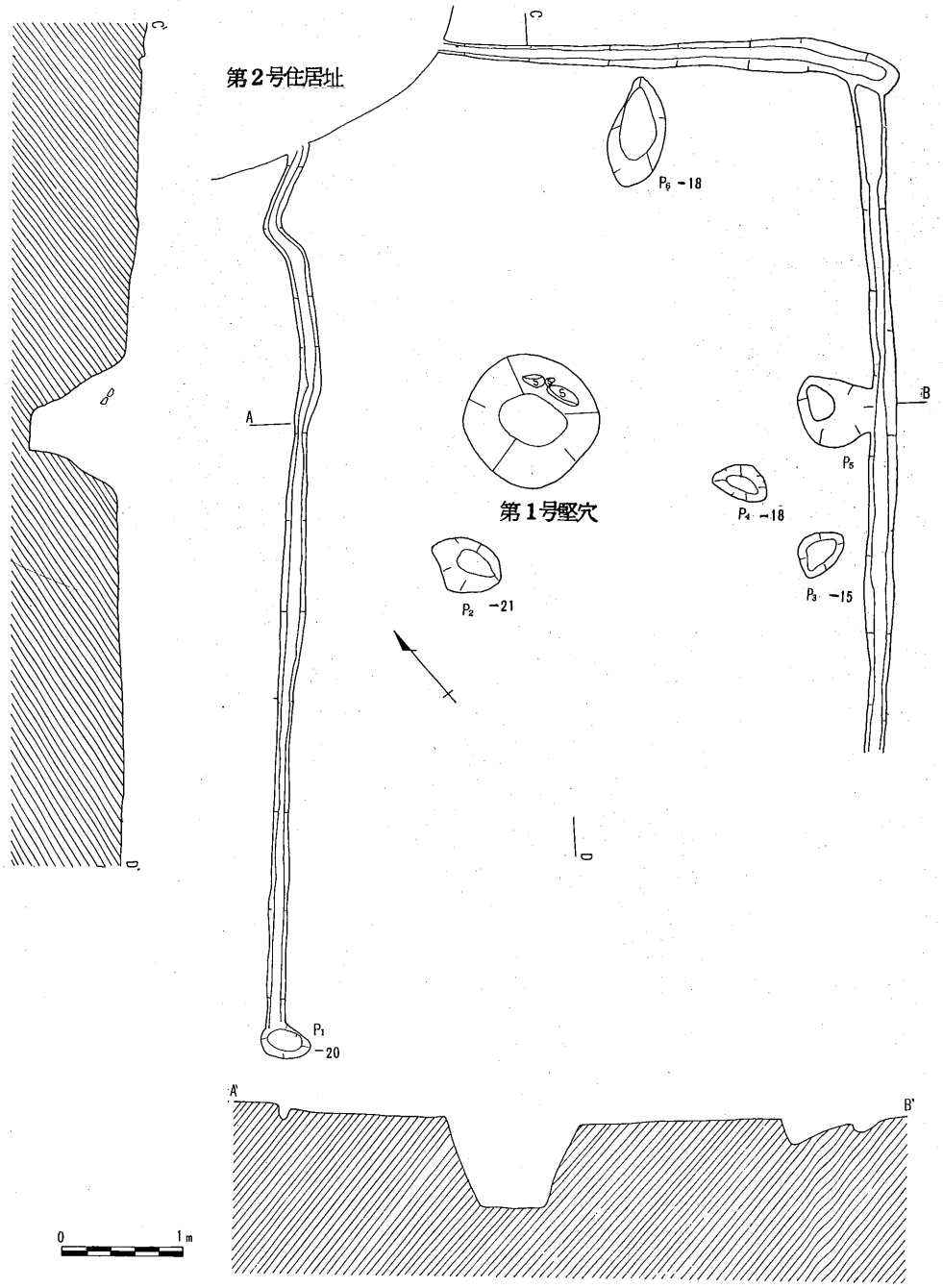


第7図　第3号土拡及び柱穴群

覆土中に多量の炭化物が出土した。遺物としては縄文前期終末期の土器片が出土した。

（小池政美）

第４節　溝状遺構



第８図　第１号竪穴及び第１号溝状遺構実測図

第１号溝状遺構（第８図，図版５）

第２号住居址と北西の隅で切り合い関係で検出された遺構である。溝状遺構と第２号住居址との切り合い関係は第２号住居址の覆土上層に溝状遺構の黒色土が埋没しており，明らかに溝状遺構が新しいことが証明できる。

遺構の規模は南北８ｍ50cm，東西５ｍ程の範囲内に描かれている。溝は東から北へ，さらに西へと連結しており，南側は開口している。溝巾は10～30cm，深さは10cm程であった。

溝に取り囲まれた中に６カ所ピットが発見され，深さも割合に浅かった。床面と思われるローム層は叩き状にはなっておらなかった。同面上に近いところより炭化物が相当量検出された。

遺物は何も出土せず，よって時代決定は不可能である。

第４節　マウンド

第１号マウンド（第９図，図版５）

調査地の最東部，第１号住居址の東側に位置している。マウンドは南北１ｍ40cm，東西３ｍ50cm程，高さは30～55cmで，南側には巾１ｍ20cm，深さ25cm程，北側には巾65cm，深さ50cm程の溝が走っている。

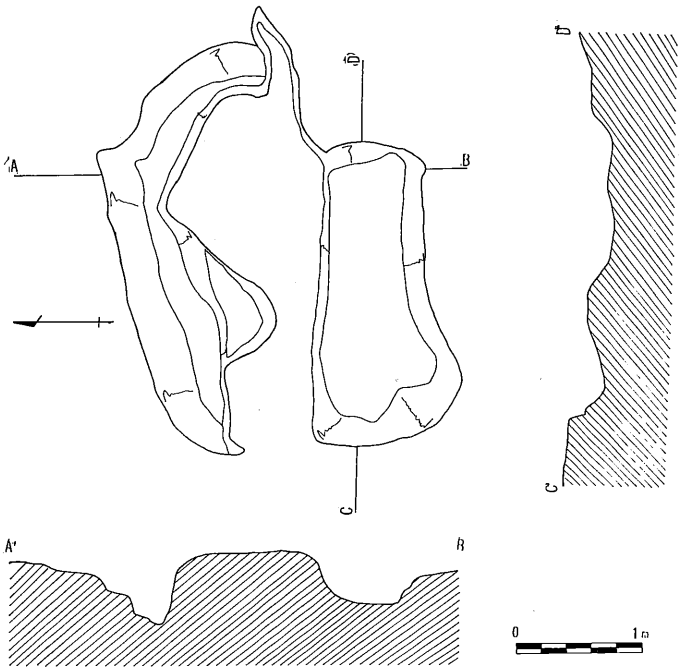
形状は多少の変化はあるがおうよそ方形状に近似値を指し，堅く叩いてあるようだ。

頂部は黒土層が混合したような状態を呈し，表面はほぼ水平状であった。

頂部から傾斜面に移行する面は若干丸味状を呈しており崩壊しないように堅く叩いた痕跡が確認でき，遺構に相違ないことが実証できえた。

マウンドの形成土は大部分がソフトロームであり，なかに，ブロック状に黒色土やハードロームが混じっていた。

焼土や木炭の検出はみられたが，遺物は何もなかった。



第９図　第１号マウンド実測図

第２号マウンド（第10図，図版５）

調査地の西側，第３号土拡の南側に位置している遺構である。マウンドはローム層より形成され

ており，遺構名に関してはロームマウンドと考えた方が妥当と思われたが，組成内容に於いて違いが認められたのでマウンドと考えた。

地形は平坦部であり，地層は耕土，黒土，褐色土，ローム層と堆積層位としては正常であった。

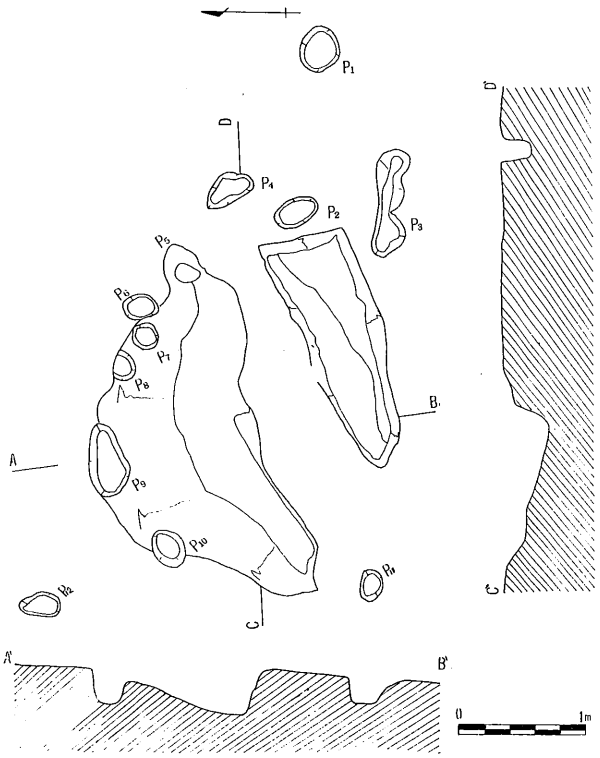
南北60cm，東西２ｍ70cm程の規模を有し，高さは，高い所で40cm，低いところで20cm程を示していた。

頂部は平坦であり，傾斜も割合に急であった。

覆土中より多量の炭化物が出土したが，遺物は１つの破片すらも出土せずに終了してしまった。よって時代決定は全く不可能となってしまった。

一般的にマウンドの遺構は遺物の出土しない例が多いように思われる。

（小池政美）



第10図　第２号マウンド実測図

第Ⅲ章　遺　　物

第1節　土　　器

土器の説明は表を作製し，一見のもとに理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容的説明を付記しておくことにする。

胎土，保存状態，色調についての記述は，明らかなる基準によったものではなく，筆者の主観によるものである。

（小池政美）

図版	番号	胎　土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　　考
6	1	多量の雲母	良　好	黒褐色	4	波　状　文	第1号住居址
〃	2	〃	〃	赤褐色	5	波状文，櫛目文	〃
〃	3	〃	普　通	黄褐色	6	〃	〃
〃	4	少量の長石	〃	赤褐色	〃	櫛　目　文	〃
〃	5	少量の雲母	良　好	〃	5	〃	〃
〃	6	〃	〃	黒褐色	〃	波　状　文	〃
〃	7	〃	不　良	黄褐色	〃	櫛　目　文	〃
〃	8	少量の長石	〃	〃	7	波　状　文	〃
〃	9	〃	普　通	赤褐色	5	櫛　目　文	〃
〃	10	少量の雲母	良　好	黒褐色	〃	波　状　文	〃
〃	11	〃	〃	赤褐色	〃	櫛　目　文	〃

第1表　出土土器の形状一覧表（その1）

図版	番号	胎　土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　　考
7	1	多量の長石	普　通	黒褐色	6	沈　線　文	第2号住居址
〃	2	少量の雲母	〃	〃	8	〃	〃
〃	3	〃	〃	〃	4	縄　文，沈　線 粘土紐，刻　目	〃
〃	4	多量の長石	〃	〃	7	沈　　線	〃
〃	5	少量の長石	良　好	黄褐色	8	〃	〃
〃	6	〃	〃	黒褐色	9	縄　文，沈　線	〃
〃	7	〃	普　通	黄褐色	6	縄　　文	〃
〃	8	多量の雲母	不　良	黒褐色	7	〃	〃
〃	9	〃	普　通	茶褐色	7	縄　文，沈　線	〃
〃	10	少量の長石	〃	黄褐色	5	沈線，粘土紐，刻目	〃
〃	11	〃	良　好	黒褐色	7	縄　文，粘土紐	〃
〃	12	〃	普　通	〃	5	縄文，粘土紐，刻目	〃
〃	13	〃	〃	〃	〃	縄　　文	〃
〃	14	〃	良　好	〃	4	沈　線，粘土紐	〃
〃	15	〃	普　通	黄褐色	7	縄　　文	〃

第2表　出土土器の形状一覧表（その2）

図版	番号	胎　土	保存状態	色調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
8	1	多量の雲母	良　好	黒褐色	5	縄　文，粘土紐	第1号竪穴
〃	2	〃	普　通	〃	6	縄　文	〃
〃	3	少量の長石	〃	茶褐色	4	沈　線	第1号マウンド
〃	4	〃	〃	〃	6	〃	〃
〃	5	少量の雲母	良　好	〃	4	縄文，粘土紐，刻目	グリット
〃	6	〃	普　通	〃	7	縄　文	〃
〃	7	多量の雲母	良　好	黒褐色	7	磨消縄文	表面採集
〃	8	〃	〃	〃	5	無　文	〃
〃	9	少量の長石	〃	〃	6	内耳土器	〃
〃	10	〃	〃	茶褐色	7	〃	〃
〃	11	〃	〃	〃	12	〃	〃
〃	12	〃	〃	〃	6	〃	〃
〃	13	〃	〃	〃	6	〃	〃
〃	14	〃	〃	〃	7	〃	〃
〃	15	〃	〃	白灰色	7	灰釉陶器	〃
〃	16		〃	白青色	4	青　磁	〃
〃	17		〃	〃	3	〃	〃
〃	18		〃	〃	4	〃	〃

第3表　出土土器の形状一覧表（その3）

第2節　石　　器

石器の説明は表を用いることにする。表の項目は図版，番号，名称，器形，石質，備考である。

（小池政美）

図版	番号	名　称	器　形	石　質	備　考
9	1	棒状石器		緑泥岩	第1号住居址
〃	2	打製石斧	短冊形	砂　岩	〃
〃	3	〃	〃	〃	第1号竪穴
〃	4	〃	〃	緑泥岩	第2号住居址
〃	5	〃	〃	砂　岩	〃
〃	6	〃	〃	硬砂岩	表面採集
〃	7	〃	〃	緑泥岩	〃
〃	8	砥　石		安山岩	〃

第4表　出土石器の形状一覧表（その4）

第Ⅳ章　ま　と　め

大規模農業転換の一環として，西部開発（県営畑地帯総合土地改良事業）が実施されるにあたり埋蔵文化財の該当個所が数多くあり，東方A遺跡もその一つであった。発掘調査の過程において，把握できた所見，問題点，意義等を記述し，今後に参考，研究課題に資したいと思う。

まず第1は，本遺跡の規模と立地についてであるが，工事の日程上，適当な地点を選択して発掘調査を実施してみた。その成果は竪穴住居址2，土拡3，柱穴群1，竪穴1，溝状遺構1，マウンド2であった。

遺跡地の自然現象条件として最も大きな比重を占める理由は，天竜川右岸段丘上の先端部に位置し，段丘崖，段丘下には豊富な湧水地帯が点在し，現在はワサビ畑に利用されている。尚，この湧水地帯は清水坂と呼ばれている小字名があり，明らかに水の存在性が即座に指摘できよう。

第2に，出土遺物の問題点についてであるが，古くは，下島直後形式，大歳山式，縄文後期の堀の内式，加曽利B式，弥生後期の座光寺原式，内耳土器片，青磁等各種の時代にわたっている。

第3に遺構についてであるが，第2号住居址は大きさが南北3m60cm，東西3m85cm程の円形プランを呈している。時代は縄文前期と思われる。

第1号住居址は大きさが南北6m85cm，東西6m5cm程の隅丸方形プランを呈し，弥生後期座光寺原式と思われる。土拡は3カ所検出され，それらの平面プランは第1，第3号は円形に近く，第2号は不整円形であった。大きさは，大きいので径1m50cm，小さいので1m前後であった。

柱穴群は発掘面積の都合により，7カ所のピットを検出したに留まったが，もう少し広範囲の発掘調査を実施したならば，配置状態や，建造物の規模把握が可能となったと思われた。時代についてであるが，内耳土器片や青磁片が発見されているによって中世の前半期の遺構と思われた。

竪穴はたったの1カ所発見されただけであった。遺物は縄文前期終末期の土器片が出土している。竪穴としては一般的にみられるのとぴったりと一致していた。規模は南北1m15cm，東西1m10cm程で円形プランを呈していた。断面はフラスコ状を呈しており，定説となっている貯蔵穴の一種と思われた。溝状遺構は南北に長く，東西に狭く，長方形状に溝が走っており，南側は開口していた。明確に方形状の溝が掘られており，建物の存在性があるとすれば，雨だれの可能性もあるが，柱穴だと確証できるピットはなかった。遺物の出土でもあれば時代決定も可能であろうが，それもなかった。ただ，唯一わかっている点は第2号住居址を切って構築されており，それよりも新しいことは確実である。

マウンドは2カ所発見され，ローム層より成り立ち，中央道の遺跡発掘で一躍にして脚光を浴びるようになってきた。遺構全体の中央部にローム層を盛り上げマウンド状にし，周囲はそれをとりかこむようにして一段下り凹地のようになっていた。

（小池政美）

南より北を眺む

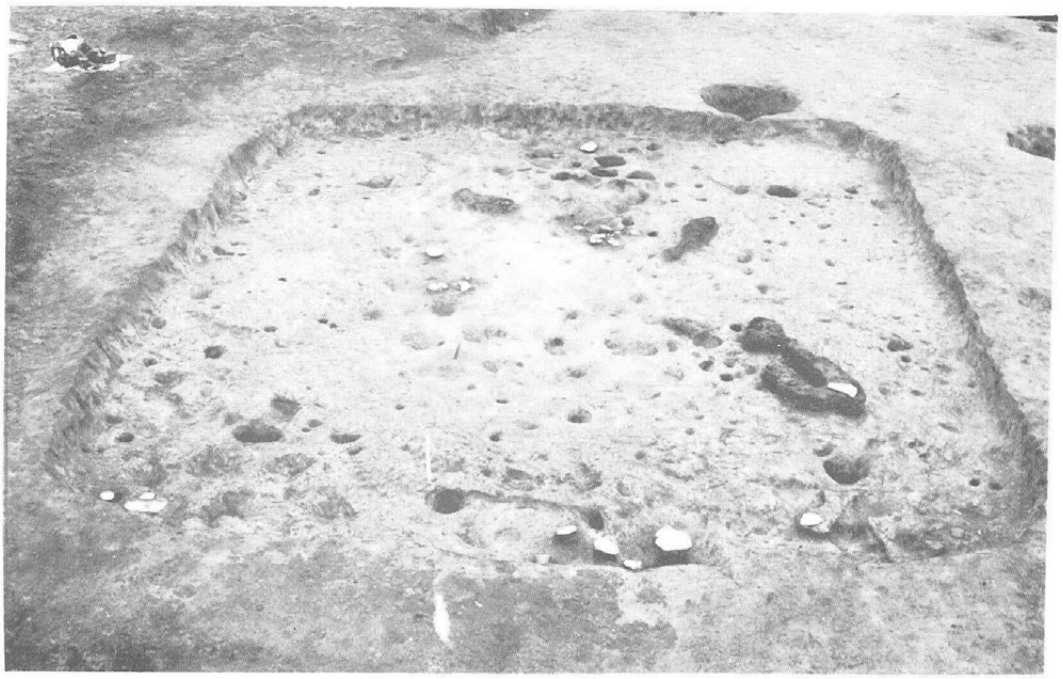
遺跡地近景

図版1　遺跡全景

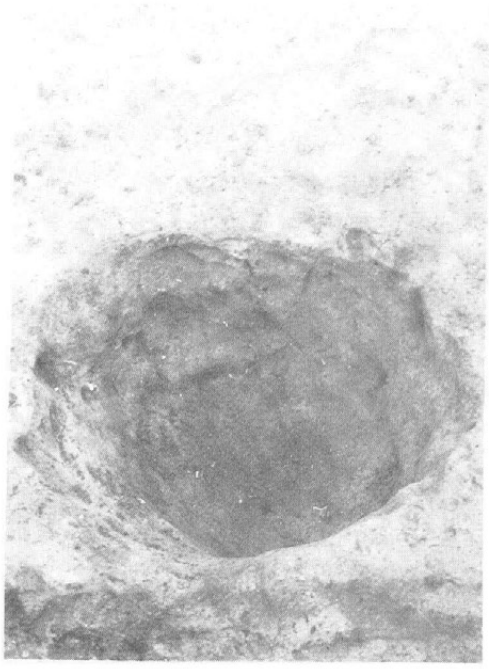
遺構配置

第 2 号住居址

図版 2　遺構配置及び遺構（住居址）



第 1 号住居址

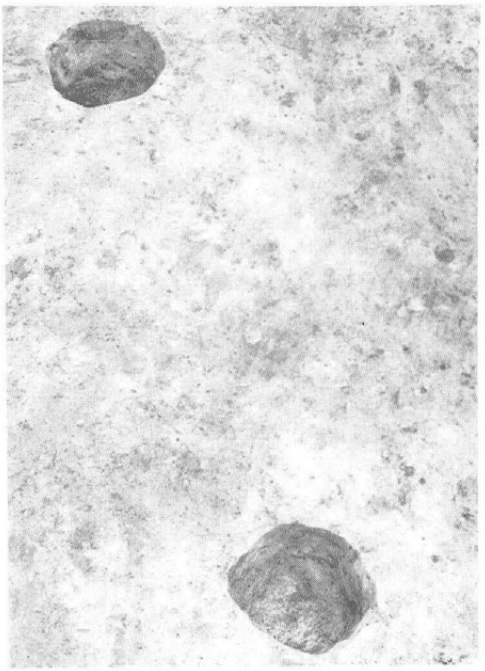


第 1 号土拡

第 2 号土拡

図版 3　遺構（住居址及ひ土拡）

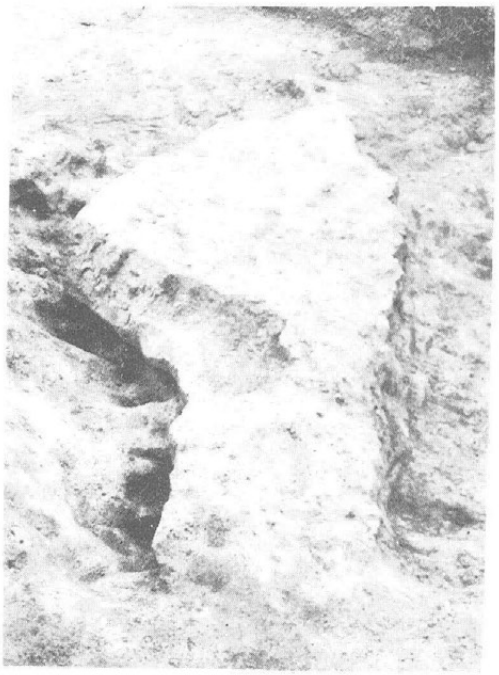
第 3 号土拡



柱穴群

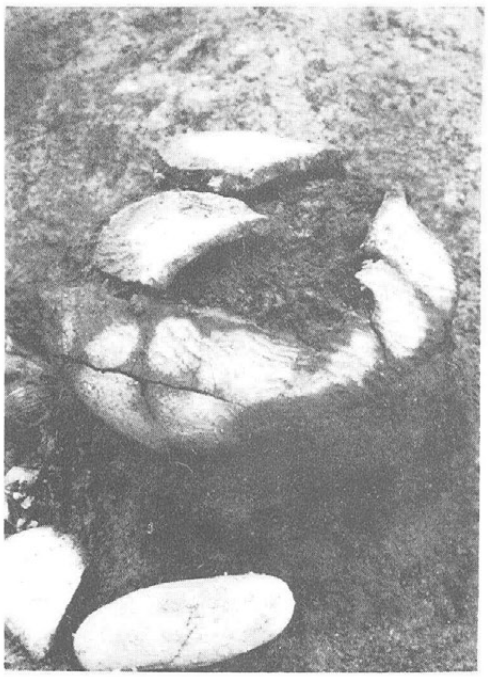
溝状遺構と第 1 号竪穴

図版 4　遺構（土拡，柱穴群，溝状遺構，竪穴）



第１号マウンド

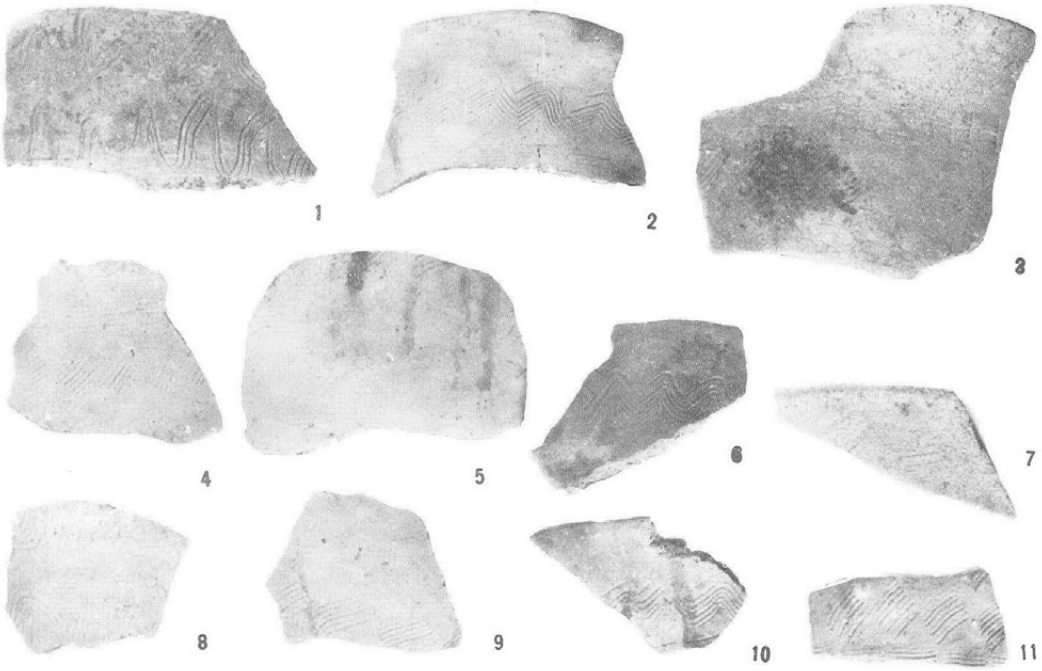
第２号マウンド



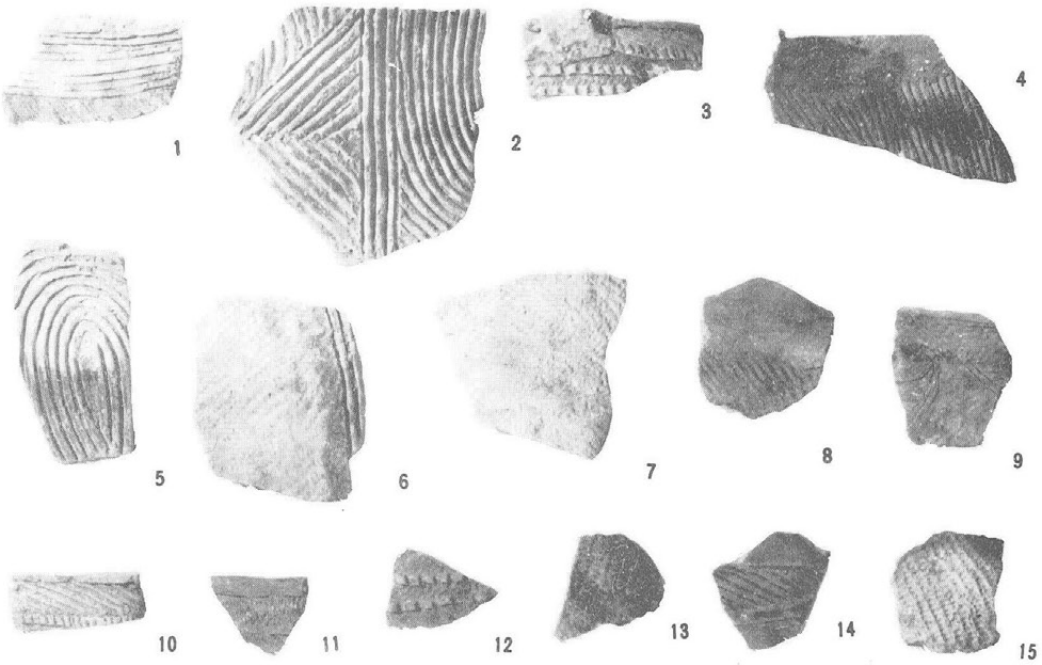
土器出土状況

土器出土状況

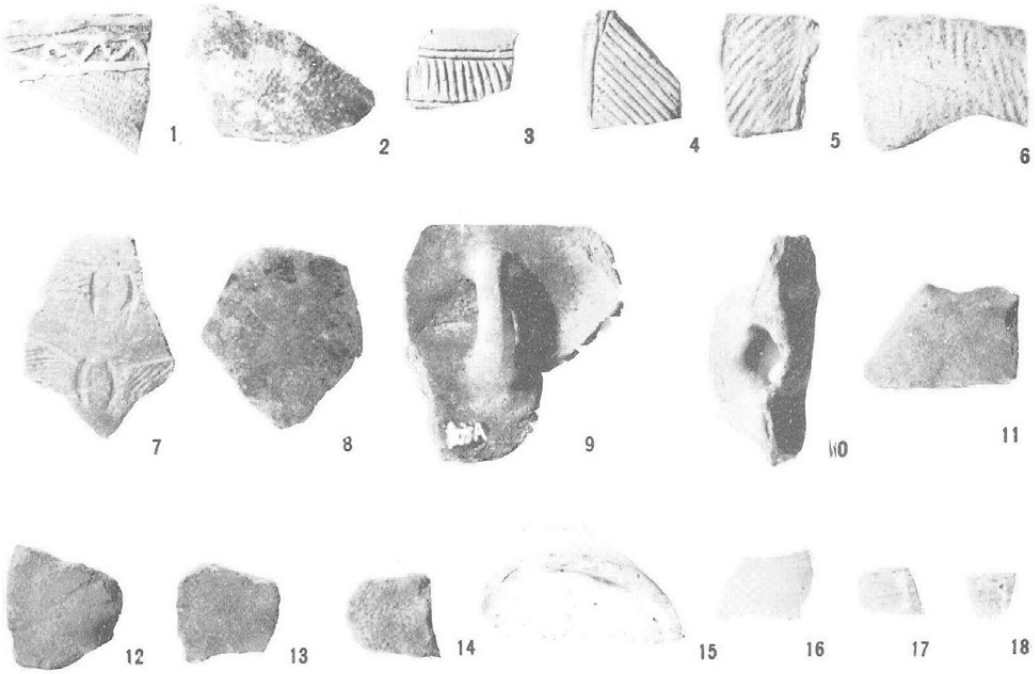
図版５　遺構（マウンド）及び遺物出土状況



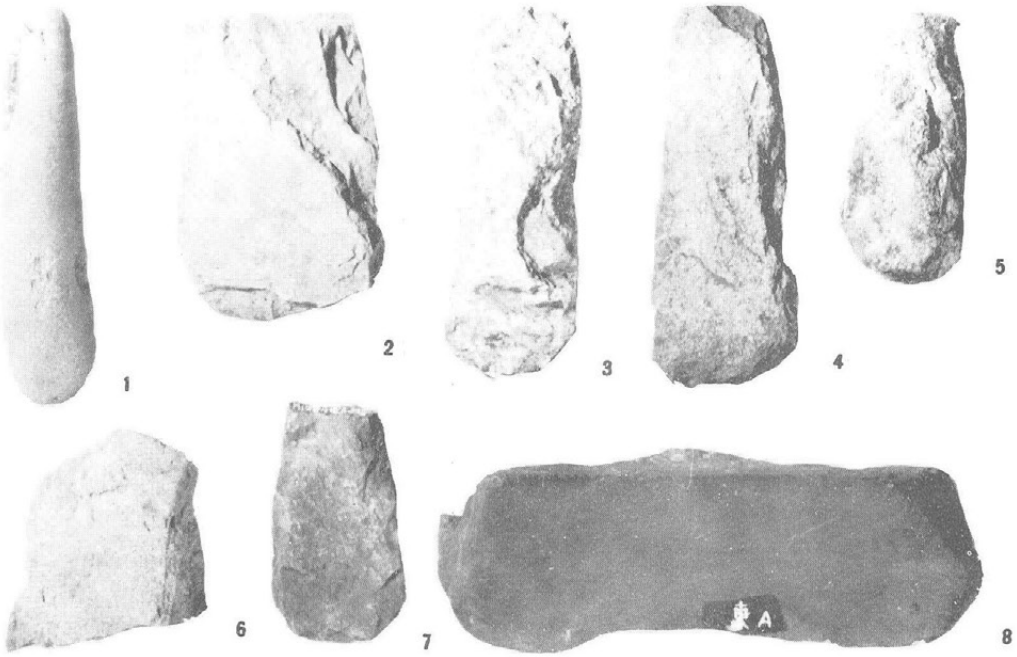
図版6　出土土器



図版7　出土土器



図版8　出土土器



図版9　出土石器

村岡北遺跡

目　　次

目　　次 …… (3)
挿図目次 …… (4)
図表目次 …… (4)
図版目次 …… (4)

第Ⅰ章　発掘調査の経過 …… (5～7)

第1節　発掘調査の経緯 …… (5)
第2節　調査の組織 …… (5～6)
第3節　発掘日誌 …… (6～7)

第Ⅱ章　遺　　構 …… (8～10)

第1節　住居址 …… (8)
第2節　　堀 …… (8～9)
第3節　道路址 …… (9～10)

第Ⅲ章　遺　　物 …… (11～12)

第1節　土　器 …… (11)
第2節　石　器 …… (12)

第Ⅳ章　ま　と　め …… (13)

挿図目次

第１図　遺構配置図……（８）
第２図　第１号住居址実測図…（９）
第３図　堀址実測図……（10）
第４図　道路址実測図……（10）

図表目次

第１表　出土土器の形状一覧表（その１）…(11)
第２表　出土土器の形状一覧表（その２）…(11)
第３表　出土石器の形状一覧表（その１）…(12)
第４表　出土石器の形状一覧表（その２）…(12)

図版目次

図版１　遺跡全景……(14)
図版２　遺構（第１号住居址及び堀址……(15)
図版３　遺構（道路址及び遺物出土状況）…(16)
図版４　出土土器……(17)
図版５　出土土器……(17)
図版６　出土石器……(18)
図版７　出土石器……(18)

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査の経緯

西部開発事業（県営畑地帯総合土地改良事業）は昨年の上島，東方部落にわたって行なわれました。本年度は東方，村岡，城，山本部落にわたり，その面積は60数haに達している。

発掘調査は東方Ａ，村岡北，村岡南，常輪寺下，北条の５遺跡が該当し，東方Ａ遺跡と村岡北遺跡は夏に，村岡南遺跡，常輪寺下遺跡，北条遺跡は秋にそれぞれ実施されました。

西部開発（県営畑地帯総合土地改良事業）第９工区内の遺跡の調査を委託された場合は，受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり，おって南信土地改良事務所より，緊急発掘調査について委託した旨，市教育委員会へ依頼を受けたので，市教育委員会を中心に，村岡北遺跡発掘調査会を結成し，この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

・６月22日，南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節　調査の組織

村岡北遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	松沢一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	坂井喜夫	伊那市教育委員長
〃	向山雅重	長野県文化財専門委員
〃	木下　衛	上伊那教育会会長
〃	原　益久	南信土地改良事務所長
〃	辰野伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	浦野孝之	伊那市教育委員会社会教育課長
〃	保坂九市	〃　課長補佐
〃	中村幸子	〃　主事

発掘調査団

団長	友野良一	日本考古学協会会員
副団長	根津清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調査員	小池政美	〃
〃	辰野伝衛	伊那市文化財審議委員

調査員	清水　満	長野県考古学会会員
〃	福沢幸一	〃
〃	太田　保	〃
〃	柴登巳夫	〃
〃	長瀬康明	〃
〃	本田秀明	〃
〃	堀口貞幸	〃
〃	深沢健一	〃
〃	丸山弥生	国学院大学学生
〃	赤羽義洋	〃
〃	石岡憲雄	〃
〃	館野　孝	〃

第3節　発掘日誌

昭和49年6月29日　遺跡地に発掘器材の運搬をし，発掘準備をする。

昭和49年6月30日　土層の堆積状態が不明なので，試掘坑を数カ所掘り，ある程度層序関係がつかめたので，表土剥ぎをブルトーザーを入れて実施する。表土剥ぎ完了後，ただちにグリット設定をする。グリットの名称は北より南にかけてA～Z，東より西にかけて1～31，一辺を2m，面積を4㎡とする。A6～A7にかけて黒土の落ち込みがあり，大きさや深さより堀と判断し，これを第1号堀址とする。堀のプラン確認に全力を注ぎ，特に南北の伸びに注意し，慎重に拡張していく想像してみると堀址は北側では段丘岸に，南側で川に抜けている模様である。

昭和49年7月1日，早朝より雨降りとなり，作業中止とする。

昭和49年7月2日，昨日と同様，早朝より雨降りだったので，作業中止とする。

昭和49年7月3日　本日で3日続きの雨降りとなった。やみそうもないので本日も作業中止とする。是非とも明日は晴れになってほしいものだ。

昭和49年7月4日　本日は昨日の期待に反するかのように小雨が降っていたが，日程の都合上，長びかすことができないので，作業をすることに決めた。主たる作業は堀のプランを確認する。

午後より太陽が雲間よりわずかに顔を出した。あらためて，太陽の偉大さを感じた。

昭和49年7月5日　昨日に引続き，お茶頃までかかってプラン確認をし，それが終了後，ただちに掘り下げを実施した。堀の中より多量の内耳土器片が出土し，時代決定が明らかとなった。

発掘風景

さらになかより細片ではあるが，宋の青磁片が出土し，館への可能性が有望となった。

昭和49年７月６日　堀の掘り下げを北へと進めていく，北へ延びていくにしたがって，幅が次第に大きく，また深くなっていくようである。遺物は堀に関連するものは何も出土しなかった。本日も相変らず，梅雨空で，どんよりと曇り，今にも雨が降り出しそうな模様だった。

昭和49年７月８日　堀の掘り下げをする。北側の小段丘をぶち抜いて，貫通させる。それが終了すると，一層，堀が大きくみえた。前述したように館は大部分，自然地形を利用していたものと思われた。

昭和49年７月９日　ブルトーザーで，耕土を押した部分の堀を全部掘り下げた。その後，堀の西側の部分にグリットを入れる。それによると，各グリットから縄文中期土器片が数片出土したが，遺構は検出されなかった。このような状況だったので，思いきって，現在通路に利用されている位置にためし掘りをしてみると，列状の石が並べられてあり，一応，これを道路址とする。本遺構の周辺を拡張してみると数片の陶器片が出土した。近くの古老に聞いてみるが，本列状石については何も知らないとの返答があり，古い時期への位置づけがある程度可能となった。

昭和49年７月10日　昨日，道路址の究明に全力を注ぐが，決め手には不充分であった。

昭和49年７月11日　道路址の精査を重ねる。本遺構を掘り始めて，本日は３日目となるが，決め手となるものは把握できなかった。

昭和49年７月12日　道路址の拡張を北へと進めていくと，段丘を人為的にカットした部分があった。その附近を注意して調査を進めてみると，石列が並列して二本連なっており，これらの西側には溝状の落ち込みがあった。なかより陶器片が出土したが時代の決め手になるものはなかった。

道路址の西側に住居址を，検出し，第１号住居址とする。プラン確認後，ただちに掘り下げを開始する。

昭和49年７月13日　道路址の完掘，第１号住居址の完掘と清掃を終える。堀，道路址，第１号住居址の写真撮影をし，報告書の資料となるように慎重性を考えた。

昭和49年７月14日，堀と道路址の実測を終了する。

昭和49年７月15日　第１号住居址と全測図の作製，あとかたづけを済せる。　（小池政美）

第Ⅱ章　遺　　構

第1節　住　居　址

第1号住居址（第2図，図版2）

調査地の北縁台地上に位置する。近接の遺構としては，東側に道路址が存在している。表層下30cm位下ったローム層を掘り込み，南北（現存は2m90cm），北側は道路によって破壊されてしまっている。東西は4m10cm程の円形プランを呈する竪穴住居址である。壁は北側を除いては現存はしているが，低くて10数cmしかない。状態は内傾気味で，軟弱を呈し，多少の凹凸が認められた。

床面はローム層自体に設けられ，叩きは中央部は良好，他は軟弱であった。柱穴は5ケ所検出されたが，主柱穴と成り得るのはP4，P5である。P2，の中の石はホルンヘルスの自然石で立石状になっていた。

覆土中より多量の焼土と木炭を検出した。遺物は縄文中期初頭，いわゆる平出3A式土器片が単独に出土した。　　（小池政美）

第2節　堀　　址

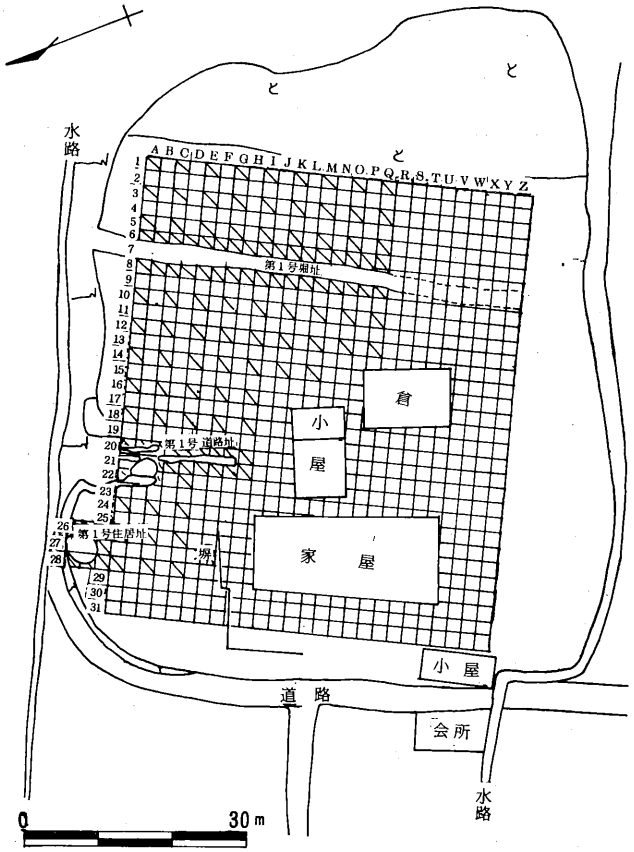
第1号堀址（第3図，図版2）

発掘地区の東側にローム層面上に南北に続く黒色土層の落ち込みが検出された。

歴史的環境の節で述べたように館址に関係するものと考え，堀と言う名称にした。

堀は北側は段丘崖へ，南側はQ7ラインで都合により発掘調査を断念したが，おそらく全掘すれば南側の川へと連らなっていたのと思われる。発掘した堀の長さは凡そ40m程，北の段丘崖では幅3m中央部では2m50cm，南側では1m50cm程を測定できた。

堀底は北側へわずかに傾斜をしていた。底部の様相は細かな砂が混入しており，水が流れたと思わ

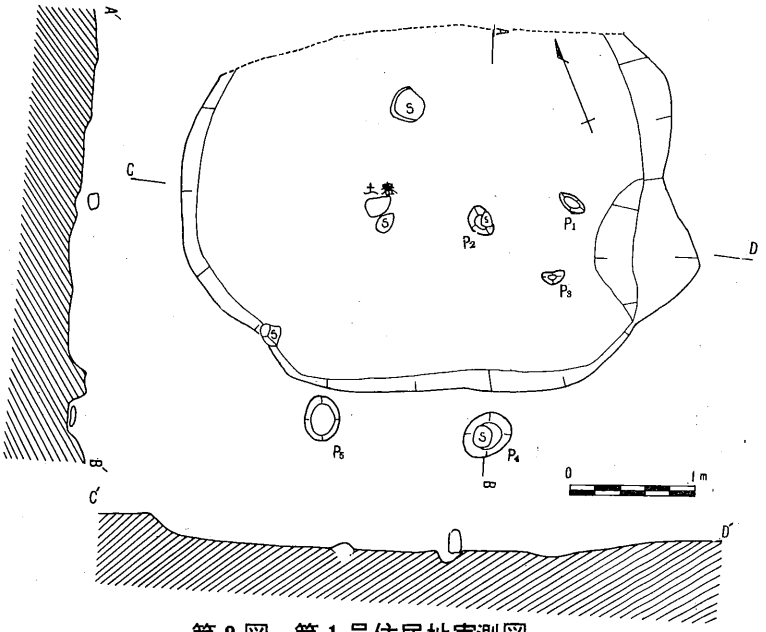


第1図　遺構配置図

れた。遺物は傾斜面に密接して内耳土器片の出土がみられた。

第3節　道路址　（第4図，図版3）

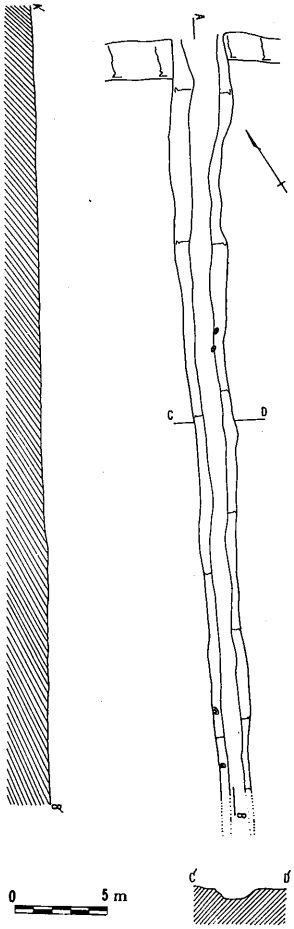
幅90cm位で附近と異って黒色土の中に細礫が混って発見された。この時点でどうも様子がおかしいと思い，附近を拡張してみると，前述した土層のなくなる位置に南北に石が並べてあった。石は幾分，西側のは東向きの傾斜をしており，ローム層面を浅いので数cm，深いので10数cm掘り込んであり石の周辺には黒色土をつめて頑強にしてあった。その中はつきかためたとみえて，かたくたたいてあり，床面のような光沢を有していた。また細礫の含まれている土層もかたくたたいてあり，一考するに道路と直に察しがついた。



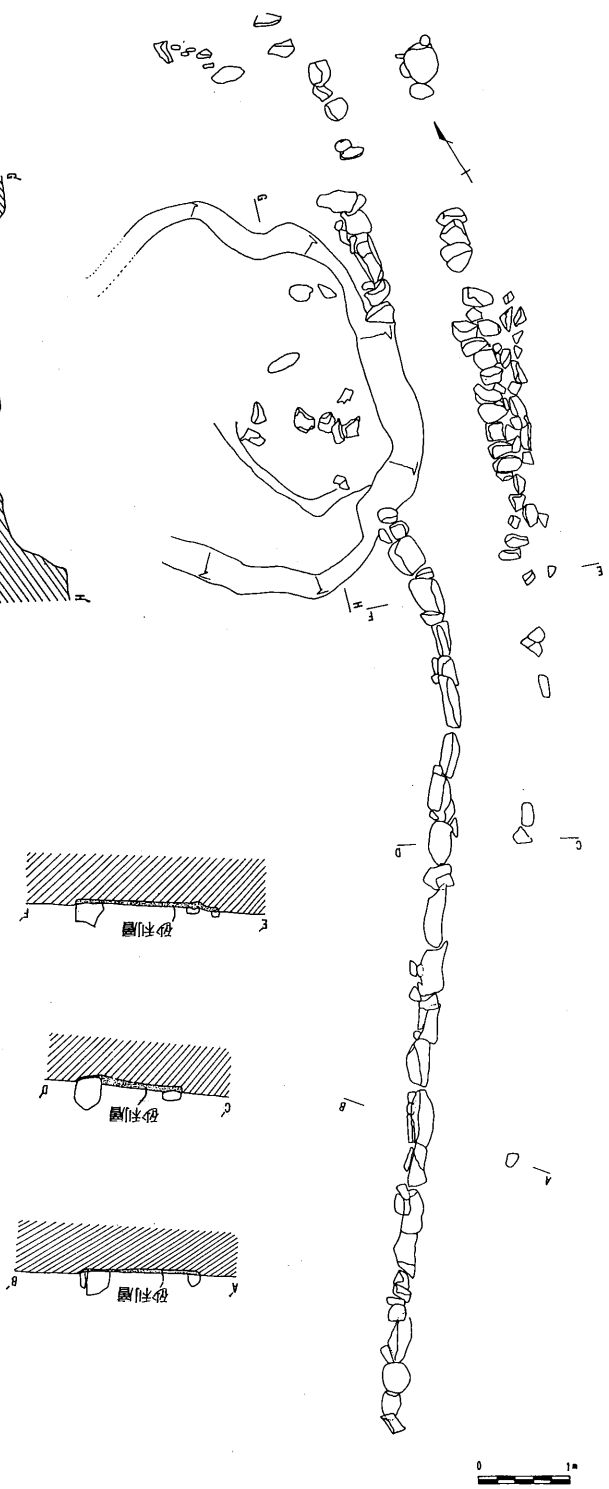
第2図　第1号住居址実測図

配列は東側には2～3個しか現存しないが，構築当時はあったと思えるが，後に耕作の際にとられたと思われる。竪穴のある部分は石がその中に落ちてしまって存在しなかった。配列は北側の傾斜面にも並べてあって，とくに注目することは，東側は傾斜面に至ると石は2列～3列に，あまりレベル差がないように思われた。ようするに傾斜のために　土の堆積差が厚く，破壊されず現われてきた。石材は大部分，ホルンヘルス，変成岩，花崗岩の三種で占められていた。

なかには火を受けた焼石も存在していた。配石の石の下より織部の陶器片が出土し，したがって桃山期に位置づけが可能と思われた。　（小池政美）



第 3 図　堀址実測図



第 4 図　道路址実測図

第Ⅲ章　遺　　物

第1節　土　器

土器の説明は表を作製し，一見のもとに理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容的説明を付記しておくことにする。

胎土，保存状態，色調についての記述は，明らかなる基準によったものではなく，筆者の主観によるものである。

（小池政美）

図版	番号	胎　　土	保存状態	色　調	厚さ	文様の特徴	備　　考
4	1	多量の長石	普通	白褐色	6mm	縄文,隆帯,沈線,刺突文	第1号住居址
〃	2	〃	〃	〃	7	〃	〃
〃	3	少量の長石	良好	黒褐色	6	沈線，刻目	〃
〃	4	多量の長石	不良	白灰色	6	沈　線	〃
〃	5	少量の長石	普通	黒褐色	7	〃	〃
〃	6	多量の長石	〃	茶褐色	8	縄文，沈線	〃
〃	7	〃	不良	赤褐色	6	縄文，	〃
〃	8	多量の雲母	普通	黒褐色	8	縄文,沈線,刻目	〃
〃	9	少量の雲母	〃	〃	5	縄文,隆帯,刺突文	〃
〃	10	〃	良好	〃	6	沈　線	〃
〃	11	多量の雲母	普通	〃	8	縄文，沈線	〃
〃	12	多量の長石	不良	〃	7	沈　線	〃
〃	13	少量の長石	良好	〃	8	〃	〃
〃	14	〃	普通	〃	6	〃	〃
〃	15	多量の長石	〃	〃	10	縄文，沈線	〃

第1表　出土土器の形状一覧表（その1）

図版	番号	胎　　土	保存状態	色　調	厚さ	文様の特徴	備　　考
5	1	多量の長石	良好	黄褐色	7mm	沈　線	堀　址
〃	2	〃	〃	黒褐色	8	〃	〃
〃	3	〃	〃	赤褐色	7	無　文	〃
〃	4	少量の長石	〃	黒褐色	6	沈　線	〃
〃	5	〃	普通	白灰色	5	〃	〃
〃	6	微量の長石	良好	黒褐色	8	内耳土器	〃
〃	7	〃	〃	〃	6	〃	〃
〃	8	〃	〃	〃	8	〃	〃
〃	9	〃	〃	〃	5	〃	〃
〃	10	〃	〃	〃	6	〃	〃
〃	11	微量の雲母	普通	茶褐色	6	沈　線	道路址
〃	12	〃	〃	〃	10	〃	〃
〃	13	〃	〃	〃	11	〃	〃

第2表　出土土器の形状一覧表（その2）

第2節　石　器

石器の説明は表を用いることにする。表の項目は図版，番号，名称，器形，石質，備考である。

（小池政美）

図版	番号	名　称	器　形	石　質	備　考
6	1	打製石斧	短冊形	硬砂岩	道　路　址
〃	2	〃	〃	緑泥岩	第1号住居址
〃	3	〃	〃	硬砂岩	〃
〃	4	石　錘		〃	〃
〃	5	〃		〃	堀　址
〃	6	砥　石		油性頁岩	〃
〃	7	打製石斧	短冊形	緑泥岩	第1号住居址
〃	8	〃	〃	硬砂岩	道　路　址
〃	9	〃	〃	緑泥岩	〃
〃	10	〃	〃	〃	〃
〃	11	磨　石		硬砂岩	〃

第3表　出土石器の形状一覧表（その1）

図版	番号	名　称	器　形	石　質	備　考
7	1	打製石斧	短冊形	緑泥岩	グリット
〃	2	〃	撥　形	硬砂岩	〃
〃	3	〃	短冊形	〃	〃
〃	4	〃	〃	緑泥岩	〃
〃	5	〃	〃	〃	〃
〃	6	〃	撥　形	〃	〃
〃	7	磨　石		硬砂岩	〃
〃	8	石　錘		〃	〃
〃	9	〃		〃	〃
〃	10	石包丁		緑泥岩	〃

第4表　出土石器の形状一覧表（その2）

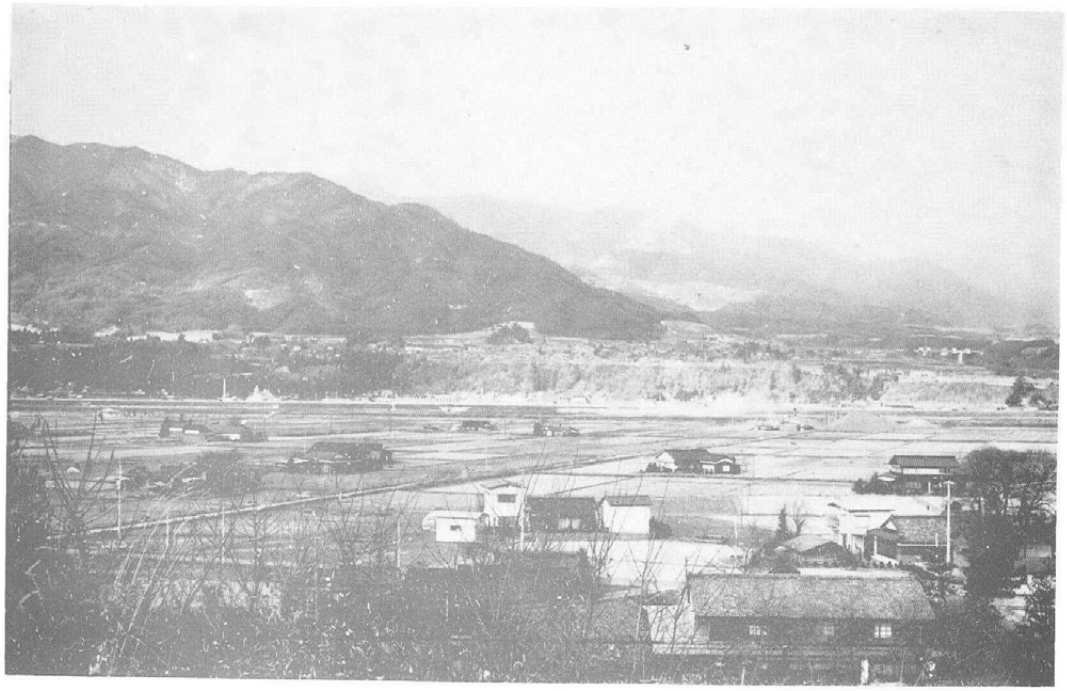
第Ⅳ章　ま　と　め

発掘地点は段丘の先端部，しかも西側は宅地が入りこんでいたので，全面的な発掘調査が行なわれなかったが，縄文中期，中世城郭との長い間にわたる遺構と遺物の検出をみた。縄文期のものは縄文中期初頭の所謂，平出３Ａ式，五領ケ台式，阿玉台式的手法をもつ土器類と，一般的にみられる加曽利Ｅ式的土器類とであった。

中世時代の遺物としては，中世前半の内耳土器片，中世後半の陶器類，特に美濃の鉄釉等であった。次に遺構についてであるが，縄文中期初頭の竪穴住居址，中世時代の堀址，中世時代の道路址１であった。竪穴住居址は縄文中期初頭のいわゆる平出３Ａから阿玉台期に移項する時期の住居址で，同時期の単独遺物出土は極めてまれであって，今後のよりよきサンプルとなると思われる。

堀は南北に走っており，南側は都合よって発掘調査は完了しなかったが，大きさや深さより，また存在個所あるいは出土遺物より本址は中世前半期の所産物と思われた。第３節，歴史的環境に述べたように館の存在を強める要素を多く含蓄しており，館をとりまく環壕のようにも思われる。

（小池政美）



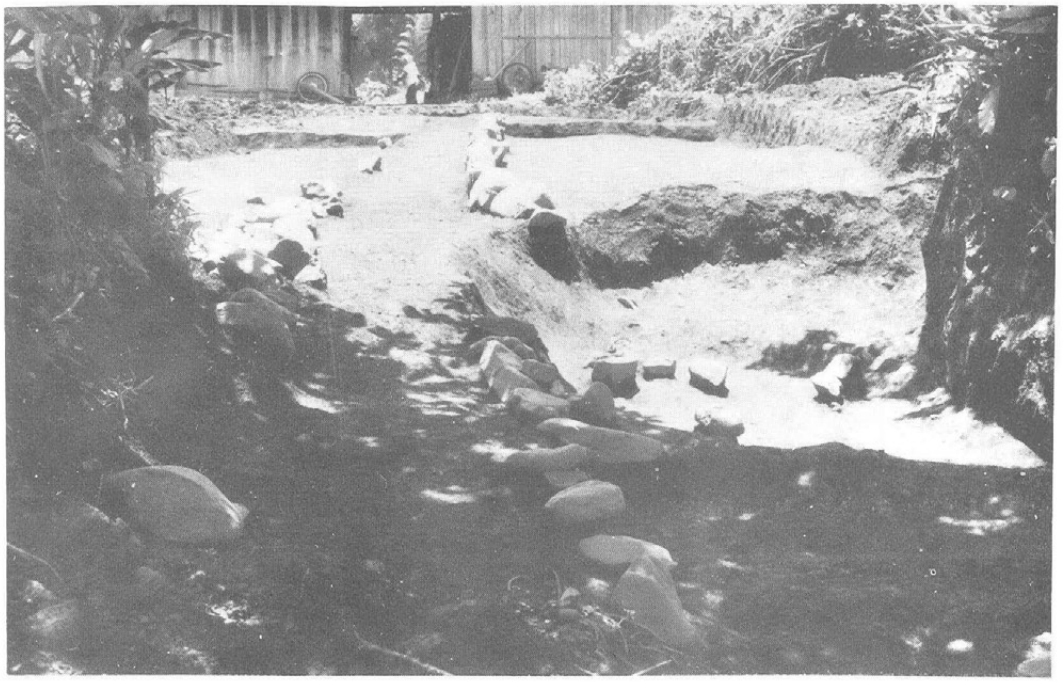
竜東より眺む

西側より眺む
図版１　遺跡全景

第1号住居址

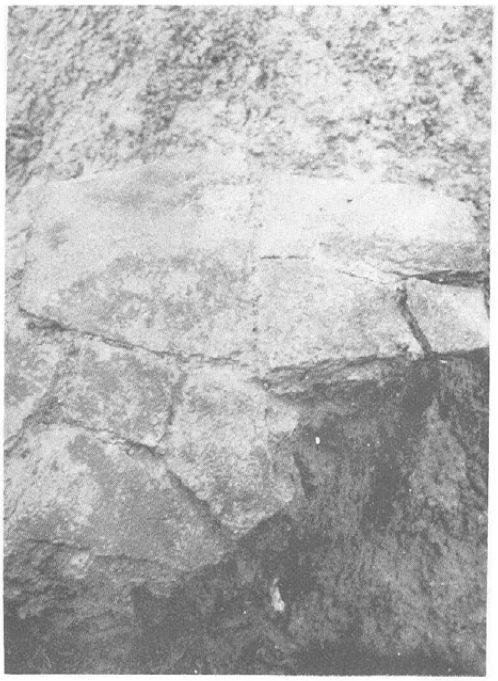
堀　　址

図版2　遺構（第1号住居址及び堀址）



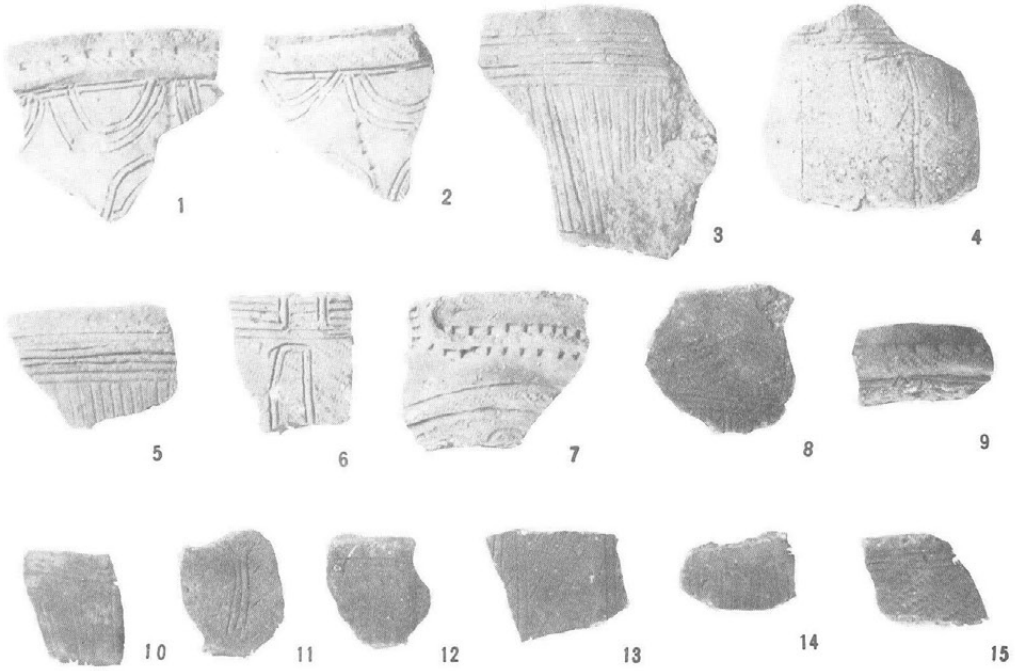
道　路　址

土器出土状況

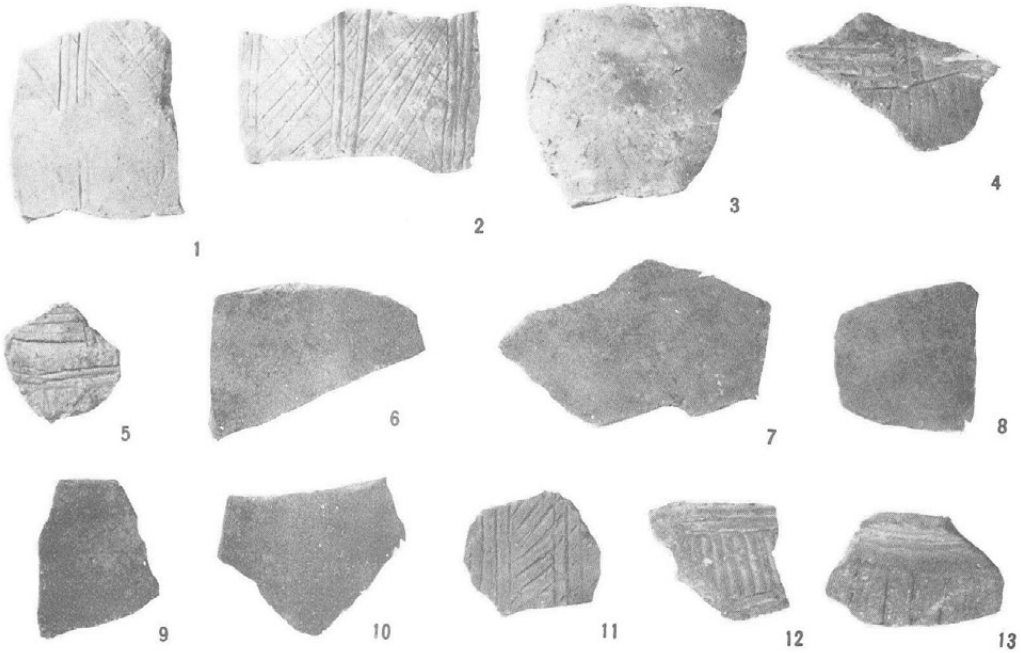


土器出土状況

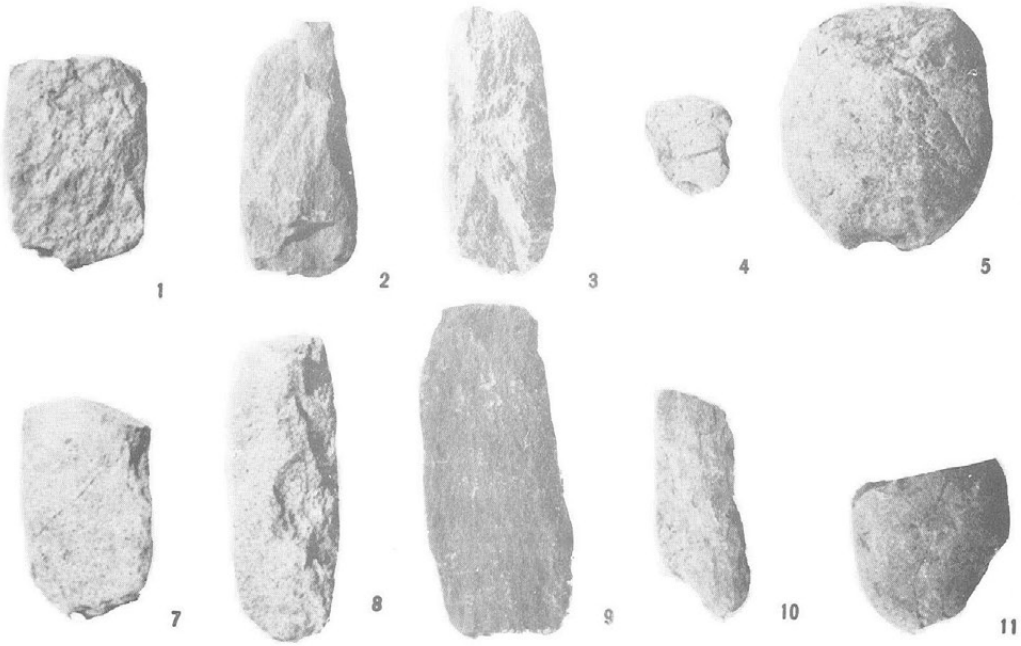
図版 3　遺構（道路址）及び遺物出土状況



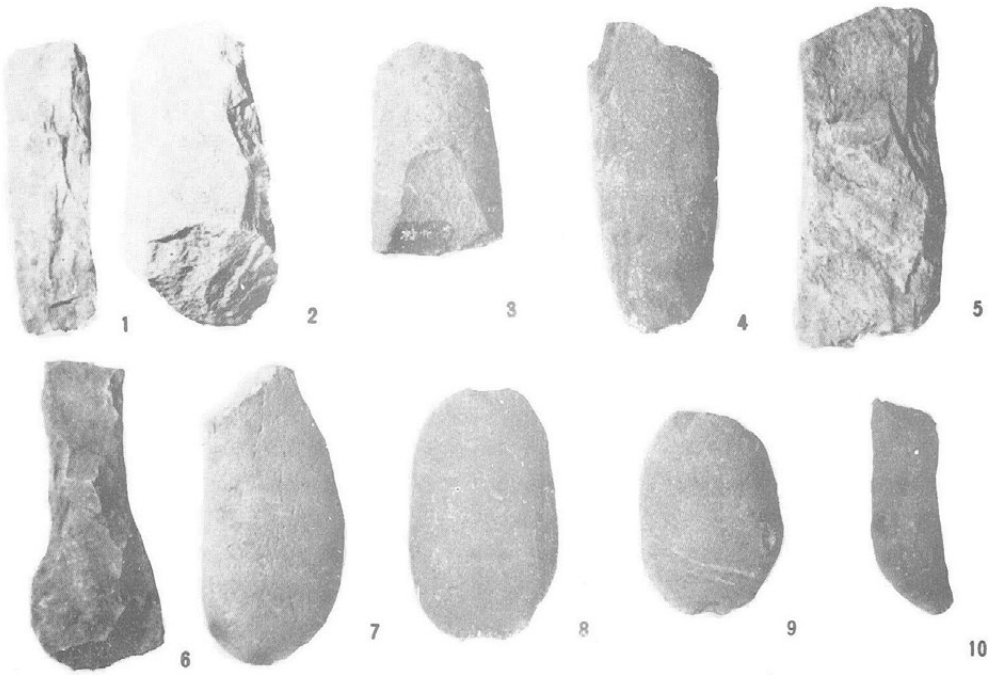
図版 4　出土土器



図版 5　出土土器



図版 6　出土石器



図版 7　出土石器

東方A・村岡北遺跡

―― 緊急発掘調査報告 ――

昭和50年3月29日　印刷

昭和50年3月31日　発行

発行所　長野県伊那市教育委員会

印刷所　長野県伊那市美すず上大島
みすず創美社

村岡南遺跡

目　　次

目　　次 …… (3)
挿図目次 …… (4)
図表目次 …… (4)
図版目次 …… (4)

第Ⅰ章　発掘調査の経過 …… (5～8)

第1節　発掘調査の経緯 …… (5)
第2節　調査の組織 …… (5～6)
第3節　発掘日誌 …… (5～8)

第Ⅱ章　遺　　構 …… (9～18)

第1節　住居址 …… (9～10)
第2節　土　拡 …… (10～11)
第3節　堀　址 …… (12～13)
第4節　柱穴群 …… (14～16)
第5節　地下倉 …… (16～18)

第Ⅲ章　遺　　物 …… (18～20)

第1節　土　器 …… (18～19)
第2節　石　器 …… (20)

第Ⅳ章　ま　と　め …… (21)

挿　図　目　次

第１図　遺構配置図 ……（９）
第２図　第１号住居址実測図 ……（10）
第３図　第１号土拡実測図 ……（11）
第４図　第２号土拡実測図 ……（11）
第５図　第３号土拡実測図 ……（11）
第６図　第４号土拡実測図 ……（12）
第７図　内堀実測図 ……（13）
第８図　外堀実測図 ……（13）
第９図　第１号柱穴群実測図 ……（14）
第10図　第２号柱穴群実測図 ……（15）
第11図　第１号地下倉実測図 ……（16）
第12図　第２号地下倉実測図 ……（17）
第13図　第２号地下倉底部実測図 ……（18）

図　表　目　次

第１表　出土土器の形状一覧表（その１）…（19）
第２表　出土土器の形状一覧表（その２）…（19）
第３表　出土石器の形状一覧表（その１）（20）
第４表　出土石器の形状一覧表（その２）（20）

図　版　目　次

図版１　遺跡全景 ……（22）
図版２　遺構（住居址及び堀址）……（23）
図版３　遺構（堀址及び柱穴群）……（24）
図版４　遺構（柱穴群及び地下倉）……（25）
図版５　遺構（地下倉及び土拡）……（26）
図版６　遺構（土拡）及び遺物出土状況（27）
図版７　出土土器 ……（28）
図版８　出土土器 ……（28）
図版９　出土石器 ……（29）
図版10　出土石器 ……（29）

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査の経緯

西部開発事業（県営畑地帯総合土地改良事業）は昨年の上島，東方部落にわたって行なわれました。本年度は東方，村岡，城，山本部落にわたり，その面積は60数haに達している。

発掘調査は東方Ａ，村岡北，村岡南，常輪寺下，北条の５遺跡が該当し，東方Ａ遺跡と村岡北遺跡は夏に，村岡南遺跡，常輪寺下遺跡，北条遺跡は秋にそれぞれ実施されました。

西部開発（県営畑地帯総合土地改良事業）第９工区内の遺跡の調査を委託された場合は，受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり，おって南信土地改良事務所より，緊急発掘調査について委託した旨，市教育委員会へ依頼を受けたので，市教育委員会を中心に，村岡南遺跡発掘調査会を結成し，この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

10月７日　南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節　調査の組織

村岡南遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	松沢一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	坂井喜夫	伊那市教育委員長
〃	向山雅重	長野県文化財専門委員
〃	木下　衛	上伊那教育会会長
〃	原　益久	南信土地改良事務所長
〃	辰野伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	竹松英夫	伊那市教育委員会社会教育課長
〃	石倉俊彦	〃　課長補佐
〃	中村幸子	〃

発掘調査団

団長	友野良一	日本考古学協会会員
副団長	根津清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調査員	小池政美	〃
〃	辰野伝衛	伊那市文化財審議委員

調　査　員	清水　満	長野県考古学会会員
	福沢幸一	〃
	太田　保	〃
	柴登巳夫	〃
	長瀬康明	〃
	本田秀明	〃
	堀口貞幸	〃
	深沢健一	〃
	丸山弥生	国学院大学学生
	赤羽義洋	〃
	石岡憲雄	〃
	館野　孝	〃

第3節　発掘日誌

昭和49年10月14日　本日より調査開始の運びとなった。日照時間は日一日と短く，また寒くなっていくので，防寒用の為にテントを2張とする。これでテントも2張並び，発掘調査団らしくなってきた。器材の点検を行ない，今後の調査に支障のないように万全を整える。このところ快天気が続くので，調査期間中，この状態が続行してほしいものだ。

昭和49年10月15日　作業員の人数も増し，仲良くやっていってもらいたいと思う。本日はブルトーザーを入れて耕土剥ぎを実施した。現況は桑畑であったが，耕土を取り除いてみると，下より黄褐色土層混りの硬い地場層がみられ，水田をつくった事実が判然とした。ブルトーザーによる作業終了後，グリット打ちを開始する。調査地域をA～Cまで3地区に分ける。A地区は東側の畑，B地区は南西の畑，C地区は西北の畑とし，その中を南北に1～25，東西にA～Kとし，グリット名称の頭文字には地区名を採用することとする。遺物は縄文中期土器片数片出土，

昭和49年10月16日　昨日に引続き，A地区に10カ所ほど，新規のグリットを掘ると，AB18より多数の縄文中

発掘風景

期土器片と木炭が検出でき，プランの一隅の色の違いが判然とし，第１号住居址とする。遺構の存在が，はっきりとすると，安心感とともに表現しようもない期待感が，胸中のどこかに潜んでいて作業員達の道具を持つ手に力が自然に入る。Ａ地区は中央部より西側は水田造成の折に破壊されたとみえて，調査を断念せざるをえなかった。作業の能率性を考えて，２班に分けて，１班はＢ地区に入れる。Ｂ地区は西側が深く，ローム層まで深くて約１ｍ位あった。１班は第１号住居址のプランを確認する。

昭和49年10月17日　第１号住居址のプラン確認とともに，掘り下げを開始する。遺物は昨日に増して多数の縄文中期土器片が出土した。また床面上より焼土塊が検出され，住居址の様相を整えていった。Ｂ地区に８カ所グリットを入れてみると，縄文中期土器片が数点出土したのにとどまったしかし，原地形の状態がベールをぬぐかのごとくに，刻一刻と明らかになってきた。明日になればＢ地区の原地形は素人でも理解できるようになるであろう。

昭和49年10月18日　昨日に引続き，Ｂ地区のグリットの掘り下げを行なった。昨日の念観であったＢ地区の原地形が明らかになった。その内容は北から南傾斜，東から西傾斜と二つの傾斜面上に位置し，複雑地形になっている。グリットを掘れども，掘れども，遺物は少量出土するが，遺構へは当らず，作業員の志気もあがらず，落胆の雰囲気が漂っていた。

昼食後，Ｂ地区傾斜面の平坦部にかかる地区に一つの丸い落ち込みが，目にまぶしい程に黒々と輝いて発見された。皆，『あった』，『あった』と感嘆の叫びが発せられ，目を転じてみれば，顔面が喜悦の表情で満ちあふれていた。黒い落ち込みの周辺グリットを拡張してみると，凡そ，等間隔で柱穴が検出され，第１号柱穴群とする。柱穴群の範囲内より天目茶碗の破片が出土し，中世遺構，特に，あら城との手がかりをつかめたものと思った。新らためてであるが，遺跡発掘は最後まで，あきらめてはいけないという教訓を得た。

昭和49年10月21日　第１号柱穴群の全体を確め，精査はあとにまわすことにする。北西の桑畑にグリットを設定する。これをＣ地区とし，名称はＡ，Ｂ地区同様に，南北に１～10，東西にＡ～Ｍとし，頭文字にＣを付けることとする。ただちに，グリット掘りを開始した。遺物は多量に出土しＣＣ１に，黒い落ち込みがあり，第１号土拡とする。また，ＣＤ４～ＣＩ４にかけて褐色土層面に黒く，丸や，角状に落ち込みがみられ，第２号柱穴群とする。

昭和49年10月23日　第１号土拡の掘り下げ，第２号柱穴群の範囲把握に，グリット掘りを各所にわたって実施していると，ＣＦ９に方形の黒土の落ち込み，ＣＥ９に円形の落ち込み，ＣＨ10に楕円形状の落ち込みが検出され，前より順に，第１号地下倉，第２号土拡，第３号土拡とする。ＣＨ２に人為的に埋められた，一見撹乱層のように思われる土層の変色があり，方形を呈していた。一応これを第２号地下倉と決める。第１号地下倉を掘り下げてみると，構築面より30㎝位下ったレベルに無数の石が検出できた。第２号，第３号土拡を掘り下げ，同日中に完掘し終える。

昭和49年10月24日　第１号土拡の完掘を終えるが，遺物は何も出土せず。第１号地下倉の石の清掃をする。第２号地下倉の掘り下げをしていると，第１号地下倉と同様石を敷いてあり，写真撮影と実測を済ませるまで，手をつけられないので，そのままにしておく。グリット掘りを西へ，西へと延長していくと，太陽が沈みかけた，ちようど午後４時頃に捜し求めていた掘がみつかり，つい

にくるものがきたという感じになった次第である。

昭和49年10月25日　昨日，検出された堀のプラン確認に専念した。堀は南北に長く，南は段丘崖に，北は幾分カーブを描きながら，東とへ回わっている模様である。

昭和49年10月26日　堀のプラン確認に努める。内堀のプラン確認

昭和49年10月28日　内堀に対し，外堀のプラン確認に主を置いて掘りすすめると，それは南側の段丘崖まで続いているようだ。外堀をところどころ，掘り下げてみると，底部に近い所に敷石がみられ，これは飯島町，本郷，南羽場遺跡のA号溝址に類似している。

昭和49年10月29日　外堀の残った部分のプラン確認と，内堀のプラン検出，内堀は東側の段丘から西へ向い，さらに南側の段丘に続いていた。南側の段丘崖にも堀を掘った痕跡がみうけられた。形としては，内郭を方形に取り囲き，城郭としては古い形態に属していると思われる。南北に走る堀はプランが明確であるのに対し，東西のそれは，桑や水田の時に破壊されたとみえて，プラン検出にてこずった。

昭和49年10月30日　内堀のプラン確認と，本郭と呼んでいいかは不適当と思われる地区にグリットを設定して，内堀の取土の都合により，堀に最も近い西側より掘り始めるが，水田や桑畑等の破壊により遺構の検出は不可能と思われた。

昭和49年10月31日　本郭の地区に昨日実施した所より，東へ東へと延長していく，本郭地区全域にわたって調査を実施したが，どこにも遺構らしきものは見当らず，外堀の掘り下げを実施する。入口と思われる所より古瀬戸の菊皿，内耳土器片の出土に本堀の大体の時代決定が可能となった。

昭和49年11月１日　外堀の掘り下げを実施する。午後，権現山より吹きおろす寒風が肌身に浸み日一日と冬へ近ずく足音が聞えてくるようであった。明日も天気になるだろう。

昭和49年11月２日　外堀の掘り下げを実施する。ほぼ全掘を終える。

昭和49年11月５日　内堀の掘り下げを実施する。覆土中より内耳土器片が出土する。

昭和49年11月６日　内堀の掘り下げを実施する。

昭和49年11月７日　内堀の掘り下げ，第３号土拡，第４号土拡の掘り下げ，清掃をする。

昭和49年11月８日　内堀，外堀，第１号住居址，第１号柱穴群，第２号柱穴群，第１号地下倉，第２号地下倉の完掘，並びに全遺構の写真撮影

昭和49年11月９日　第１号土拡から第４号土拡までの実測，第１号住居址，第１号柱穴群，第２号柱穴群，第１号地下倉，第２号地下倉の実測

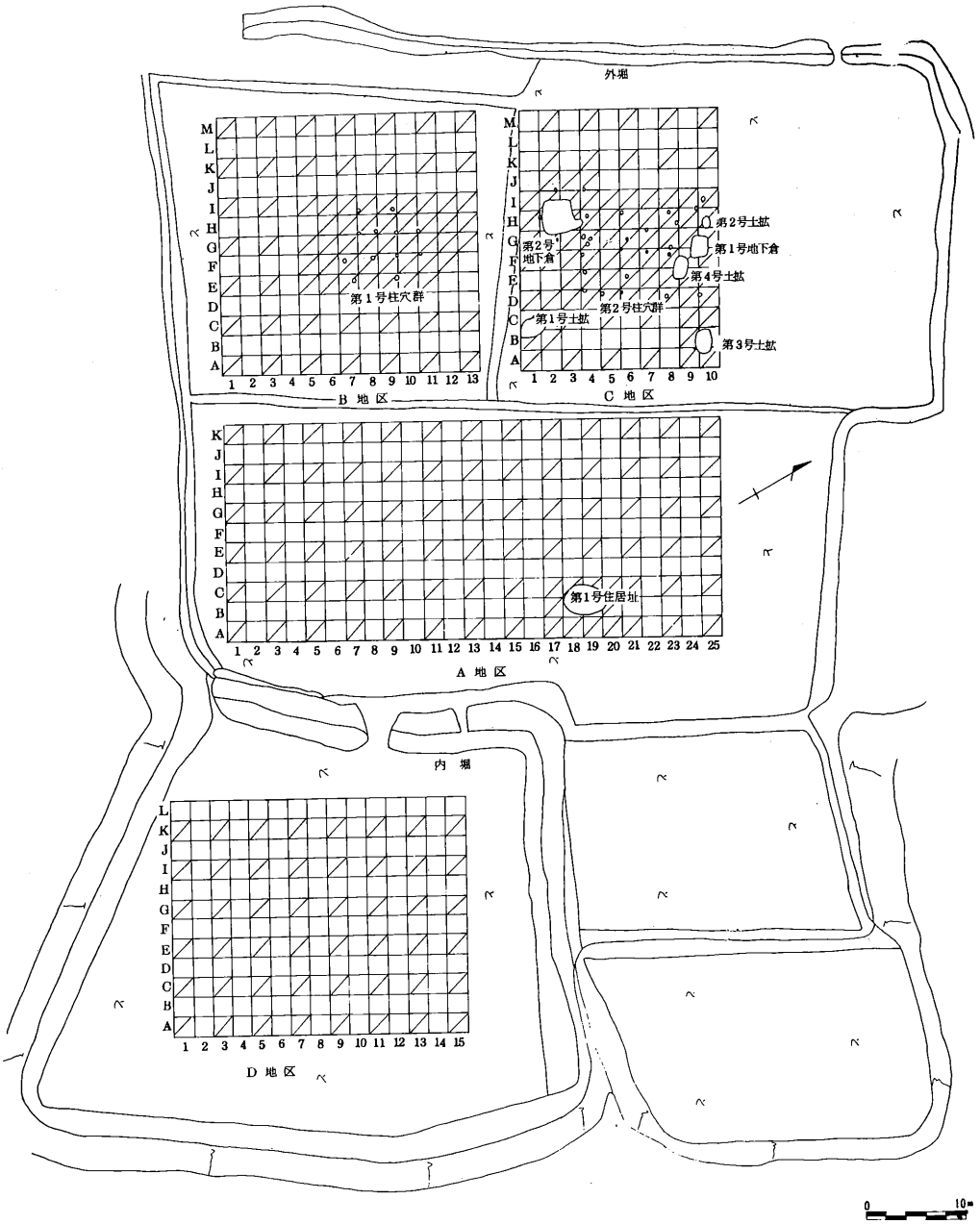
昭和49年11月11日　内堀，外堀の実測，全測図の作成

昭和49年11月12日　発掘器材のあとかたづけをする。

（小池政美）

第Ⅱ章　遺　　構

第1節　住居址



第1図　遺構配置図

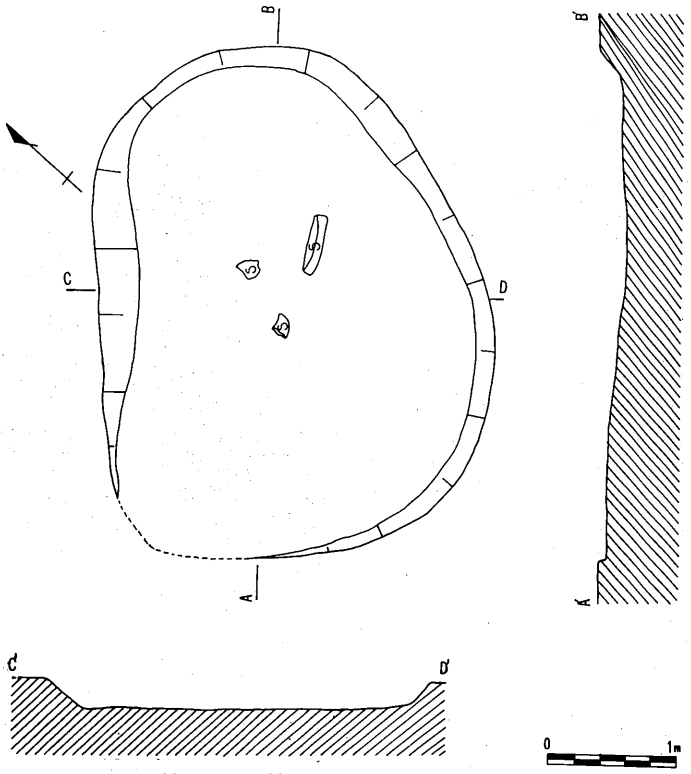
第１号住居址　（第２図，図版２）

本址は第４層であるローム層を掘り込み，南北３ｍ５cm，東西４ｍ程の規模で円形プランを呈する竪穴住居址である。壁高は10～20cm位の範囲に含まれ，内傾気味であった。床面は全般的に軟弱気味であり，ところどころに堅い叩きの箇所も認められた。

住居址の内部施設と考えられる柱穴や炉は桑の撹乱によってしまってどこにも検出されなかった。内部の３個の石はホルンヘルスや花崗岩であった。

床面に密着して縄文中期初頭の土器片がかたまって出土したこれらの土器片は編年で考えてみるならば，関東地方の五領ケ台式，信州に於いては平出３Ａ式と呼ばれている。

前述した土器片だけが単独出土した例は極めて少なく，内部施設が完全な状態で出土したならば好資料になったと思われるのに誠に残念であった。しかし今後の資料に何か役にたつ面はあると思う。



第２図　第１号住居址実測図

第２節　土　拡

第１号土拡　（第３図，図版５）

第１号柱穴群の東南の端に位置し，南北３ｍ20cm，東西１ｍ70cmの長円形プランを呈し，深さは75～80cm位あった。状態は西壁が垂直に近く，他はなだらかな傾斜を成していた。東壁は各所にわたって凹凸がみられた。床面は堅く叩いた形跡は存在しなかった。覆土中よりわずかな炭化物の検出がみられ，遺物の出土は全くなかった。

第２号土拡　（第４図，図版６）

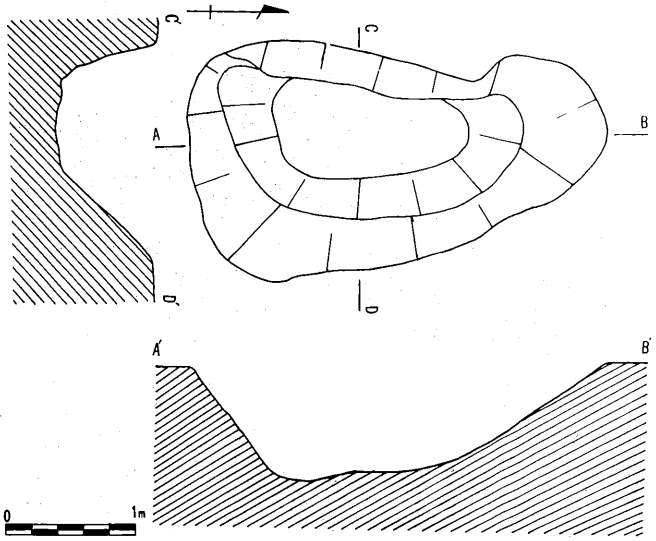
第１号地下倉の西側に位置し，第３層，褐色土層面を掘り込んだ土拡で円形プランを呈していたその規模は南北85cm，東西75cm位であり，高さは55cm前後であった。状態は内面にわずかに傾斜状になっていた。床面上に密着して４個のホルンヘルスの角礫があり，それは焼けていた。

床面上には叩きらしきものは存在しなかった。覆土中より少量の炭化物があり，遺物の出土はみられなかった。

第３号土拡　（第５図，図版６）

第２号柱穴群の北東の端に発見された土拡で，第３層，褐色土層面を掘り込み，南北１ｍ70cm，東西２ｍ45cm程の規模で，東西に細長い長円形プランを呈している。深さは45cm位を数え，壁の状態は内面に急傾斜し，叩き状の何かは存在しなかった

床面は叩きが存在せずに，軟弱気味であった。覆土中に炭化物が検出され，遺物は何も出土しなかった。



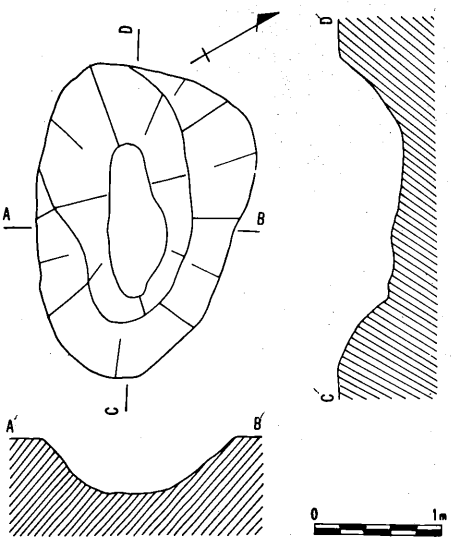
第３図　第１号土拡実測図

第４号土拡　（第６図，図版６）

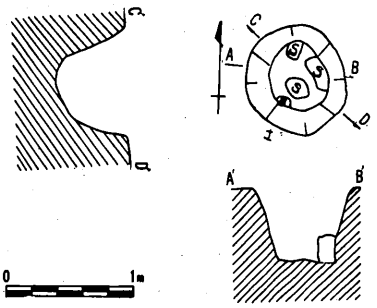
第２号柱穴群の北側の方に，第３層，褐色土層面を掘り込んだ土拡で，その規模は南北２ｍ35cm，東西１ｍ35cm程を測定でき，深さは75cm位であった。

壁は内傾に近く，叩きは存在しなかった。北東の隅にみられた柱穴は第２号柱穴群の一つと思われた。

床面は軟弱気味であった。遺物は何も出土せずに，少量の炭化物が検出された。



第５図　第３号土拡実測図



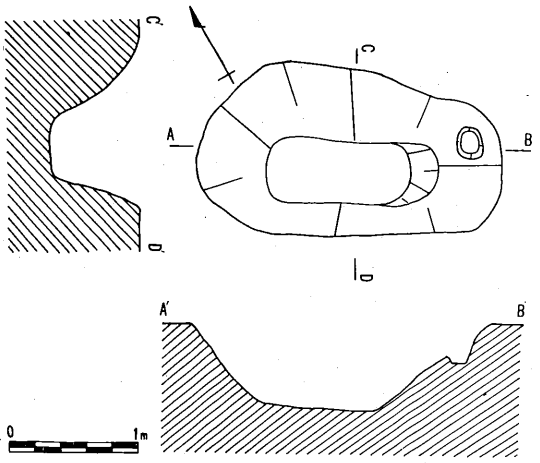
第４図　第２号土拡実測図

第3節　堀　　址

内堀　（第7図，図版2）

本内堀は城郭遺構の内部を区画するようなかっこうで発見された。内堀の構築された位置は天竜川形成段丘が南北に走り，戸沢川段丘が東西に走っている。前段丘崖から西へ凡そ45m程延長した地点で南に直角に折れて，南へ30m程続いて，南側の段丘崖へとぬけている。両段丘崖には人為的に掘られた跡がみられた。

次の本内堀の内部的な様相について触れてみようと思う。幅は南側では4m，中央部では5m，北側では4m50cm位であった。



第6図　第4号土拡実測図

段面はなだらかに内側へ傾斜をしていた。底面に散在しているホルンヘルスは内郭の建造物の土台に利用したものと思われた。遺物は底面近くより内耳土器片が出土した。

南側より北へ約10m位寄ったところに溝の切れた箇所がみつかった。これはおそらく入口の一種と思われた。

外堀　（第8図，図版3）

本外堀は城郭遺構の全体を取り囲むようにしている。規模並びに，深さについては実測図を参照してもらうことにして，単刀直入に内部の様相について触れてみようと思います。外堀は北側で東へとカーブをしており，カーブより南へ5m位のところで，溝が一部分切れており，ちようどブリッチ状になっていた。おそらく入口と断定できると思われる。この推定を裏付けできるかの如くに南側と北側に門柱の跡が発見された。入口の南側の溝の中央部までは傾斜は平坦であり，溝底には大小さまざまなホルンヘルスの自然石が平坦にわたってつまっていた。南の平坦部から傾斜面へ移る個所へ拳大程の石が集石状にはいっていた。入口と思われる個所では南側と北側が，東西にわたってわんきよく状になっていた。

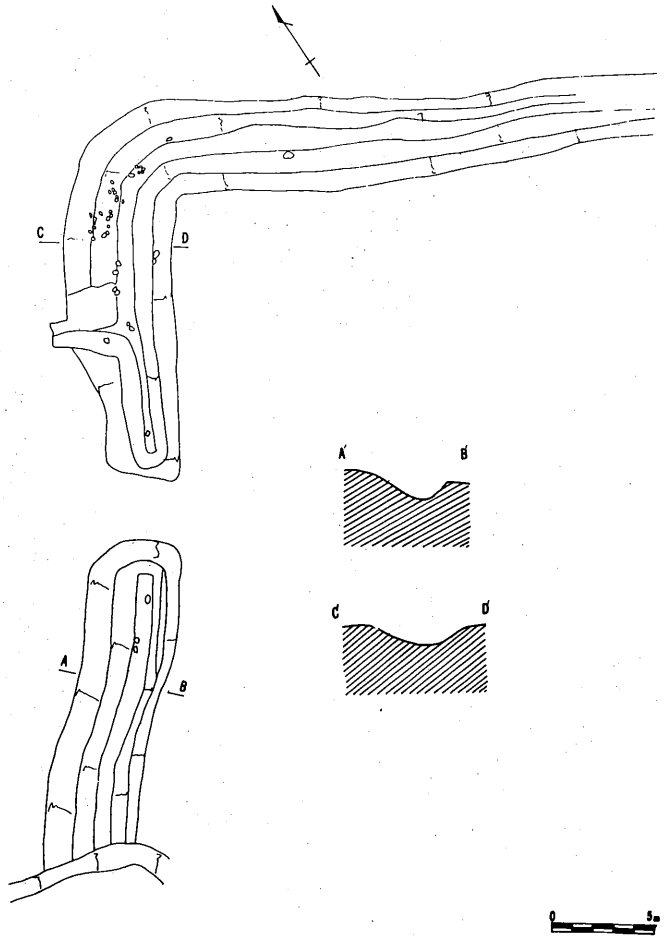
溝底のレベルは基盤全体が北から南への傾斜のために，レベルも同様に南へ行くに従って深くなっていた。構築時にこのような工法を用いる方が安易であったためと思われた。

溝底の石はその数において千個をはるかにこえており，石の形態は凡そ丸形が多かった。ホルンヘルスは明らかに人為的に埋めた事実が顕著であった。石の中には焼けて赤く変色したり，焼土や炭化物が附着したものも全体の一割以上をもしめていた。石の下には溝底まで，黒土層がびっしりとつまっており，堀と石とでは時間差があるように思われた。

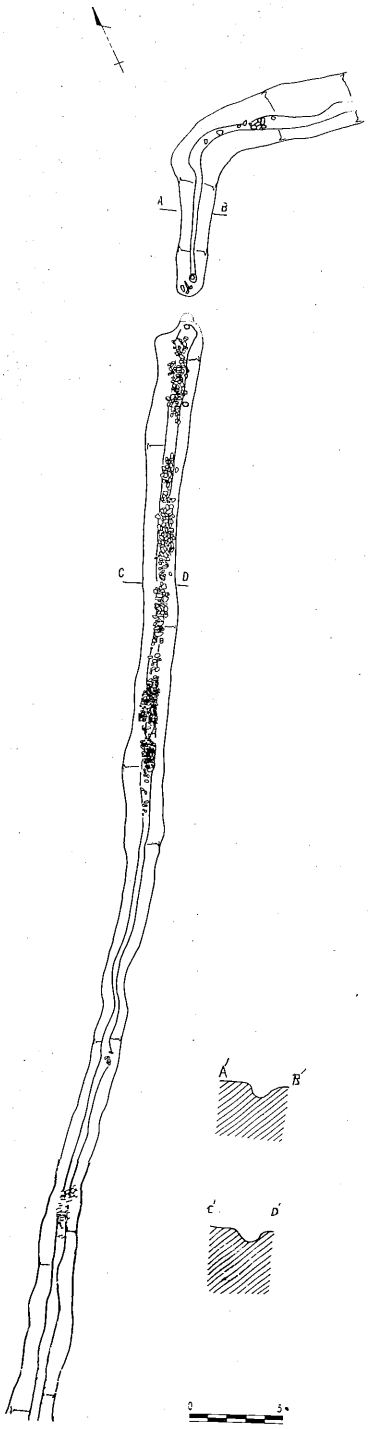
遺物は黄瀬戸の陶器片や内耳土器片が出土した。したがっておうよその時代は鎌倉時代から室町時代の内に属していると思われる。

最後に，城郭遺構を究明するには外堀や内堀の形態並びにその存在位置，あるいは自然的環境との問題，さらに，それに伴なう附属施設，たとえば，郭，建造物，倉庫，井戸等々，生活に密接する遺構を見つけだす必要があろう。いずれにしろ総合的な追求が重要視されねばならない。

（小池政美）



第7図　内堀実測図

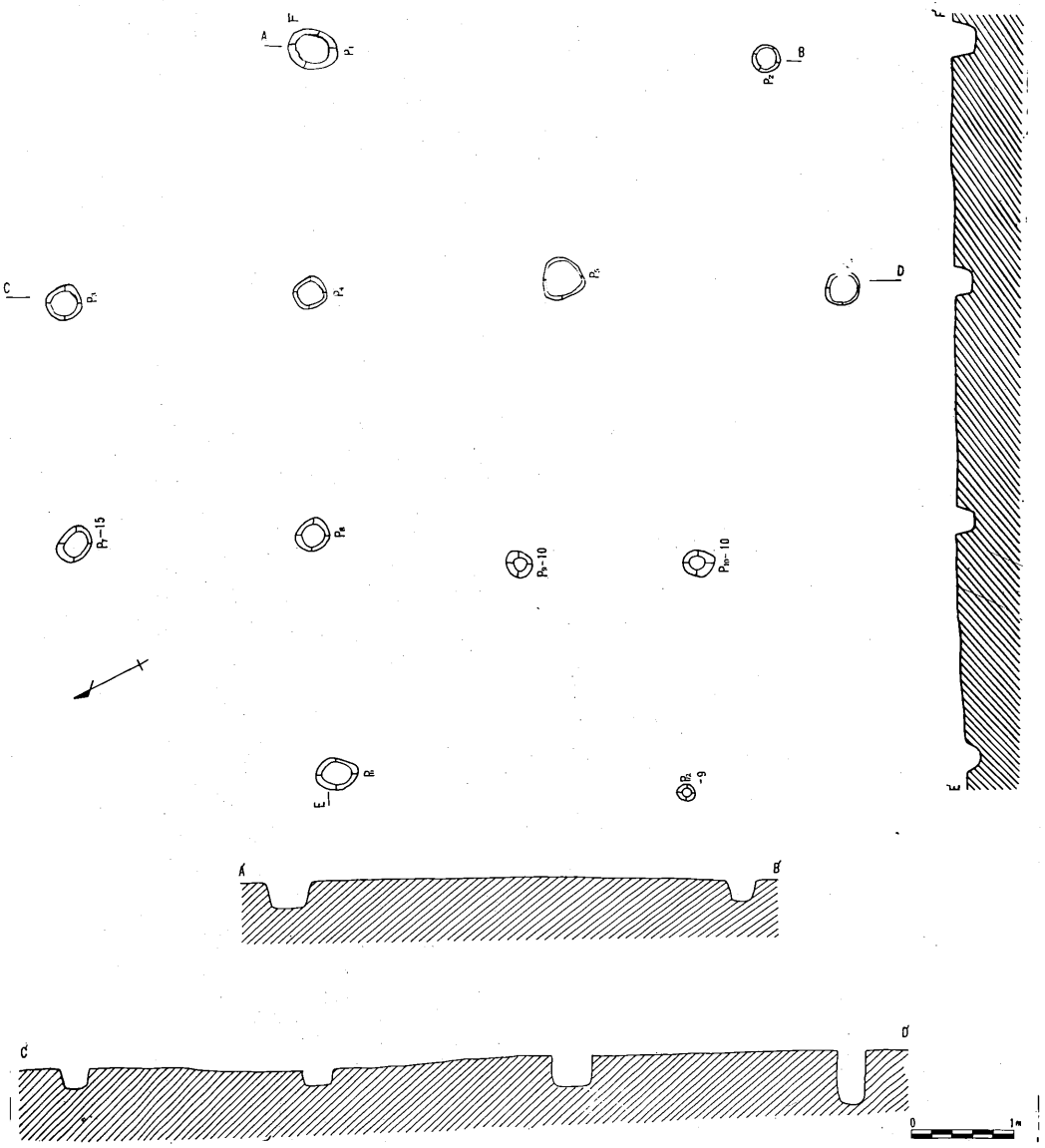


第8図　外堀実測図

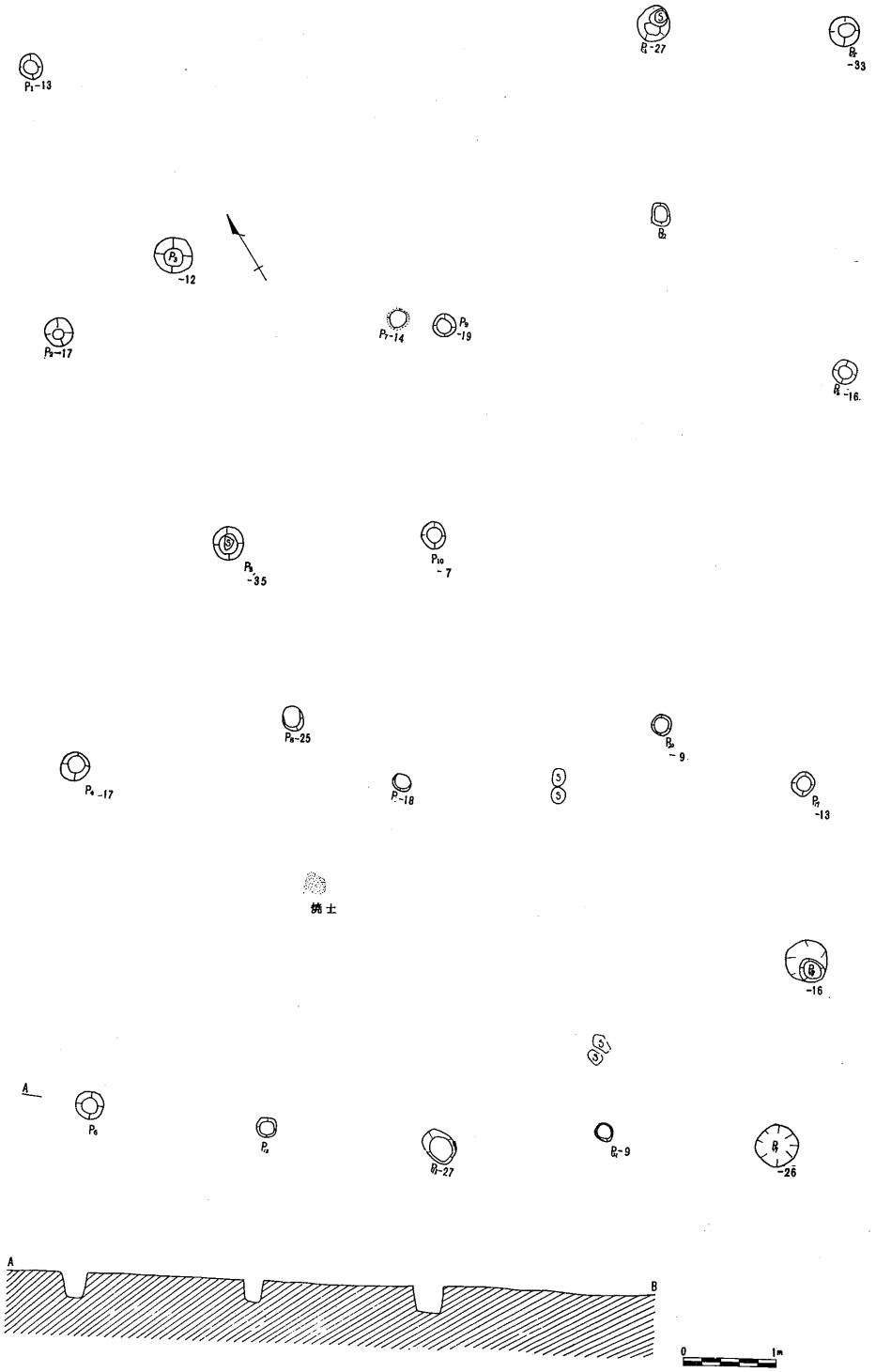
第3節　柱穴群

第1号柱穴群　（第9図，図版3）

本柱穴群はB地区のローム層面に12個検出された。その範囲は南北8ｍ，東西7ｍ50cm位であった。柱穴の深さは10cmから20cm位に含まれていた。配列状態が割合に整然としていたのは，P_1，P_4 P_8，P_7 と P_3，P_4，P_5，P_6 と P_{15}，P_8，P_9，P_{10} とであった。遺物はローム層面に密着して鉄釉，古瀬戸の陶器類が出土した。またローム層面は固く叩かれていた。



第9図　第1号柱穴群実測図



第10図　第２号柱穴群実測図

第２号柱穴群　（第10図，図版４）

本柱穴群はＣ地区の東半分位のところに位置し，褐色土層面に21個の柱穴が発見された。柱穴の規模は大体において大差はなかった。形状については円形状のものが大多数を占め，なかにはP_{12}のように角状のものも存在していた。特殊な柱穴としてはP_{14}，P_5のように石をもっているものもあった。柱穴の眼目となる配列については列状を成しているものは，東側と南側であり，それらの名称はP_{15}，P_{16}，P_{17}，P_{18}，P_{19}，東側のP_6，P_{12}，P_{17}，P_{21}，P_{19}の順であった。P_{11}の南側に焼土のブロックがみられた。これは当時の人々のカマドに使用した残りであろう。掘り込み面の土層は硬くなってはおらなかった。したがって建築構造物は板敷きであろう。

遺物としては，古瀬戸，鉄釉陶器片が出土した。したがって時代は鎌倉時代から桃山時代に含まれるであろうと思われる。

（小池政美）

第４節　地　下　倉

第１号地下倉　（第11図，図版４）

本地下倉は第２号柱穴群の北側，西側が第２号土拡に近接した位置に発見された。第３層，褐色土層面を掘り込み，南北３ｍ40cm，東西３ｍ85cm程の規模を有し，東西にやや長いが，隅丸方形プランを呈している。

壁高は北15cm，南45cm，東60cm，西75cm位を測定でき，状態は南，北は垂直に東，西はやや傾斜気味を示していた。

掘り込み面より20～30cm位下った面に大小各種さまざまなホルンヘルスの自然石が300個前後配列してあった。敷石のレベルは南から北へ，東から西へ，それぞれにわずかな傾斜を成しているようだった。石は断面でみるように２段になっていた。敷石列の下に黒色土層が充満していた。石の中には焼けたものや炭化物の附着，あるいは赤くなったのもあった。石を取り除いて床面を精査してみると，同面はローム層の極めて良好なる叩きであって，水平となっていた。遺物は何も検出されなかった。

第11図　第１号地下倉実測図

第２号地下倉　（第12～13図，図版５）

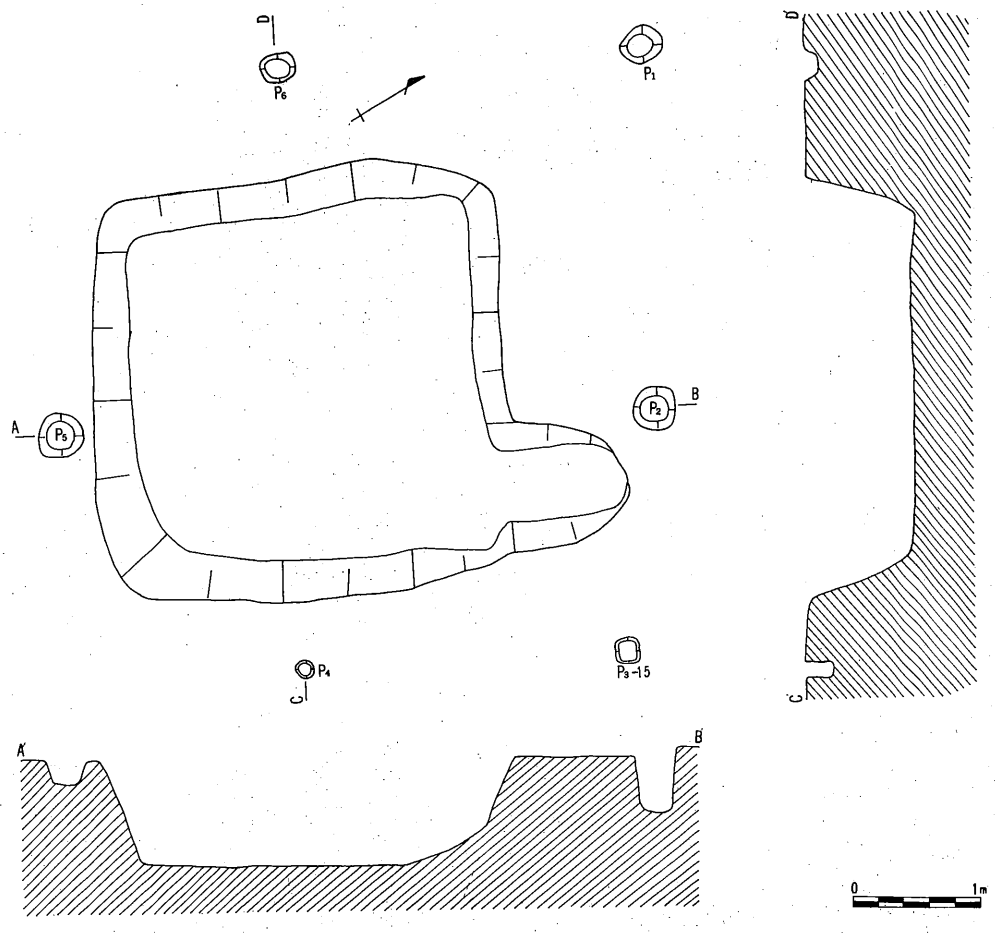
第２号柱穴群の南側に方形状の状態で発見され，その覆土は人為的に埋めたとみえて，その覆土は黄褐色砂礫混りの土層であった。その大きさは南北３ｍ40cm，東西３ｍ45cm位の規模を示していた。それらの南東の隅に南北１ｍ５cm，東西１ｍ程の規模の突出し部分があった。突び出し部は幾

分南傾斜を成しており，しかも，その底面は極めて固い叩きとなっていた。この部分の傾斜から判断して出入口に利用したものではないか？その出入口の際に踏みかためられて固くなったのと想像できよう。地下倉の底部には敷石列があり，大小さまざまな石を千個前後配列してあり，レベルは北側半分と南側半分とでは差があり，南傾斜状になっていた。石質はホルンヘルスが全てであった石の上の覆土は褐色のローム層の混りで，明らかに人為的に埋められたものと察知できた。下の覆土は黒色土が埋没の形で混入していた。

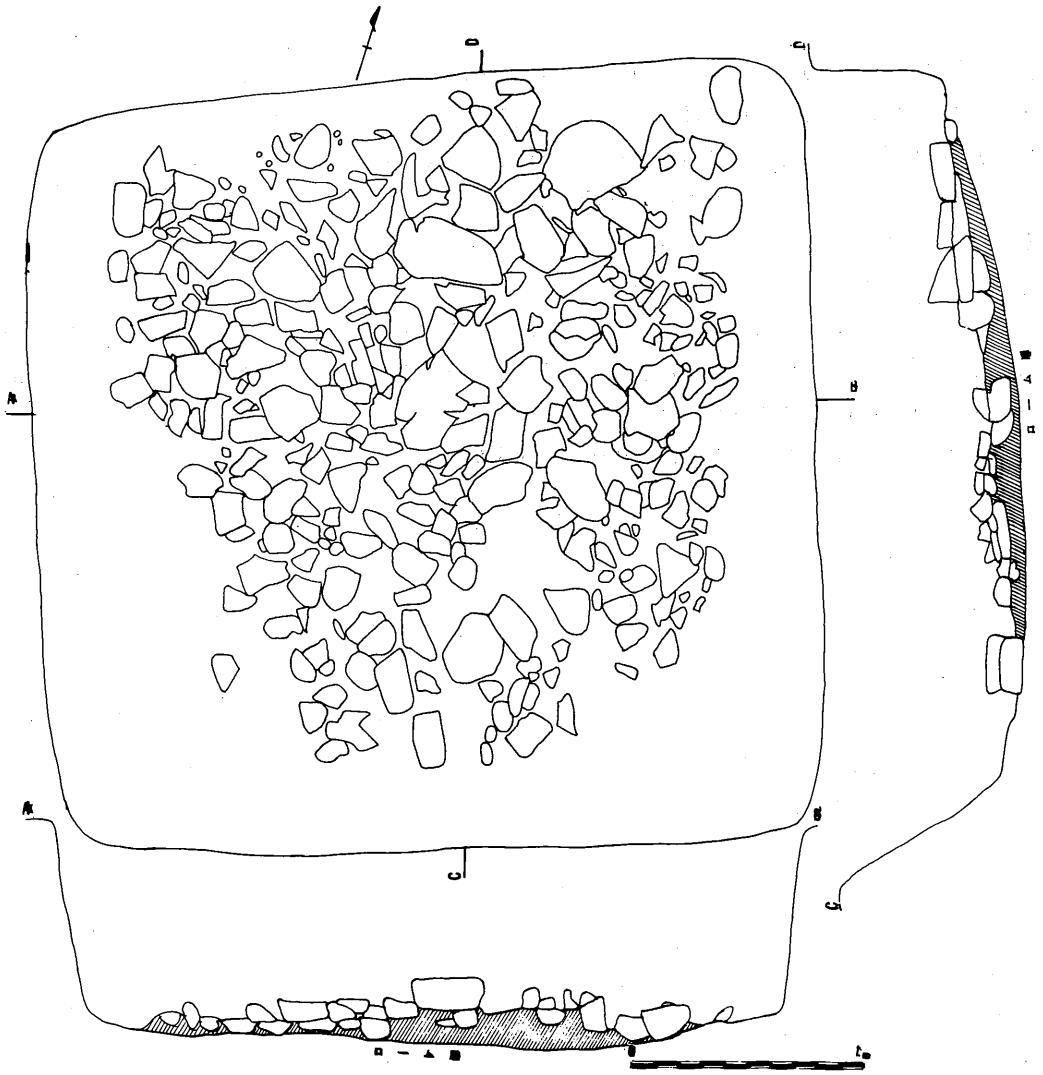
覆土中に多量の焼土と炭化物がみられ，明らかに火災にあったものと判断できるが，如何なる理由にて，このような石が並べられたかは二つ考えられると思われる。一つは湿気を防ぐための場合もう一つは構造物の上に置いた場合とである。

遺物は出入口と思われるところより鉄釉の陶器片が出土している。

（小池政美）



第12図　第2号地下倉実測図



第13図　第12号地下倉底部実測図

第Ⅲ章　遺　　物

第1節　土　　器

土器の説明は表を作成し，一見のもとに理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容説明を付記しておくことにする。

胎土，保存状態，色調についての記述は明らかなる基準によったものではなく，筆者の主観によるものである。　　（小池政美）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
7	1	多量の雲母	不　良	黄褐色	7	沈　線	第1号住居址
〃	2	少量の長石	良　好	茶褐色	6	沈線　刺突文	〃
〃	3	〃	〃	黒褐色	6	沈線　縄文　隆帯	〃
〃	4	多量の長石	〃	茶褐色	7	〃	〃
〃	5	〃	普　通	〃	7	〃	〃
〃	6	多量の雲母	〃	赤褐色	8	〃	〃
〃	7	〃	〃	〃	11	キャタピラ文	〃
〃	8	〃	〃	〃	11	キャタピラ文　爪形文	〃
〃	9	〃	〃	茶褐色	10	キャタピラ文　隆帯	〃
〃	10	多量の長石	良　好	〃	7	縄文　沈線	〃
〃	11	多量の雲母	普　通	〃	8	沈　線	〃
〃	12	〃	〃	〃	8	〃	〃
〃	13	多量の長石	〃	〃	7	縄　文	〃
〃	14	多量の雲母	〃	黒褐色	7	〃	〃

第1表　出土土器の形状一覧表（その1）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
8	1	多量の繊維	良　好	赤褐色	8	条痕文	グリット
〃	2	少量の長石	普　通	黒褐色	5	爪形文　縄文	〃
〃	3	〃	良　好	黄褐色	6	隆帯　刻目	〃
〃	4	〃	〃	黒褐色	10	隆帯　爪形文	〃
〃	5	多量の雲母	〃	茶褐色	6	沈　線	〃
〃	6	多量の長石	普　通	黄褐色	6	指頭圧痕文	〃
〃	7	〃	良　好	茶褐色	9	沈　線	〃
〃	8	多量の雲母	普　通	黄褐色	6	〃	〃
〃	9	〃	〃	茶褐色	7	〃	〃
〃	10	多量の長石	〃	赤褐色	10	刺突文	〃
〃	11	〃	良　好	黒褐色	7	沈　線	〃
〃	12	〃	〃	茶褐色	7	〃	〃
〃	13	〃	普　通	黒褐色	6	縄　文	〃
〃	14	〃	〃	赤褐色	8	〃	〃
〃	15	〃	良　好	黒褐色	7	内　耳	〃

第2表　出土土器の形状一覧表（その2）

第2節 石　器

石器の説明は表を用いることにする。表の項目は図版，番号，名称，器形，石質，備考である。

（小池政美）

図版	番号	名称	器形	石質	備考
9	1	打製石斧	短冊形	変成岩	第1号住居址
〃	2	〃	〃	硬砂岩	〃
〃	3	〃	〃	緑泥岩	〃
〃	4	〃	〃	硬砂岩	〃
〃	5	〃	〃	変成岩	〃
〃	6	剥片石器		硬砂岩	〃
〃	7	〃		〃	〃
〃	8	磨石		〃	〃
〃	9	凹石		〃	〃

第3表　出土石器の形状一覧表（その1）

図版	番号	名称	器形	石質	備考
10	1	磨製石斧	乳棒状	緑泥岩	外堀
〃	2	〃	〃	〃	〃
〃	3	打製石斧	短冊形	硬砂岩	〃
〃	4	〃	〃	緑泥岩	〃
〃	5	〃	〃	変成岩	〃
〃	6	磨石		硬砂岩	グリット
〃	7	〃		〃	〃

第4表　出土石器の形状一覧表（その2）

第Ⅳ章　ま　と　め

村岡南遺跡は発掘調査以前，あら城という小字名の存在より，城郭遺構が発見されるのではないかと大きな期待を寄せて調査にとりかかった。以前，明確になっていた事柄は小字名，あるいは文献等による究明にすぎず，また近くの古老の言い伝えによる内堀の存在したことにすぎなかった。

今回，このような事例を参照にして，考古学的なメスを加えることによって，その地中に埋没している古代の城郭をつきとめようと企画した理である。発掘調査に着手してみると，期待を常に寄せていた通りの成果があがった。その内容は，住居址１，土拡４，内堀，外堀，柱穴群２，地下倉２であった。これらの遺構の要点をかいつまんで，述べていきたいと思う。

第１号住居址は縄文中期初頭の住居址だけと判明したが，住居址に伴なう内部施設の形態は何一つ加味しておらず，あまり，参考にする資料としては不十分のように思われる。土拡は４カ所発見され，その形態，規模，深さより一般的にみられるのと大差はなかった。遺物の検出は全くなかったが，遺構附近の出土遺物より察するに縄文中期時代の所産と思われた。

今まで述べてきた住居址，土拡は各々一つの遺構と考えてみても良いであろうが，これから述べていく内堀，外堀，柱穴群，地下倉等々の遺構は一つの城郭遺構として，一連性があるという観点のもとに考えを進めていく必要性がのぞまれてしかるべきであろう。城郭遺構のとらえ方として，構築された自然的条件，つまりに河岸段丘や山の利用等，あるいは附近の時代的背景，小字名の究明，社寺の存在等々の項目を抽出して総合的な学術調査が必要とされる。最近，城郭に関しては，以前のように歴史学だけではなくて，考古学の面での依頼度が高くなってきた。長野県に於いて考古学的な見地から城郭が調査された例としては，飯島町本郷南羽場，陣垣外遺跡，辰野村樋口内城岡谷市小坂城跡，諏訪市大熊城跡等であった。これらの調査において，文献を裏付けできるような好資料も続々し，今後の調査方法に大きな光明を投げかけてくれた。このような事より今後の城郭遺構調査のあり方として，考古学の面と，歴史学の面と合致した姿をとらなければならない。

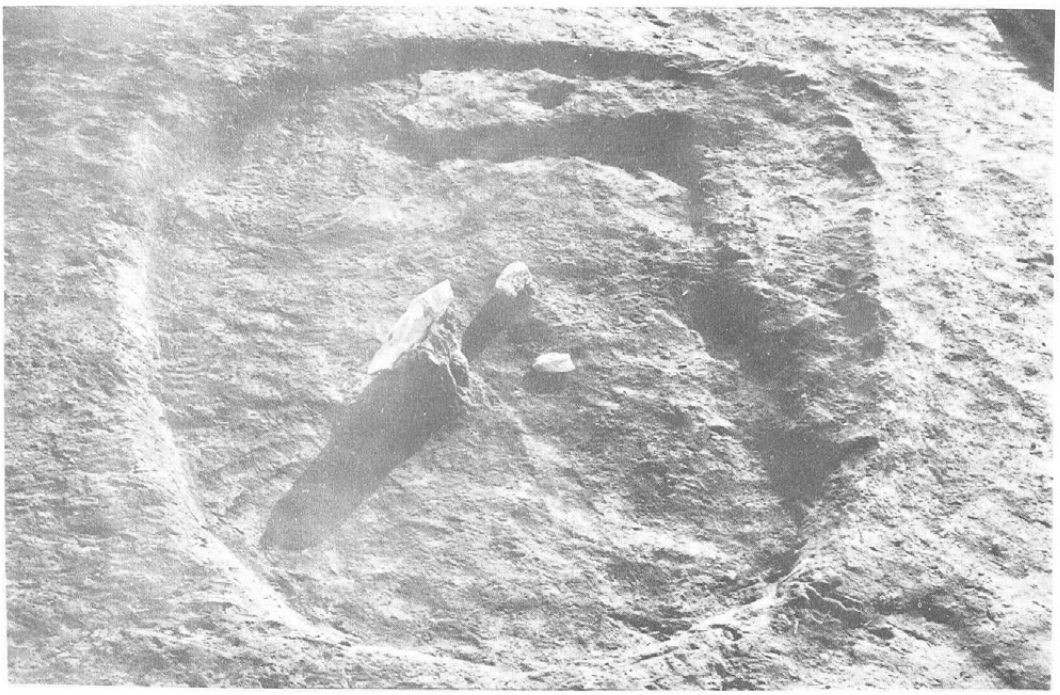
また最後にできるだけ綿密な地形測量を必要とすることを強調したい。

（小池政美）

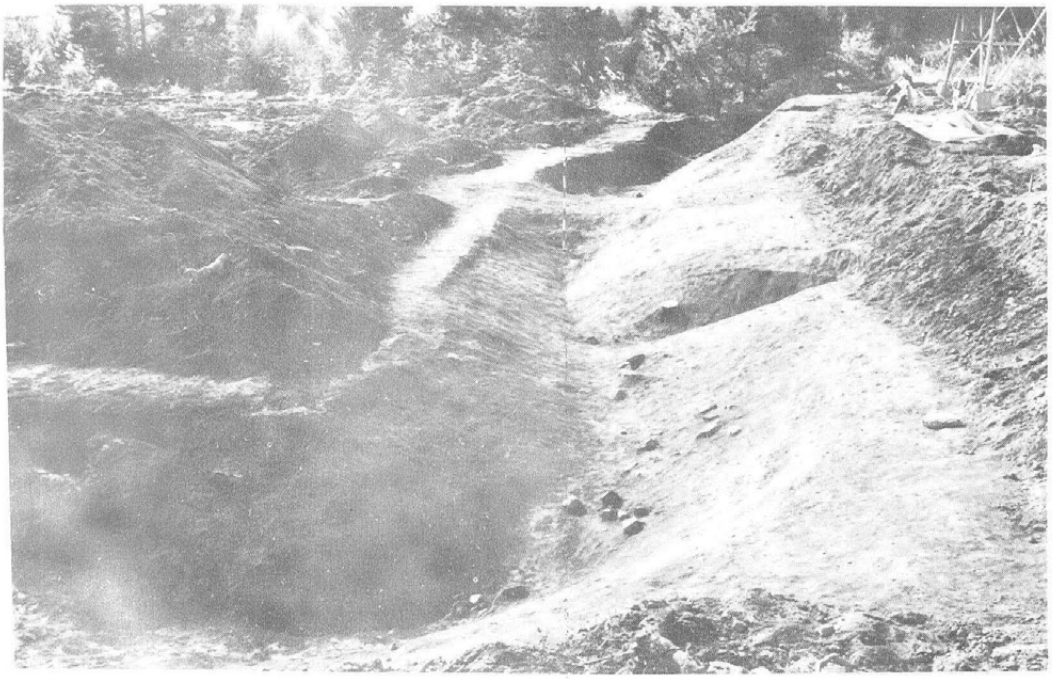
西側より遺跡地を眺む

遺跡地の近景

図版1　遺跡全景

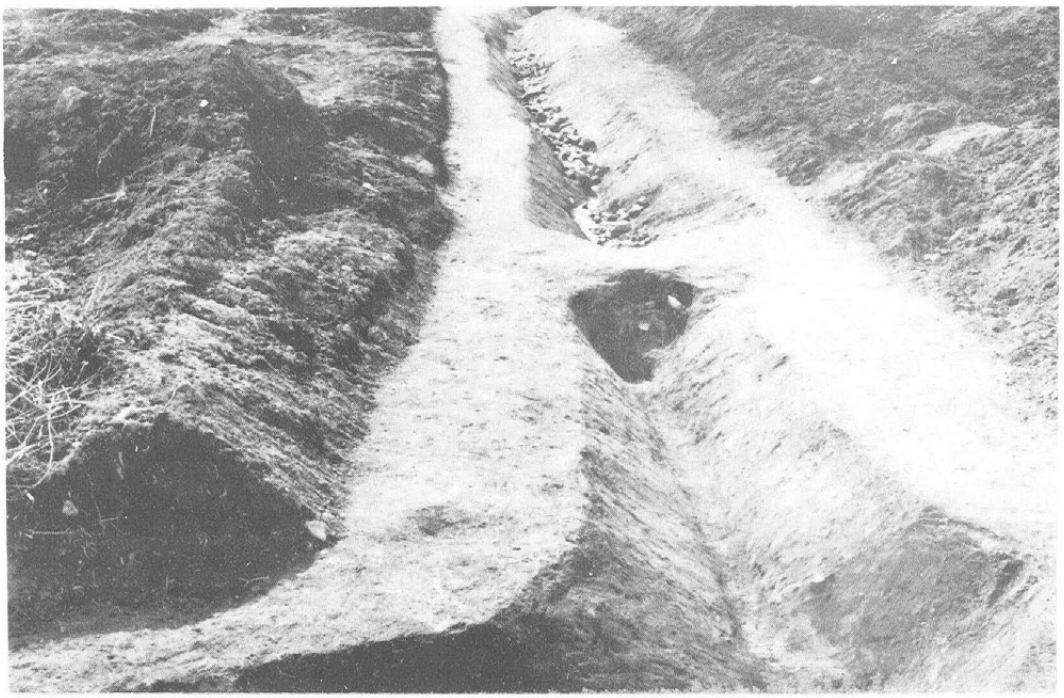


第1号住居址

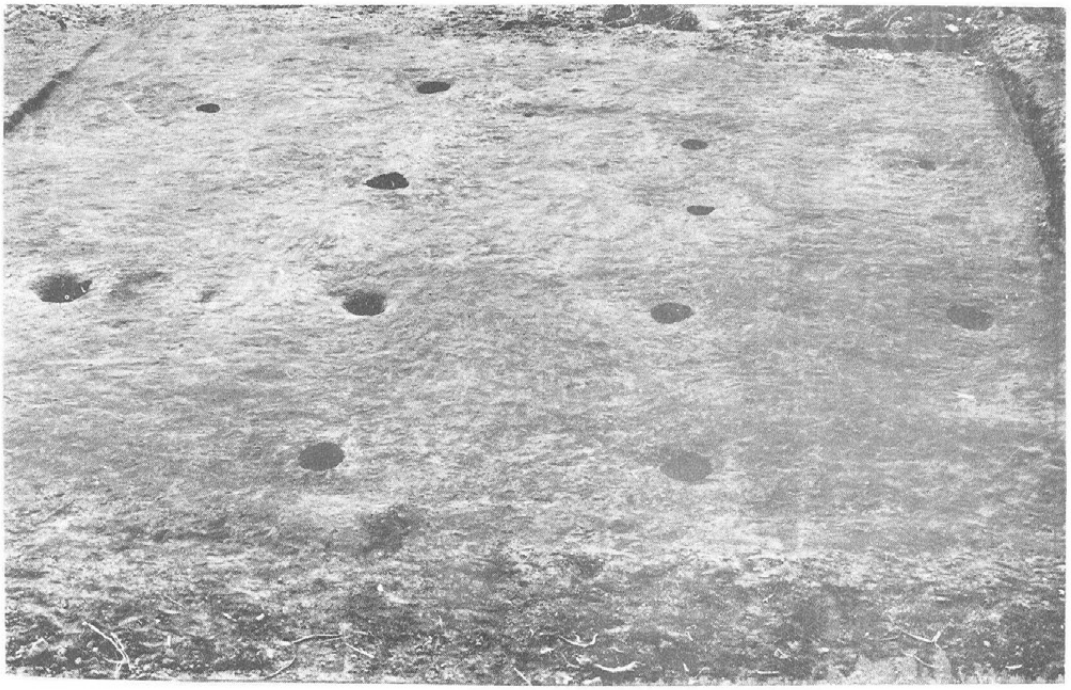


内　堀

図版2　遺構（住居址及び堀址）

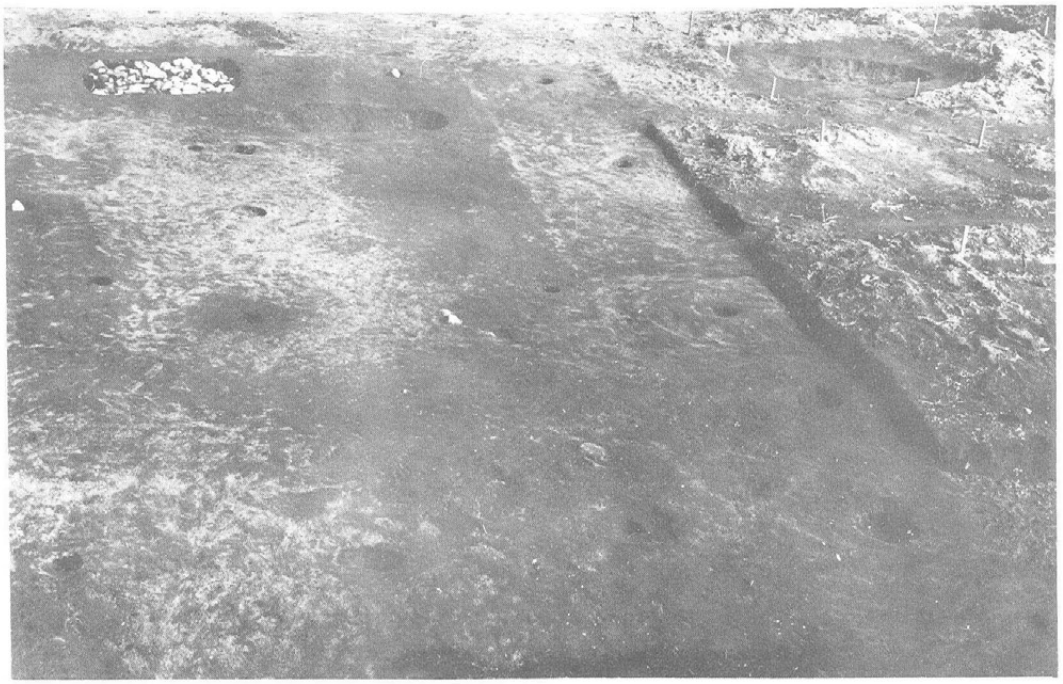


外　堀

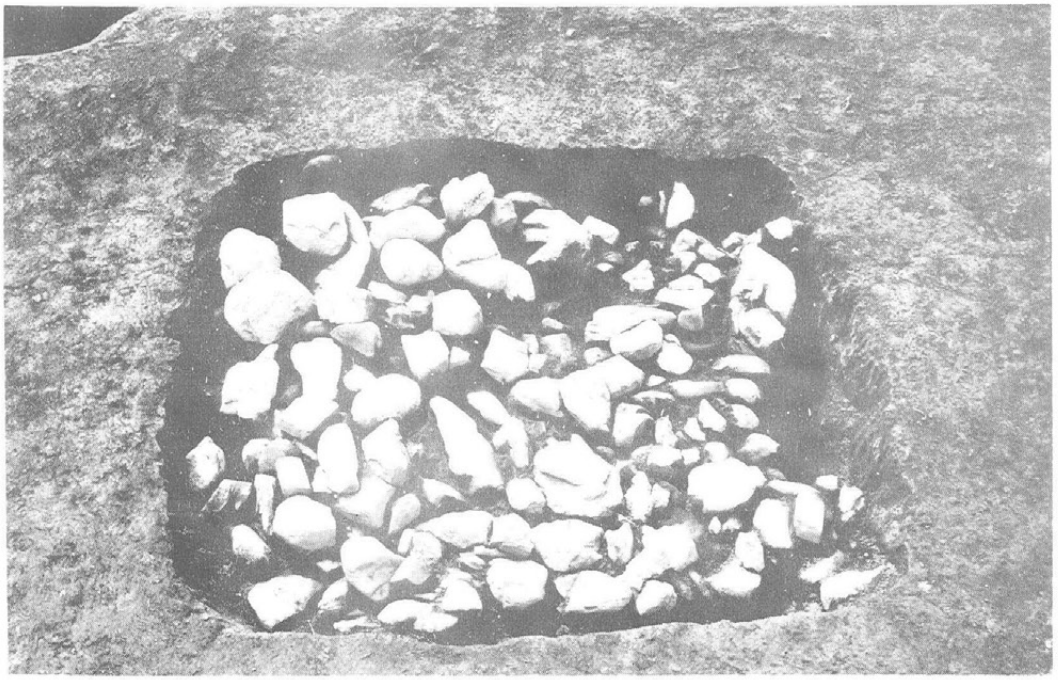


第１号柱穴群

図版３　遺構（堀址及び柱穴群）

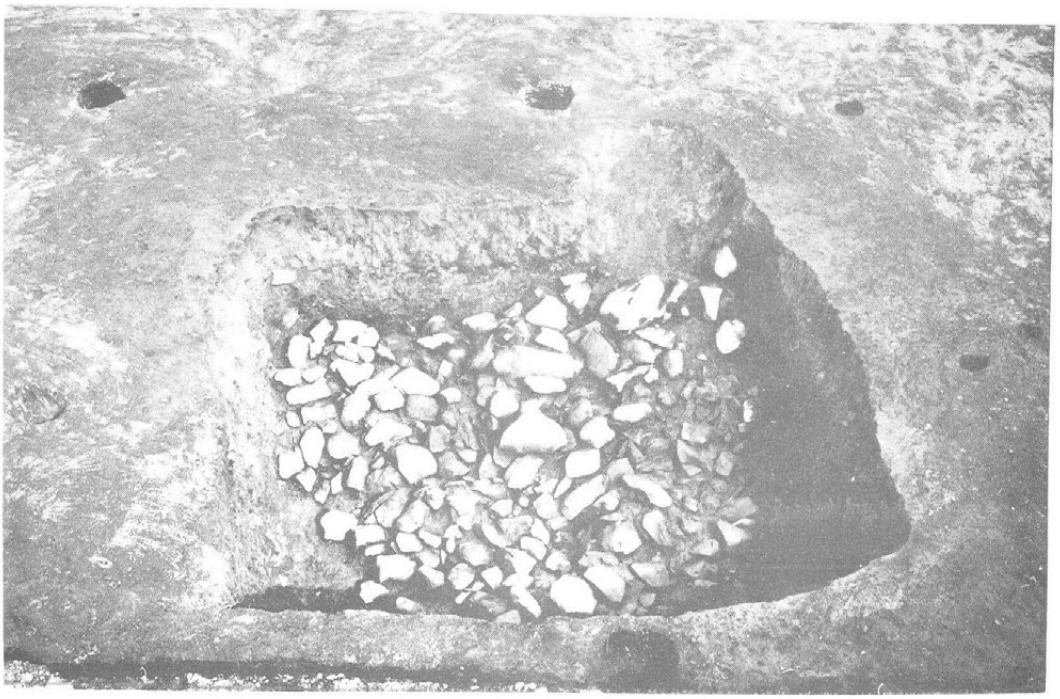


第 2 号柱穴群

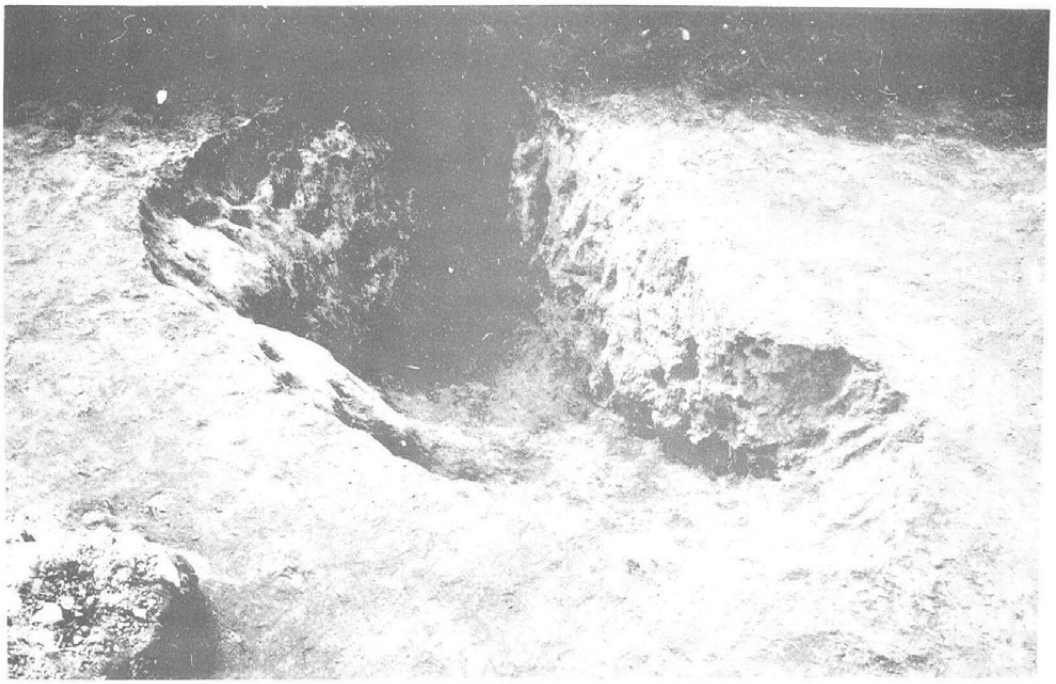


第 1 号地下倉

図版 4　遺構（柱穴群及び地下倉）

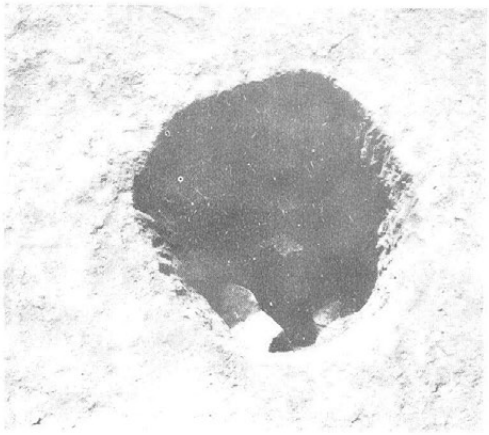


第 2 号 地下倉

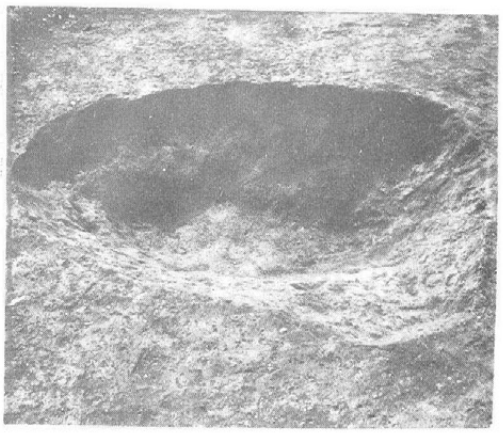


第 1 号　土　拡

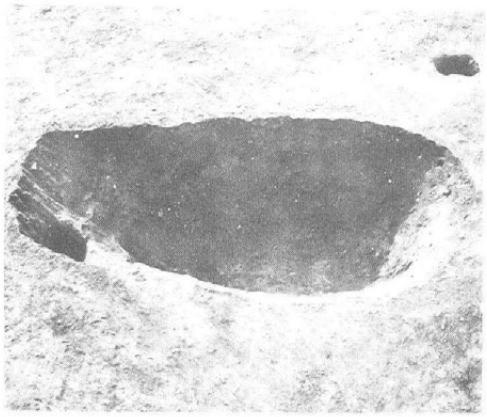
図版 5　遺構（地下倉及び土拡）



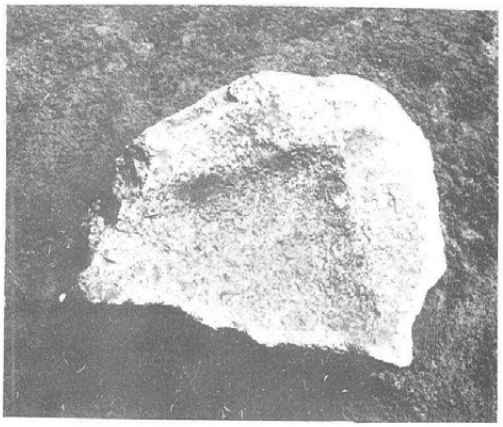
第 2 号土拡



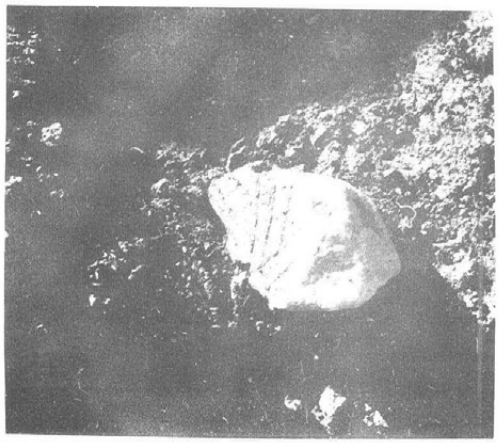
第 3 号土拡



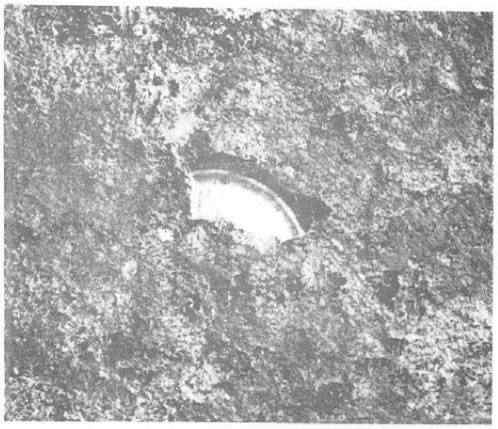
第 4 号土拡



石　皿

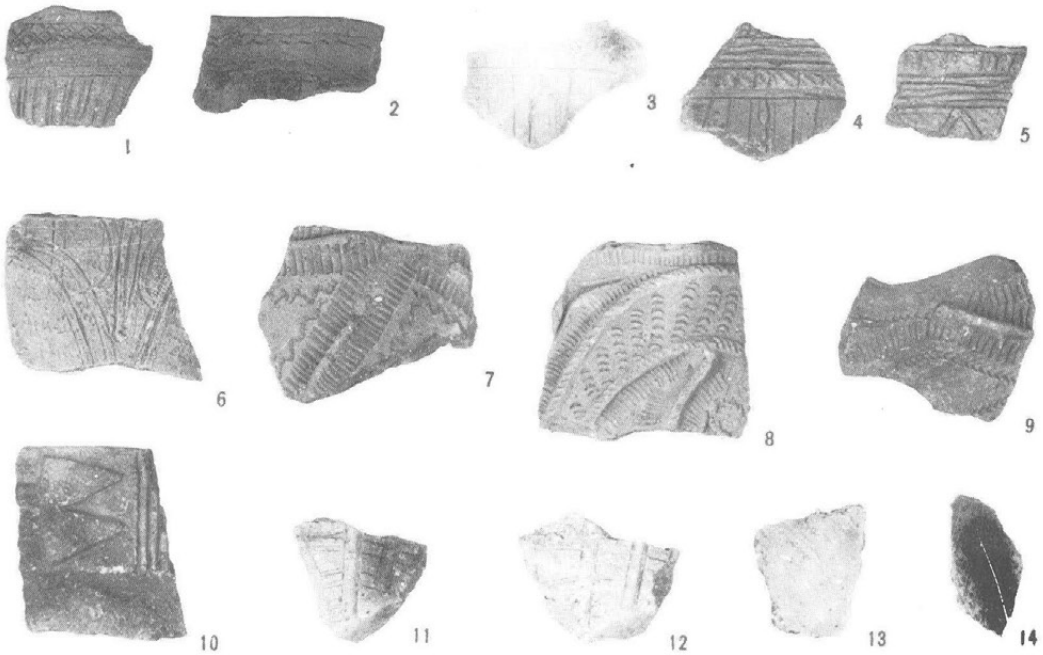


石　臼

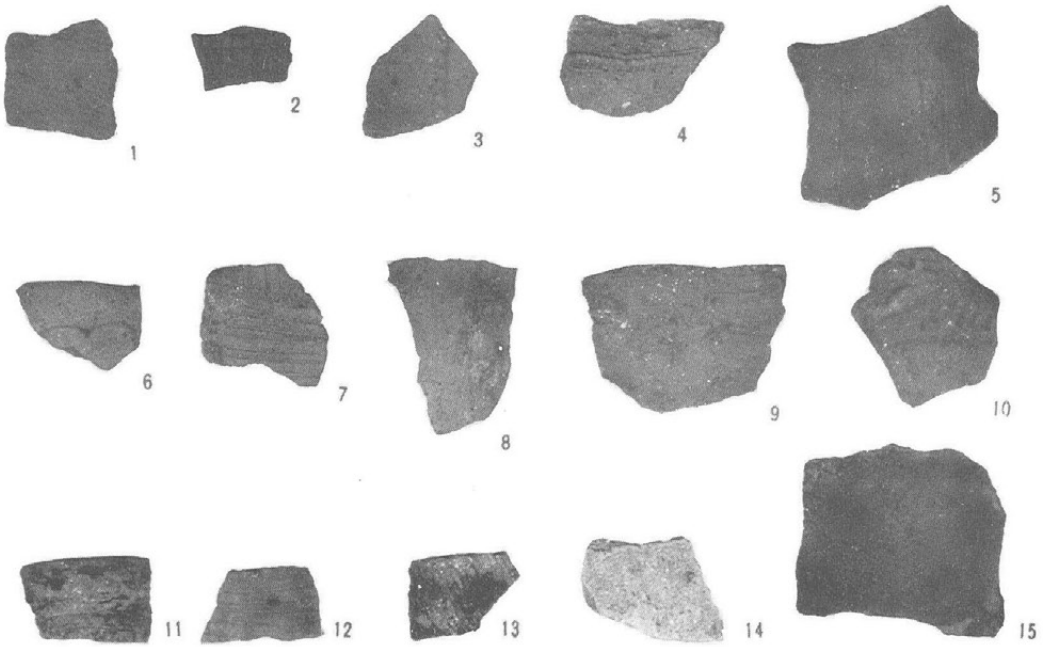


菊　皿

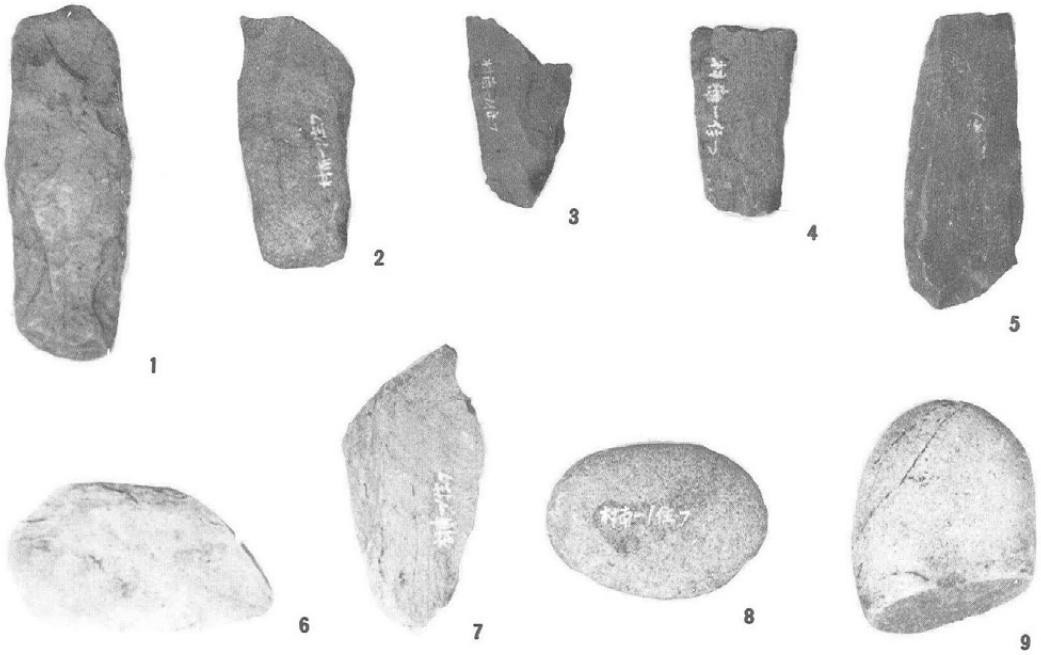
図版 6　遺構（土拡）及び遺物出土状況



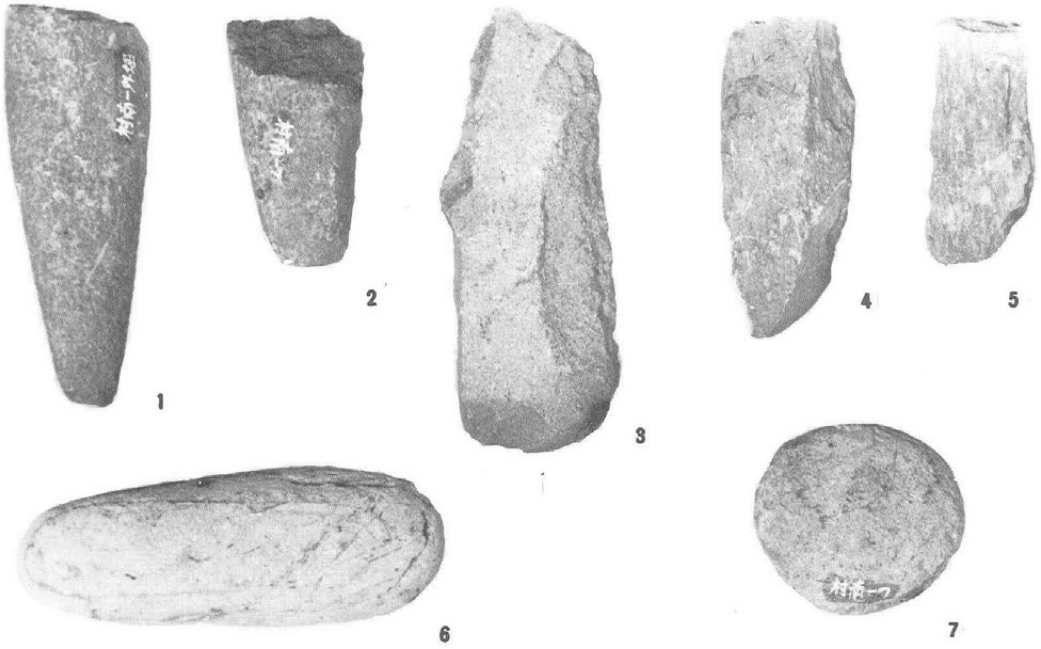
図版 7　出土土器



図版 8　出土土器



図版 9　出土石器



図版10　出土石器

常輪寺下遺跡

目　　次

目　　次 …… (3)
挿図目次 …… (4)
図表目次 …… (4)
図版目次 …… (5)

第Ⅰ章　発掘調査の経過 …… (6～9)

第1節　発掘調査の経緯 …… (6)
第2節　調査の組織 …… (6～7)
第3節　発掘日誌 …… (7～9)

第Ⅱ章　遺　　構 …… (10～24)

第1節　住居址 …… (10～20)
第2節　土　拡 …… (20～22)
第3節　柱穴群 …… (23～24)

第Ⅲ章　遺　　物 …… (25～32)

第1節　土　器 …… (25～29)
第2節　陶磁器 …… (29～30)
第3節　石　器 …… (30～32)

第Ⅳ章　ま　と　め …… (33)

挿　図　目　次

第1図　遺構配置図 …… (10)
第2図　第7号住居址実測図 …… (11)
第3図　第8号住居址実測図 …… (12)
第4図　第9号住居址実測図 …… (13)
第5図　第10号住居址実測図 …… (14)
第6図　第11号住居址実測図 …… (15)
第7図　第12，13号住居址実測図 …… (16)
第8図　第14号住居址実測図 …… (17)
第9図　第15号住居址実測図 …… (18)
第10図　第17号住居址，第12~14号，第16号土拡実測図(19)
第11図　第3，18号住居址実測図 …… (19)
第12図　第19号住居址，第15号土拡実測図…… (20)
第13図　第8号土拡実測図 …… (21)
第14図　第9号土拡実測図 …… (21)
第15図　第10号土拡実測図 …… (21)
第16図　第11号土拡実測図 …… (21)
第17図　第1号柱穴群実測図 …… (23)
第18図　第2号柱穴群実測図 …… (24)

図　表　目　次

第1表　出土土器の形状一覧表（その1）… (25)
第2表　出土土器の形状一覧表（その2）… (25)
第3表　出土土器の形状一覧表（その3）… (26)
第4表　出土土器の形状一覧表（その4）… (26)
第5表　出土土器の形状一覧表（その5）… (26)
第6表　出土土器の形状一覧表（その6）… (27)
第7表　出土土器の形状一覧表（その7）… (27)
第8表　出土土器の形状一覧表（その8）… (27)
第9表　出土土器の形状一覧表（その9）… (28)
第10表　出土土器の形状一覧表（その10）… (28)
第11表　出土土器の形状一覧（その11）…… (28)
第12表　出土土器の形状一覧（その12）…… (29)
第13表　出土土器の形状一覧（その13）…… (29)
第14表　出土陶磁器の形状一覧表（その1）… (30)
第15表　出土石器の形状一覧（その1）…… (30)
第16表　出土石器の形状一覧（その2）…… (31)
第17表　出土石器の形状一覧（その3）…… (31)
第18表　出土石器の形状一覧（その4）…… (31)
第19表　出土石器の形状一覧（その5）…… (32)
第20表　出土石器の形状一覧（その6）…… (32)

図　版　目　次

図版１　遺跡全景 …… （34）
図版２　遺　構（住居址） …… （35）
図版３　遺　構（住居址） …… （36）
図版４　遺　構（住居址） …… （37）
図版５　遺　構（住居址） …… （38）
図版６　遺　構（住居址） …… （39）
図版７　遺　構（住居址） …… （40）
図版８　遺　構（柱穴群） …… （41）
図版９　遺　構（土拡）及び遺物出土状況　（42）
図版10　遺物出土状況 …… （43）
図版11　出土土器 …… （44）
図版12　出土土器 …… （44）
図版13　出土土器 …… （45）
図版14　出土土器 …… （45）
図版15　出土土器 …… （46）
図版16　出土土器 …… （46）
図版17　出土土器 …… （47）
図版18　出土土器 …… （47）
図版19　出土土器 …… （48）
図版20　出土土器 …… （48）
図版21　出土土器 …… （49）
図版22　出土土器 …… （49）
図版23　出土土器 …… （50）
図版24　出土陶磁器 …… （50）
図版25　出土石器 …… （51）
図版26　出土石器 …… （51）
図版27　出土石器 …… （52）
図版28　出土石器 …… （52）
図版29　出土石器 …… （53）
図版30　出土石器 …… （53）

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査の経緯

西部開発事業（県営畑地帯総合土地改良事業）は昨年の上島，東方部落にわたって行なわれました。本年度は東方，村岡，城，山本部落にわたり，その面積は60haに達している。

発掘調査は東方A，村岡北，村岡南，常輪寺下，北条の5遺跡が該当し，東方A遺跡と村岡北遺跡は夏に，村岡南遺跡，常輪寺下遺跡は秋にそれぞれ実施しました。

西部開発（県営畑地帯総合土地改良事業）第9工区内の遺跡の調査を委託された場合は，委託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり，おって南信土地改良事務所より，緊急発掘調査について委託した旨，市教育委員会へ依頼を受けたので，市教育委員会を中心に，常輪寺下遺跡発掘調査会を結成し，この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

10月7日，南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節　調査の組織

常輪寺下遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	松沢一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	坂井喜夫	伊那市教育委員長
〃	向山雅重	長野県文化財専門委員
〃	木下　衛	上伊那教育会会長
〃	原　益久	南信土地改良事務所長
〃	辰野伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	竹松英夫	伊那市教育委員会教育課長
〃	石倉俊彦	〃　課長補佐
〃	中村幸子	〃　主事

発掘調査団

団長	友野良一	日本考古学協会会員
副団長	根津清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調査員	小池政美	〃
	辰野伝衛	伊那市文化財審議委員

調　査　団	清水　満	長野県考古学会会員
	福沢幸一	〃
	太田　保	〃
	柴登巳夫	〃
	長瀬康明	〃
	本田秀明	〃
	堀口貞幸	〃
	深沢健一	〃
	丸山弥生	国学院大学学生
	赤羽義洋	〃
	石岡憲雄	〃
	館野　孝	〃

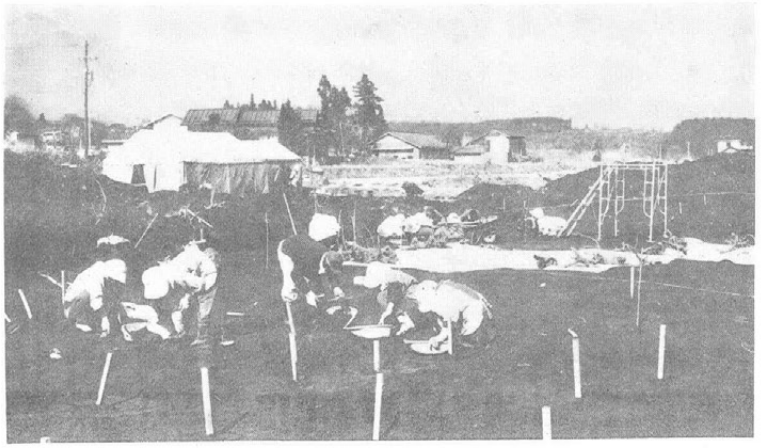
第3　発掘日誌

昭和49年11月15日　午前中はテントの設定，地層調査を実施すると，台地の基盤は西から東の傾斜のために，ローム層は東へ行くほど深くなっていた。午後は遺跡地へグリットを設定し，グリット地区はA～C地区の3つに分ける。A地区は北西の水田，B地区は東西の水田，C地区は東側の水田と決める。AA1ラインを南へと10カ所ほど，グリットを掘ってみると，ローム層面に各所にわたって，黒土の落ち込みが点在しており，一応第1号柱穴群と考えた。

昭和49年11月16日　第1号柱穴群の拡張をすると同時に，東へとグリット掘りを進めていくと，AI5に黒土の落ち込みがみられ，黒土の中に多量の焼土と炭化物が検出でき，住居址と決めるに十分な条件を備えていると考え，本年度，春先実施した大規模農道発掘の折に住居址は第7号住居址まで確認されているので，それに見習って本址を第8号住居址と決定した。第8号住居址のプラン確認につとめる。

昭和49年11月18日

第1号柱穴群と第8号住居址のプラン確認に，その主眼を置き調査を進める。本日は作業員も増え，活気が漂っていた。



発掘風景

第８号住居址のプラン確認作業の途中で，同址の東側に褐色土の落ち込みがあり，これを第９号住居址とする。午後，第８号住居址の掘り下げを開始すると，土器片が続々出土し，一種の驚嘆が背筋に走った。遺物は大般加曽利Ｅ式であった。

昭和49年11月19日　第８号住居址の南側を掘り下げていくと，黒土の落ち込みが点々としておりこれを第２号柱穴群とした。同掘り込み面に青磁，黄瀬戸，中津川，天目，鉄釉等，いわゆる施釉陶器が出土し，ある程度の時代判別が明らかとなった。当地は大房丸，常輪寺創建等に関係の深い地であった。草戸千軒町遺跡で発見された木札等のものが出土しないかと思った。

昭和49年11月20日　第２号柱穴群の拡がりをつさとめようと考え，調査を進めると，南側はAW6，東側はAR10まで伸びている模様であった。本日も縄文中期の土器片，施釉陶器が無数に出土し，その量は大きなポリ袋に５個もあった。

昭和49年11月21日　第２号柱穴群の東側に方形の黒土の落ち込みがあり，第10号住居址，第10号住居址の北側に褐色土の落ち込みがあり，これを第11号住居址と決める。前住居址より須恵器，後住居址内より加曽利Ｅ式土器片が出土した。本日はおりしも，菜洗いには好天気の日であり，このような日が続いて欲しいものだ。

昭和49年11月22日　第10号住居址の掘り下げ，第11号住居址のプラン確認を進めていくと，前住居址の北側にもう一つ住居址が発見され，これを第12号住居址とした。

昭和49年11月23日　第10号住居址のほぼ完掘を終える。それによると石組カマドを東壁中央にもつ竪穴住居址であった。遺物に関しては土師器，須恵器片が出土した。第11号住居址，第12号住居址のプラン確認に全力を注ぎ込む，遺物は加曽利Ｅ式土器片が多数出土した。

昭和49年11月25日　第８号住居址と第９号住居址，第11号住居址，第12号住居址の掘り下げをする。第12号住居址の拡張をしていると，第12号住居址に切られるような形で北側に住居址がみられこれを第13号住居址とする。第11号住居址を東側へ拡張していくと，褐色土の落ち込みがみられ，第14号住居址とする。

昭和49年11月26日　第８号住居址，第９号住居址，第11号住居址，第12号住居址，第13号住居址の掘り下げを実施した。第８号住居址はほぼ完掘を終えた。南壁の近くに正位の埋甕，６本の主柱穴，炉の形態も明確化する。第９号住居址は床面上に一面にわたって，土器片が，ちようど土器を敷き詰めたように検出され，足の踏み場のないような状態であった。本日よりＢ地区にも数カ所にわたってグリツト掘りを開始する。

昭和49年11月27日　第８号住居址，第９号住居址，第11号住居址，第12号住居址，第13号住居址第14号住居址の掘り下げを行なう。第12号，第13号住居址を除いて，他の住居址はほぼ完掘を終える。Ｂ地区に新らたに２軒の住居址を検出した。

昭和49年11月28日　第13号住居址の完掘を終えるとともに，Ｂ地区の住居址附近拡張に専念し，その規模把握につとめる。

昭和49年11月30日　第８号住居址から第14号住居址までの最後の清掃並びに仕上げを行ない，写真撮影を終える。

昭和49年12月２日　Ｂ地区，住居址確認個所の拡張につとめる。天候は不順であったけれども，

仕事の都合上，作業を続行せざるをえなかった。

昭和49年12月３日　第１号柱穴群の掘り下げを実施し，ほぼ完掘し終えるが，遺物は全く出土せず，深さは浅いのでは10cm，深いのは60cm位あった。柱穴群の中に混って土拡が検出され，第８号土拡，第９号土拡，第10号土拡，第11号土拡とし，どの土拡からも遺物が出土した。

昭和49年12月４日　第15号住居址のプラン確認と掘り下げを行ない，ほぼ，完掘を終える。第16号住居址と予定したところは，住居址とはならなかったので，整理の都合上，第16号住居址を欠番とした。第17号住居址の掘り下げをしていると，同住居址の床面や壁をこわすかのようにして，円形状の土拡があり，東より西へ向って第12号土拡，第14号土拡，第13号土拡とした。第13号土拡の北壁に密着して蛇頭把手が出土した。第17号住居址は中期初頭が主体をしめている模様だった。

昭和49年12月５日　第17号住居址，第12号～第14号土拡の完掘を終える。第17号住居址の床面上より顔面把手が顔を上に向けて，また，第14号土拡内より藤内式土器が出土した。Ｃ地区の大規模農道用地境の東側を掘っていくと，南側より第18号住居址，第３号住居址，第19号住居址，第７号住居址とした。どの住居址からも漠大な土器片が出土した。

昭和49年12月６日　第８号住居址，第３号住居址，第19号住居址，第７号住居址の掘り下げを行なう。大体，完掘を終える。第３号住居址より土偶の出土があった。埋甕は第３号住居址，第19号住居址にあり，特に，第19号住居址は２つみられ，１つはわずかに下っていた。

昭和49年12月７日　本日は第１号柱穴群，第２号柱穴群の写真撮影，第３号住居址，第19号住居址，第18号住居址，第７号住居址，第15号住居址，第17号住居址，第12号土拡，第13号土拡，第14号土拡の写真撮影を終える。　全測図の作製をする。

昭和49年12月９日　第８号住居址，第９号住居址，第10号住居址の実測を済せる。

昭和49年12月10日　第11号住居址，第12号住居址，第13号住居址の実測を済せる。

昭和49年12月11日　第14号住居址，第15号住居址，第17号住居址の実測を済せる。

昭和49年12月12日　第18号住居址，第19号住居址，第３号住居址，第７号住居址の実測を済せる。

昭和49年12月13日　第８号土拡，第９号土拡，第10号土拡，第11号土拡，第１号柱穴群，第２号柱穴群の実測を済せる。

昭和49年12月14日　発掘器材のあとかたづけをする。

（小池政美）

第Ⅱ章　遺　　構

第1節　住　居　址

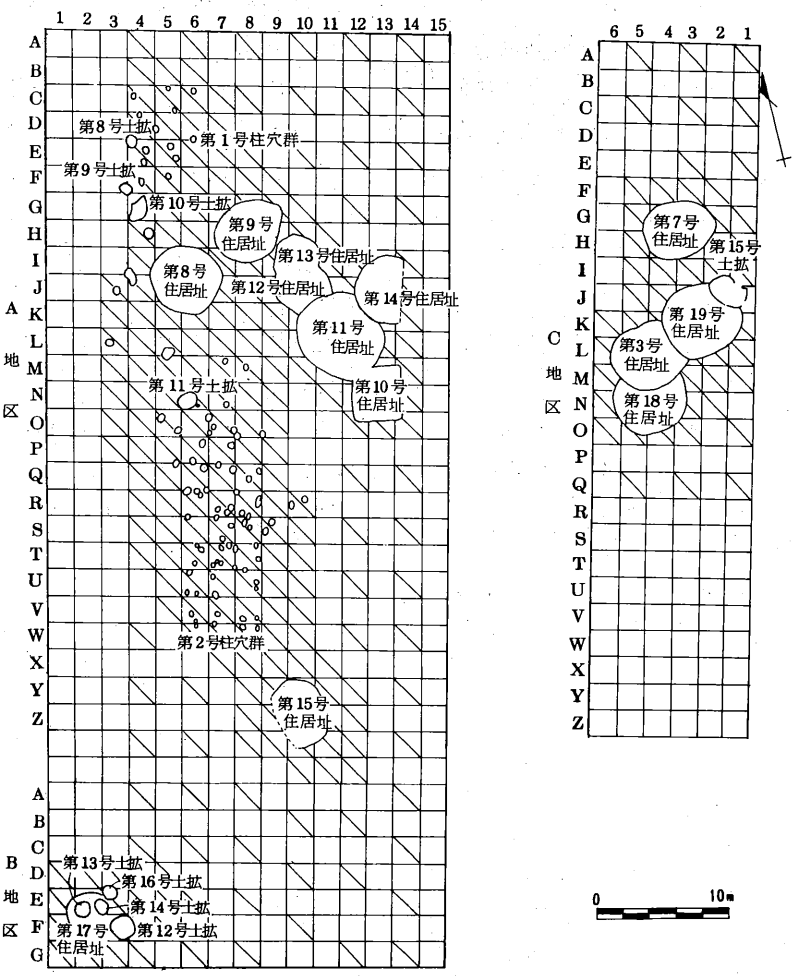
第7号住居址　（第2図，図版6）

住居址はC地区の最北端にあって，西側は昭和49年度に実施した大規模農道発掘のおりに調査を完了している。南北5ｍ，東西5ｍ70cmの円形で，東側はわずかに張し出し気味である。壁は南東に高く，北西に低くなっている。状態としては，壁面自体に凹凸があった。

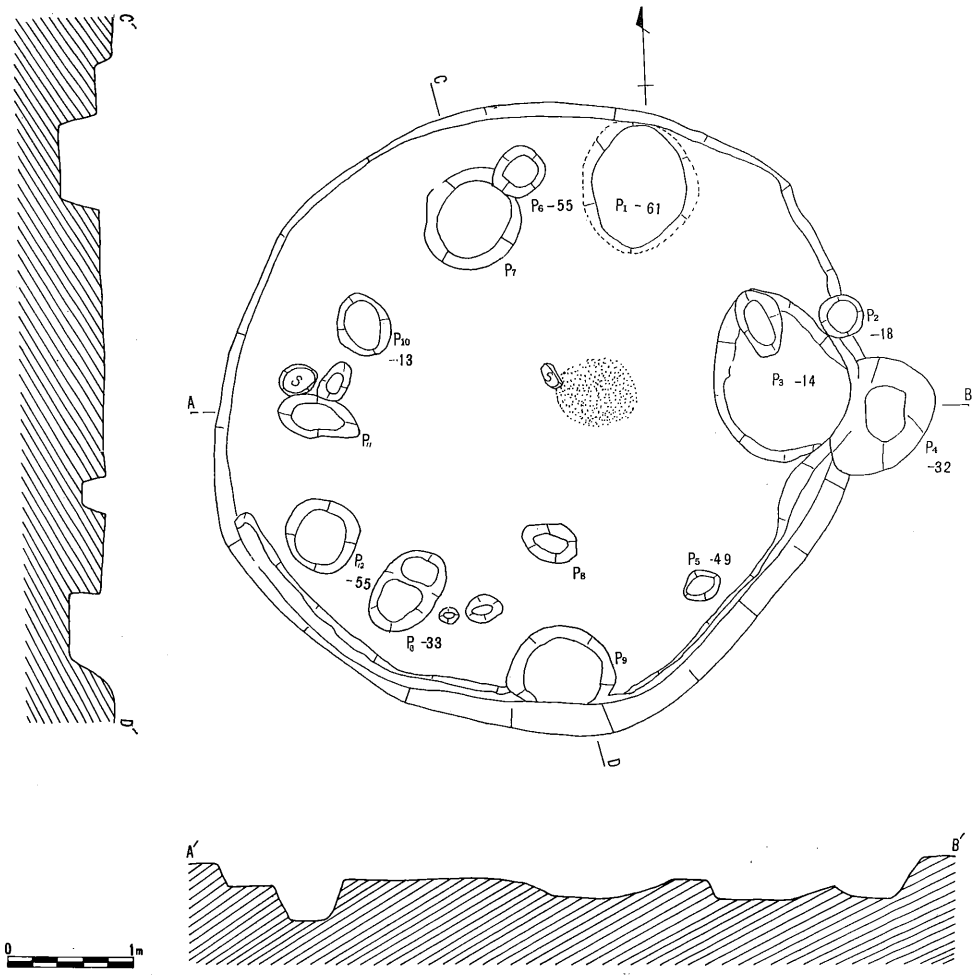
床面はローム層の叩きで凹凸が顕著であった。柱穴は4本主柱穴であり，それはP_4，P_7，P_9，P_{12}であった。炉は中央よりやや東寄りに位置し，南北55cm，東西60cm程の範囲内に焼土があり，またそれは極めて厚く地床炉の形態をとっていた。西側に花崗岩があり，それは炉石となっていた。P_1は貯蔵穴と思われる。

遺物は曽利Ⅰ式の完型に近い土器が出土した。遺物は有孔つば付土器，曽利Ⅰ式の完型に近い土器は口縁部が無文帯で大部分を占め，口縁直下より隆帯や沈線による懸垂文が垂下しており，器形は円筒形を呈していた。

その他，石器の類も多量に出土しその数に於いても吟味を加える必要があると思う



第1図　遺構配置図



第2図　第7号住居址実測図

第8号住居址　（第3図，図版2）

A地区の西より，第9号住居址の西寄りに接するように発見された。南北5ｍ，東西5ｍ15cm程のほぼ円形で，壁は全般的には低く，高いところでも20数cmであった。壁は内傾で，軟弱気味であった。床面はローム層の極めて硬い叩きになっており，ほぼ水平を呈していた。主柱穴は6本で，それはP_1，P_2，P_3，P_4，P_5，P_6である。

炉は中央よりやや北寄りに位置し，方形の石囲炉である。南側と東側は石が抜かれていた。炉縁石は花崗岩で，内面は焼けており，炉底の焼土は割合少なかった。

遺物は炉を中心として床面より10数cm位浮いて全面にわたって出土した。土器の下の土は黒土層であった。埋甕の位置は南壁に近いところに南北に2つ並んで正位の状態で出土した。南側のは床とほぼ同一レベルで，北側のは，それより10cm位下った土層面であった。2つとも渦巻文様を持つ加曽利E式であった。

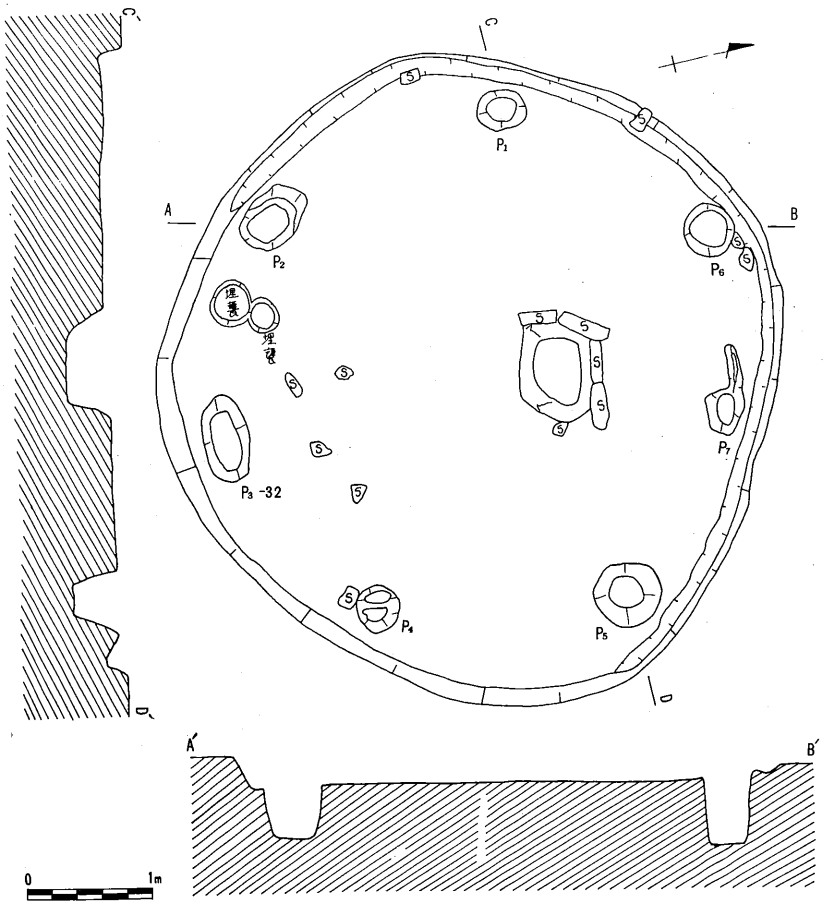
第９号住居址　（第４図，図版２）

本址は第８号住居址の北側に近接して発見されたが，南北４ｍ90cm，東西５ｍ10cm程の規模を持ち，不整円形プランを呈する竪穴住居址である。壁は全般的に低く，東は不明であった。床面は全般的に軟弱気味であり，わずかな叩きを呈し，多少の凹凸があった。また，同面上の石はホルンヘルスであった。

柱穴は構築当時は４本主柱穴と思われたが，発掘では３カ所しか発見されなかった。もう一カ所は撹乱によって，不明となってしまった。

炉は中央より北側にあり，形状は長円形状のすりばち状の炉で，現在はホルンヘルスの拳大程の石３個が入っていた。

焼土の堆積は厚く，石も焼けていた。炉内には多くの土器片が出土し極だったものとしては炉壁には完型に近い土器が密着して出土した。



第３図　第８号住居址実測図

遺物は床面より10cm位浮いて炉を中心として敷いたように広がっていた。加曽利Ｅ式土器片が出土した。

第10号住居址　（第５図，図板３）

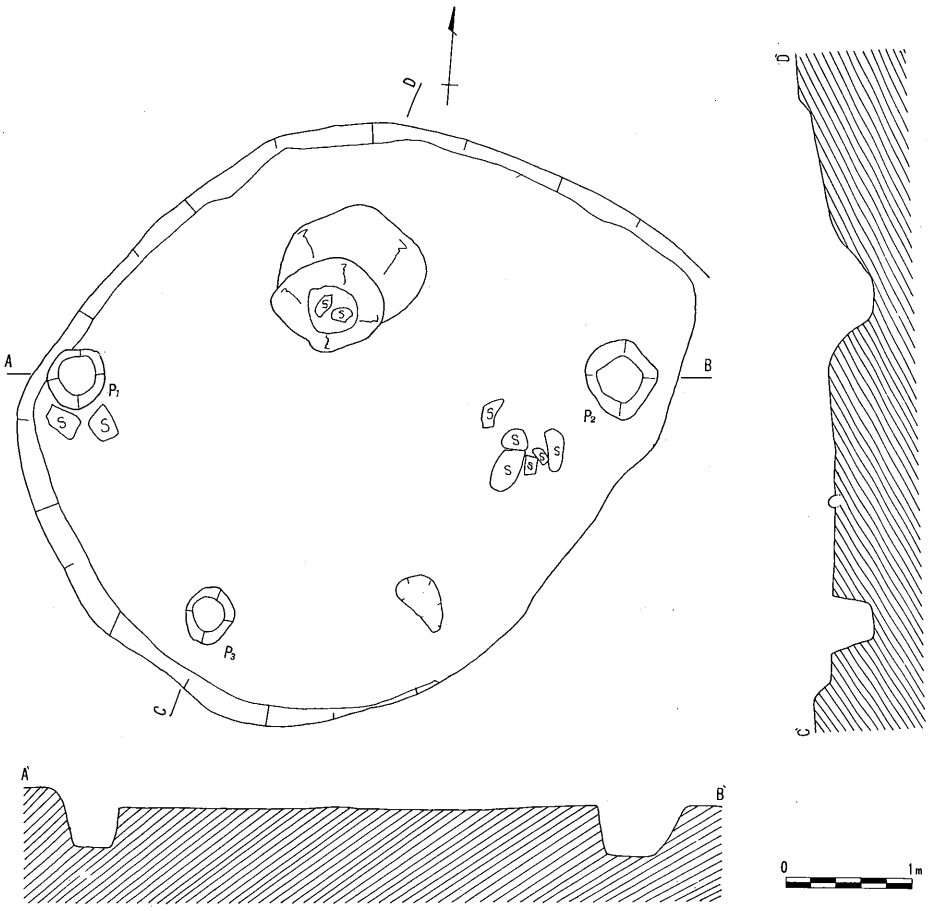
Ａ地区の第11号住居址と北西の一隅で接するようにして検出された。南北３ｍ95cm，東西３ｍ70cmで，壁高30cm位を測り，隅丸方形プランを示すものである。ローム層を掘り込み，黒土の覆土が落ち込んでいる。壁は内傾気味で，叩きが良好であった。

床面は極めて良好なる叩きで，凹凸がある。柱穴は４本柱と思われたが，北西の一角に一本存在

したと思われるが，第11号住居址の切り合い関係により，現在はなかった。

カマドは東壁の中央部に位置し，石組粘土カマドで，石材はホルンヘルスであった。煙道と思われるところに土師器の甕が出土した。

遺物は土師器の甕，須恵器の杯，須恵器の自然釉の瓶が出土した。



第4図　第9号住居址実測図

第11号住居址　（第6図，図版3）

本址は第10号住居址と接して発見され，南壁は第10号住居址に切られている。南北6ｍ5㎝，東西6ｍ10㎝位の円形状の竪穴住居址で，西，南，東壁は深く，北壁は浅い。状態は内傾気味で，軟弱であった。床面は軟弱気味で，各所にわたって凹凸が顕著であった。

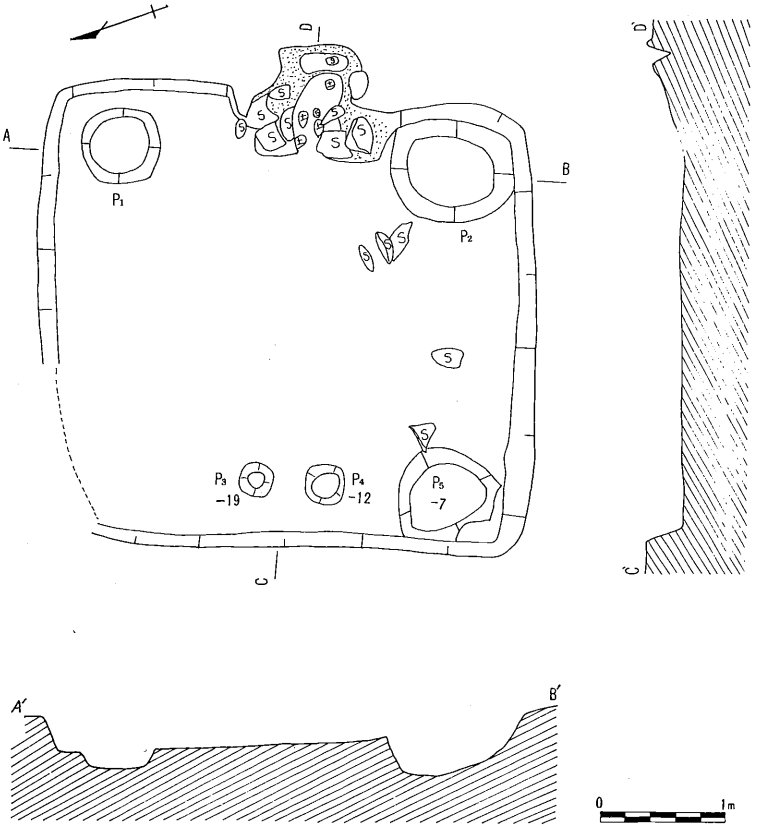
柱穴は6本であったと思われるが，切り合い関係が複雑なので，深さより判断できた。

炉の位置は中央部にあり，たらい状に落ち込み焼土は炉底に集中していた。ホルンヘルスは東側の炉壁面に密着していた

埋甕は第10号住居址の壁に近いところと，北壁の近くに正位の状態で出土した。これらはいずれも加曽利E式であった。

新旧関係は第12号住居址を切り，第10号住居址と第14号住居址に切られている。

埋甕の出土状態は南側のは東半分が，まっぷたつに分れており，その破片はどこにも発見されず意図的に，またはなくなってしまったのかは，現段階では不明であった。



第5図　第10号住居址実測図

第12号住居址　（第7図，図版4）

本址は第11号住居址に切られ，また第13号住居址を切るような状態で発見された。規模は切り合いの為に推定によると，南北3 m50cm，東西3 m95cm程で，円形プランを呈する竪穴住居址である。

壁の状態は内傾気味と，浅いためとたび重なる切り合いによって良好ではない。床面はローム層の叩きで凹凸があった。炉は中央よりやや北側によったところにあり，凹み状の落ち込みになっていた。内部より焼土が少量検出された。

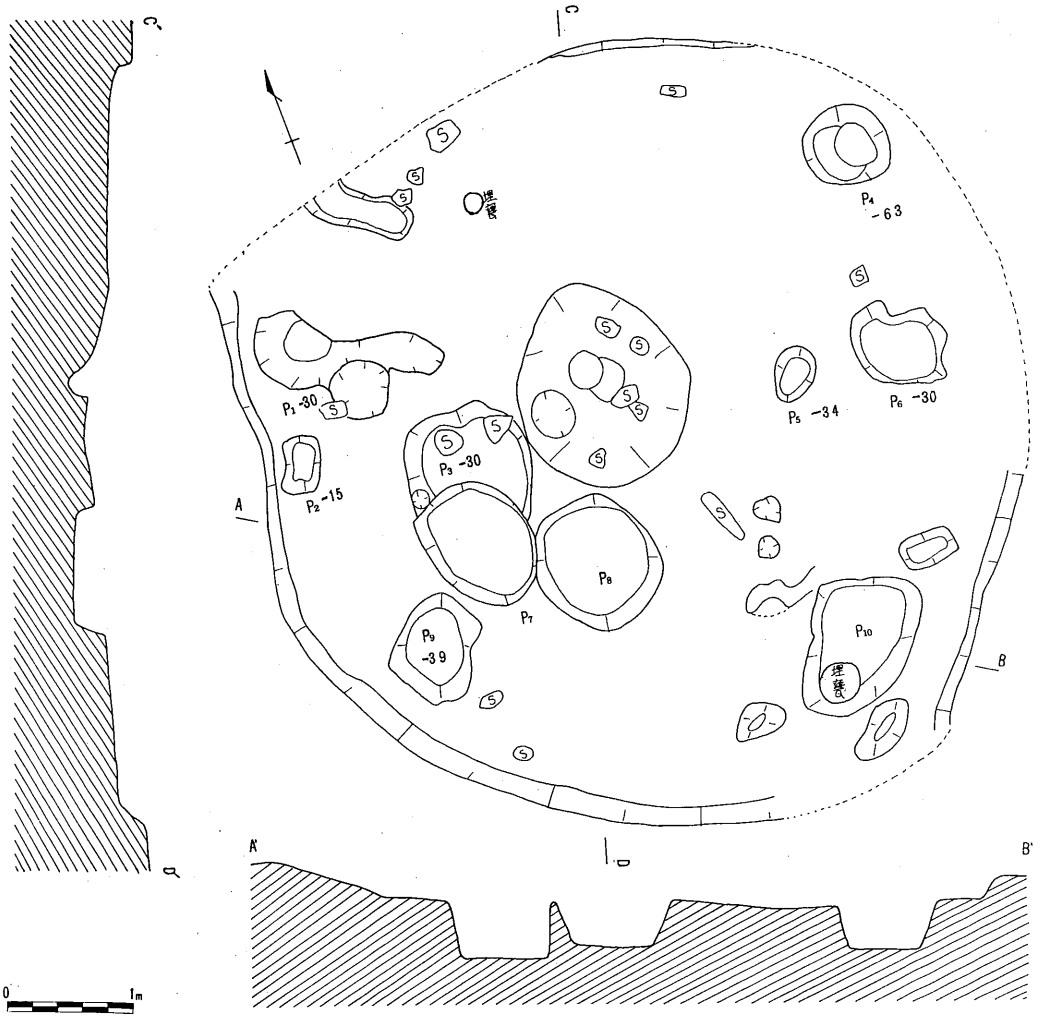
炉縁石と思われるものは3個あり，すべて花崗岩であり，焼けて炭化物が附着していた。遺物は加曽利E式の土器片が大部分を占めており，なかに混じって東海系の土器片も出土した。

第13号住居址　（第7図，図版4）

本址は第12号住居址に切られるような形で発見された。切り合いにより南北は推定ではあるが，3 m10cm，東西は3 m35cm程の円形状の竪穴住居址である。壁高は撹乱気味や，その他のことで20位に満たなかった。状態は内傾気味であった。床面はローム層の叩きで，極めて良好である。

柱穴は撹乱が顕著すぎて1カ所の検出にすぎなかった。埋甕炉と思われる土器があった。その周

辺は赤く焼けていた。その土器は平出３Ａ式土器と呼ばれ，縄文中期初頭と思われた。



第６図　第11号住居址実測図

第14号住居址　（第８図，図版４）

本址は第11号住居址を切るような位置に発見された。南北４ｍ80cm，東西は推定ではあるが５ｍ位の円形プランを呈する竪穴住居址である。壁高は北西が高く，南は低く，東は調査不可能であった。状態はやや内傾気味で，タタキ状のものはなかった。床面はローム層の叩きで大体水平であった。主柱穴は４本と思われるが，北東の一カ所は調査不能により不明であったが，完掘すればおそらく発見されたであろう。

炉は住居址の中央部に位置し，南北１ｍ10cm，東西１ｍ10cm，深さ30cm程の規模ですりばち状に掘られ，炉縁石と思われる石は炉底にくずれておちていた。それは焼けて赤くなり，焼土がこびりついていた。遺物は加曽利Ｅ式であった

第15号住居址（第９図，図版５）

今まで述べてきた住居址と離れて，Ａ地区の終末の場所に位置しており，南北５ｍ50cm，東西４ｍ30cm程の規模で不整円形状の竪穴住居址であった。

壁高は高いところでも10数cm位であり，状態は内弯気味であった

床面はローム層の叩きで，極めて凹凸が著しかった。炉は中央よりやや南寄りにあり，南北80cm，東西80cm程の円形状の焼土の堆積で，地床炉の形態をとっている。

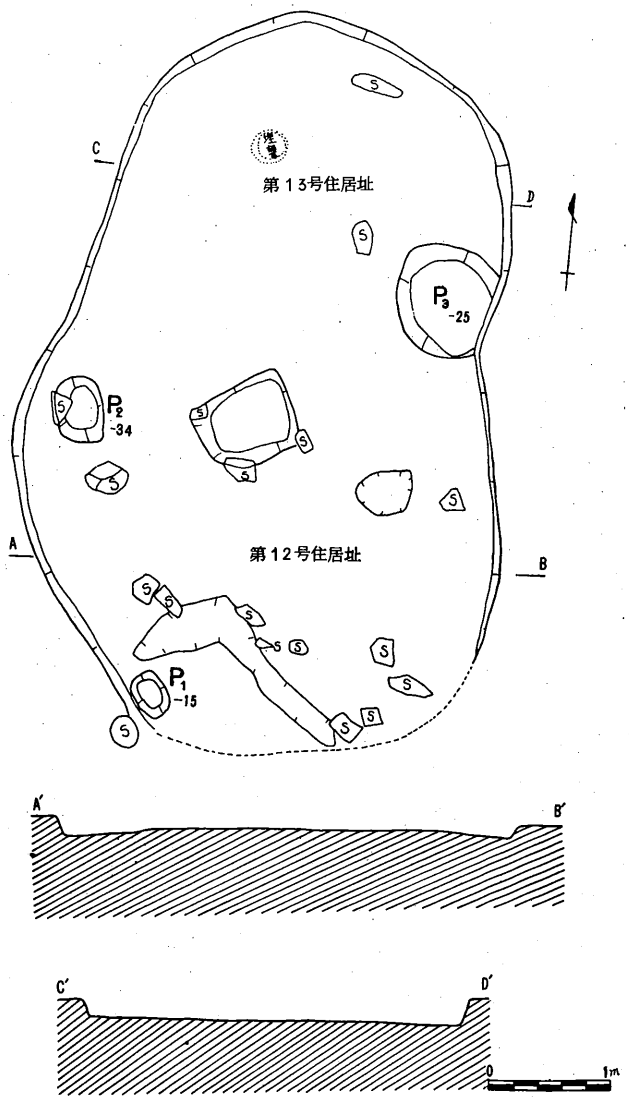
遺物は加曽利Ｅ式であった。

第17号住居址（第10図，図版５）

発掘された遺構中，最南部にあり，南北４ｍ５cm，東西３ｍ90cmの大きさで，北側がつぼまり，南側はややひろがる円形状プランを呈する竪穴住居址であった。

壁高は20数cm位あったが，状態は土拡によって切られていたのではっきりした様相は不明であった

床面は極めて良好なるローム層の叩きであり，水平を示していた柱穴は３カ所検出されたが，３カ所の土拡による破壊が著しくて，はっきりした本数は不明であった。住居址の中央部と思われる場所に阿玉台式の甕が埋甕状になっており，それは焼けていることより，炉として使用されたように思われる。



第７図　第12号，第13号住居址実測図

遺物は平出３Ａ式土器片が多かった。特殊な遺物としては勝坂期の顔面把手があお向けにして出土した。

第３号住居址　（第11図，図版６）

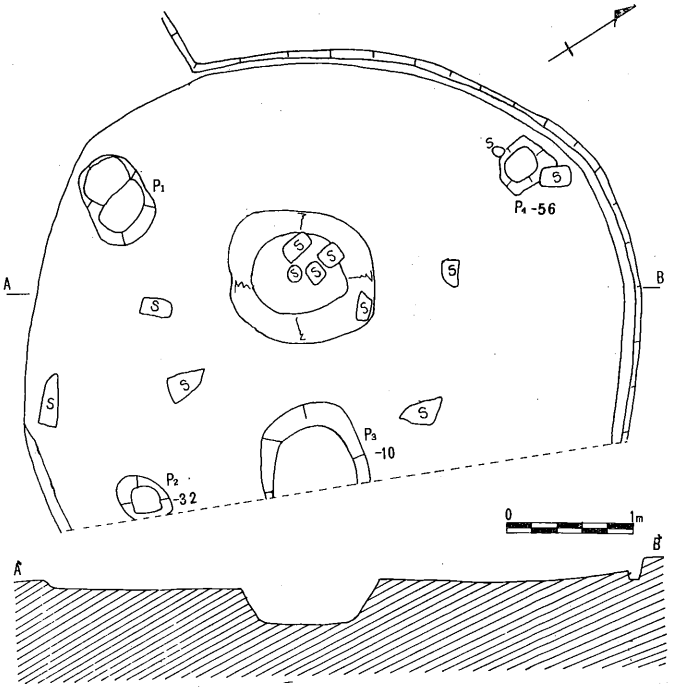
調査地域のＣ地区に発見された縄文中期の竪穴住居址である。南側は第18号住居址を切り，北側は第19号住居址に切られている。南側は周溝による切り合いの為に存在しなかった。他のそれは20

～25cmの範囲に属している。状態は内傾気味で，軟弱であり，かつまた凹凸が顕著であった。

床面は極めて良好なるローム層の叩きであり，大般水平であるが，あばた状の凹凸が各所にみられた。

柱穴は４本等間隔状に配置され，深さは40cm前後と一定ししていた。壁面直下に幅10～20cm，深さ10cm程の周溝が全周している。

炉は中央より北よりに位置しており，南北１ｍ，東西１ｍ程の円形状の落ち込みを利用している。焼土の状態は壁面には全くみられず，炉底に厚く堆積していた。炉壁にはこまかな凹凸が認められ，わずかな叩きになっていた。壁面は内弯気味で，すりばち状を呈していた。



第８図　第14号住居址実測図

遺物は南東の隅に埋甕が２個並んで発見され，レベルは東側が高く，西側はそれより10cm位下った面にあった。それらは加曽利Ｅ式であった。

第18号住居址　（第11図，図版７）

本址は北側が第３号住居址によって切られているが，推定円形プランと思われる。規模は切られた関係で，南北５ｍ25cm，東西５ｍ80cm程を測定できる。壁高は北側は存在しないが，南側，東側は30cm位に含まれている。状態は垂直に近く，軟弱気味であり，凹凸が各所にみられた。

床面は極めて良好なる叩きで，凹凸が顕著であった。柱穴は４～５本とみられる。周溝は東側から南側にかけて，幅20～30cm，深さ30cm程である。炉の位置は中央より北よりで，炉縁石はホルンヘルスで囲まれており，それらの中に同じくホルンヘルスが敷いてあった。石の間には焼土が充満していた。

遺物は炉の南側より加曽利ＥⅠ式の甕が正位で出土した。炉の東側の穴の中より南壁に定着して倒立状に土隅が出土した。

第19号住居址　（第12図，図版７）

Ｃ地区にかかって発見された，縄文中期の竪穴住居址である。北側に第15号土拡が本址を切るよ

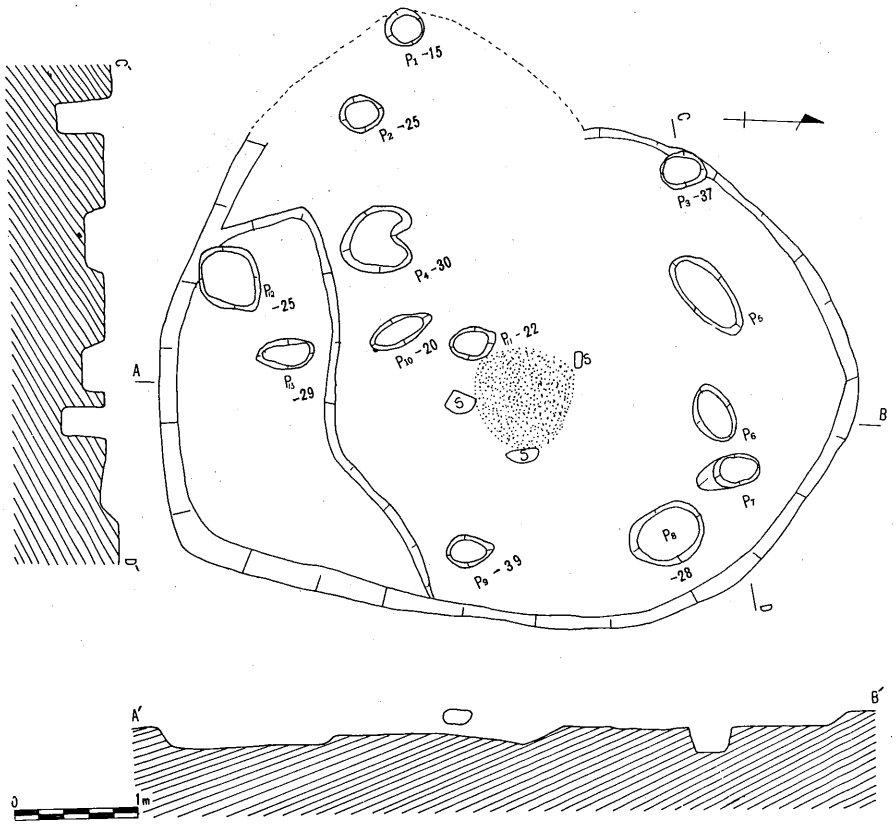
うな形で，南側は本址が第３号住居址を切るような様相になっていた。

形状はローム層を掘り込み，南北５ｍ40cm，東西５ｍ45cm程の規模で，円形プランを呈し，壁高は20～30cm位の範囲内に含まれている。状態はわずかに内傾気味で，壁面に凹凸が顕著であった。柱穴は典型的な４本主柱穴であり，発掘された住居址中最右翼のものと考えられる。底部は固くたたかれていた。

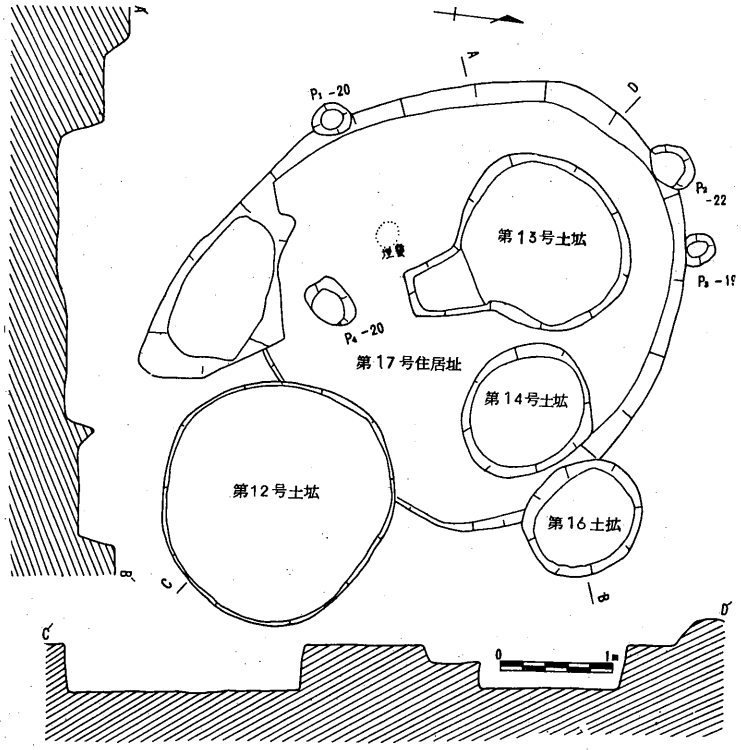
床面はローム層の極めて良好なる叩きであり，あばた状の凹凸が認められ，全般的には水平床とみてよかろう。壁面直下に沿って，幅20cm，深さ10cm程の周溝が全周していた。

炉は中央と思われる場所に位置し，南北１ｍ，東西１ｍ位の方形状の石囲炉であった。南側と西側は石が抜れていた様子が明瞭に判別できた。炉底に焼土が充満し，すりばち状に落ち込んでいた

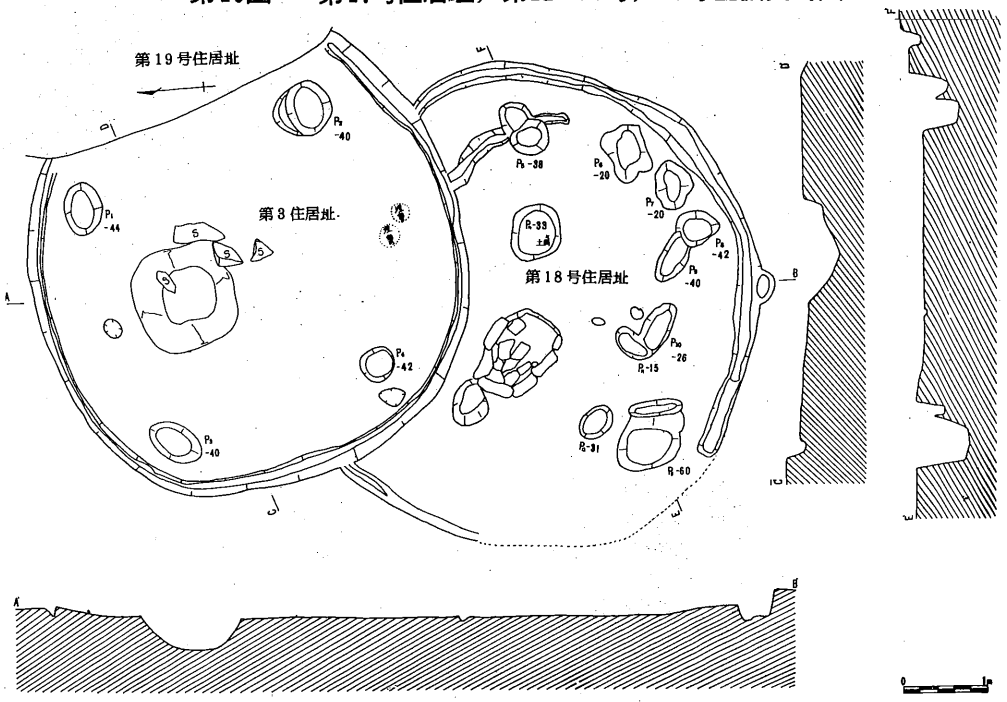
南側にはホルンヘルスの自然石（厚さ10cm位）の下に正位の埋甕があった。それは加曽利Ｅ式である。



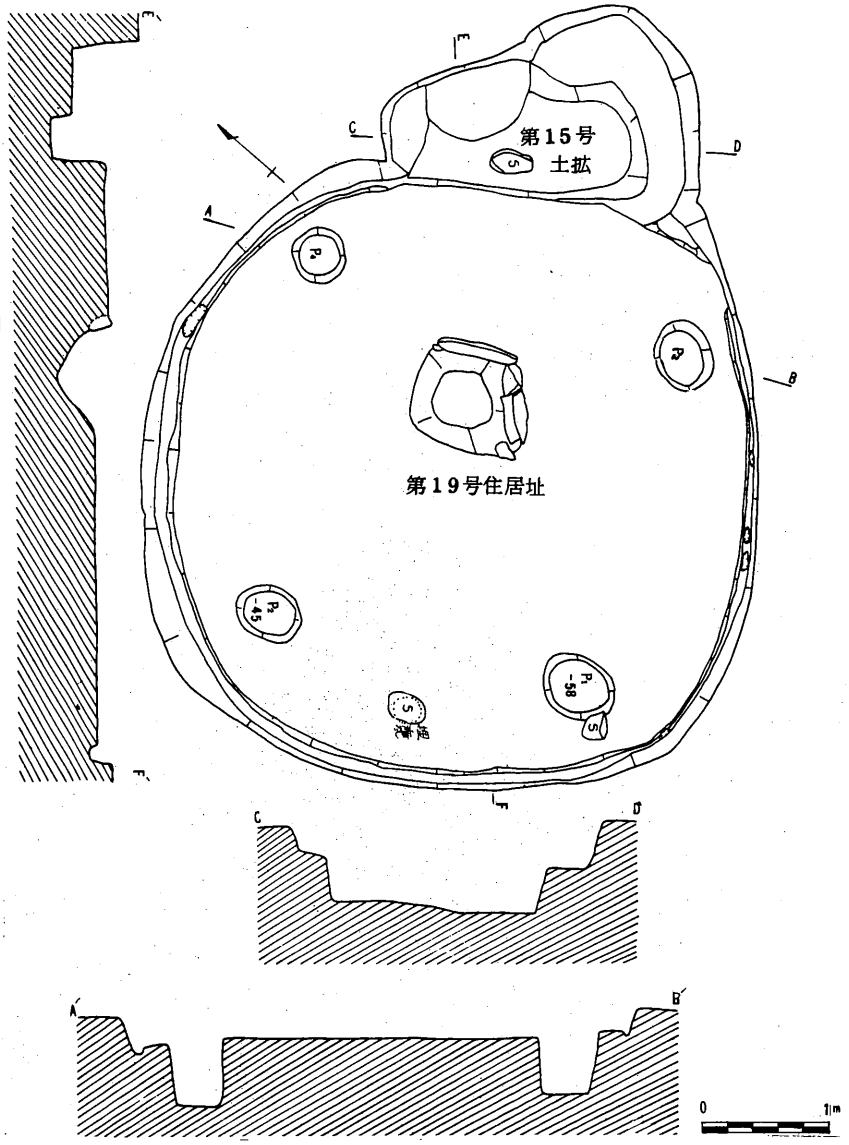
第９図　第15号住居址実測図



第10図　第17号住居址，第12～14号，16号土拡実測図



第11図　第3号，第18号住居址実測図



第12図　第19号住居址，第15号土拡実測図

第2節　土　　拡

第8号土拡　（第13図，図版9）

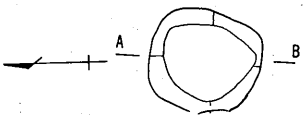
第1号柱穴群内に検出された土拡で，南北87cm，東西85cmの円形，深さ60cm位にローム層を掘り込んでいる。壁面は袋状で内傾気味を呈し，凹凸がわずかに認められ，叩きは存在しなかった。

床面はローム層のわずかな叩きであり，覆土中より少量の炭化物が検出された。遺物は加曽利E

式であった。

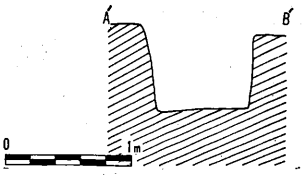
第９号土拡　（第14図，図版９）

第１号柱穴群の西端に発見された土拡である。南北87cm，東西は推定ではあるが１ｍ位の楕円形で，西は28cm位掘り込んでいる。壁面は全般的に内傾に近い，南壁に接してホルンヘルスの自然石が存在していた。床面はローム層のわずかな叩きであった。遺物は加曽利Ｅ式土器片が出土した。



第10号土拡　（第15図，図版９）

第１号柱穴群の南端に発見された土拡である。南北２ｍ40cm，東西１ｍ40cm程の規模で，不正円形を呈している。壁高は20～30cm位の範囲に属し，状態は北壁は傾斜が急である。壁面の西側には凹凸がはげしい。



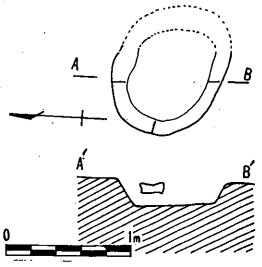
第13図　第８号土拡実測図

床面はローム層のわずかな叩きで，多少の凹凸があった。遺物としては加曽利Ｅ式土器片が出土した。

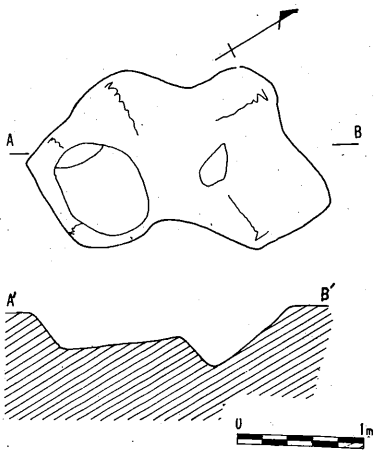
第11号土拡　（第16図，図版９）

第２号柱穴群の北端に検出された土拡である。壁高は深く，60cm位を推定できる。規模は南北１ｍ45cm，東西１ｍ30cm程の規模を有している。

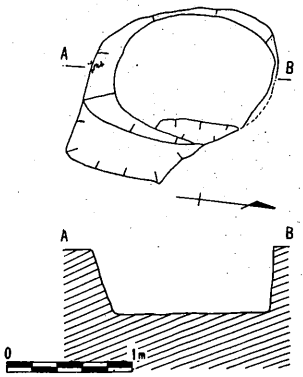
壁の状態は北は垂直に近く，南は内傾している。東壁は凹凸が著しい。床面はローム層のタタキがあり，中央部はやや高くなっている。覆土中より少量の焼土や炭化物が検出され，遺物としては加曽利Ｅ式土器片が少量出土した。



第14図　第９号土拡実測図



第15図　第10号土拡実測図



第16図　第11号土拡実測図

第12号土拡　（第10図，図版５）

第17号住居址の東側を切るようにして検出された土拡である。南北２ｍ５cm，東西２ｍ17cm程の円形プランを呈している。壁高は40cm前後を測定でき，状態は垂直に近かった。床面は極めて良好なるローム層の叩きであった。遺物は加曽利Ｅ式土器であった。

第13号土拡　（第10図，図版）

第17号住居址を切るような形で発見された土拡である。南側は角状にとび出した形になっており大般円形プランを呈している。規模は南北２ｍ，東西１ｍ65cm位を測定できる。壁高は30cm前後を呈している。壁面は堅く叩れており，垂直に近くなっている。

床面はローム層の極めて良好なる叩きとなっている。遺物は勝坂式であった。

第14号土拡　（第10図，図版５）

第17号住居址の東壁を切るような状態で発見された土拡である。円形プランを呈し，その規模は南北１ｍ15cm，東西１ｍ10cmを測定できる。壁高は南は高くて25cm程あり，状態は極めて良好なるたたきで，垂直に近かった。床面はローム層の極めて良好な叩きであった。

遺物は床面上に藤内式の土器がつぶれた状態で出土した。

第15号土拡　（第12図，図版９）

第19号住居址の北壁を切るような状態で発見された土拡である。規模は南北２ｍ80cm，東西１ｍ45cm程を測定できた。壁の状態は垂直に近いが切り合い関係が複雑なために壁面の凹凸は著しい。

床面はローム層の極めて良好なる叩きであり，最下部のものは礫層混りのローム層であった。床面にくっついてホルンヘルスの自然石があった。床面に近いところより加曽利Ｅ式の完型に近い土器が伏った状態で出土した。

第16号土拡　（第10図，図版５）

第17号住居址の東壁を切るような状態で発見された土拡である。その大きさは南北１ｍ10cm，東西１ｍ５cm程を測定できた。壁は垂直に近く，床面はローム層の叩き状になっていた。

遺物は加曽利Ｅ式が多量に出土した。

（小　池　政　美）

第3節　柱穴群

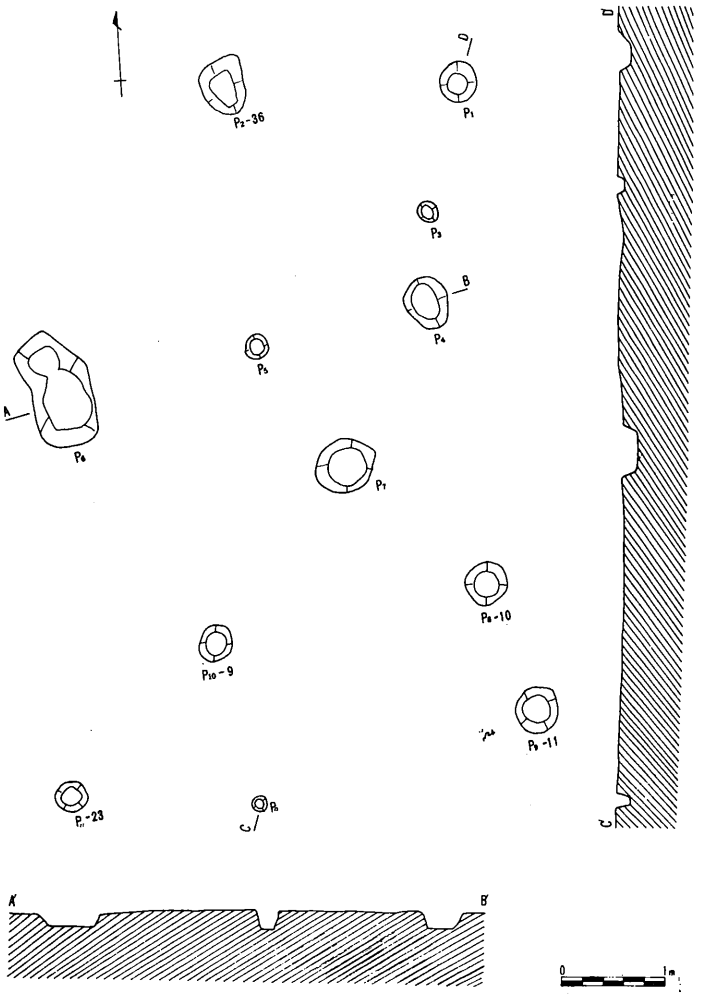
第1号柱穴群　（第17図，図版8）

本柱穴群は発掘地区のA地区の北西の隅に発見され，その規模は南北7 m80cm，東西5 m35cm程を測定できる。調査の都合によって全体的な配列や実体を把握するのはおおいに疑問点が残るので12個発見されたピットについてその見解を述べてみたいと思う。まず柱穴のプランであるが円形状のものとしてはP_1，P_3，P_5，P_7，P_8，P_9，P_{10}，P_{11}，P_{12}，楕円形のものとしては P_2，P_4，不整形状のものとしてはP_9がそれぞれ列挙できよう。

次に大きさについてであるが，小型のものとしてはP_3，P_5，P_{12}，中位のものとしてはP_1，P_8，P_9，P_{10}，P_{11}，大型のものとしてはP_2，P_4，P_7，極めて大きなものとしてはP_6が指摘できよう。

深さに関しては浅いので9～10cm，深いので36cm位とばらばらであった。最後に柱穴群の重要なポイントとなるのはその配列状態であろう。これらを究明するには当然全面発掘が必要であり，その時点で，柱穴の南北，東西の距離，また深さ等の諸項目を含めた上で考えて見るべき必要性があることをつけ加えて述べておこう。

遺物は古瀬戸，中津川，美濃，織部，黄瀬戸，青磁陶器片とあらゆる種類の陶磁器類が出土した。これらはいずれも釉薬をかけたいわゆる施釉陶器と呼ばれるものであった。時代は鎌倉時代から安土桃山時代迄と思われた。



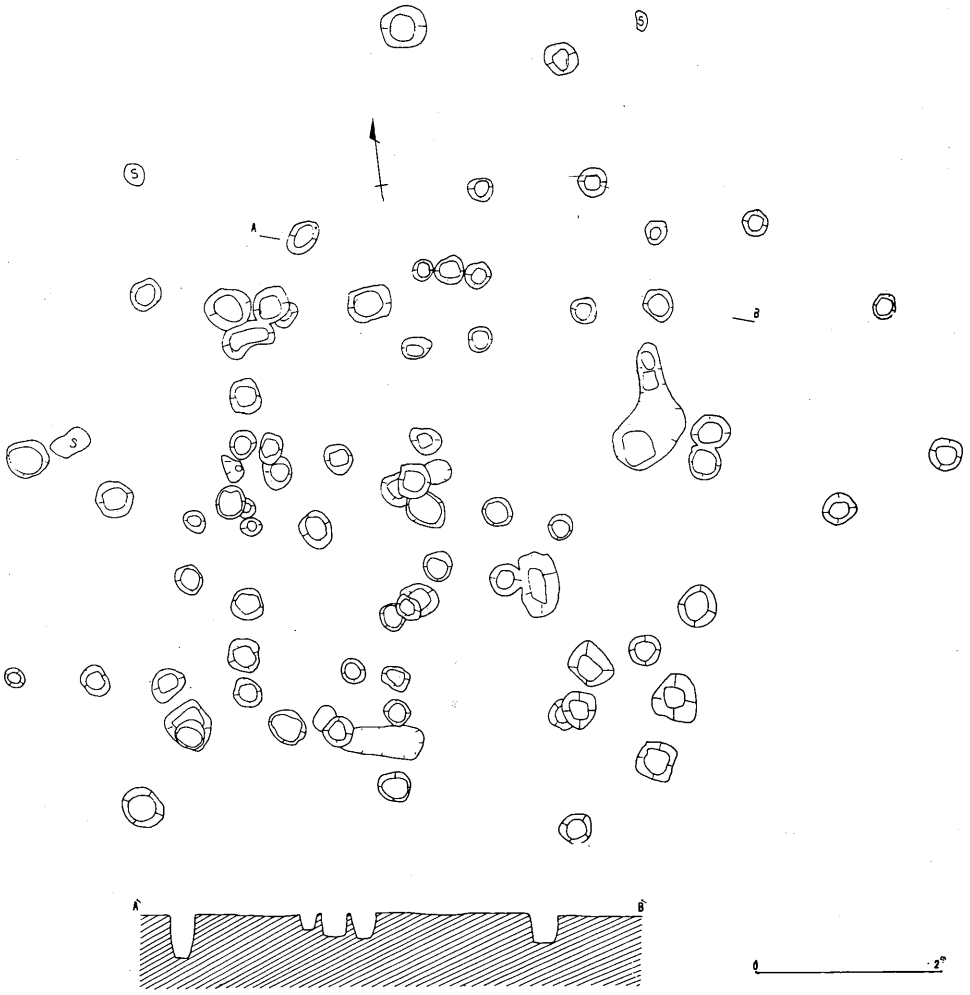
第17図　第1号柱穴群実測図

第２号柱穴群　（第18図，図版８）

本柱穴群はＡ地区の南側よりＢ地区の北側にかけて発見された。規模に関しては全面発掘が不可能なのでその実体は把握できなかった。ただ無数のピットの存在，あるいはピットの形状，並びに深さより何時代にもわたっていることは明らかなる事実である。

遺物は古瀬戸，中津川，美濃，青磁片の多量な出土がみられ，これよりも重複関係等々がうかがわれる。これら多量の施釉陶器の出土は犬房丸伝説，小出氏の小出城，常輪寺創建等の歴史的事項を裏付けできる最も好資料となろう。

（小池政美）



第18図　第２号柱穴群実測図

第Ⅲ章　遺　　物

第1節　土　　器

土器の説明は表を作成し，一見のもとに理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容説明を付記しておくことにする。

胎土，保存状態，色調についての記述は，明らかなる基準によったものではなく，筆者の主観によるものである。

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
11	1	多量の雲母	良　好	黒褐色	7	爪形文　縄文	第8号住居址
〃	2	〃	普　通	黄褐色	8	沈線　刺突文	〃
〃	3	〃	良　好	〃	9	沈線　粘土紐	〃
〃	4	多量の長石	〃	茶褐色	8	沈線　縄文	〃
〃	5	多量の雲母	〃	黒褐色	9	粘土紐　刺突文	〃
〃	6	〃	〃	茶褐色	9	沈線　刺突文	〃
〃	7	多量の長石	普　通	黒褐色	8	沈　線	〃
〃	8	〃	〃	茶褐色	10	〃	〃
〃	9	少量の雲母	〃	〃	7	懸垂文　沈線	〃
〃	10	〃	〃	〃	7	粘土紐	〃
〃	11	多量の雲母	〃	〃	8	沈線　縄文	〃
〃	12	少量の長石	良　好	黒褐色	9	沈　線	〃
〃	13	〃	普　通	茶褐色	11	〃	〃

第1表　出土土器の形状一覧表（その1）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
12	1	多量の雲母	良　好	茶褐色	9	隆線　刺突文	第9号住居址
〃	2	多量の長石	〃	〃	8	粘土紐　沈線	〃
〃	3	少量の長石	〃	〃	6	沈　線	〃
〃	4	〃	〃	〃	4	粘土紐	〃
〃	5	〃	〃	〃	6	粘土紐　沈線	〃
〃	6	多量の長石	普　通	黒褐色	7	粘土紐　沈線　刻目	〃
〃	7	少量の長石	〃	茶褐色	6	沈　線	〃
〃	8	〃	良　好	〃	7	縄文　沈線	〃
〃	9	〃	普　通	赤褐色	6	沈　線	〃
〃	10	〃	〃	黒褐色	6	縄文　沈線	〃
〃	11	〃	良　好	赤褐色	8	粘土紐　沈線	〃
〃	12	〃	〃	〃	10	〃	〃

第2表　出土土器の形状一覧表（その2）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文　様　の　特　徴	備　考
13	1	多量の雲母	良　好	茶褐色	4	土　師　器	第10号住居址
〃	2	〃	〃	赤褐色	3	〃	〃
〃	3	〃	〃	〃	5	〃	〃
〃	4	〃	普　通	黄褐色	5	〃	〃
〃	5	〃	良　好	赤褐色	3	〃	〃
〃	6	〃	〃	〃	3	〃	〃
〃	7	多量の長石	普　通	黒褐色	5	〃	〃
〃	8	多量の雲母	良　好	赤褐色	3	〃	〃
〃	9	〃	〃	〃	3	〃	〃
〃	10	〃	〃	〃	8	〃	〃
〃	11	少量の長石	〃	白灰色	4	須　恵　器	〃
〃	12	〃	〃	〃	3	〃	〃
〃	13	〃	〃	〃	3	〃	〃

第3表　出土土器の形状一覧表（その3）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文　様　の　特　徴	備　考
14	1	多量の長石	良　好	赤褐色	14	隆帯　刻目	第11号住居址
〃	2	少量の雲母	普　通	黄褐色	8	沈　線	〃
〃	3	〃	〃	赤褐色	6	沈線　刻目	〃
〃	4	多量の雲母	〃	黄褐色	6	隆線　沈線　刻目	〃
〃	5	少量の長石	〃	黒褐色	7	隆線，沈線	〃
〃	6	多量の雲母	〃	〃	7	〃	〃
〃	7	少量の長石	〃	黄褐色	6	〃	〃
〃	8	多量の雲母	良　好	茶褐色	7	〃	〃
〃	9	〃	〃	〃	6	沈　線	〃
〃	10	〃	普　通	〃	8	刺突文　縄文	〃
〃	11	少量の長石	良　好	赤褐色	6	磨消縄文	〃

第4表　出土土器の形状一覧表（その4）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文　様　の　特　徴	備　考
15	1	多量の長石	普　通	黒褐色	8	沈　線	第12号住居址
〃	2	少量の雲母	良　好	茶褐色	7	隆線　沈線	〃
〃	3	〃	普　通	〃	9	〃	〃
〃	4	多量の雲母	良　好	黄褐色	9	〃	〃
〃	5	〃	〃	〃	8	〃	〃
〃	6	少量の雲母	普　通	赤褐色	8	〃	〃
〃	7	多量の雲母	〃	黒褐色	7	沈　線	〃
〃	8	少量の雲母	良　好	赤褐色	8	隆線　沈線	〃
〃	9	〃	普　通	黒褐色	8	粘土紐　沈線	〃
〃	10	〃	良　好	〃	7	沈　線	〃
〃	11	少量の長石	普　通	茶褐色	8	綾杉文	〃
〃	12	多量の雲母	〃	〃	7	渦巻　沈線	〃

第5表　出土土器の形状一覧表（その5）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文　様　の　特　徴	備　考
16	1	少量の長石	普　通	黒褐色	8	沈　線	第13号住居址
〃	2	〃	良　好	茶褐色	8	沈線　刻目	〃
〃	3	〃	〃	〃	7	〃	〃
〃	4	少量の雲母	〃	黒褐色	8	沈線　縄文	〃
〃	5	〃	普　通	茶褐色	7	沈線　隆帯	〃
〃	6	多量の雲母	〃	赤褐色	10	縄文　懸垂文	〃
〃	7	多量の長石	〃	茶褐色	8	縄文　沈線　刺突文	〃
〃	8	少量の雲母	〃	黒褐色	8	縄　文	〃
〃	9	〃	〃	茶褐色	7	縄文　沈線	〃
〃	10	〃	〃	〃	5	刺突文　沈線	〃
〃	11	多量の雲母	〃	黒褐色	10	縄文　沈線	〃
〃	12	〃	〃	赤褐色	9	〃	〃
〃	13	少量の雲母	〃	茶褐色	5	刺突文　沈線	〃
〃	14	多量の雲母	〃	〃	10	縄文　沈線	〃
〃	15	少量の長石	〃	赤褐色	7	沈　線	〃

第6表　出土土器の形状一覧表（その6）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文　様　の　特　徴	備　考
17	1	少量の長石	普　通	茶褐色	9	渦巻　刺突文	第14号住居址
〃	2	〃	〃	黄褐色	8	隆線　刺突文	〃
〃	3	多量の雲母	〃	〃	7	隆線　綾杉文	〃
〃	4	少量の雲母	〃	黒褐色	8	隆線　沈線	〃
〃	5	少量の長石	〃	茶褐色	9	〃	〃
〃	6	〃	〃	〃	8	〃	〃
〃	7	多量の雲母	良　好	黄褐色	7	渦巻文	〃
〃	8	少量の長石	普　通	黒褐色	6	縄文　沈線	〃
〃	9	多量の雲母	〃	黄褐色	6	隆線　沈線　縄文	〃
〃	10	多量の長石	〃	〃	5	綾杉文	〃
〃	11	〃	〃	〃	11	〃	〃
〃	12	多量の雲母	良　好	〃	8	懸垂文　綾杉文	〃

第7表　出土土器の形状一覧表（その7）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文　様　の　特　徴	備　考
18	1	多量の長石	普　通	茶褐色	8	爪形文	第15号住居址
〃	2	少量の長石	良　好	〃	7	隆線　沈線	〃
〃	3	多量の雲母	普　通	黄褐色	9	隆線　刻目　沈線	〃
〃	4	少量の長石	良　好	〃	8	〃	〃
〃	5	多量の雲母	普　通	〃	11	沈線　刺突文	〃
〃	6	〃	〃	茶褐色	8	隆線　刻目	〃
〃	7	多量の長石	〃	赤褐色	10	粘土紐　沈線	〃
〃	8	〃	良　好	黒褐色	12	沈　線	〃
〃	9	少量の長石	〃	黄褐色	10	粘土紐	〃
〃	10	多量の雲母	普　通	赤褐色	9	沈　線	〃
〃	11	〃	〃	黒褐色	7	〃	〃
〃	12	少量の長石	良　好	黄褐色	10	粘土紐	〃

第8表　出土土器の形状一覧表（その8）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
19	1	多量の雲母	普　通	赤褐色	7	沈線　縄文	第17号住居址
〃	2	〃	〃	黄褐色	9	沈　線	〃
〃	3	多量の長石	良　好	黒褐色	6	沈線　指頭圧痕文	〃
〃	4	少量の長石	〃	黄褐色	8	キャタピラ文	〃
〃	5	少量の雲母	〃	赤褐色	9	キャタピラ文　刺突文	〃
〃	6	少量の長石	〃	〃	8	沈線　刺突文	〃
〃	7	〃	〃	黒褐色	9	キャタピラ文　刺突文	〃
〃	8	少量の雲母	普　通	黄褐色	10	隆線　沈線文	〃
〃	9	少量の長石	〃	黒褐色	7	沈　線	〃
〃	10	〃	〃	茶褐色	6	沈線　刺突文	〃
〃	11	〃	不　良	黄褐色	9	刺突文	〃
〃	12	〃	普　通	〃	10	隆線　キャタピラ文	〃
〃	13	〃	〃	〃	7	縄文　沈線	〃

第9表　出土土器の形状一覧表（その9）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
20	1	多量の雲母	普　通	赤褐色	8	隆線　刺突文	第18号住居址
〃	2	多量の長石	〃	黒褐色	7	渦巻文	〃
〃	3	多量の雲母	〃	黄褐色	10	懸垂文　沈線	〃
〃	4	〃	〃	〃	8	粘土紐	〃
〃	5	〃	〃	黒褐色	10	隆　線	〃
〃	6	少量の長石	不　良	〃	10	〃	〃
〃	7	多量の雲母	〃	〃	6	隆線　綾杉文	〃
〃	8	〃	〃	赤褐色	7	綾杉文	〃
〃	9	少量の長石	〃	〃	8	渦巻文	〃
〃	10	〃	良　好	〃	6	沈　線	〃
〃	11	多量の雲母	普　通	黒褐色	10	隆　線	〃
〃	12	〃	〃	〃	8	〃	〃

第10表　出土土器の形状一覧表（その10）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文様の特徴	備　考
21	1	多量の雲母	良　好	茶褐色	10	沈　線	第19号住居址
〃	2	〃	普　通	赤褐色	9	〃	〃
〃	3	〃	良　好	〃	7	隆帯　刻目	〃
〃	4	〃	〃	黒褐色	11	隆線　刺突文	〃
〃	5	少量の長石	普　通	赤褐色	12	隆線　刻目	〃
〃	6	少量の雲母	良　好	黒褐色	7	縄文　沈線	〃
〃	7	多量の雲母	普　通	黄褐色	10	隆線　沈線	〃
〃	8	多量の長石	〃	〃	8	綾杉文	〃
〃	9	〃	〃	赤褐色	9	沈線　縄文	〃
〃	10	多量の雲母	〃	黒褐色	8	縄　文	〃
〃	11	少量の長石	〃	〃	7	〃	〃
〃	12	〃	良　好	〃	7	無　文	〃

第11表　出土土器の形状一覧表（その11）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文　様　の　特　徴	備　考
22	1	多量の雲母	普　通	茶褐色	7	粘土紐	第3号住居址
〃	2	〃	〃	〃	9	沈　線	〃
〃	3	〃	良　好	赤褐色	10	〃	〃
〃	4	〃	普　通	〃	8	隆線　綾杉文	〃
〃	5	多量の長石	〃	黒褐色	7	〃	〃
〃	6	少量の長石	良　好	〃	9	沈　線	〃
〃	7	多量の長石	普　通	〃	8	沈線　綾杉文	〃
〃	8	多量の雲母	良　好	〃	5	縄　文	〃
〃	9	〃	普　通	〃	8	隆線　刺突文	〃
〃	10	〃	〃	茶褐色	8	隆　線	〃
〃	11	少量の雲母	〃	赤褐色	10	隆線　刺突文	〃
〃	12	〃	〃	黒褐色	9	沈　線	〃
〃	13	〃	〃	赤褐色	8	縄文　沈線	〃

第12表　出土土器の形状一覧表（その12）

図版	番号	胎　土	保存状態	色　調	厚さ(mm)	文　様　の　特　徴	備　考
23	1	少量の長石	良　好	赤褐色	8	沈線　刺突文	第7号住居址
〃	2	多量の長石	不　良	〃	7	隆線　刺突文	〃
〃	3	〃	良　好	黄褐色	5	粘土紐	〃
〃	4	多量の雲母	〃	赤褐色	10	粘土紐　沈線	〃
〃	5	少量の長石	〃	黄褐色	5	縄文　沈線	〃
〃	6	〃	普　通	茶褐色	6	縄　文	〃
〃	7	多量の雲母	〃	赤褐色	8	隆線　綾杉文	〃
〃	8	〃	〃	黒褐色	10	〃	〃
〃	9	〃	〃	茶褐色	9	沈線　縄文	〃
〃	10	〃	不　良	〃	6	粘土紐	〃
〃	11	多量の長石	普　通	黒褐色	7	粘土紐　綾杉文	〃
〃	12	多量の雲母	〃	茶褐色	8	刺突文	〃
〃	13	〃	〃	黄褐色	12	綾杉文	〃

第13表　出土土器の形状一覧表（その13）

第2節　陶磁器

陶磁器の説明は表を作成し，一見のもとに理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容説明を付記しておくことにする。

本来ならば時代を考える必要があるが，専門家による鑑定を必要とするので，今回は省略させてもらい，後の機会に発表したいと思います。　（小池政美）

図版	番号	器形	色調	厚さ(mm)	備考
24	1	青磁碗	薄青色	7	グリット
〃	2	青磁皿	〃	6	〃
〃	3	青磁碗	〃	5	〃
〃	4	青磁皿	〃	8	第12号住居址
〃	5	青磁碗	〃	5	グリット
〃	6	灰釉皿	緑青色	6	〃
〃	7	折縁皿	薄緑色	5	〃
〃	8	灰釉小皿	〃	6	〃
〃	9	大甕	緑色	8	〃
〃	10	〃	茶色	10	〃
〃	11	甕底部	白色	11	〃
〃	12	〃	〃	7	〃
〃	13	〃	〃	6	〃
〃	14	灰釉碗	〃	5	〃
〃	15	おろし皿	黒茶色	10	〃
〃	16	鉄釉碗	黒色	5	〃
〃	17	鉄釉	〃	3	〃

第14表　出土陶磁器の形状一覧表（その1）

第3節　石　器

石器の説明は表を用いることにする。表の項目は図版，番号，名称，器形，石質，備考である。

（小池政美）

図版	番号	名称	器形	石質	備考
25	1	打製石斧	撥形	緑泥岩	第8号住居址
〃	2	〃	短冊形	硬砂岩	〃
〃	3	〃	〃	緑泥岩	〃
〃	4	打製石匙	縦型	〃	〃
〃	5	石錐		花崗岩	〃
〃	6	磨製石斧	乳棒状	緑泥岩	第9号住居址
〃	7		〃	蛇紋岩	〃
〃	8	打製石斧	短冊形	花崗岩	〃
〃	9	磨石		緑泥岩	〃
〃	10	石錐		花崗岩	〃

第15表　出土石器の一覧表（その1）

図版	番号	名称	器形	石質	備考
26	1	打製石斧	撥形	緑泥岩	第11号住居址
〃	2	磨製石斧	乳棒状	〃	〃
〃	3	〃	定角式	蛇紋岩	〃
〃	4	鋸		黒耀石	〃
〃	5	スクレーパー		〃	〃
〃	6	磨製石斧	定角式	蛇紋岩	〃
〃	7	石錐		花崗岩	第12号住居址
〃	8	打製石斧	短冊形	緑泥岩	〃
〃	9	〃	〃	花崗岩	〃
〃	10	〃	〃	緑泥岩	〃
〃	11	〃	〃	変成岩	〃

第16表　出土石器の形状一覧表（その2）

図版	番号	名称	器形	石質	備考
27	1	磨製石斧	定角式	蛇紋岩	第14号住居址
〃	2	打製石斧	短冊形	緑泥岩	〃
〃	3	〃	〃	〃	〃
〃	4	〃	撥形	硬砂岩	〃
〃	5	打製石匙	縦型	緑泥岩	〃
〃	6	打製石斧	短冊形	〃	〃
〃	7	剥片石器		硬砂岩	〃
〃	8	〃		〃	〃

第17表　出土石器の形状一覧表（その3）

図版	番号	名称	器形	石質	備考
28	1	磨製石斧	乳棒状	緑泥岩	第15号住居址
〃	2	打製石斧	撥形	硬砂岩	〃
〃	3	打製石匙	横型	〃	〃
〃	4	打製石斧	定角式	蛇紋岩	〃
〃	5	石錐		変成岩	〃
〃	6	打製石斧	短冊形	硬砂岩	第17号住居址
〃	7	〃	〃	緑泥岩	〃
〃	8	〃	〃	硬砂岩	〃
〃	9	敲石		〃	〃

第18表　出土石器の形状一覧表（その4）

図版	番号	名称	器形	石質	備考
29	1	磨製石斧	定角式	緑泥岩	第18号住居址
〃	2	〃	乳棒状	〃	〃
〃	3	打製石斧	撥形	〃	〃
〃	4	〃	〃	安山岩	〃
〃	5	〃	〃	緑泥岩	〃
〃	6	磨石		変成岩	〃
〃	7	打製石斧	撥形	緑泥岩	第19号住居址
〃	8	〃	短冊形	蛇紋岩	〃
〃	9	〃	撥形	硬砂岩	〃
〃	10	〃	〃	〃	〃
〃	11	凹石		〃	〃

第19表　出土石器の形状一覧表（その5）

図版	番号	名称	器形	石質	備考
30	1	磨製石斧	定角式	蛇紋岩	第3号住居址
〃	2	〃	乳棒状	緑泥岩	〃
〃	3	打製石斧	短冊形	〃	〃
〃	4	打製石匙	縦型	硬砂岩	〃
〃	5	打製石斧	撥形	緑泥岩	〃
〃	6	石錐		硬砂岩	第7号住居址
〃	7	磨製石斧	定角式	蛇紋岩	〃
〃	8	打製石斧	撥形	硬砂岩	〃
〃	9	〃	〃	〃	〃
〃	10	打製石匙	横型	チャート	〃

第20表　出土石器の形状一覧表（その6）

第Ⅳ章　ま　と　め

常輪寺下遺跡は昨年春，大規模農道路線内の発掘調査の結果より，今回の調査に念ずる期待は当初よりきわめて大であった。しかし，諸条件の都合上遺跡地に指定された面積のほんの僅かな地点に留まった。このようなことより，まだ幾多の問題が残されているが，調査の結果，知り得た問題点を取り上げて，一応，まとめて供したいと思う。

A　常輪寺遺跡の自然的環境

小黒川の河岸段丘上に発達した遺跡の南側の所謂小出地籍には，豊富な水量を持つ湧水があり，これを無視して遺跡を述べることはできない。信濃で有名な八ケ岳山麓の井戸尻，尖石両遺跡でも明解なように縄文中期時代の集落址は湧水集落とまで云われ，集落の近くには必ず湧水が存している特徴をもっている。当常輪寺下遺跡はこの通例に該当し，遺跡地の西側の扇状地の扇測部と思われる位置に湧泉が現在でも３カ所程存在し，豊富な水量を誇り，湿地地帯を形成している。

最後に，当常輪寺下遺跡の全面発掘が可能であったならば100軒をこえる住居址の発見がなされたであろうことは想像に難くないのである。

B　各住居址の特色

今回の発掘調査で検出された住居址は，縄文中期時代に属するもの12軒，土師器のもの１軒であった。縄文時代のうちで１軒は時間の都合によって完掘できなかった。まず縄文時代から順に特徴を説明していくことにしようと思う。

縄文時代の住居址は全て円形プランであった。住居址の内部施設としてまず炉を考えてみよう。縄文中期時代の代表的な石囲炉は第８，18，19号住居址であり，第18号住居址の炉内には石を敷いてあった。埋甕炉としては第13，17号住居址，地床炉としては第15，７号住居址，凹み状の炉としては第９，11，12，14，３号住居址であった。

埋甕を有するもの第８，11，19，３号住居址であった。その諸特徴は二個並んでいたものは第８，３号住居址，南側と北側に離れて２個存在していたものは第11号住居址，石蓋のあったものは第19号住居址であった。

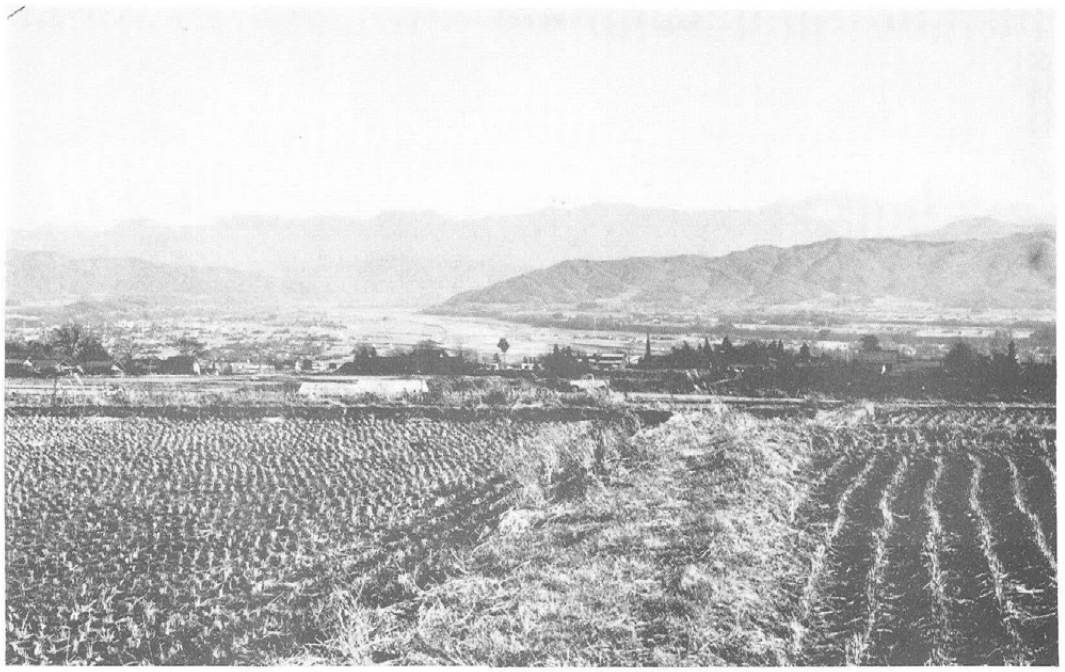
土師器の住居址は第11号住居址を切るような形で発見され，第10号住居址と命名した。隅丸方形の住居址で，東壁に石組粘土カマドを持つものである。

C　出土遺物について

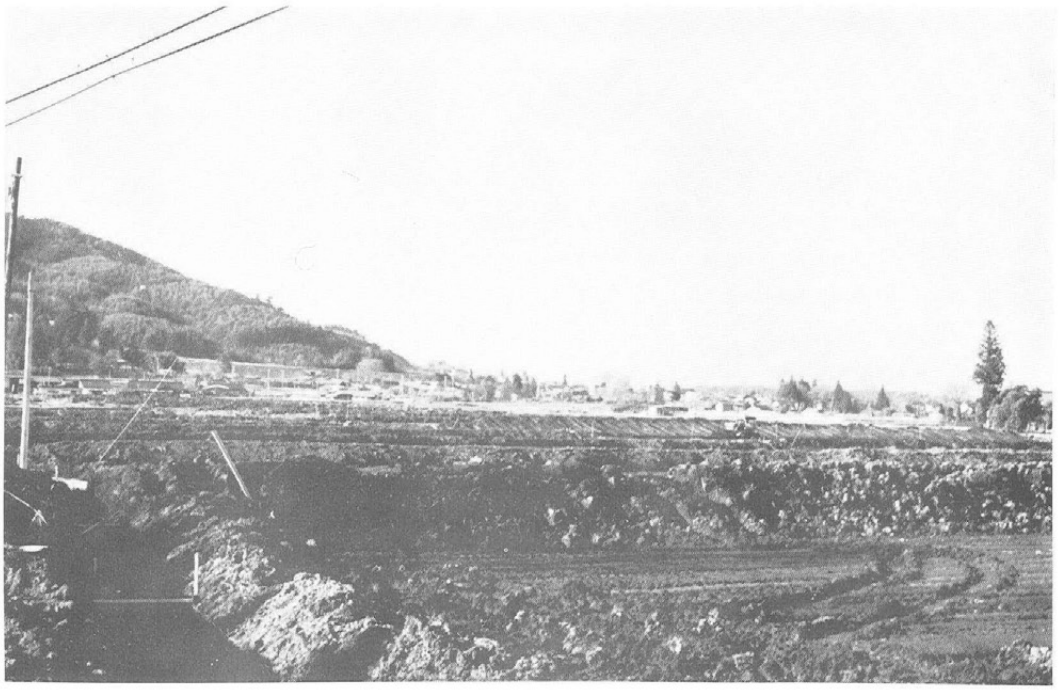
縄文時代の出土遺物は縄文中期時代全般にわたり，編年でいわれている梨久保式，五領ケ台式，平出３Ａ式，阿玉台式，勝坂式，加曽利Ｅ式であった。極わだった特徴ではあるが，加曽利Ｅ式のなかに混じって，同時代の東海，美濃，近畿地方の土器片が数片みられた。

その他の遺物として土師器，須恵器，灰釉陶器，常滑焼，古瀬戸，中津川，美濃，青磁，黄瀬戸等の破片が相当量出土した。

（小池政美）

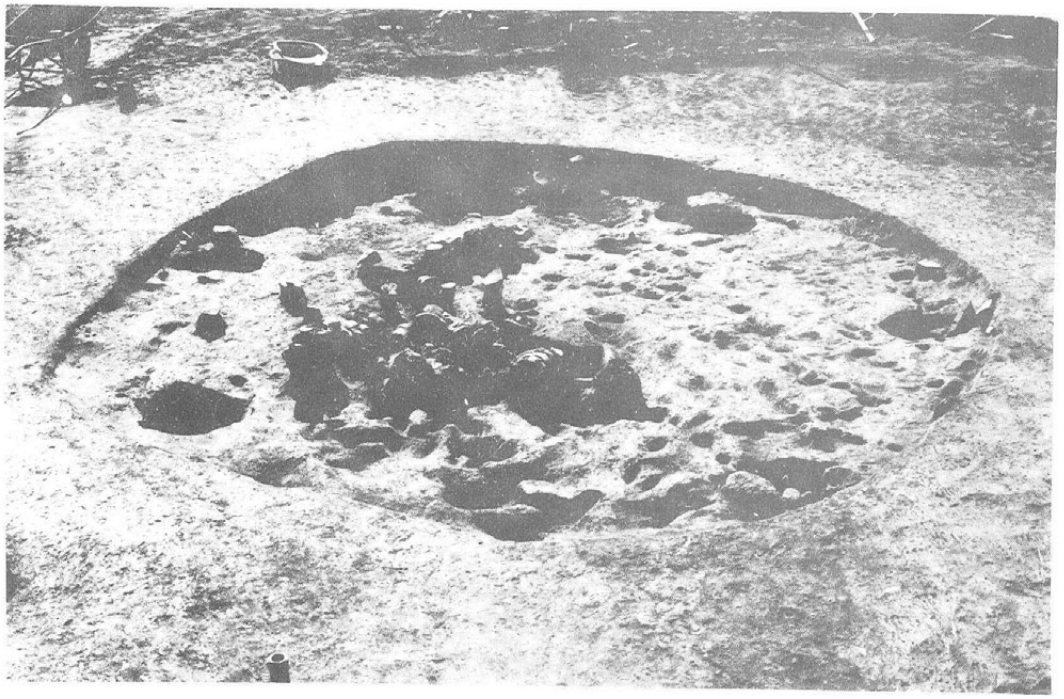


西側より遺跡地を眺む

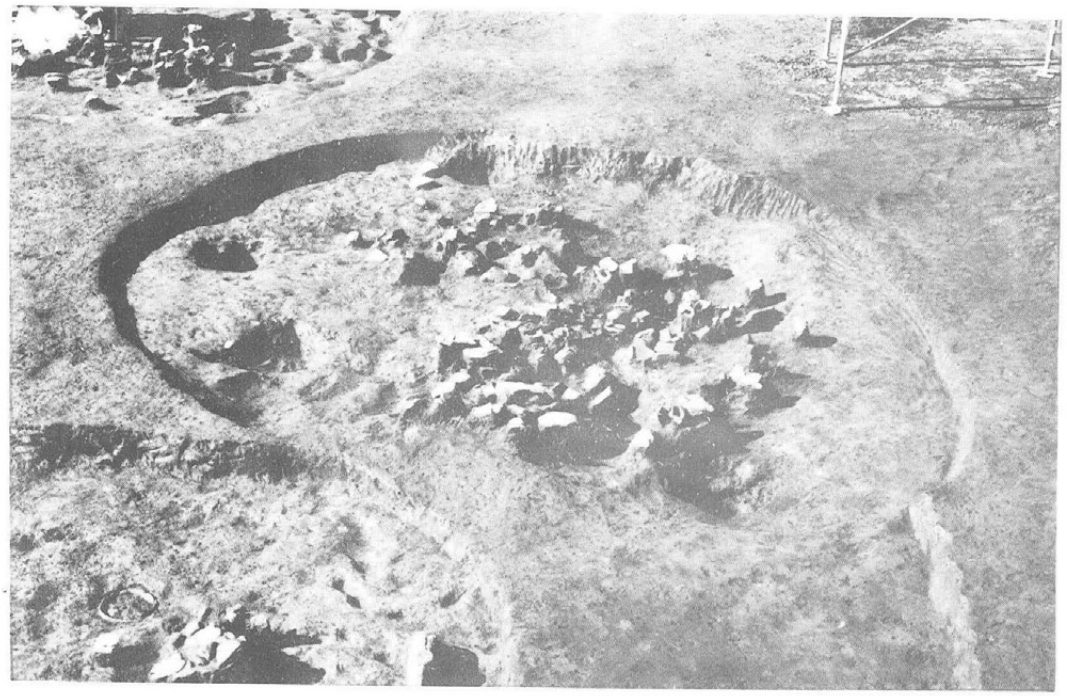


東側より遺跡地を眺む

図版1　遺跡全景

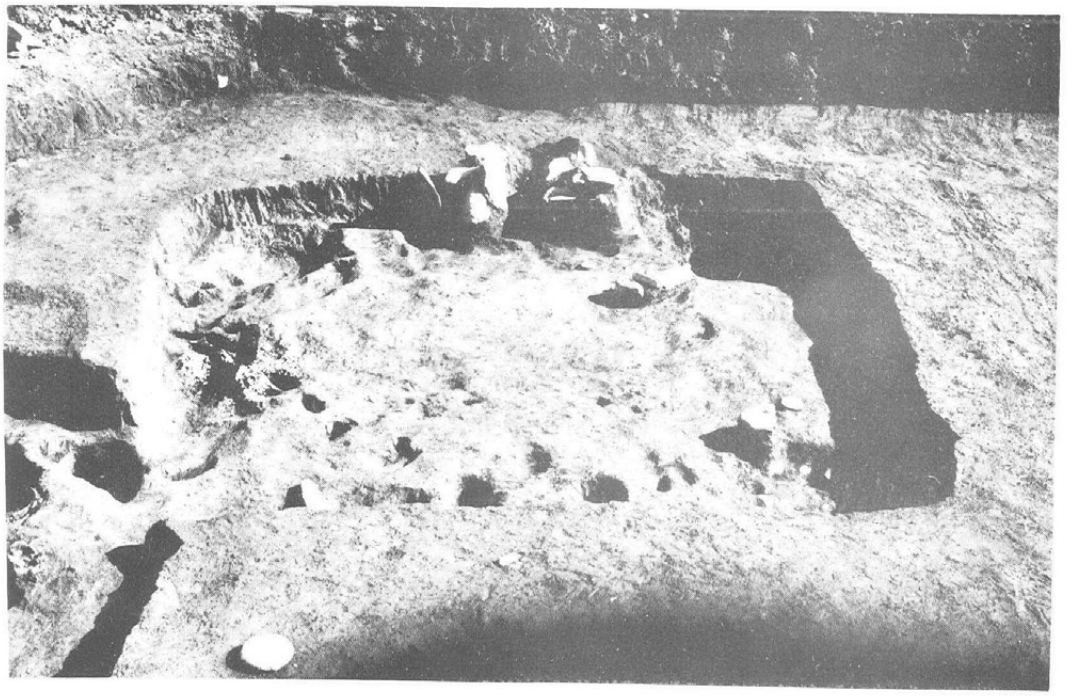


第 8 号住居址

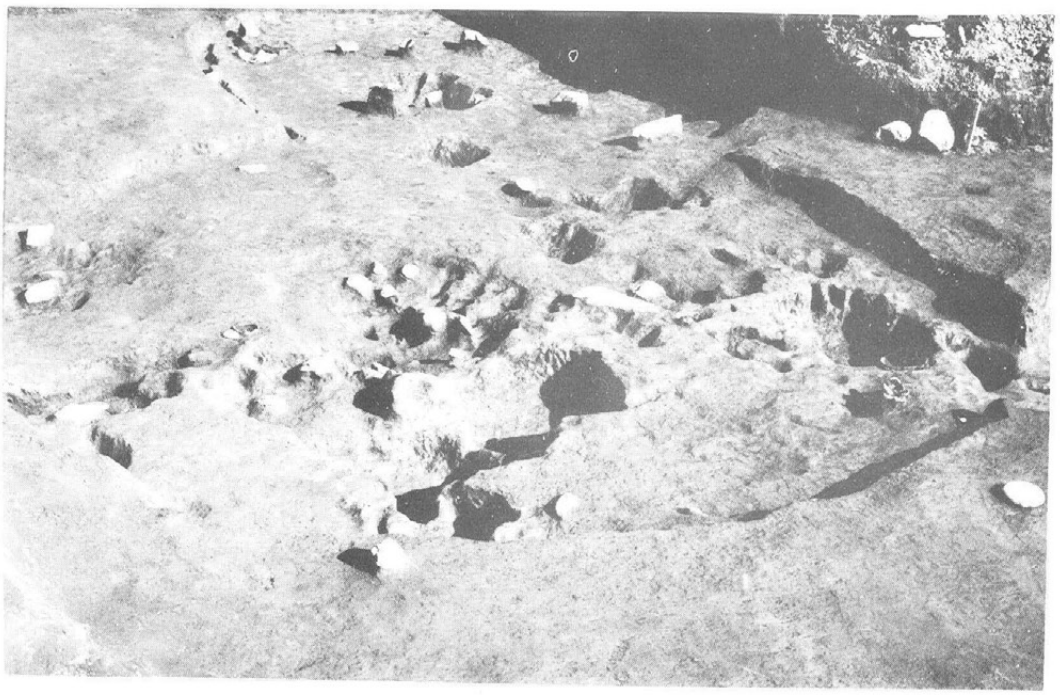


第 9 号住居址

図版 2　遺構（住居址）

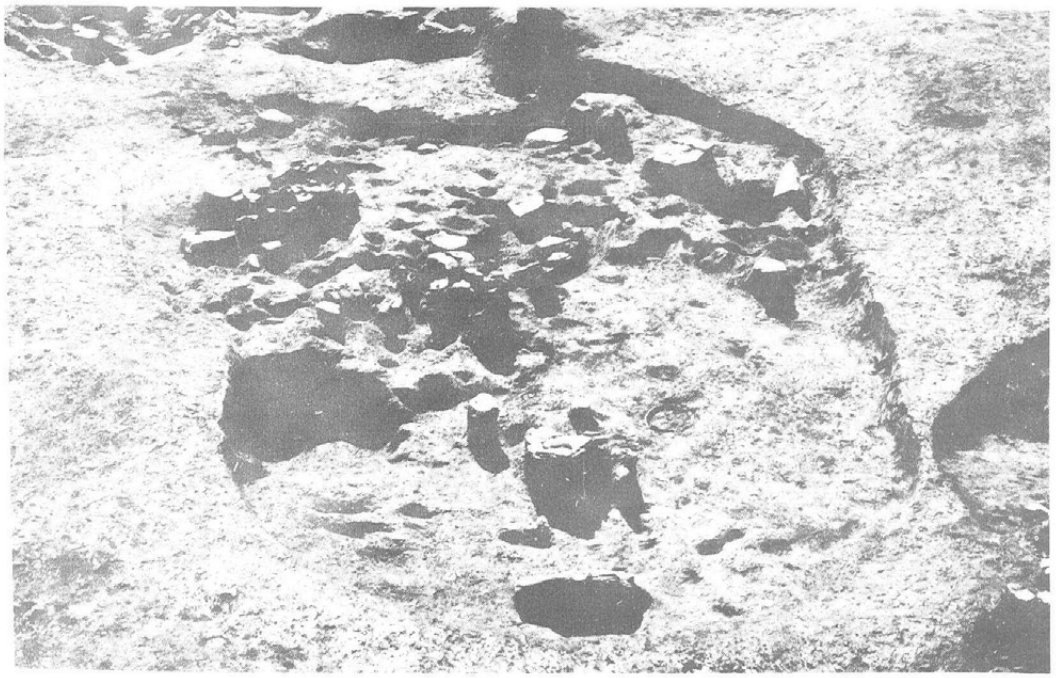


第10号住居址

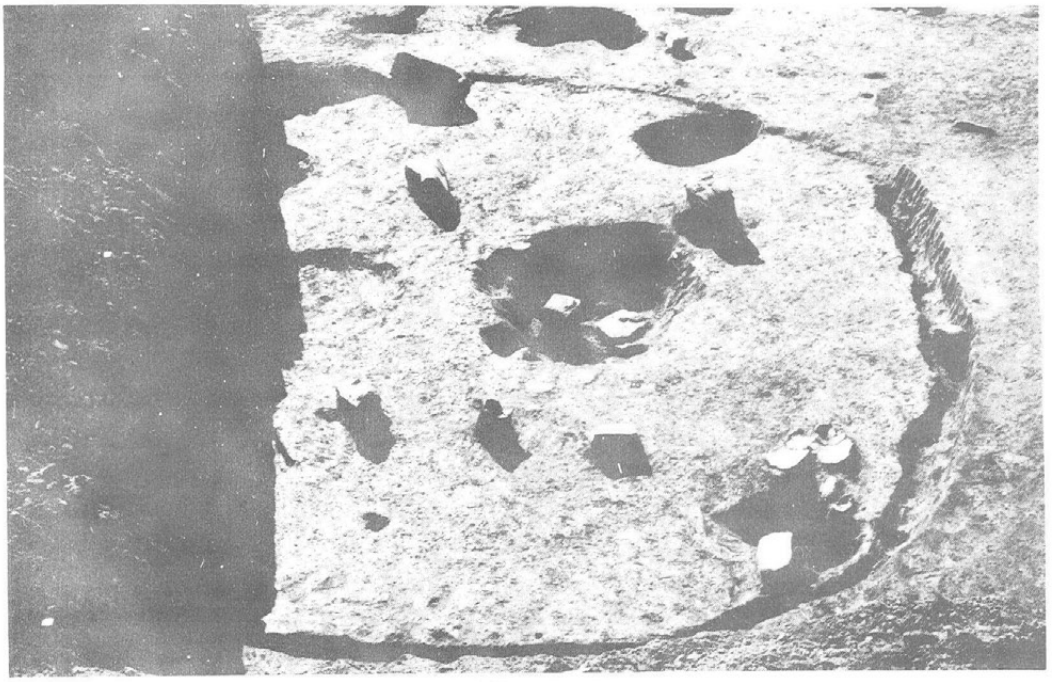


第11号住居址

図版 3　遺構（住居址）

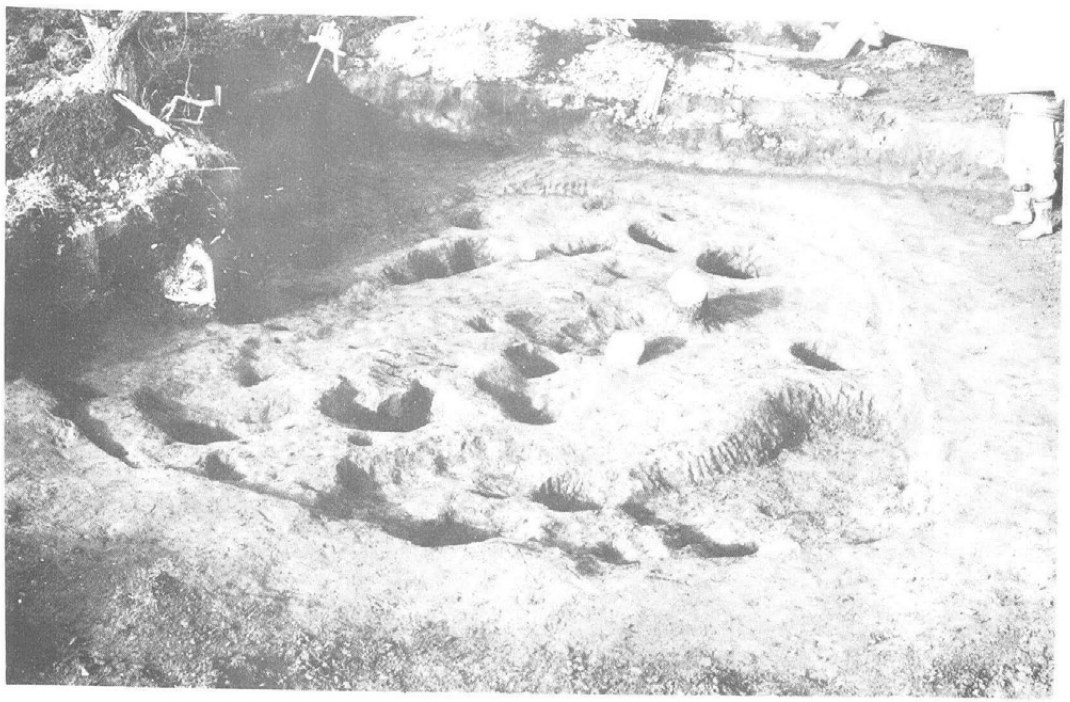


第12・13号　住居址

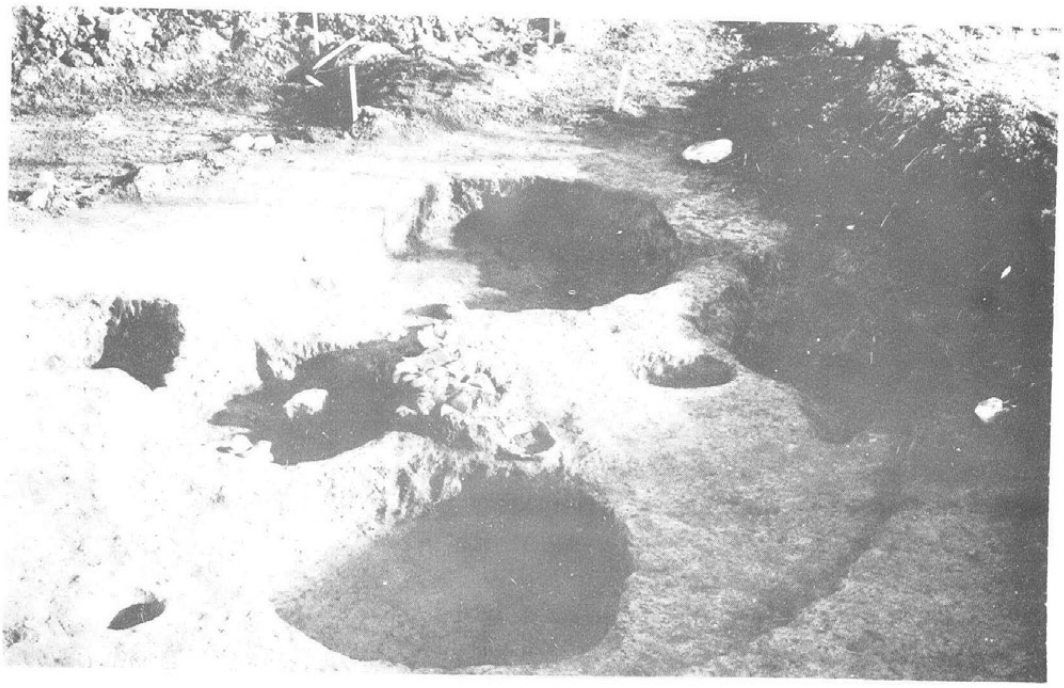


第14号　住居址

図版4　遺構（住居址）



第15号 住居址



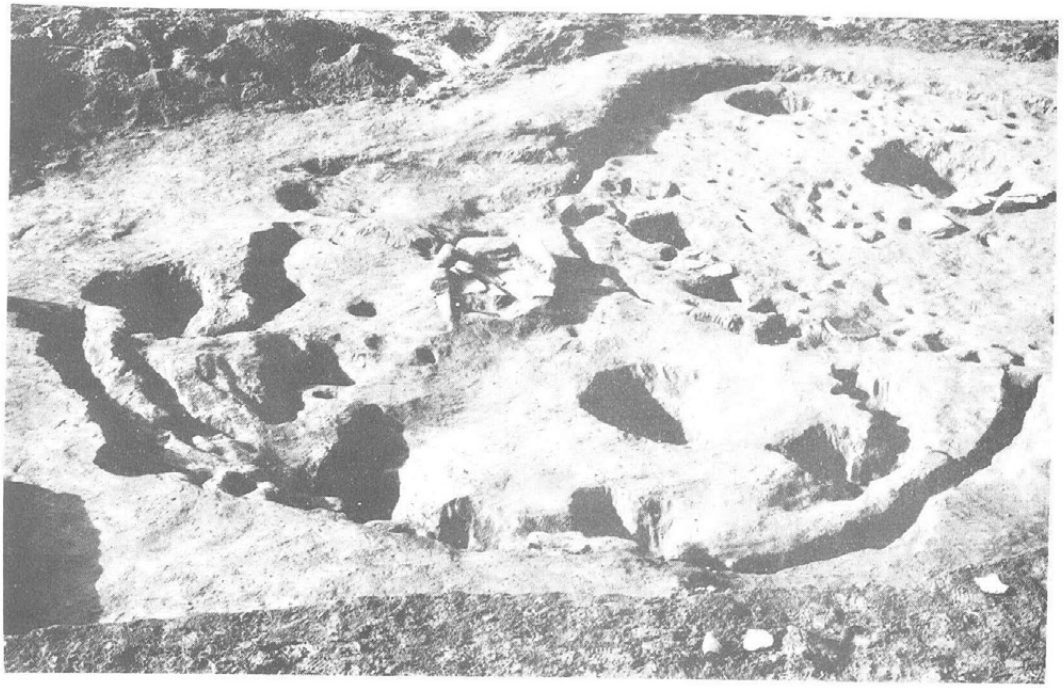
第17号住居址

図版 5　遺構（住居址）

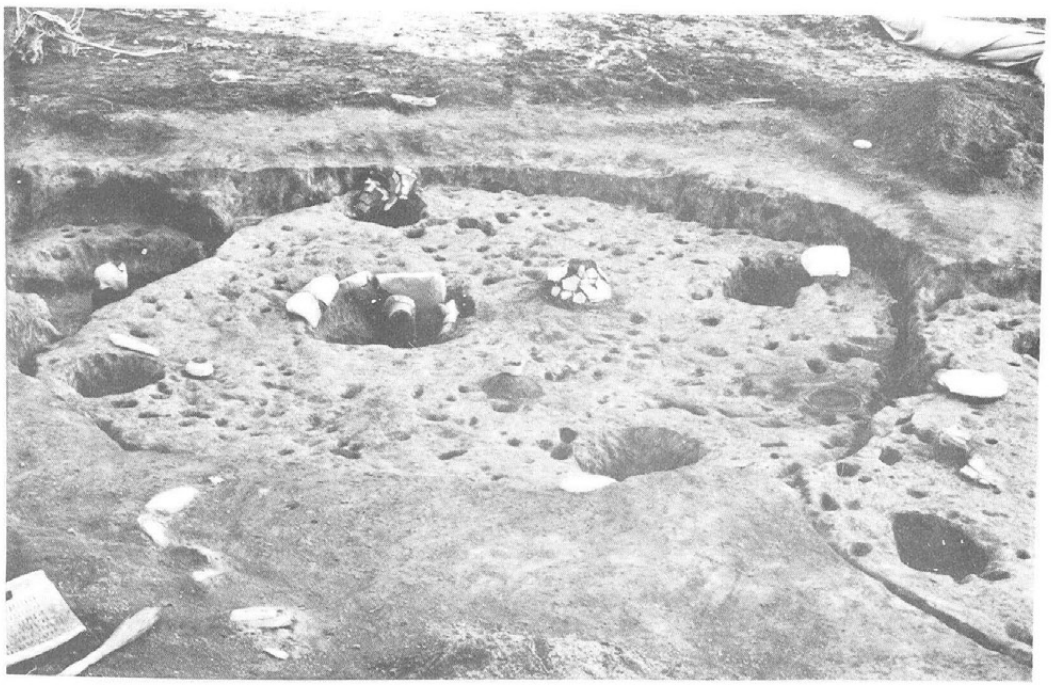
第 7 号住居址

第 3 号住居址

図版 6　遺構（住居址）

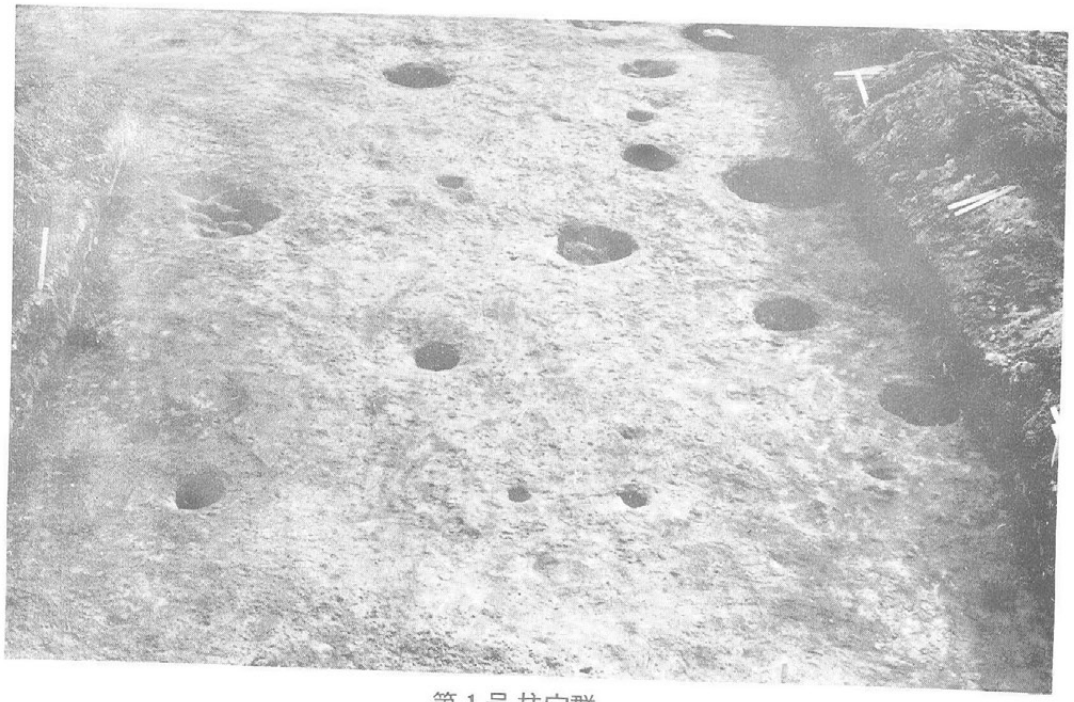


第18号住居址



第19号住居址

図版7　遺構（住居址）

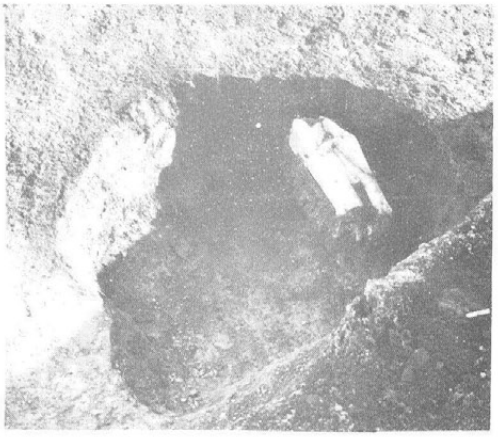


第 1 号 柱穴群

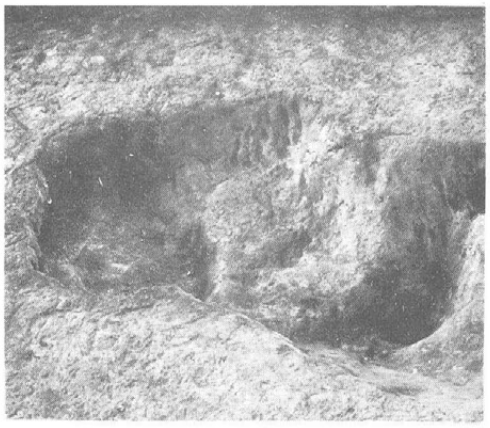
第 2 号 柱穴群

図版 8　遺構（柱穴群）

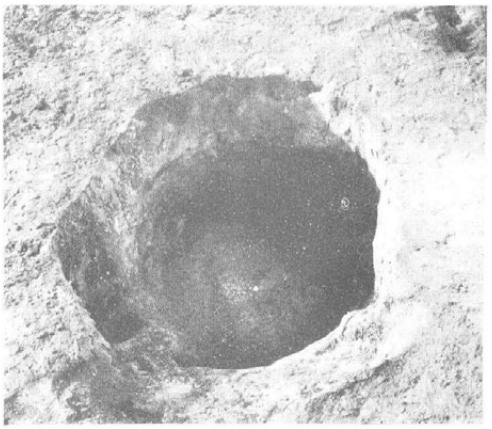
第 8 号 土 拡



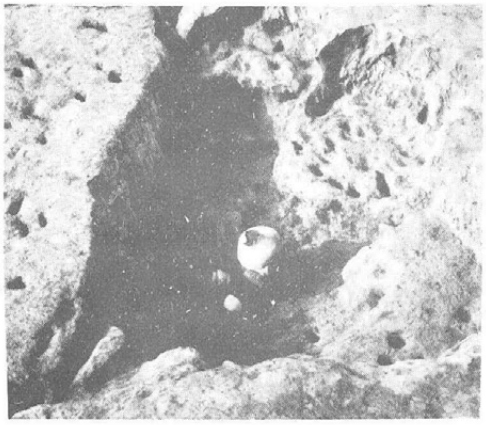
第 9 号 土 拡



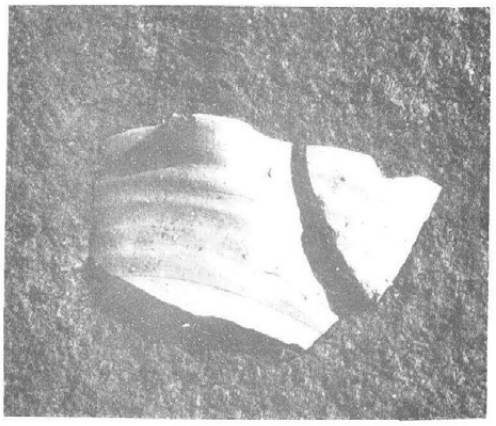
第10号土拡



第11号土拡

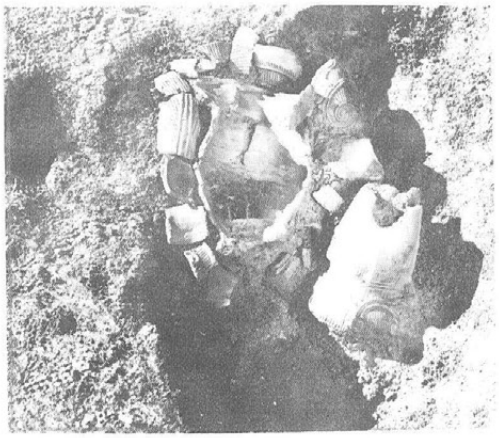


第15号土拡

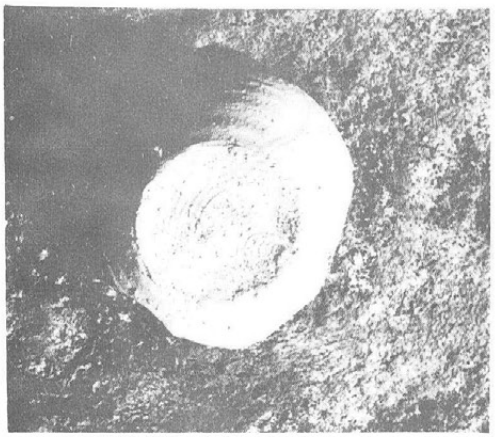


陶器出土状況

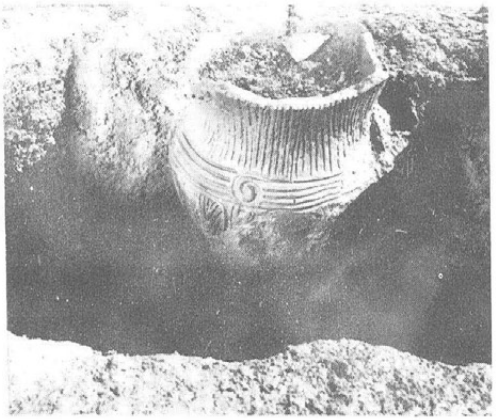
図版 9　遺構（土拡）及び遺物出土状況



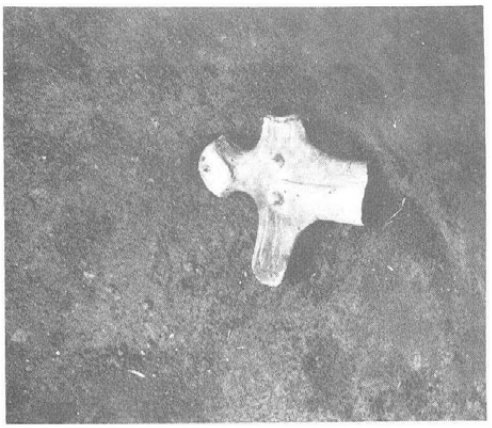
土器出土状況



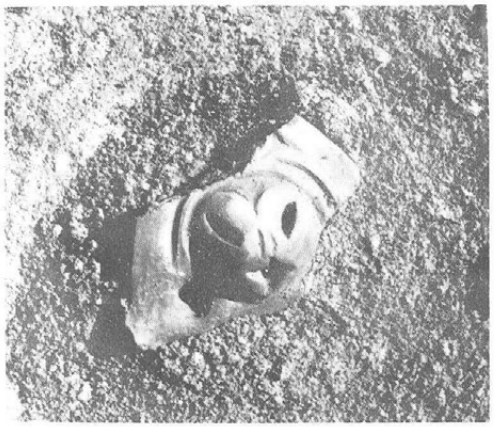
須恵器出土状況



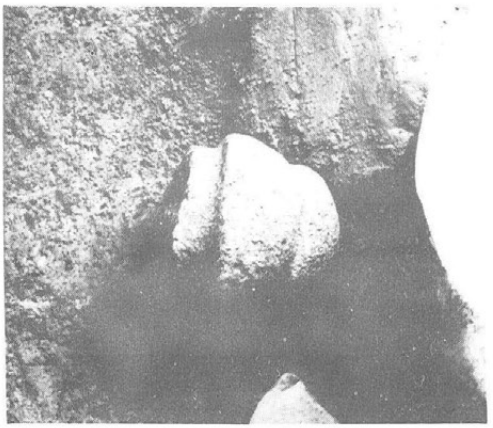
土器出土状況



土偶出土状況

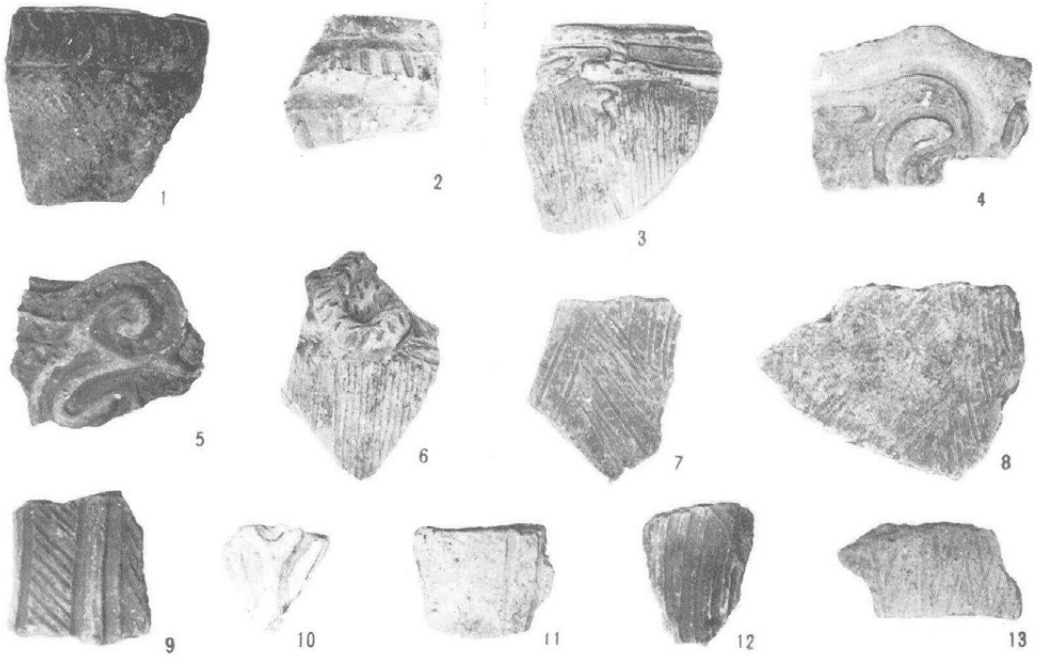


顔面把手出土状況

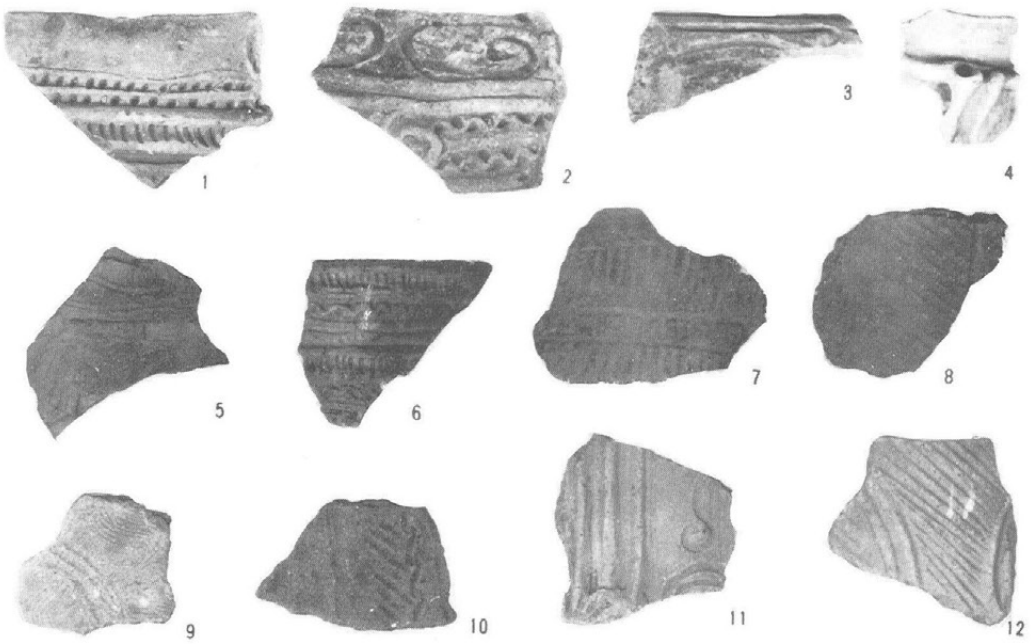


石棒出土状況

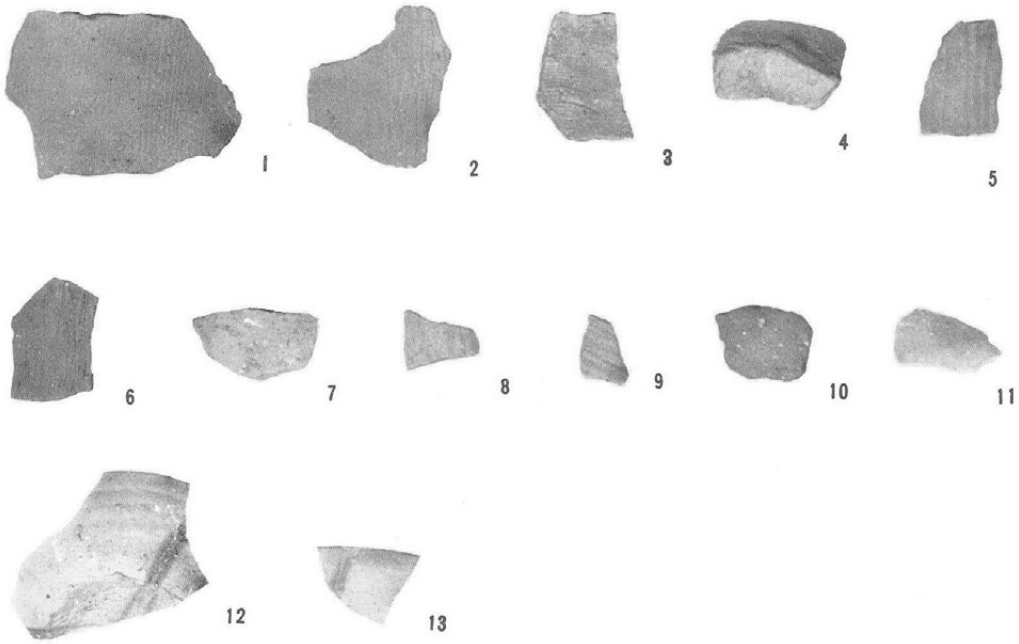
図版10　遺物出土状況



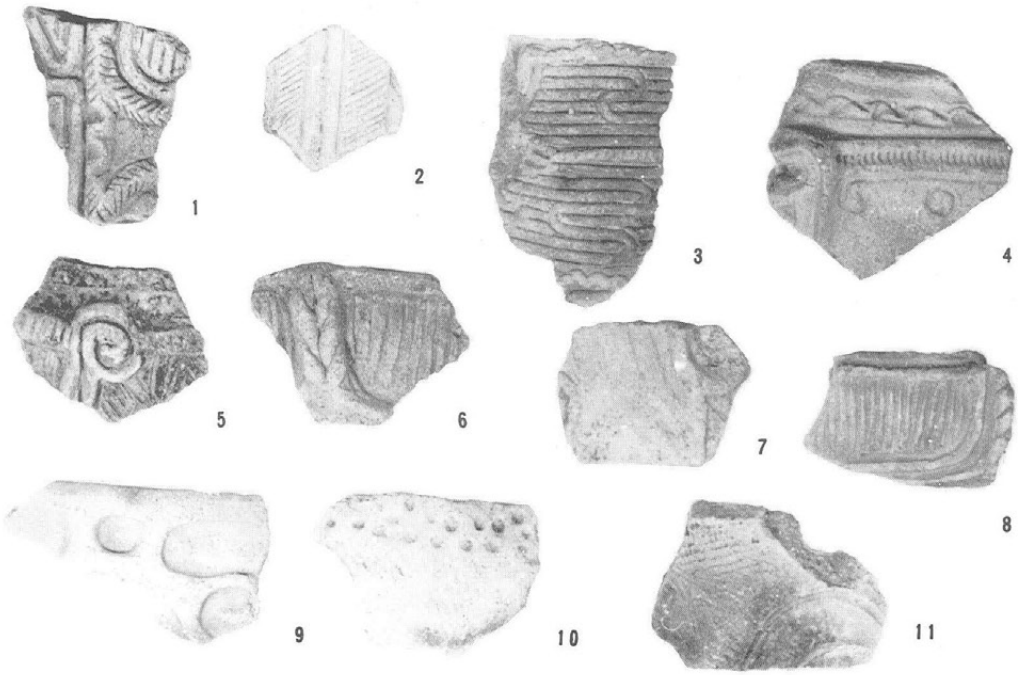
図版11　出土土器



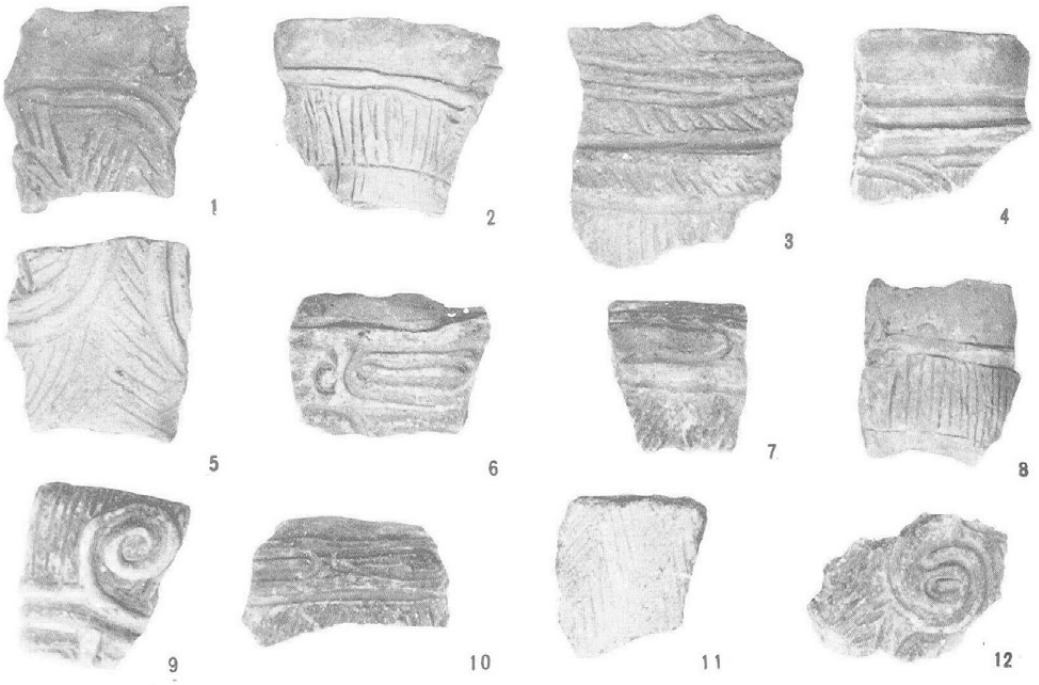
図版12　出土土器



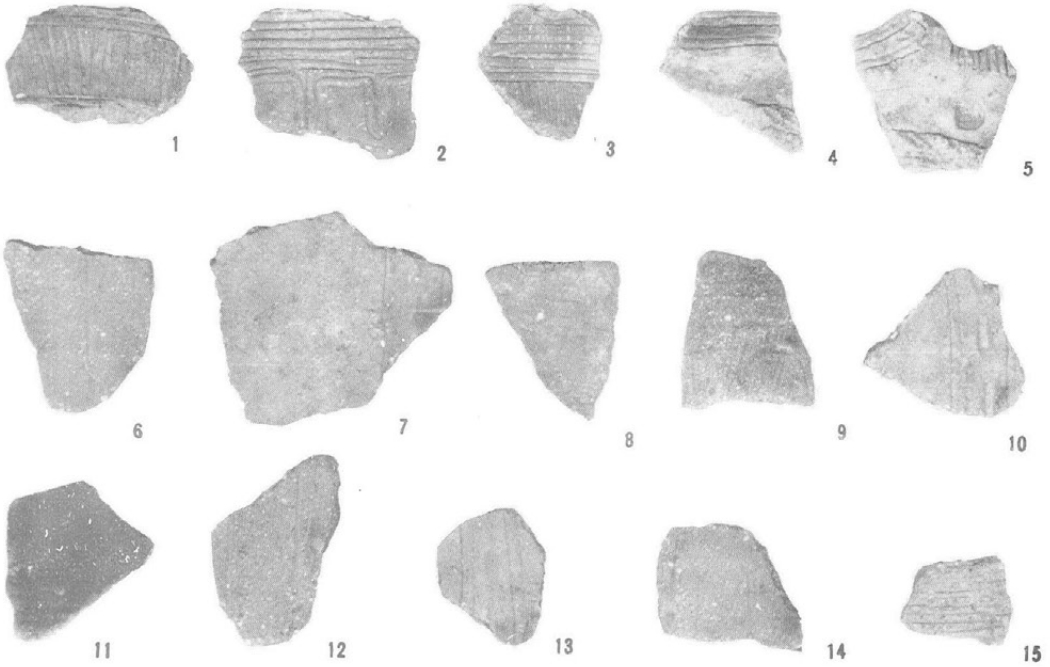
図版13　出土土器



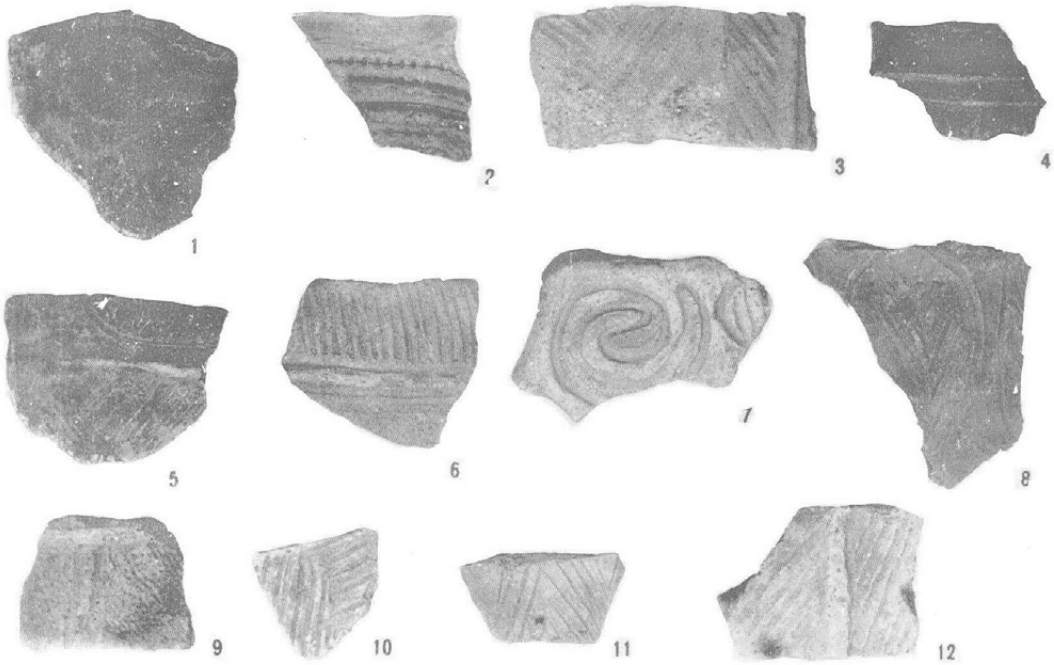
図版14　出土土器



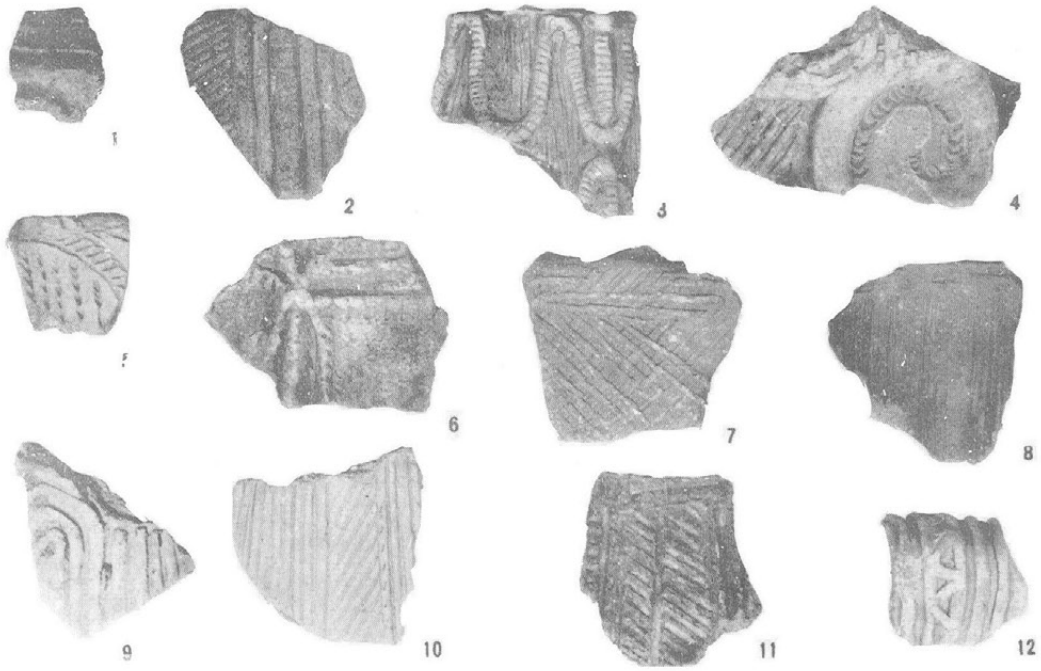
図版15　出土土器



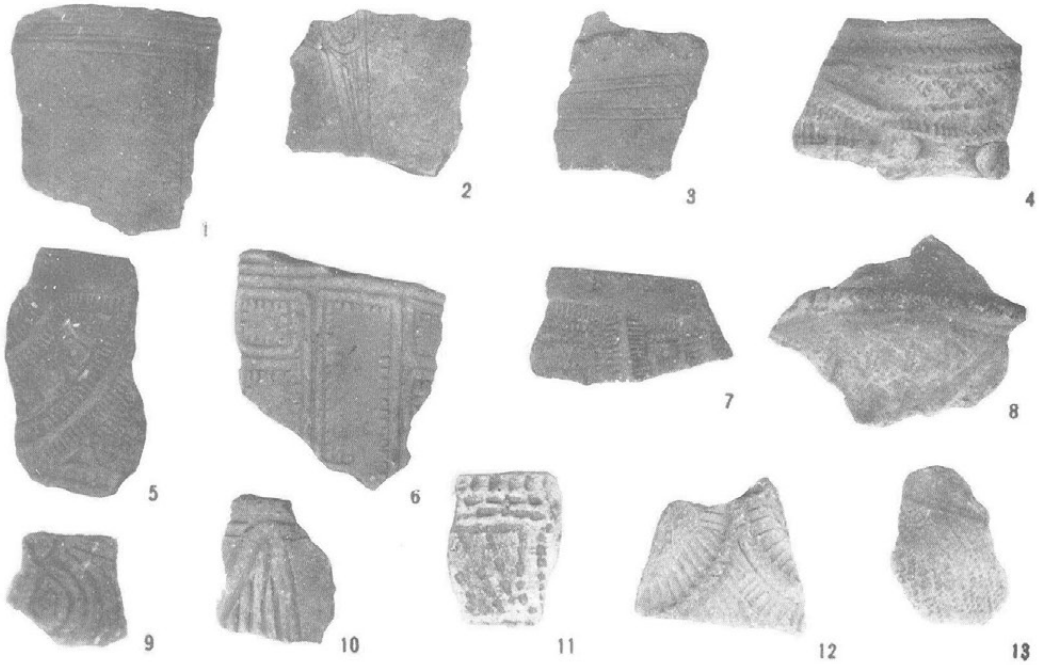
図版16　出土土器



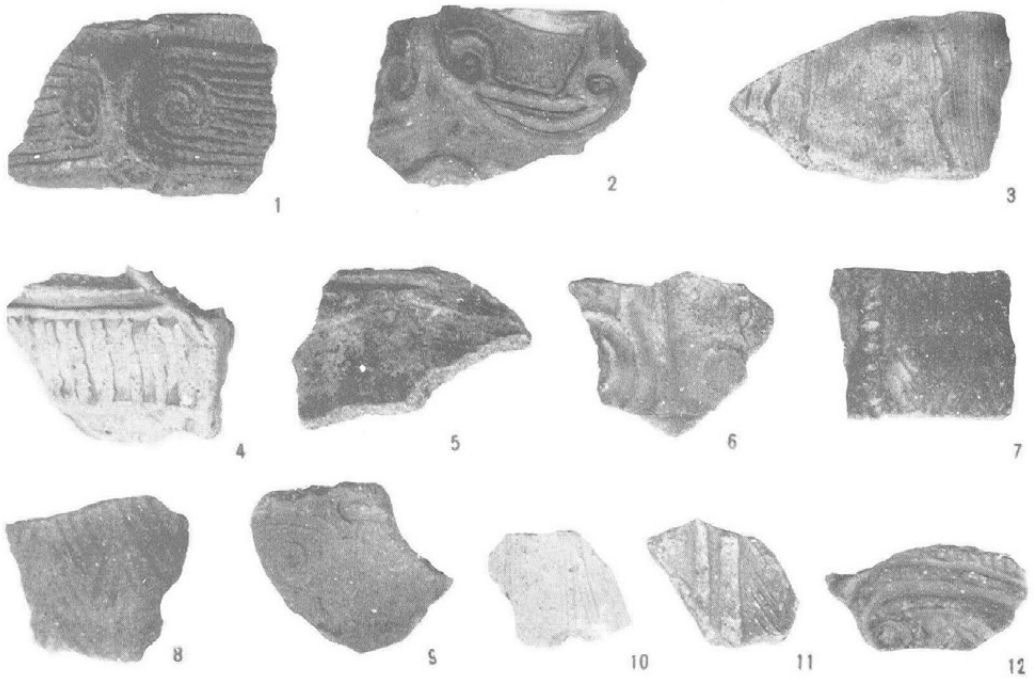
図版17　出土土器



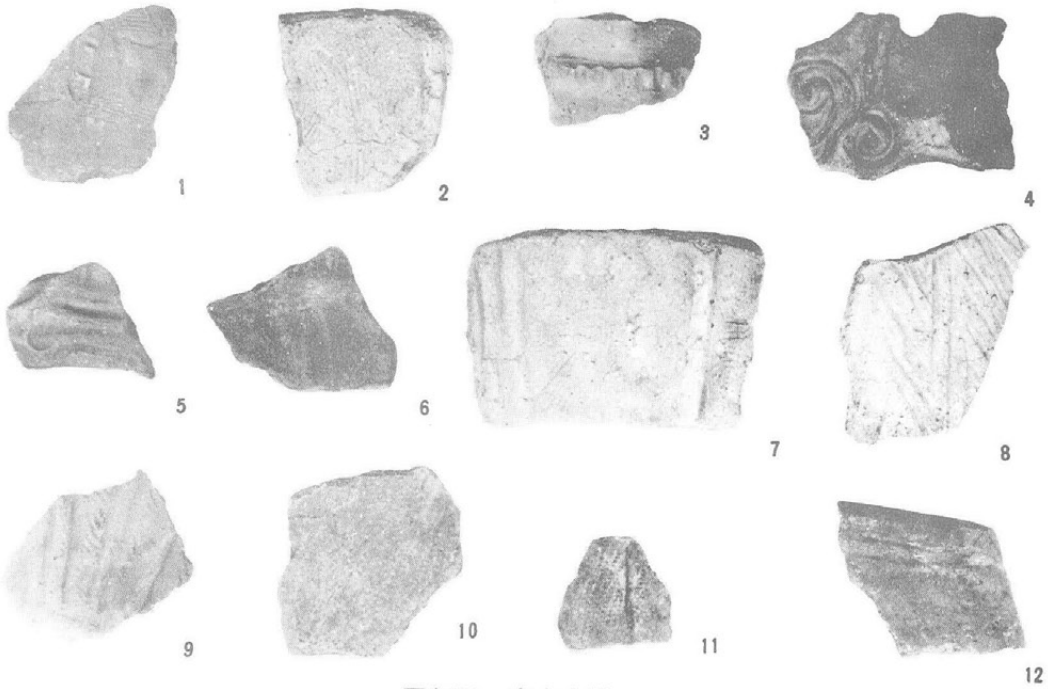
図版18　出土土器



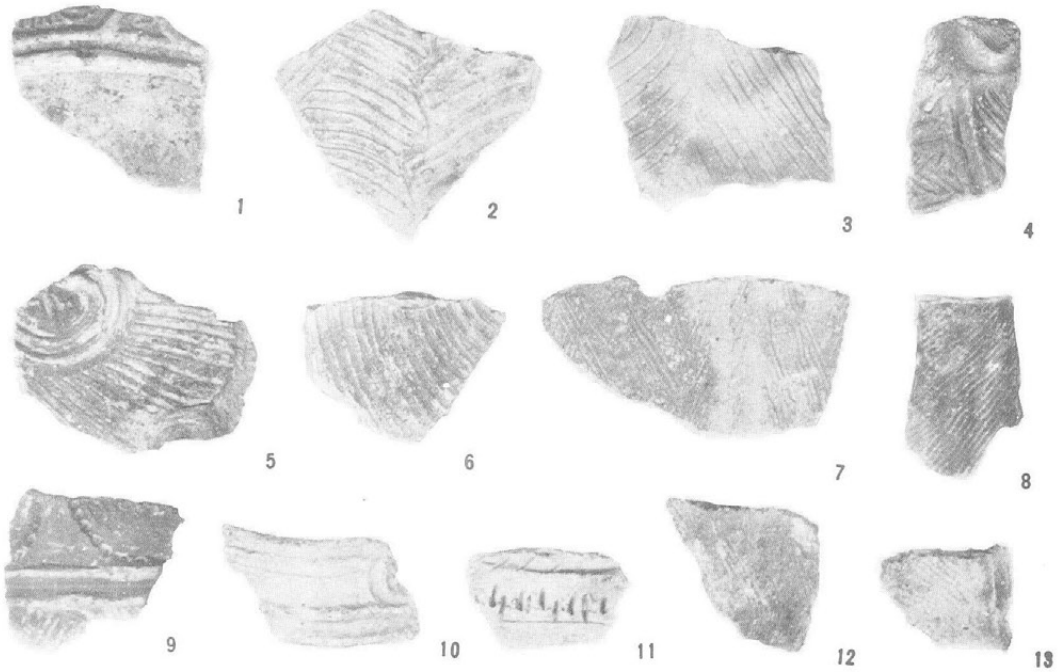
図版19　出土土器



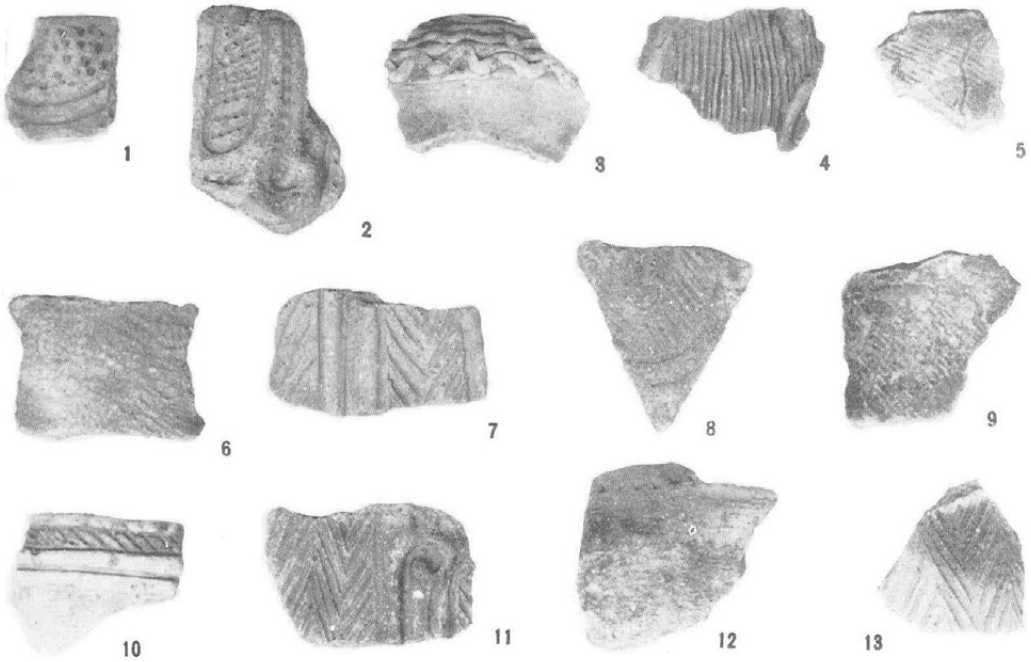
図版20　出土土器



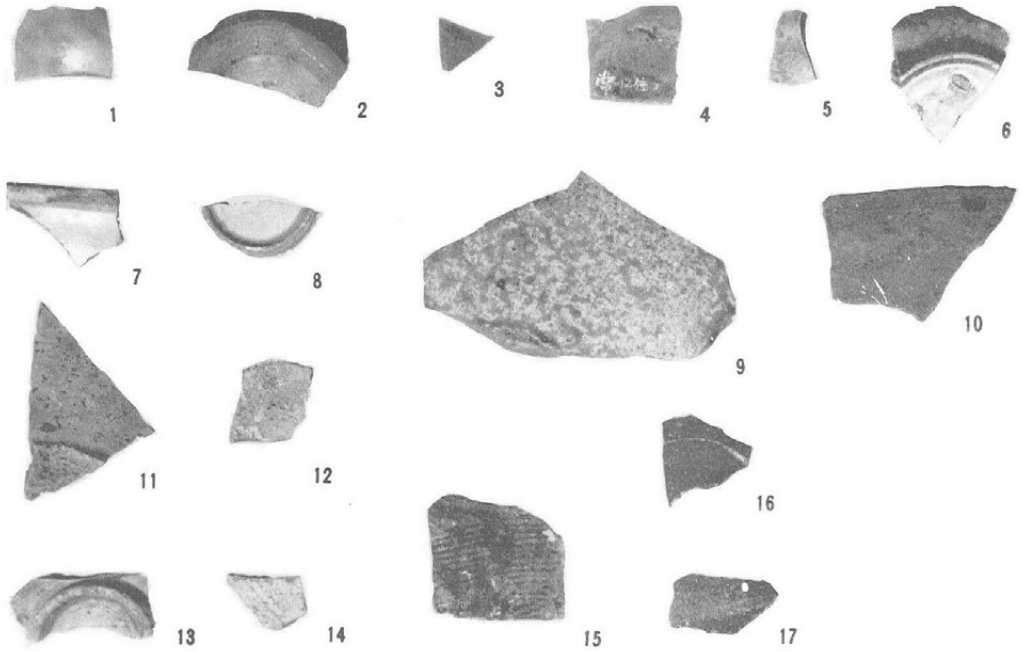
図版21　出土土器



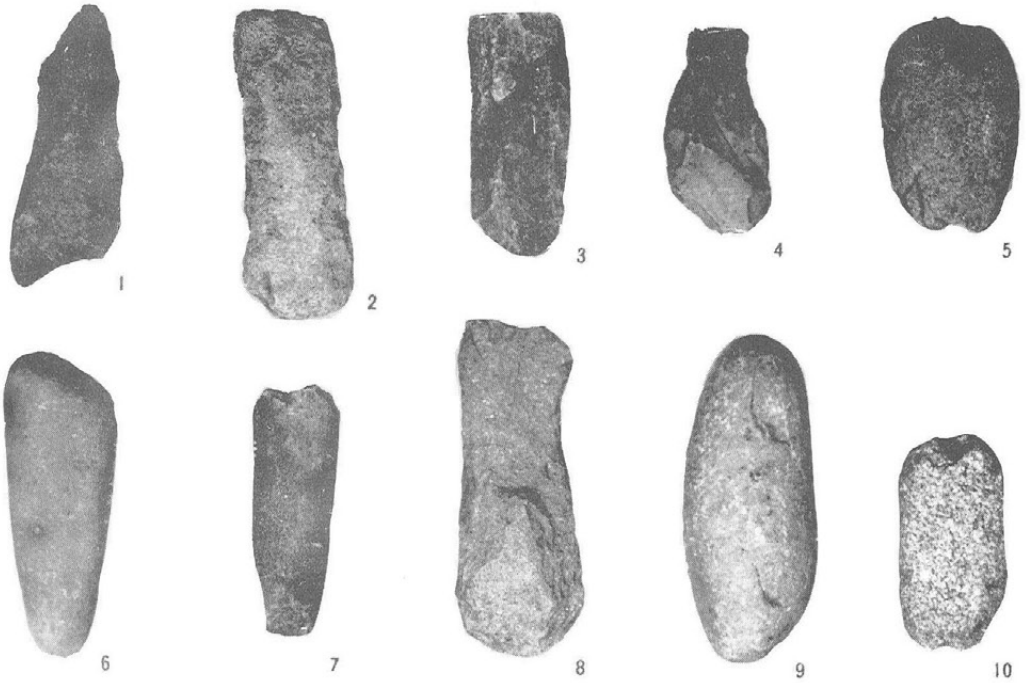
図版22　出土土器



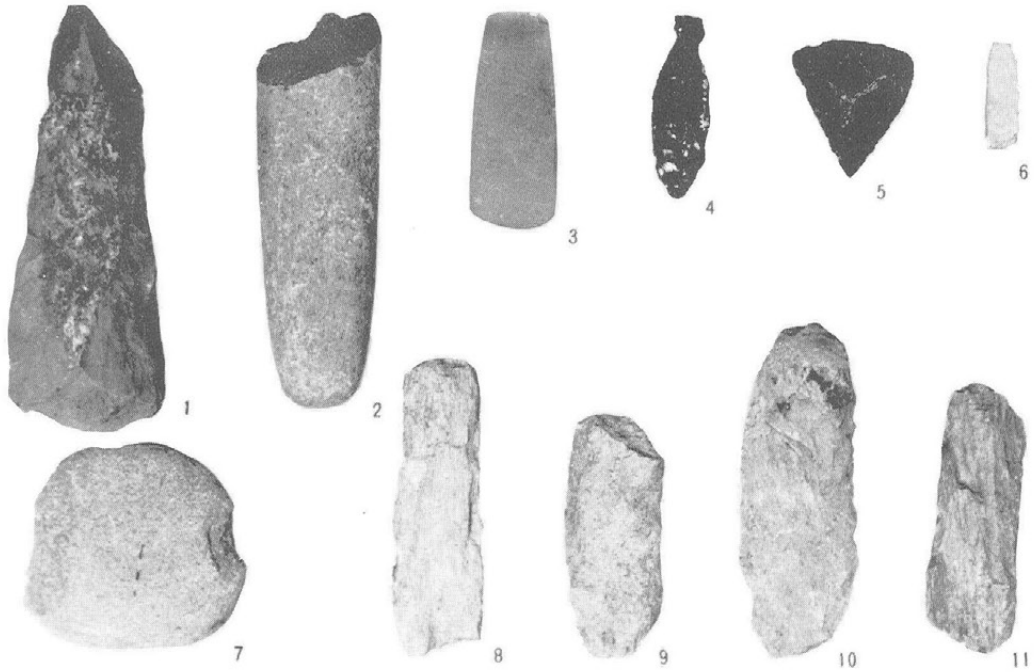
図版23　出土土器



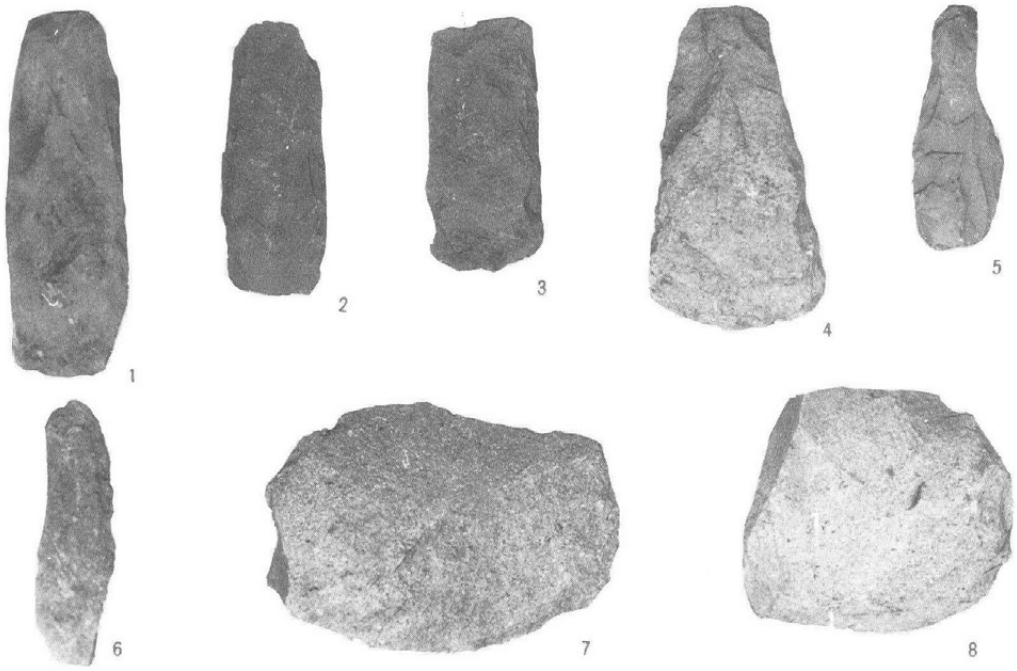
図版24　出土陶磁器



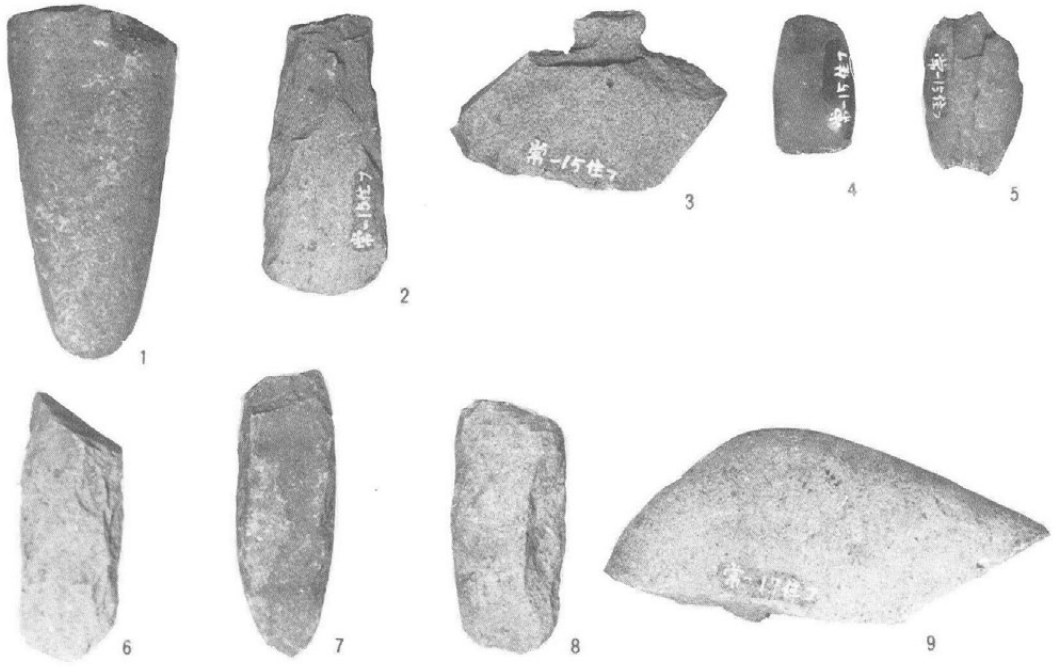
図版25　出土石器



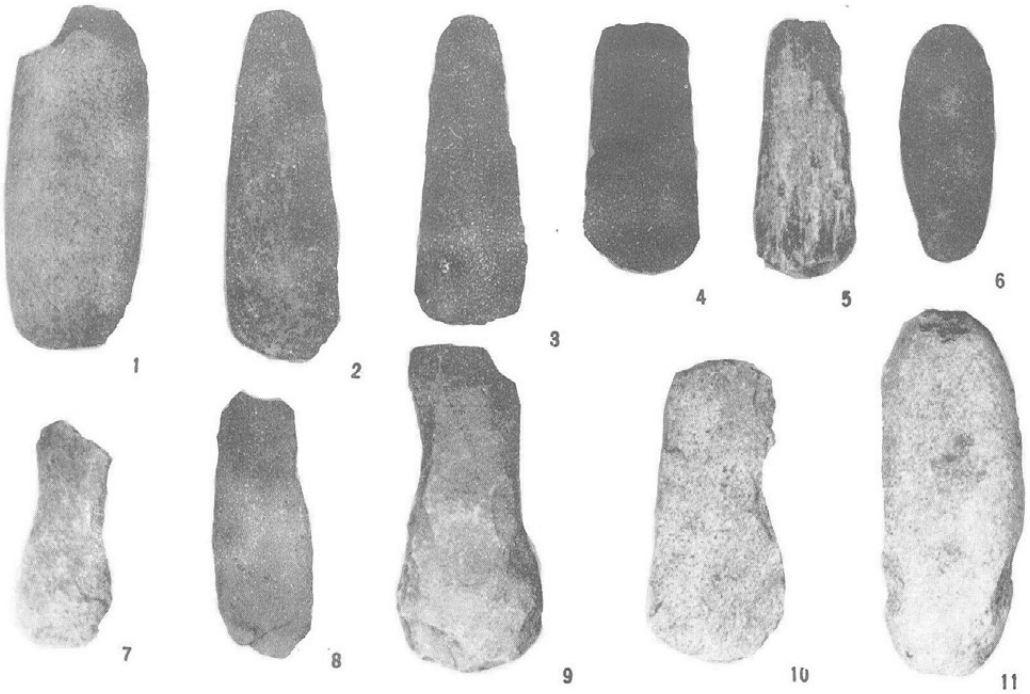
図版26　出土石器



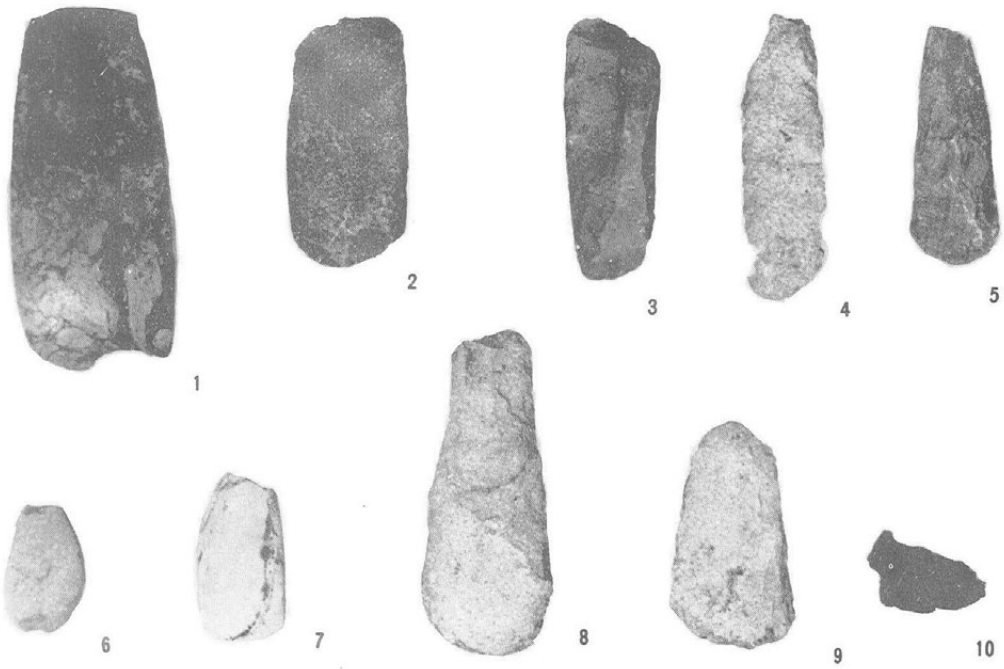
図版27　出土石器



図版28　出土石器



図版29　出土石器



図版30　出土石器

北条遺跡

— —

目　　次

目　　次 …… (3)
挿図目次 …… (4)
図表目次 …… (4)
図版目次 …… (4)

第Ⅰ章　発掘調査の経過 …… (5～7)

第1節　発掘調査の経緯 …… (5)
第2節　調査の組織 …… (5)
第3節　発掘日誌 …… (6～7)

第Ⅱ章　遺　　構　(その1) …… (8～10)

第1節　住居址 …… (8～9)
第2節　土　拡 …… (9)

第Ⅱ章　遺　　構　(その2) …… (11～20)

第1節　住居址 …… (11～20)

第Ⅲ章　遺　　物 …… (21～26)

第1節　土　器 …… (21～24)
第2節　石　器 …… (24～26)

第Ⅳ章　ま と め …… (27)

挿　図　目　次

第１図　遺構配置図　（その１）……（８）
第２図　第１号住居址実測図……（９）
第３図　第２号住居址実測図……（10）
第４図　第３号住居址実測図……（10）
第５図　第１号土拡実測図……（10）
第６図　遺溝配置図　（その２）……（11）
第７図　第１号住居址実測図……（12）
第８図　第２号,４号,５号住居址実測図……（14）
第９図　第３号,４号,11号住居址実測図……（15）
第10図　第７号住居址実測図……（16）
第11図　第８号住居址実測図……（17）
第12図　第９号住居址実測図……（18）
第13図　第10号住居址実測図……（19）
第14図　第12号住居址実測図……（20）

図　表　目　次

第１表　出土土器の形状一覧表(その１)…(21)
第２表　出土土器の形状一覧表(その２)…(21)
第３表　出土土器の形状一覧表(その３)…(22)
第４表　出土土器の形状一覧表(その４)…(22)
第５表　出土土器の形状一覧表(その５)…(22)
第６表　出土土器の形状一覧表(その６)…(23)
第７表　出土土器の形状一覧表(その７)…(23)
第８表　出土土器の形状一覧表(その８)…(23)
第９表　出土土器の形状一覧表（その９）…（24）
第10表　出土土器の形状一覧表（その10）…（24）
第11表　出土石器の形状一覧表（その１）…（24）
第12表　出土石器の形状一覧表（その２）…（25）
第13表　出土石器の形状一覧表（その３）…（25）
第14表　出土石器の形状一覧表（その４）…（25）
第15表　出土石器の形状一覧表（その５）…（26）
第16表　出土石器の形状一覧表（その６）…（26）

図　版　目　次

図版１　遺跡全景……（28）
図版２　遺構（住居址）……（29）
図版３　遺構（住居址及び土拡）……（30）
図版４　出土土器……（31）
図版５　出土石器……（31）
図版６　遺跡全景……（32）
図版７　遺構（住居址）……（33）
図版８　遺構（住居址）……（34）
図版９　遺構（住居址）……（35）
図版10　遺構（住居址）……（36）
図版11　遺物出土状況……（37）
図版12　出土土器……（38）
図版13　出土土器……（38）
図版14　出土土器……（39）
図版15　出土土器……（39）
図版16　出土土器……（40）
図版17　出土土器……（40）
図版18　出土土器……（41）
図版19　出土土器……（41）
図版20　出土土器……（42）
図版21　出土石器……（42）
図版22　出土石器……（43）
図版23　出土石器……（43）
図版24　出土石器……（44）
図版25　出土石器……（44）

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査の経緯

西部開発事業（県営畑地帯総合土地改良事業）は昨年の上島，東方部落にわたって行なわれました。本年度は東方，村岡，城，山本部落にわたり，その面積は60数haに達している。

発掘調査は東方Ａ，村岡北，村岡南，常輪寺下，北条の５遺跡が該当し，東方Ａ遺跡と村岡北遺跡は夏に，村岡南遺跡，常輪寺下遺跡，北条遺跡は秋にそれぞれ実施されました。

西部開発（県営畑地帯総合土地改良事業）第９工区内の遺跡の調査を委託された場合は，受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり，おって南信土地改良事務所より，緊急発掘調査について委託した旨，市教育委員会へ依頼を受けたので，市教育委員会を中心に，北条遺跡発掘調査会を結成し，この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

10月７日，南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節　調査の組織

北条遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	松沢一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	坂井喜夫	伊那市教育委員長
〃	向山雅重	長野県文化財専門委員
〃	木下　衛	上伊那教育会会長
〃	原　益久	南信土地改良事務所長
〃	辰野伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	竹松英夫	伊那市教育委員会社会教育課長
〃	石倉俊彦	〃　課長補佐
〃	中村幸子	〃　主事

発掘調査団

団長	友野良一	日本考古学協会会員
副団長	根津清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調査員	小池政美	〃
〃	辰野伝衛	伊那市文化財審議委員

調　査　員	清水　　満	長野県考古学会会員
〃	福沢幸一	〃
〃	太田　　保	〃
〃	柴登巳夫	〃
〃	長瀬康明	〃
〃	本田秀明	〃
〃	堀口貞幸	〃
〃	深沢健一	〃
〃	丸山弥生	国学院大学学生
〃	赤羽義洋	〃
〃	石岡憲雄	〃
〃	館野　　孝	〃

第3節　発掘日誌

昭和49年12月17日　北条遺跡は段丘を境にして二つに分けた。まず最初に上段より手を着けた。発掘器材を運搬し，テントを設営，グリットの設定，その名称は西より東へA～M，北から南にかけて1～25とする。A9，C11，F19，G11，にそれぞれ黒土の落ち込みを見い出した。前よりそれぞれ第1号住居址，第2号住居址，第3号住居址，第1号土拡と命名する。

昭和49年12月18日　昨日，検出された遺構の掘り下げ，住居址は土師器，須恵器，灰釉陶器片が出土し，奈良時代から平安時代に至る住居址と判明した。遺物の量は割合に少なかった。

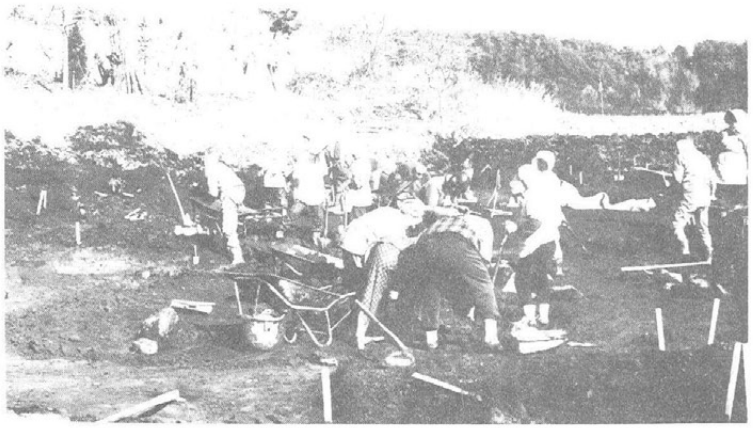
昭和49年12月19日　第1号住居址，第2号住居址，第3号住居址，第1号土拡の完掘，第1号住居址は東側に，第2号住居址は西側に，第3号住居址も同様，西側にカマドを持っていた。

昭和49年12月20日

各住居址並びに土拡の清掃をすませ，写真撮影を終了する。午後下の段へ移動し，グリットを設定する。

昭和49年12月21日

E11に落ち込みがみられ，拡張していくといくつにも重さなっているようだった。それで南側より第2号住居址，第3号住居址，第



発　掘　風　景

4 号住居址，第 5 号住居址，第 6 号住居址，南西の一隅に落ち込みがあり，第 1 号住居址とする。

昭和49年12月22日　第 2 号住居址，第 3 号住居址，第 4 号住居址，第 5 号住居址，第 6 号住居址第 1 号住居址の完掘をする。第 1 号住居址の東側に落ち込みがあり，落ち込みは 2 つみられ，前者を第 7 号住居址，後者を第 8 号住居址とする。

昭和49年12月23日　第 7 号住居址，第 8 号住居址の完掘を終える。第 7 号住居址の南側に落ち込みがみられ，これを第 9 号住居址とする。第 9 号住居址の東側に落ち込みがあり，これを第10号住居址とする。

昭和49年12月24日　第 3 号住居址の東側を精査していくと，切り合い関係で，住居址が検出されこれを第11号住居址とした。また，第10号住居址の南側に黒色土の方形の落ち込みがみられ，第12号住居址とする。第 1 号住居址，第 2 号住居址，第 3 号住居址，第 4 号住居址，第 5 号住居址，第 6 号住居址，第 7 号住居址，第11号住居址の写真撮影をする。

昭和49年12月25日　第 8 号住居址，第 9 号住居址，第10号住居址，第12号住居址の掘り下げを実施し，ほぼ完掘をすませる。第 8 号住居址，第 9 号住居址，第10号住居址は縄文中期加曽利Ｅ式，第12号住居址は平安時代と判明した。

昭和49年12月26日　第 8 号住居址，第 9 号住居址，第10号住居址，第11号住居址，第12号住居址の完掘と写真撮影を終える。全測図の作製をする。

昭和49年12月27日　第 1 号住居址，第 2 号住居址，第 3 号住居址の実測をする。

昭和49年12月28日　第 4 号住居址，第 5 号住居址，第 6 号住居址の実測をする。

昭和49年12月29日　第 7 号住居址，第 8 号住居址，第 9 号住居址の実測をする。

昭和49年12月30日　第10号住居址，第11号住居址，第12号住居址の実測をする。

昭和49年12月31日　発掘器材のあとかたづけをする。　（小池政美）

第Ⅱ章　遺　構（その１）

節１節　住　居　址

第１号住居址　（第２図，図版２）

本址は発掘地区の最西端に発見され，砂礫混りの黄褐色土層を掘り込んだ隅丸方形プランを呈する竪穴住居址であり，その規模は南北４ｍ55cm，東西４ｍ10cm程を測定できる。

壁高は南，東は低く20数cm，北は高く40数cmを計る。状態は全般的に内傾気味で，壁面のところどころに細礫が露出していた。床面は黄褐色土層のわずかな叩きで，大般，水平であり礫が異々としていた。

カマドは東壁の中央部に位置し，石組粘土カマドと思われるが，現在は粘土が剥落してしまった。焚口と思われる位置に焼土が多量に充満していた。石材は花崗岩が主であった。

遺物はカマド内より土師器の甕がつぶれた状態で出土した。

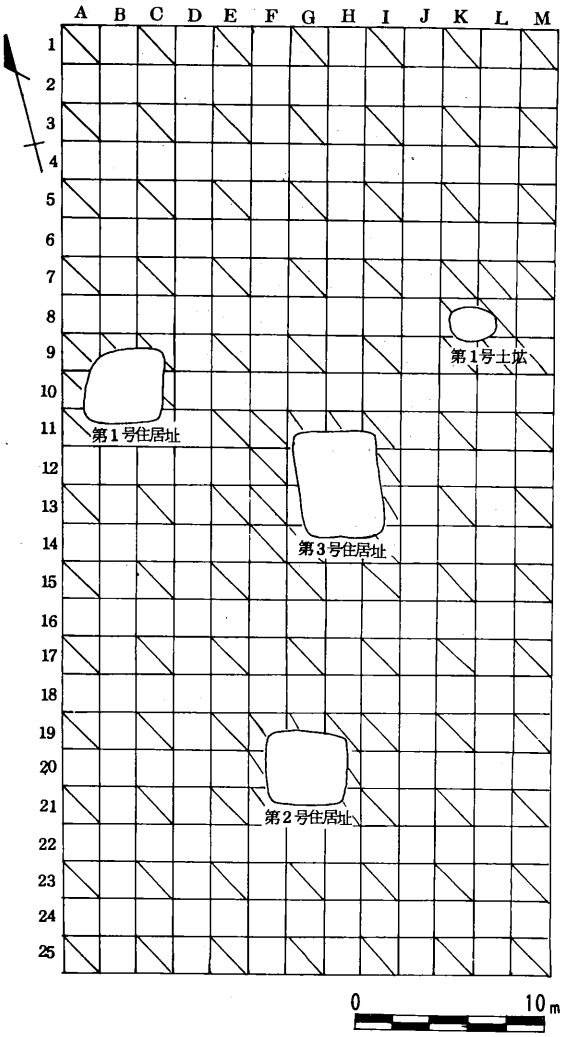
第２号住居址（第３図，図版２）

本址は発掘された遺構の最南部に発見された。南北３ｍ75cm，東西４ｍ10cm程の隅丸方形プランの竪穴住居址で，ローム層に掘り込んである。壁は20数cmから30cmの範囲に含まれ，幾分，内傾気味に削ってある

床面はローム層の叩きであり，その硬さはカマド周辺では良好，他は軟弱であった

カマドは西壁中央部に位置し，石芯粘土カマドで，中央部の煙道は若干凹ませ，双方に花崗岩の自然石を規則正しく配列し，くずれないように両面にわたって粘土をはりつけてあった。花崗岩はよほど火をうけたとみえてボロボロの状態であった。床面の北側には周溝が回っていた。

遺物は土師器，須恵器，灰釉陶器片が出土した。



第１図　遺構配置図（その１）

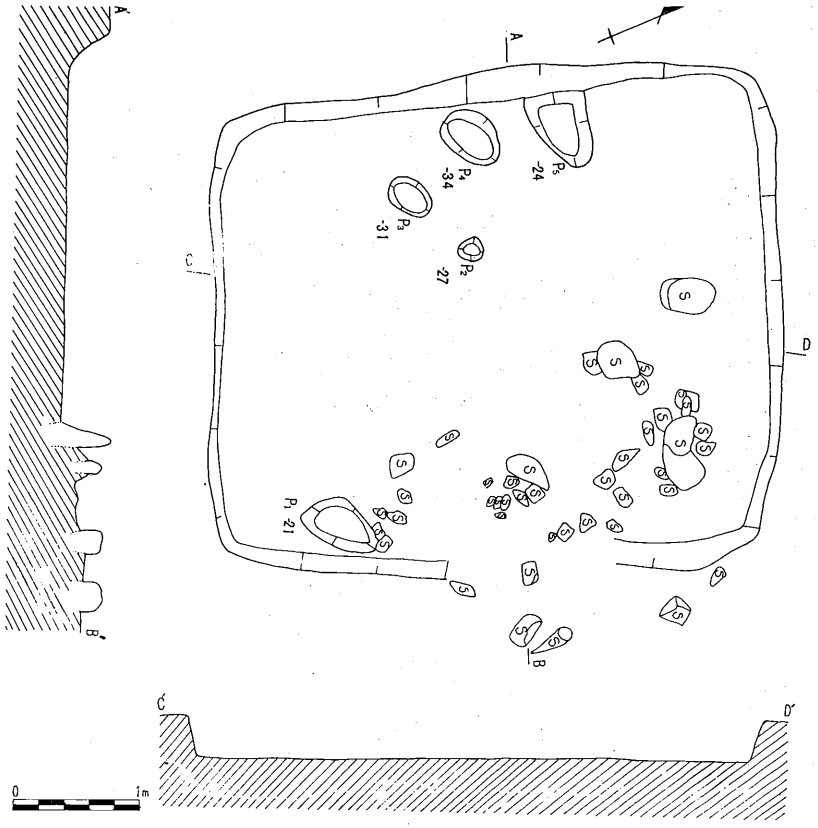
第３号住居址（第４図，図版３）

本址は発見された遺構の中で中央部に位置し，ローム層を基盤とする南北５ｍ60㎝，東西４ｍ75㎝程の隅丸方形の竪穴住居址である。壁は内弯気味に掘り込まれ，北壁，南壁には礫が露出している。床面はローム層の叩きで，多少の凹凸がある。

カマドは西壁中央部と思われる場所に位置し，石組粘土カマドで，両袖の外側に粘土を貼り付けてあった。柱穴は住居址内に主柱穴を，壁に沿ってぐるりと一周するかのように補助穴があけてあった。

遺物は土師器須恵器，灰釉陶器片が出土した遺物の出土状態においては，特にカマドの南側住居址の中央よりやや南側に，それぞれ１個体分の杯が上向きに，床面に密着して出土した。

（小池政美）



第２図　第１号住居址実測図

第２節　土　　拡

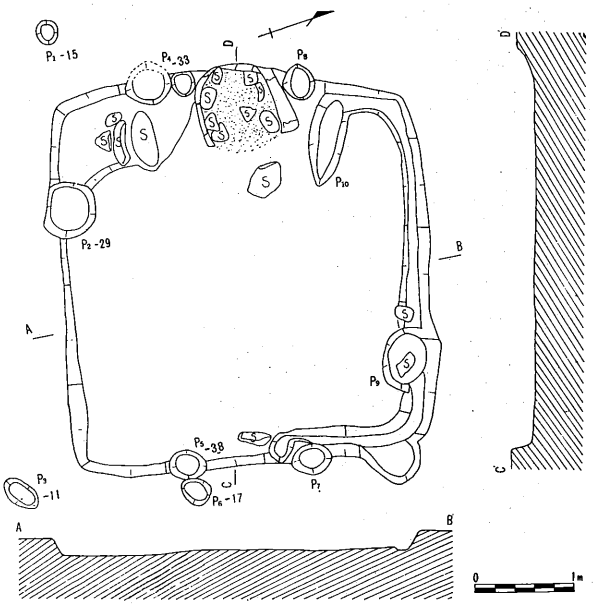
第１号土拡（第５図，図版３）

本土拡は検出された遺構のなかで最も東側に位置している。第３層，表土層面より40㎝位下った砂礫混りのローム層を掘り込み，南北２ｍ60㎝，東西２ｍ15㎝程で長円形状プランを呈している。壁の状態は急傾斜で内傾しており，たたき状になっていないので，崩落しやすい状態であった。

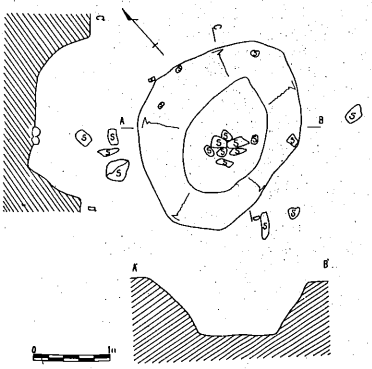
床面はローム層で，たたき状のものは存在しなかった。床面に密着している石はホルンヘルスや花崗岩の自然石であり，なかには焼けたのも存在していた。

遺物は覆土内より木炭や焼土が検出された。時代決定となりえるのは縄文中期土器片が３片くらい出土した。

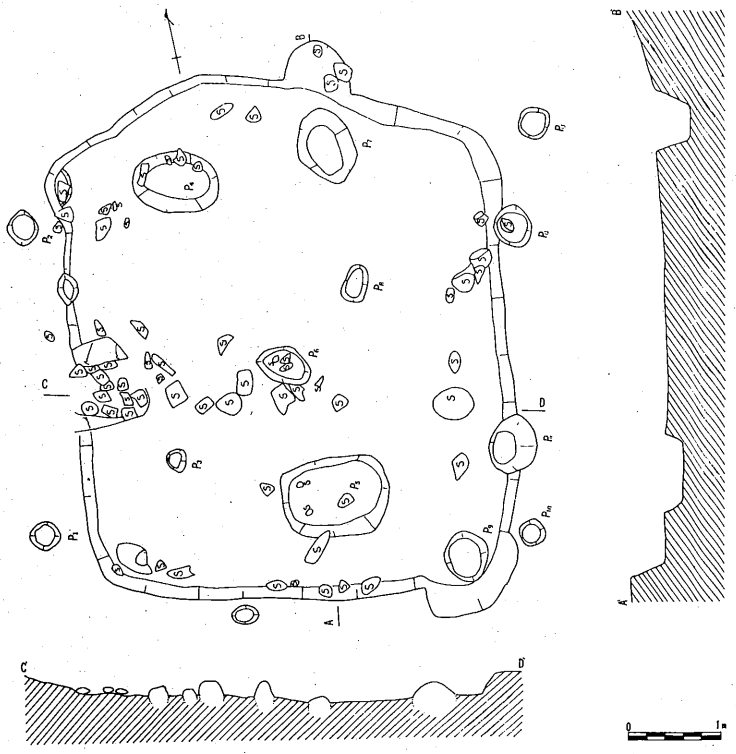
（小池政美）



第 3 図　第 2 号住居址実測図



第 5 図　第 1 号土拡実測図



第 4 図　第 3 号住居址実測図

第Ⅱ章　遺　　構（その２）

第１節　住　居　址

第１号住居址（第７図，図版７）

発掘した遺構中，最西部にあって南北５ｍ15cm，東西５ｍ40cm程の隅丸方形の竪穴住居址で，ローム層を掘り込んでいる。壁高は５～25cmあって，やや内傾気味であり，特に東壁は極端になだらかであった。

カマドは北壁の中央部に位置し，石心粘土カマドであるが，後世の破壊によるものとみえて，大部分は崩壊してしまい，東西に走る礫群がカマドの面影を残している。この附近はカマドの存在性を実証するかの如くに，粘土と焼土の存在性が顕著であった。

遺物は土師器，須恵器の出土が顕著であった。

第２号住居址（第８図，図版７）

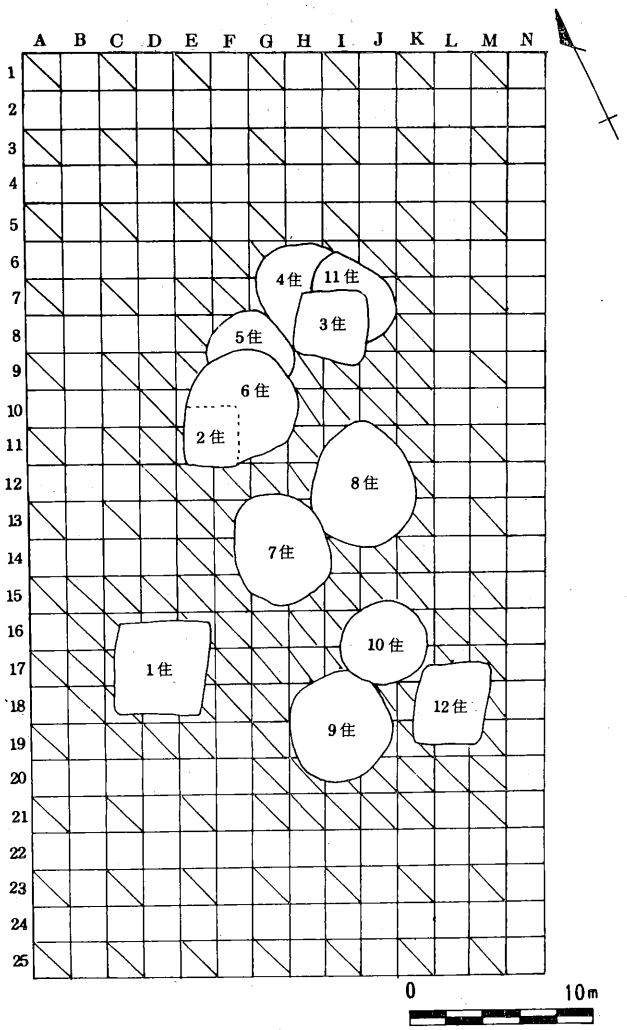
発掘地区の西端部の住居址群で第６号住居址に半分位重なっている。南北２ｍ90cm，東西３ｍ50cm程の隅丸方形の竪穴住居址である

壁は切り合い関係で北壁，東壁の存在性は不明であった。状態はやや内傾気味であった。

床面はローム層の叩きで，大般水平となっている。床面に密着している自然石は花崗岩やホルンヘルスであった。

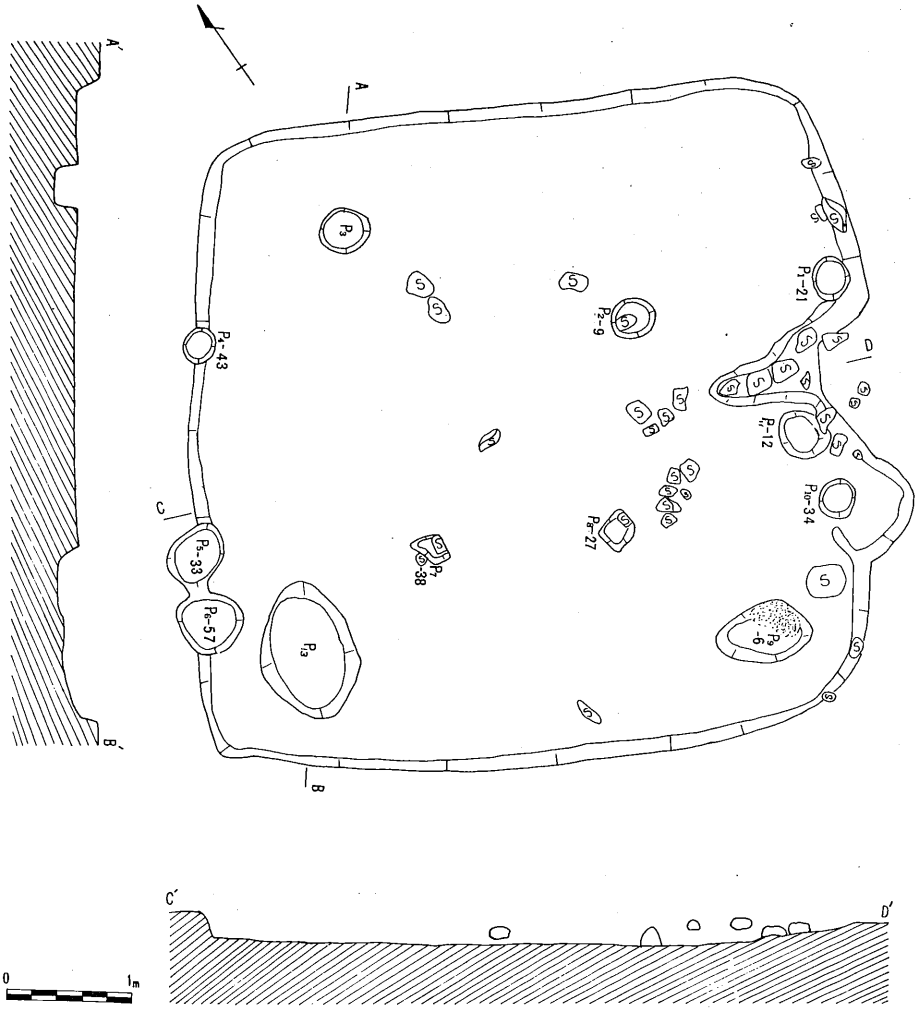
柱穴は４本だと思われる。ただ北東のは存在しなかった。残りの３本はP8，P17，P19，であろう。

カマドは西壁に近いところに多量の焼土群がみられた。これがカマドの破壊されたなれの姿と思わ



第６図　遺構配置図（その２）

れる。遺物は土師器と須恵器が出土した。最後に切り合い関係であるが，本址が第６号住居址を切っている形である。



第７図　第１号住居址実測図

第３号住居址（第９図，図版８）

西側を第５号住居址，北西で第４号住居址，北側で第11号住居址を切るような状態で検出された南北３ｍ70cm，東西３ｍ75cm程の隅丸方形プランの竪穴住居址である。壁の状態は内傾気味である

床面は黄褐色土層の貼床で，極めて良好である。主柱穴は各コーナーに４本あり，北西のと，南東のは柱穴と貯蔵穴と思ぼしきものとを併用したものであろう。カマドは西壁の中央よりやや南寄りに位置した石粗粘土カマドであろう。構築状態は外側に石を置き，石と石の間に粘土を貼り付けてこわされないようにしてあった。°火力が強かったか，または長期間使用したとみえて，がんらい黄褐色であるべき粘土が赤く変色していた。焼土はカマド内部はもちろんのこと，周辺にも多量に

堆積していた。遺物は土師器，須恵器であった。

第４号住居址（第９図，図版８）

東側の南半分は第３号住居址，北半分は第11号住居址に切られる位置に発見された。本址の規模は東側は切られてしまって大きさは不明であるが，推定で考えてみよう。南北４ｍ40cm，東西４ｍ前後の長円形プランを呈している。壁高は20cm前後であって，状態はやや内傾気味で，たたき状のものは存在しなかった。床面はローム層自体に構築され，極めて軟弱であった。

柱穴は当初では４本あったと思われるが，南側のは第３号住居址によって破壊されてしまったので，現在は３本となってしまった。炉は住居址の中央部と思われる位置にあり，方形の石囲炉で，石材はホルンヘルスであった。炉の近くに勝坂期の新しい土器がつぶれた状態で出土した。

第５号住居址（第８図，図版７）

本址は南側は第６号住居址に，南東は第３号住居址に切られた状態で発見された。ローム層を掘り込んで，構築当時は推定ではあるが，南北５ｍ，東西５ｍ50cm程あったと思われ，そのプランは円形であろう。周溝が西から北にかけて回わっている。壁の掘り込みはやや内傾気味であり，また多小の凹凸も認められた。

床面はローム層中に設けられ，軟弱気味であった。主柱穴は５本あったと思われる。それはＰ1，P2，P3，P5，P7であろう。Ｐ5，P7は第６号住居址と併用されている場合が多いと思われる。

炉は中央より北よりにあって，石囲炉である。炉縁石は南側と南西の一部は抜きとられたかっこうとなっていた。内部は焼土の堆積は少なく，炉石の内面に黒々と炭化物の附着がみられた。

遺物は加曽利Ｅ式の土器片が出土した。

第６号住居址（第８図，図版７）

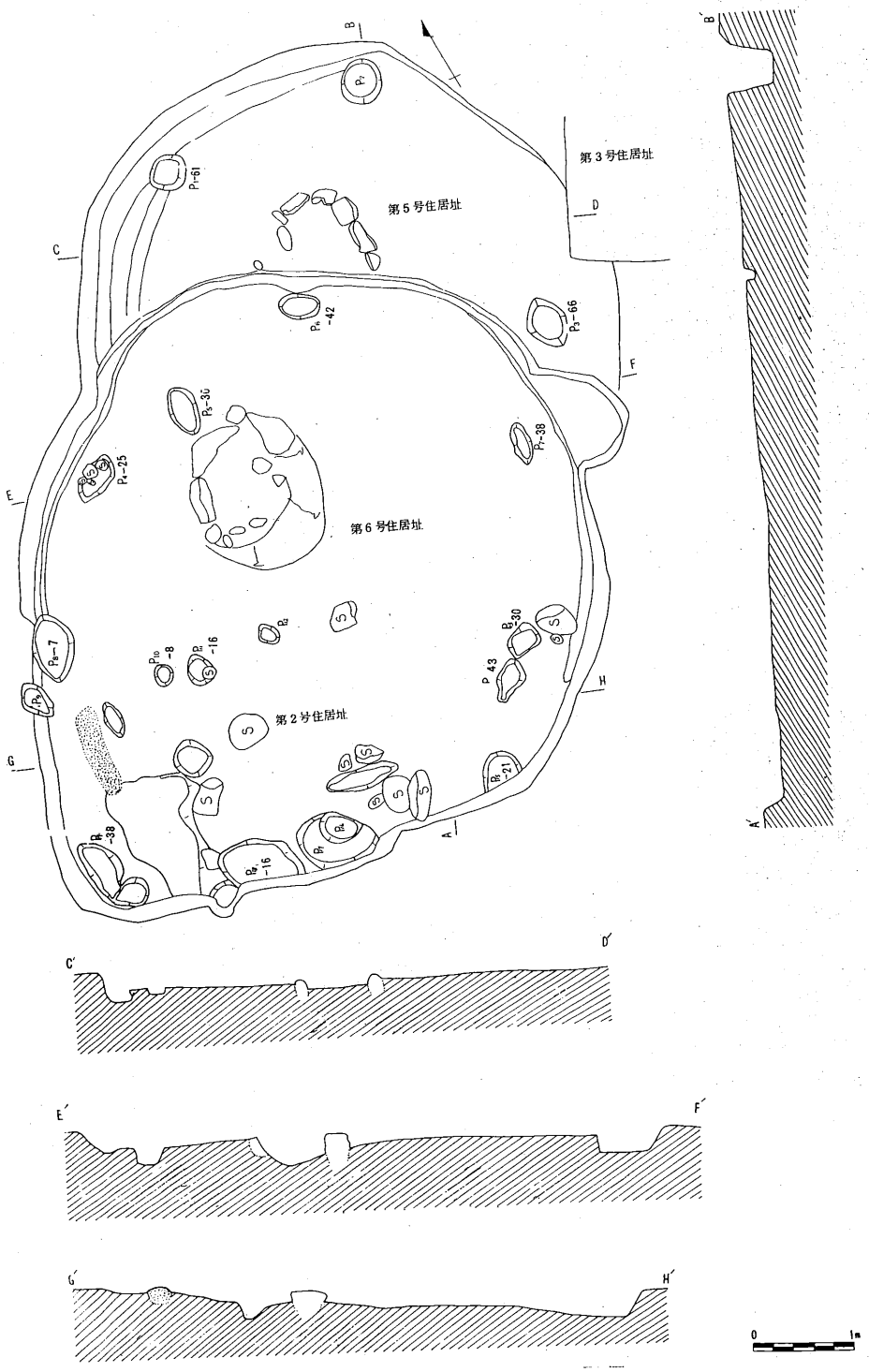
本址は第５号住居址の南側に同住居址を切るような姿で発見された竪穴住居址であって，南北５ｍ50cm，東西５ｍ80cmの円形プランを呈している。壁高は南側は第２号住居址によって切られてしまって存在せず，北側は第５号住居址を周溝によって切っている。西は30cm，北は20cm，東は30cmでやや内傾気味であって多少の凹凸がみられた。

床面はローム　の軟弱な叩きで，細かな凹凸が認められた。炉は中央より北寄りに位置し，方形の石囲炉であり，炉縁石はホルンヘルス，花崗岩であった。南側の石は抜き取られた跡が明瞭であった。断面はすりばち状で，底部には焼土が赤々と堆積していた。柱穴は６本と思われた。P5，P7は第５号住居址と併用していると考えられる。

遺物は加曽利Ｅ式の土器片が出土した。

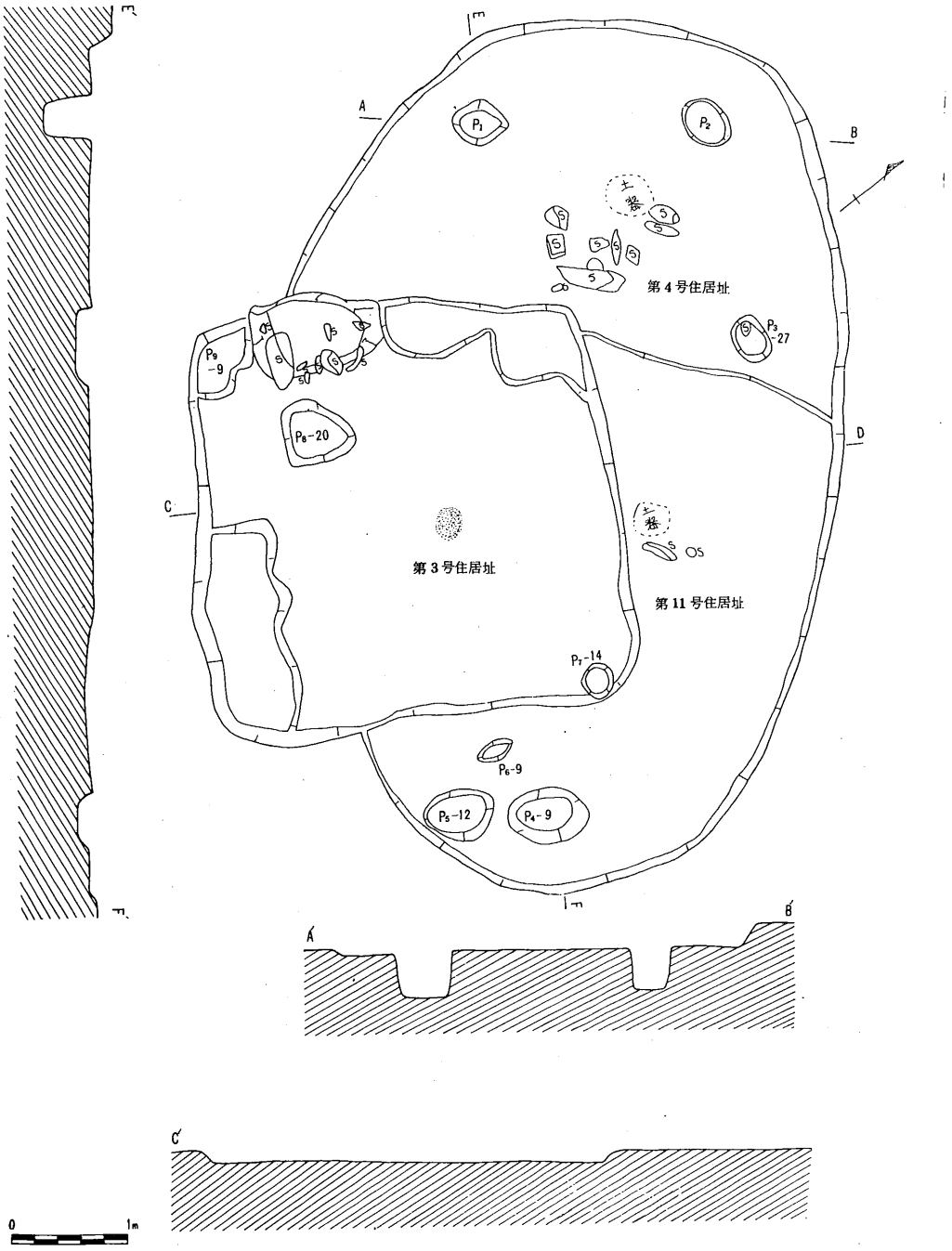
第７号住居址（第10図　図版８）

本址は東側で第８号住居址と近接して発見された。南北５ｍ75cm，東西５ｍ55cmの円形プランの竪穴住居址で，壁面直下に幅10～30cm，深さは15～20cm位の周溝が全周していた。



第8図　第2号，5号，6号住居址実測図

壁高は30cm位で，状態は内傾気味であった。床面はローム層の叩きで，炉を中心とした附近は硬く，他は軟弱であった。主柱穴は壁に沿って，ほぼ等間隔に6本検出された。それはP1，P2，P3，



第9図　第3号，4号，11号住居址実測図

P5, P6, P7 であった。炉の東側，炉内に数多くの細礫が検出されたが，人為的な何かであろう。

炉は住居址の中央部よりやや西寄りにあり，石の抜きとられた跡が，はっきりとした。断面はいくぶんすりばち状を呈していた。覆土中からは焼土と木炭の検出量は少なかった。

遺物は加曽利E式の土器片が出土した。

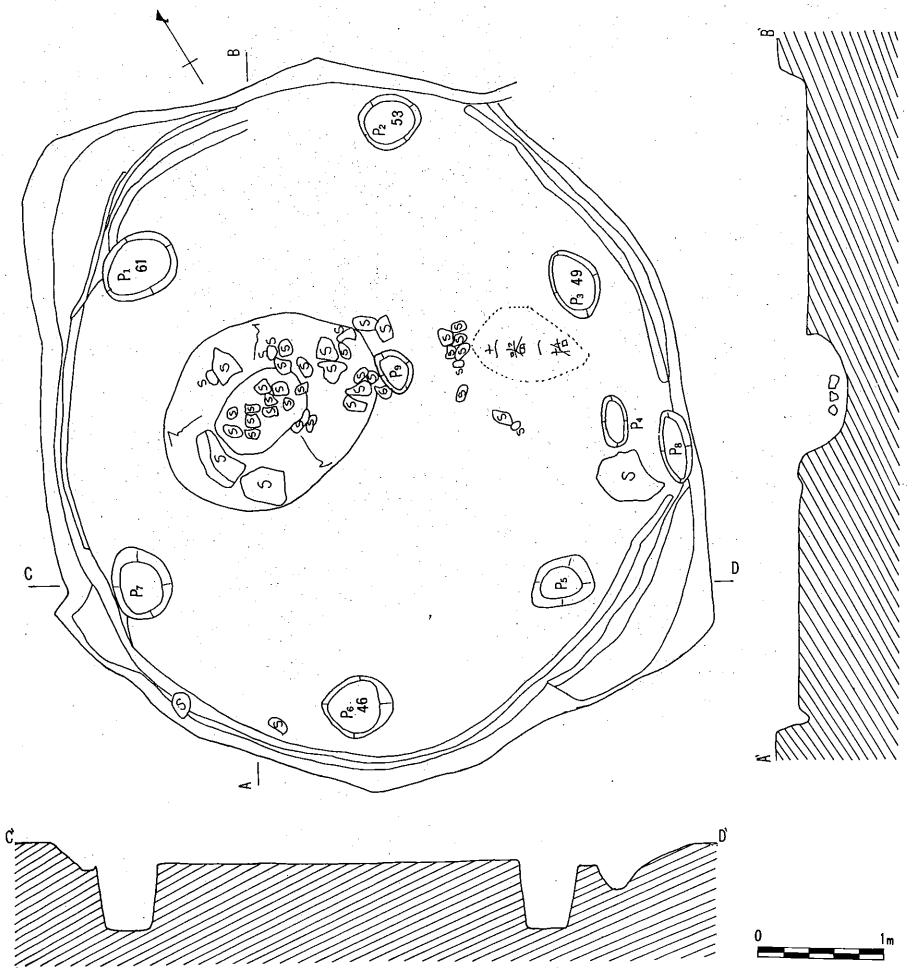
第8号住居址（第11図，図版9）

本址は発見された遺構群のほぼ中央部に，南側は第7号住居址に近接して発見された。南北7m東西5m70cm程の長円形状プランを呈する竪穴住居址である。

壁高は20～30cmの範囲内に含まれている。状態はわずかに内傾気味で，叩きは存在しなかった。主柱穴は4本，あるいは6本位だと思われた。

床面はローム層中に設けられ，極めて軟弱であり，炉のレベルより床を推定するような状態であった。

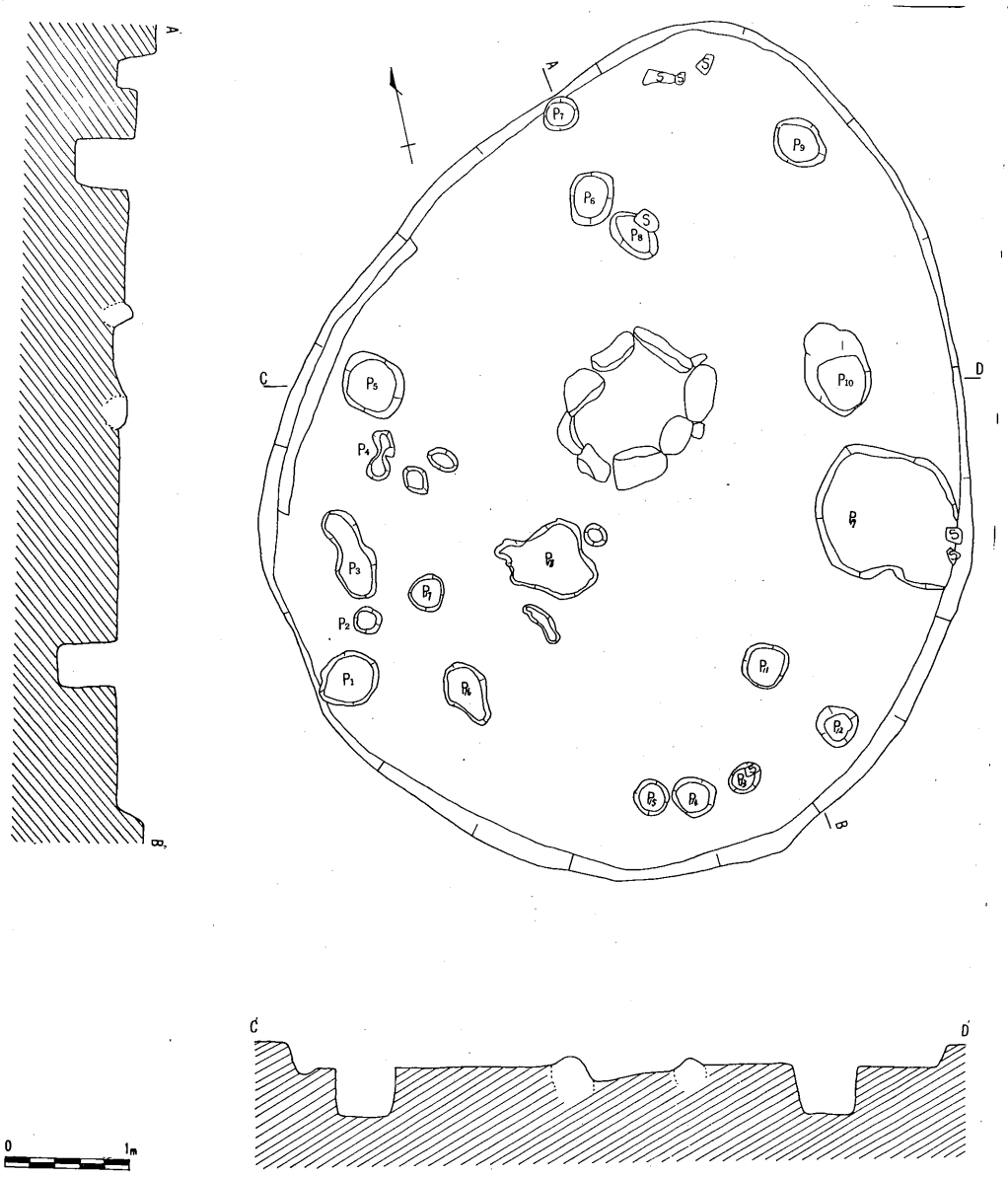
炉は住居址の中央部附近に位置し，方形の石囲炉であった。炉縁石は全面にわたってまわっており北側の長いのをのぞいてすべて花崗岩であった。長いのはホルンヘルスでありそれは焼けて筋が乱入していた。炉底には多くの焼土が充満していた。



第10図　第7号住居址実測図

遺物は加

曽利E式土器片が出土した。



第11図　第８号住居址実測図

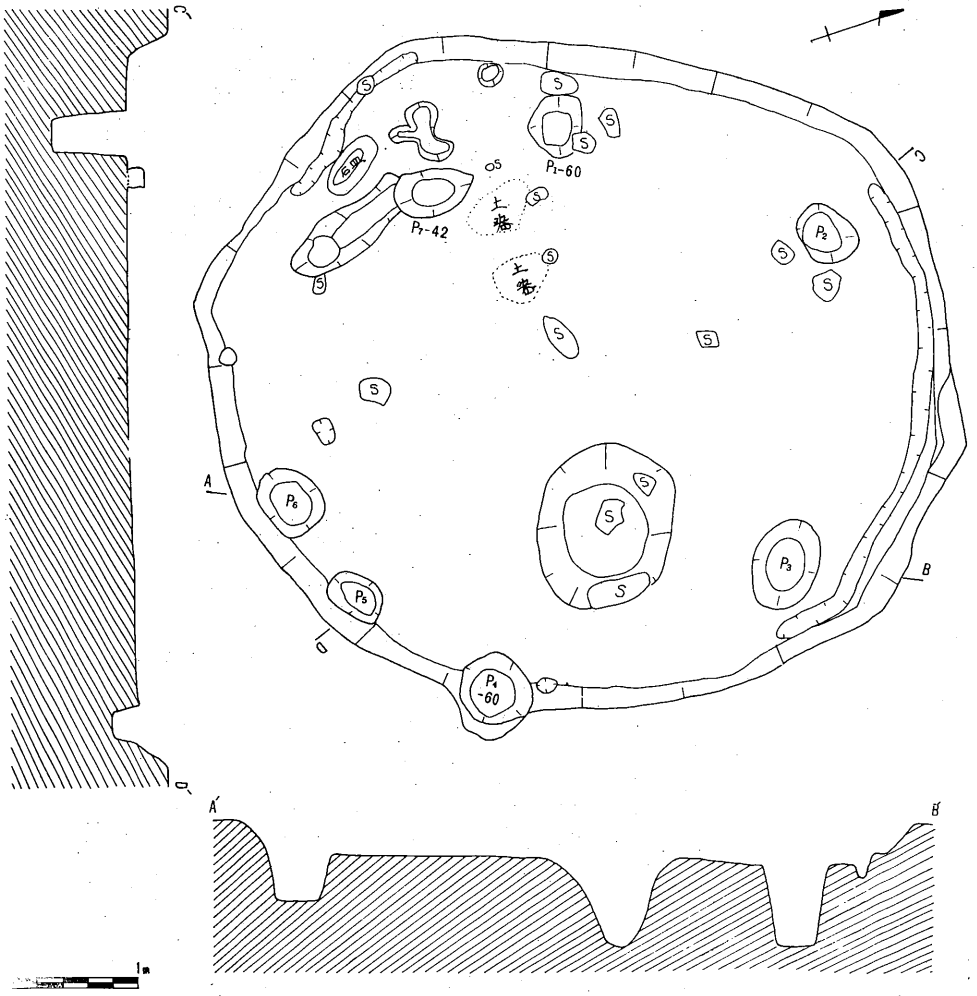
第９号住居址（第12図，図版９）

本址は検出された遺構の最南部に，また北側は第10号住居址と隣接している。南北５ｍ95cm，東西５ｍ50cm程の円形プランの竪穴住居址である。壁高は40～50cm前後を計え，状態はやや内傾気味で，わずかに叩き状になっていた。

床面は砂礫混りのローム層の極めて良好なる叩きで，大体水平となっている。北壁の壁面直下に周溝が回わっている。また点在している石は全てホルンヘルスであった。柱穴は6本存在し，深いものは60cmにも達していた。

炉は住居址の中央より東側にあり，炉の位置としては例が少ない。炉石は東側と北側の壁面と底部にあるだけであったが，抜き取られた跡がわかり，したがって，構築時は石が周囲を取りまいていたのだと思われる。

遺物は加曽利E式土器片が出土した。



第12図　第9号住居址実測図

第10号住居址（第13図，図版10）

本址は南側の半分位が，第9号住居址と接していた。南北4 m85cm，東西4 m15cm程の規模を有

し，円形プランを呈する竪穴住居址である。壁高は30cm前後を示し，状態は内傾気味であった。北壁の近くに周溝がめぐっていた。

柱穴は4主柱穴で，4本とも美事に発見された。それはP1，P5，P8，P9である。炉は中央部よりやや東側よりに　床面をすりばち状に掘り込んで炉と使用したらしく，内部より多量の焼土と木炭が検出された。炉壁から炉底にかけて土器片を全面にわたって敷きつめてあり，土の部分はどこにもみあたらなかった。土器片は全部で2個体分位あったように思われた。また土器片に焼土がこびりついていた。このような炉は当然，湿気を防ぐ為であろうことは定説のようになっている。

遺物は加曽利E式土器片が出土した。

第11号住居址（第9図，図版8）

本址は西側で第4号住居址を切り，南側は第3号住居址によって切られ，満足な姿では検出されなかった。規模は推定するに南北3m50cm前後，東西4m80cm位の東西に長い円形状プランを呈する竪穴住居址である。

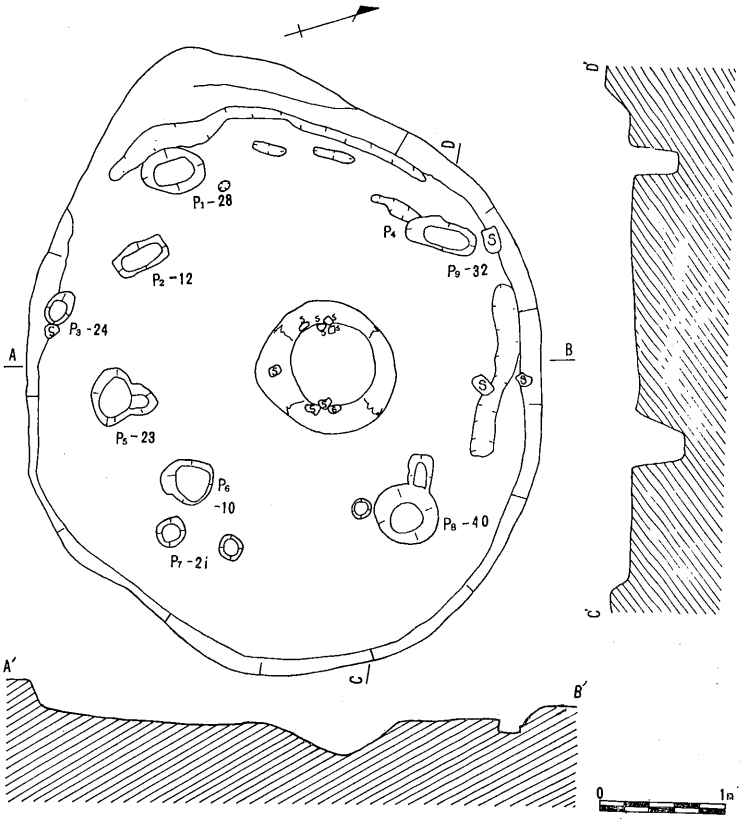
壁高は西側で10cm，南側は第3号住居址によって切られ，北側は20cm，東側は10cm位を測定できた。状態は内傾気味で，たたきは存在しなかった。

床面は砂礫混りのローム層面に構築され，わずかな叩き状になっており，水平床を呈していた。

柱穴は複雑な切り合い関係によったために明確に把握できずに終ってしまった。

炉は住居址の中央部と思われる所にあり，石は現在1カ所だけ存在していた。他のものは抜かれた跡が歴然としていた。ふりかえってみるに，構築時は方形石囲炉の可能性が強いように思われた。

遺物は勝坂期の新しい所が主体となっていた。



第13図　第10号住居址実測図

第12号住居址（第14図，図版10）

本址は発見された遺構の中で，最東部に位置し，南北5 m，東西4 m15cm程の隅丸方形の竪穴住居址でローム層を掘り込んでいる。

壁は30～40cm位あり多少の凹凸気味のところがあった。

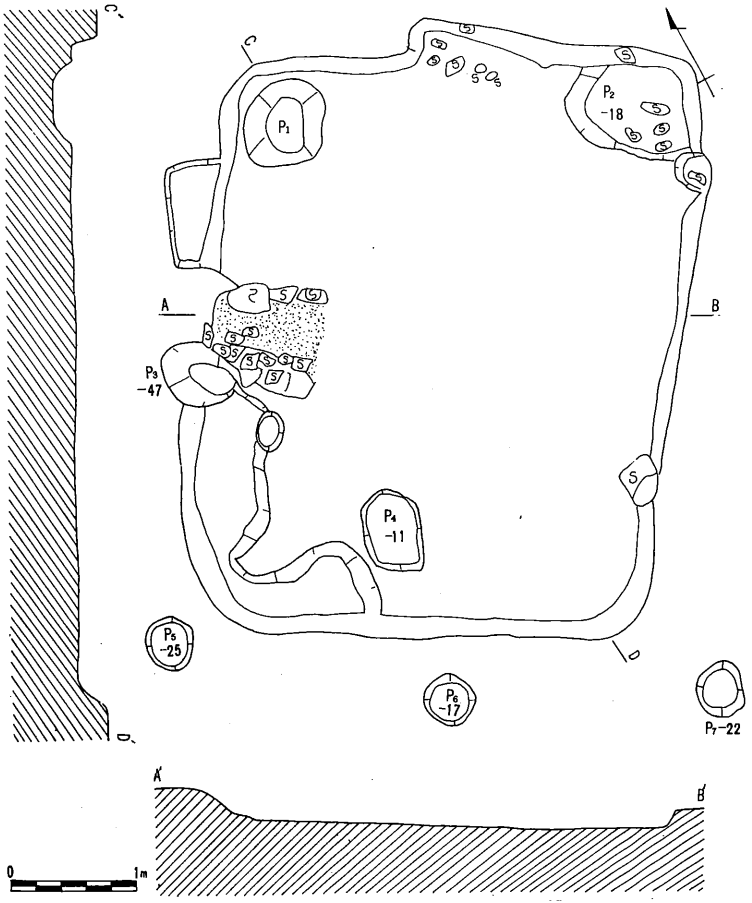
床面は砂礫混りのローム層の極めて良好なる叩きであって，ほぼ水平を呈している。

柱穴は北側に2カ所いずれもコーナーにある。南側に3カ所，一直線状になっていた。

カマドは西壁中央部にあり，石組粘土で，芯は花崗岩から成り，その外側にくずれないように粘土をはりつけてあった。底部は赤々と焼けていた。北側に寄った壁のところが一段低く掘ってあり，何を意味するかは不明であった。

遺物は土師器，須恵器片が出土した。

（小池政美）



第14図　第12号住居址実測図

第Ⅲ章　遺　　物

第1節　土　器

土器の説明は表を作製し，一見のもとに理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容的説明を付記しておくことにする。

胎土，保存状態，色調についての記述は，明らかなる基準によったものではなく，筆者の主観によるものである。

（小池政美）

図版	番号	胎　　土	保存状態	色　調	厚さ mm	文様の特徴	備　　考
4	1	少量の長石	良好	赤褐色	4	土　師　器	第1号住居址
〃	2	〃	〃	〃	6	〃	第1号住居址カマド
〃	3	〃	〃	白灰色	9	須　恵　器	第3号住居址
〃	4	〃	〃	赤褐色	7	土　師　器	第1号住居址カマド
〃	5	少量の雲母	普通	〃	4	〃	第1号住居址カマド
〃	6	〃	〃	白褐色	7	〃	第3号住居址
〃	7	〃	良好	赤褐色	7	〃	第2号住居址
〃	8	〃	〃	〃	5	〃	〃
〃	9	〃	〃	白褐色	6	灰釉陶器	〃
〃	10	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	11	少量の長石	普通	赤褐色	5	土　師　器	第2号住居址
〃	12	〃	〃	〃	4	〃	〃
〃	13	多量の雲母	〃	〃	10	〃	第1号住居址
〃	14	少量の長石	良好	黒褐色	8	須　恵　器	第3号住居址
〃	15	〃	〃	白灰色	4	灰釉陶器	〃

第1表　出土土器の形状一覧表（その1）

図版	番号	胎　　土	保存状態	色　調	厚さ mm	文様の特徴	備　　考
12	1	多量の雲母	良好	赤褐色	7	土　師　器	第2号住居址
〃	2	〃	〃	〃	6	〃	第1号住居址
〃	3	少量の雲母	〃	黒褐色	6	〃	〃
〃	4	多量の雲母	〃	黄褐色	4	〃	〃
〃	5	少量の長石	〃	赤褐色	6	〃	第2号住居址
〃	6	多量の雲母	〃	黄褐色	7	須　恵　器	第1号住居址
〃	7	〃	〃	〃	5	〃	〃
〃	8	少量の長石	〃	黒褐色	5	土　師　器	第2号住居址
〃	9	〃	〃	〃	4	〃	〃
〃	10	〃	〃	〃	5	〃	〃
〃	11	〃	〃	白灰色	7	須　恵　器	第1号住居址
〃	12	〃	〃	〃	7	灰釉陶器	第2号住居址
〃	13	〃	〃	〃	5	〃	〃

第2表　出土土器の形状一覧表（その2）

図版	番号	胎　　土	保存状態	色　調	厚さ mm	文様の特徴	備　　考
13	1	多量の雲母	普通	黒褐色	5	土　師　器	第3号住居址
〃	2	〃	〃	黄褐色	4	〃	〃
〃	3	〃	〃	〃	5	〃	〃
〃	4	〃	〃	〃	4	〃	〃
〃	5	少量の長石	良好	白灰色	3	須　恵　器	〃
〃	6	〃	〃	〃	3	〃	〃
〃	7	多量の雲母	〃	黒褐色	11	沈線，刻目	第4号住居址
〃	8	〃	〃	黄褐色	11	沈線隆線,刻目	〃
〃	9	〃	普通	赤褐色	10	櫛　形　文	〃
〃	10	〃	〃	〃	11	櫛形文,刻目	〃
〃	11	〃	〃	黒褐色	8	隆線，刻目	〃
〃	12	少量の長石	良好	黄褐色	7	沈線，刻目	〃
〃	13	〃	〃	〃	10	隆線，沈線	〃

第3表　出土土器の形状一覧表（その3）

図版	番号	胎　　土	保存状態	色　調	厚さ mm	文様の特徴	備　　考
14	1	多量の雲母	良好	茶褐色	7	沈線，刻目	第5号住居址
〃	2	〃	〃	黒褐色	8	隆線,沈線,刻目	〃
〃	3	〃	普通	黄褐色	10	渦巻，沈線	〃
〃	4	〃	〃	赤褐色	8	隆線，刻目	〃
〃	5	〃	良好	黄褐色	7	隆線，刻目	〃
〃	6	〃	普通	〃	9	隆線，沈線	〃
〃	7	少量の雲母	〃	黒褐色	7	沈線	〃
〃	8	〃	良好	黄褐色	9	粘土紐	〃
〃	9	多量の雲母	〃	〃	8	沈線，刻目	〃
〃	10	〃	普通	茶褐色	7	隆線，沈線	〃
〃	11	少量の雲母	〃	黒褐色	11	隆線,沈線,刺突文	〃
〃	12	〃	〃	黄褐色	6	隆線，沈線	〃
〃	13	〃	〃	黒褐色	6	沈線	〃

第4表　出土土器の形状一覧表（その4）

図版	番号	胎　　土	保存状態	色　調	厚さ mm	文様の特徴	備　　考
15	1	少量の長石	良好	黒褐色	7	沈線	第6号住居址
〃	2	多量の雲母	普通	茶褐色	6	粘土紐,沈線	〃
〃	3	少量の長石	良好	黒褐色	6	沈線，刻目	〃
〃	4	〃	〃	黄褐色	8	沈線,刻目,隆線	〃
〃	5	多量の雲母	〃	黒褐色	8	〃	〃
〃	6	〃	不良	黄褐色	10	隆線，沈線	〃
〃	7	少量の長石	普通	黒褐色	8	沈線	〃
〃	8	〃	良好	赤褐色	7	隆線，沈線	〃
〃	9	〃	普通	黒褐色	6		〃
〃	10	〃	〃	黄褐色	6	縄文	〃
〃	11	〃	良好	〃	7	沈線	〃
〃	12	〃	不良	茶褐色	8	隆線，沈線	〃

第5表　出土土器の形状一覧表（その5）

図版	番号	胎　　土	保存状態	色　調	厚さ mm	文様の特徴	備　　考
16	1	少量の雲母	良好	黒褐色	5	沈線	第7号住居址
〃	2	〃	〃	赤褐色	6	隆線，沈線	〃
〃	3	〃	〃	黒褐色	6	縄文，沈線	〃
〃	4	〃	〃	黄褐色	7	隆線，沈線	〃
〃	5	多量の長石	普通	黒褐色	10	沈線	〃
〃	6	少量の長石	良好	赤褐色	8	隆線，沈線	〃
〃	7	〃	〃	〃	7	沈線，隆線	〃
〃	8	〃	〃	〃	8	沈線，綾杉文	〃
〃	9	〃	〃	黒褐色	5	沈線,縄文,爪形文	〃
〃	10	〃	〃	〃	7	没線,櫛形文	〃
〃	11	多量の雲母	〃	黄褐色	8	連弧文,沈線	〃
〃	12	〃	〃	〃	7	隆線,綾杉文	〃

第6表　出土土器の形状一覧表（その6）

図版	番号	胎　　土	保存状態	色　調	厚さ mm	文様の特徴	備　　考
	1	多量の雲母	良好	黄褐色	8	キャタピラ文	第8号住居址
〃	2	〃	〃	黒褐色	9	隆線，刻目	〃
〃	3	〃	〃	〃	10	キャタピラ文	〃
〃	4	多量の雲母	普通	〃	8	沈線	〃
〃	5	〃	〃	黄褐色	8	隆線，沈線	〃
〃	6	〃	〃	赤褐色	7	沈線	〃
〃	7	〃	〃	黄褐色	8	〃	〃
〃	8	少量の長石	〃	黒褐色	9	縄文，沈線	〃
〃	9	〃	〃	〃	7	〃 〃	〃
〃	10	多量の長石	〃	赤褐色	8	隆線	〃
〃	11	多量の雲母	良好	黒褐色	10	縄文	〃
〃	12	〃	普通	赤褐色	7	縄文，沈線	〃

第7表　出土土器の形状一覧表（その7）

図版	番号	胎　　土	保存状態	色　調	厚さ mm	文様の特徴	備　　考
18	1	多量の雲母	良好	黒褐色	6	隆線，沈線	第9号住居址
〃	2	少量の長石	普通	赤褐色	10	縄文	〃
〃	3	多量の雲母	不良	黒褐色	9	縄文，沈線	〃
〃	4	〃	良好	〃	6	隆線,沈線,刺突文	〃
〃	5	〃	〃	〃	9	沈線	〃
〃	6	〃	〃	茶褐色	9	沈線	〃
〃	7	〃	〃	〃	8	沈線	〃
〃	8	少量の長石	〃	黄褐色	7	縄文，沈線	〃
〃	9	多量の雲母	〃	黒褐色	6	縄文，沈線	〃
〃	10	〃	〃	黄褐色	7	縄文，沈線	〃
〃	11	〃	〃	黒褐色	6	縄文	〃
〃	12	〃	〃	黄褐色	9	隆線,綾杉文	〃

第8表　出土土器の形状一覧表（その8）

図版	番号	胎　　土	保存状態	色　調	厚さ㎝	文様の特徴	備　　考
19	1	少量の長石	良好	赤褐色	10	沈線,刺突文	第10号住居址
〃	2	多量の雲母	〃	黒褐色	9	粘土紐，沈線，刺突文	〃
〃	3	〃	〃	黄褐色	9	沈線	〃
〃	4	〃	普通	黒褐色	6	沈線,刺突文	〃
〃	5	〃	良好	赤褐色	7	粘土紐,沈線	〃
〃	6	少量の長石	〃	黄褐色	6	沈線，縄文	〃
〃	7	〃	〃	〃	8	隆線,綾杉文	〃
〃	8	〃	〃	黒褐色	7	縄文，沈線	〃
〃	9	匆量の雲母	〃	〃	7	隆線,綾杉文	〃
〃	10	〃	普通	茶褐色	8		〃
〃	11	〃	〃	黒褐色	6	隆線，沈線	〃
〃	12	〃	〃	〃	10	綾杉文	〃

第9表　出土土器の形状一覧表（その9）

図版	番号	胎　　土	保存清態	色　調	厚さ㎝	文様の特徴	備　　考
20	1	多量の雲母	良好	黒褐色	8	隆線，沈線	第11号住居址
〃	2	〃	〃	〃	7	〃	〃
〃	3	〃	〃	〃	7	〃	〃
〃	4	〃	〃	〃	8	〃	〃
〃	5	〃	〃	〃	9	〃	〃
〃	6	〃	〃	〃	8	無文	〃
〃	7	多量の雲母	〃	〃	5	土師器	第12号住居址
〃	8	少量の長石	〃	赤褐色	4	〃	〃
〃	9	〃	〃	〃	5	〃	〃
〃	10	〃	〃	白灰色	3	灰釉陶器	〃

第10表　出土土器の形状一覧表（その10）

第2節　石　器

石器の説明は表を用いることにする。表の項目は図版，番号，名称，器形，石質，備考である。

（小池政美）

図版	番号	名　称	器　　形	石　　質	備　　考
5	1	打製石斧	短冊形	硬砂岩	グリット
〃	2	〃	撥　　形	〃	〃
〃	3	磨　　石		〃	〃
〃	4	打製石斧	短冊形	緑泥岩	〃
〃	5	〃	〃	〃	〃

第11表　出土石器の形状一覧表（その1）

図版	番号	名　称	器　　形	石　　質	備　　考
21	1	磨製石斧	乳棒状	緑泥岩	第4号住居址
〃	2		定角式	〃	〃
〃	3	打製石斧	短冊形	硬砂岩	〃
〃	4	石　　錘		砂　岩	〃
〃	5	〃		〃	〃
〃	6	〃		硬砂岩	〃
〃	7	〃		粘板岩	〃
〃	8	〃		変成岩	〃
〃	9	〃		砕　岩	〃

第12表　出土石器の形状一覧表（その2）

図版	番号	名　称	器　　形	石　　質	備　　考
22	1	打製石斧	短冊形	硬砂岩	第5号住居址
〃	2	剥片石器		〃	〃
〃	3	石　　錘		〃	〃
〃	4	剥片石器		〃	第6号住居址
〃	5	〃		〃	〃
〃	6	〃		〃	〃
〃	7	〃		〃	〃
〃	8	〃		〃	〃
〃	9	棒状石器		変成岩	〃

第13表　出土石器の形状一覧表（その3）

図版	番号	名　称	器　　形	石　　質	備　　考
23	1	磨製石斧	乳棒状	緑泥岩	第7号住居址
〃	2	〃	〃	〃	〃
〃	3	〃	〃	〃	第8号住居址
〃	4	剥片石器		硬砂岩	〃
〃	5	〃		〃	第7号住居址
〃	6	打製石斧	短冊形	砂　岩	第8号住居址
〃	7	凹　　石		花崗岩	〃
〃	8	剥片石器		緑泥岩	〃

第14表　出土石器の形状一覧表（その4）

図版	番号	名　称	器　　形	石　　質	備　　考
24	1	打製石斧	撥　　形	緑泥岩	第9号住居址
〃	2	〃	短冊形	硬砂岩	〃
〃	3	〃	〃	〃	〃
〃	4	剥片石器		〃	〃
〃	5	石　　錘		〃	〃
〃	6	剥片石斧		〃	〃
〃	7	打製石斧		〃	〃
〃	8	〃	〃	〃	〃
〃	9	石　　錘		〃	〃

第15表　出土石器の形状一覧表（その5）

図版	番号	名　称	器　　形	石　　質	備　　考
25	1	打製石斧	撥　　形	硬砂岩	第10号住居址
〃	2	〃	〃	緑泥岩	〃
〃	3	砥　　石		変成岩	〃
〃	4	石　　錘		〃	〃
〃	5	剥片石器		硬砂岩	第12号住居址
〃	6	石　　錘		〃	〃
〃	7	磨製石斧	定角式	蛇紋岩	〃
〃	8	磨　　石		硬砂岩	〃
〃	9	棒状石器		緑泥岩	第10号住居址

第16表　出土石器の形状一覧表（その6）

第Ⅳ章　ま　と　め

西春近地籍では最北端部に位置し，昭和48年度　中央道遺跡発掘調査の際には山本田代遺跡として報告されているが，今回は契約の都合により北条遺跡に含ませ，段丘を境にして上段の遺跡，下段の遺跡として取り扱つかった。上段の遺跡では奈良時代の住居址１軒，平安時代の住居址２軒，土拡各１をまたそれらに伴出する土器類，陶器類，石器類が検出された。

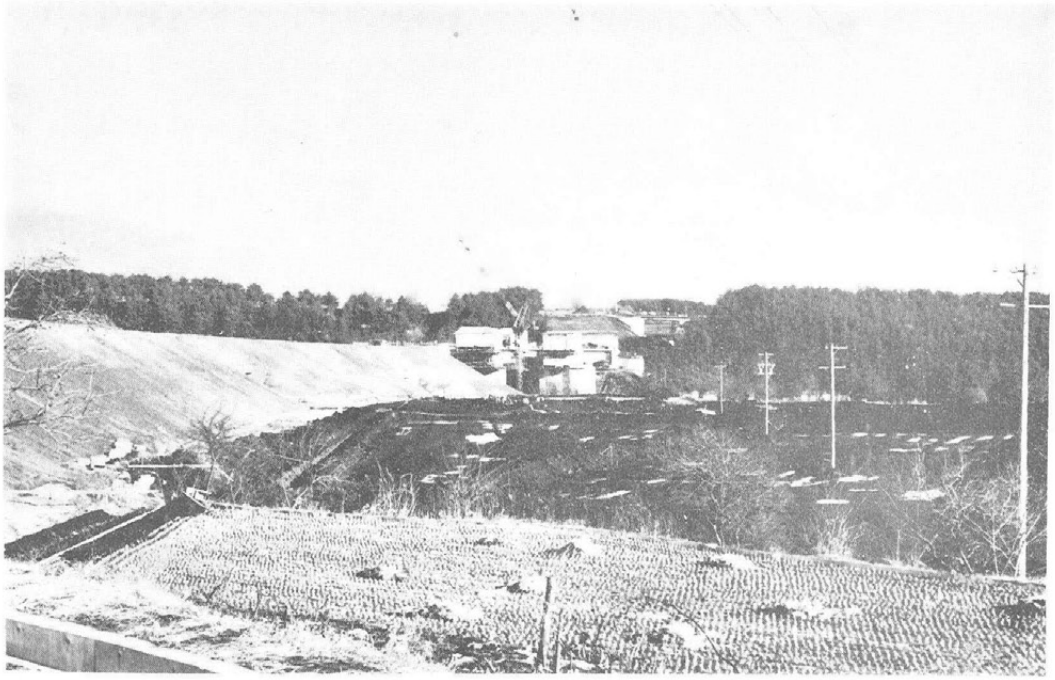
第１にカマドの形態と位置についてであるが，形態は３住居址とも石組粘土カマドであった。位置は第１号住居址は東側に，第２号住居址と第３号住居址は西側にそれぞれあった。

下段は純然たる北条遺跡で，今回の発掘調査は狭い範囲であったけれども，住居址12軒という，極めて多大な成果を収めることができた。したがって，切り合い関係も複雑多岐にわたり，第２号住居址，第５号住居址，第６号住居址との関係，第３号住居址，第４号住居址，第11号住居址と三つどもえの切り合い，第７号住居址，第８号住居址との関係，第９号住居址，第10号住居址との関係というように二つの切り合い関係が認められた。

12軒の住居址の時代的な内訳は縄文中期時代の住居址８軒，土師器，須恵器，灰釉陶器の住居址は４軒であった。第１号住居址と第12号住居址は石組粘土カマドを持ち，その位置は第１号住居址は東壁に，第12号住居址は西側に位置している。第２号住居址は西側にカマドの残がいと思われる焼土の堆積がみられた。第３号住居址は西壁のやや南寄りに石組粘土カマドをもち，カマドとしては極めて良好な状態で保存された。

縄文中期時代の炉の住居址の形態は第４号住居址と第11号住居址は勝坂期に属するので，一般的に考えられているようにやや小型であった。石囲炉の形態がほぼ明瞭であったものは第５号住居址第８号住居址であった。凹み状の炉は第７号住居址，第９号住居址であった。特に第９号住居址は位置としては東壁に近く，いままでは類例が少なかった。第10号住居址は凹み状の落ち込みを炉として利用し，その壁面や底部に土器が敷いてあった。

遺物としては勝坂Ⅲ式，加曽利ＥⅠ式，加曽利ＥⅡ式，加曽利ＥⅢ式，土師器，須恵器，灰釉陶器が出土した。注目すべきものとして，加曽利Ｅ式に混じって，東海系，美濃系，近畿地方のものがあった。特に第７号住居址はそれが顕著であった。　（小池政美）

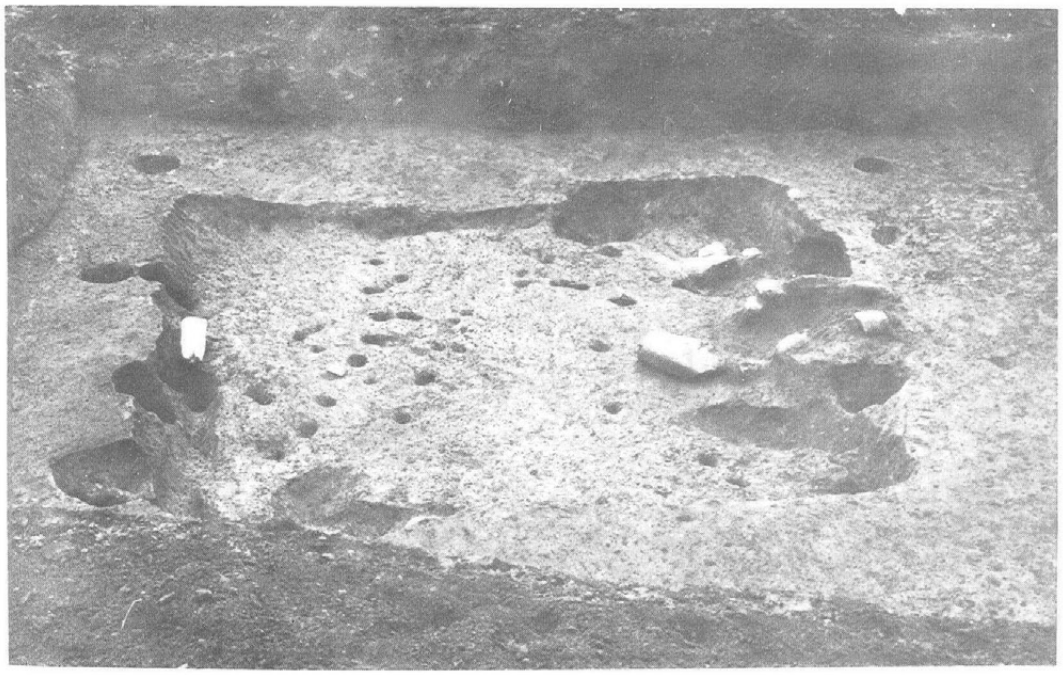


南側より遺跡地を眺む

遺跡地の近景

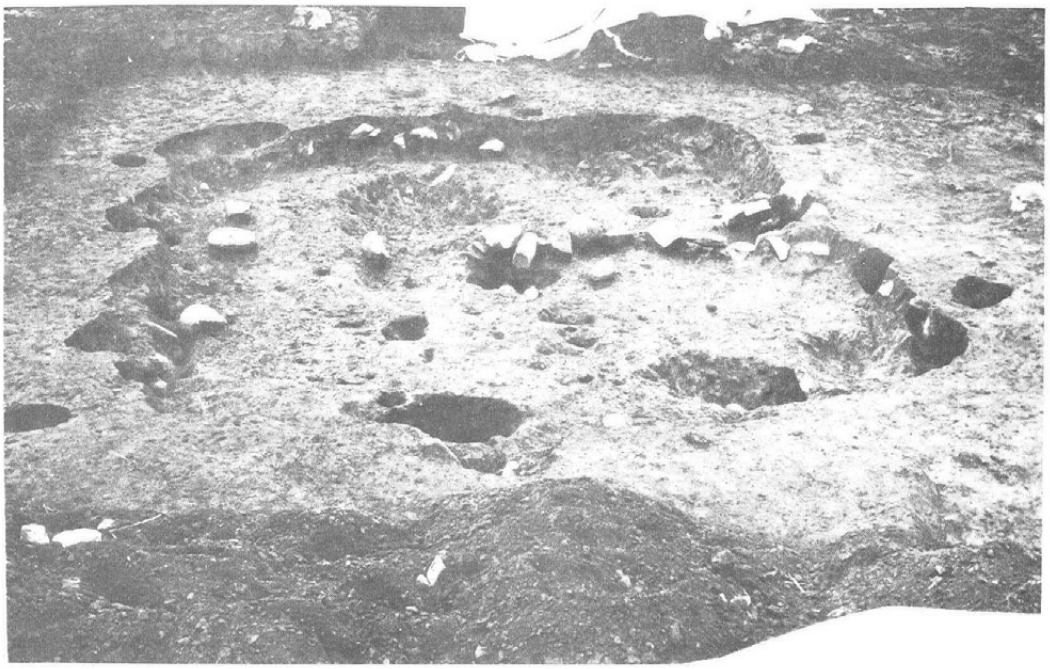
図版１　遺跡全景

第 1 号住居址

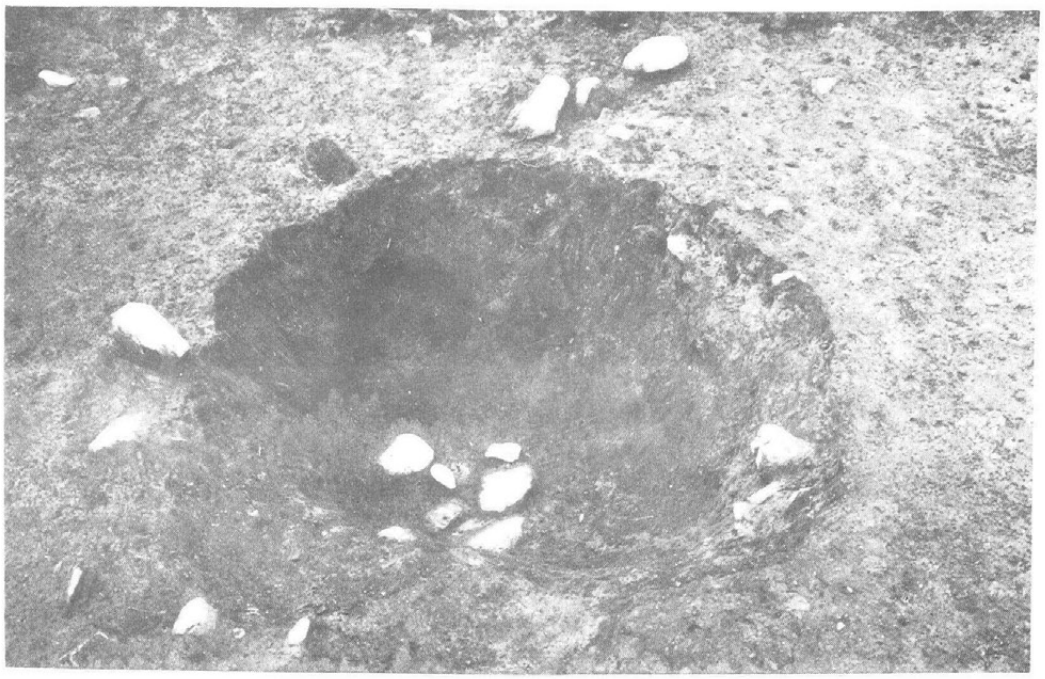


第 2 号 住居址

図版 2　遺構（住居址）

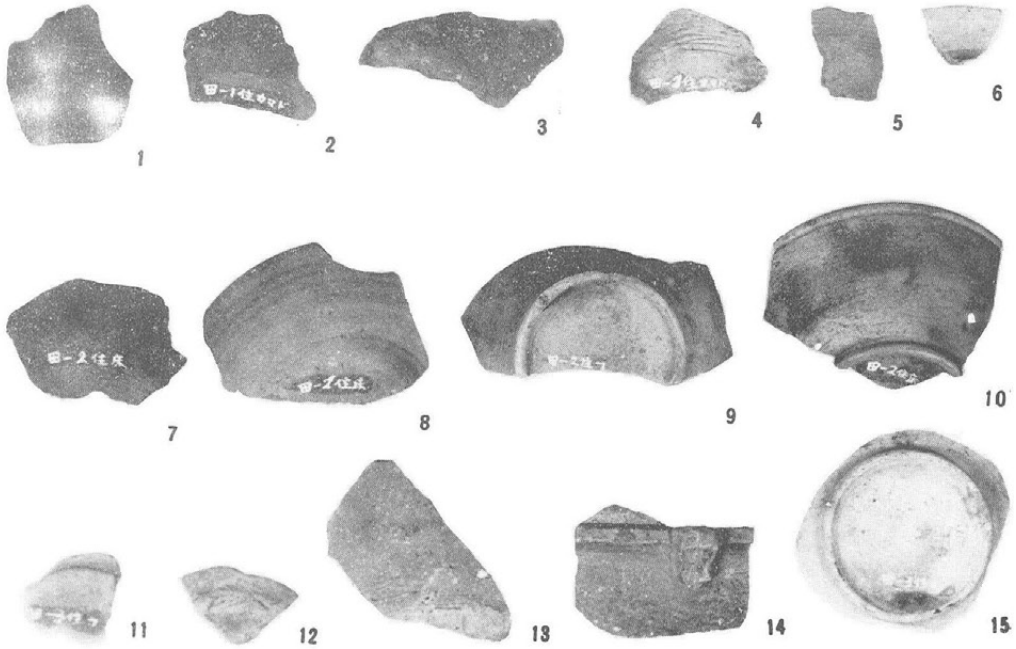


第3号住居址

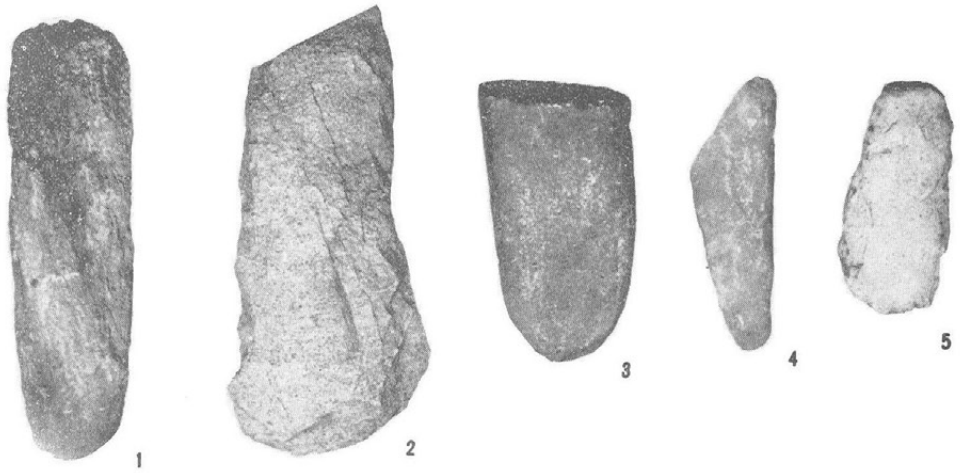


第1号　土　拡

図版3　遺構（住居址及び土拡）



図版 4　出土土器

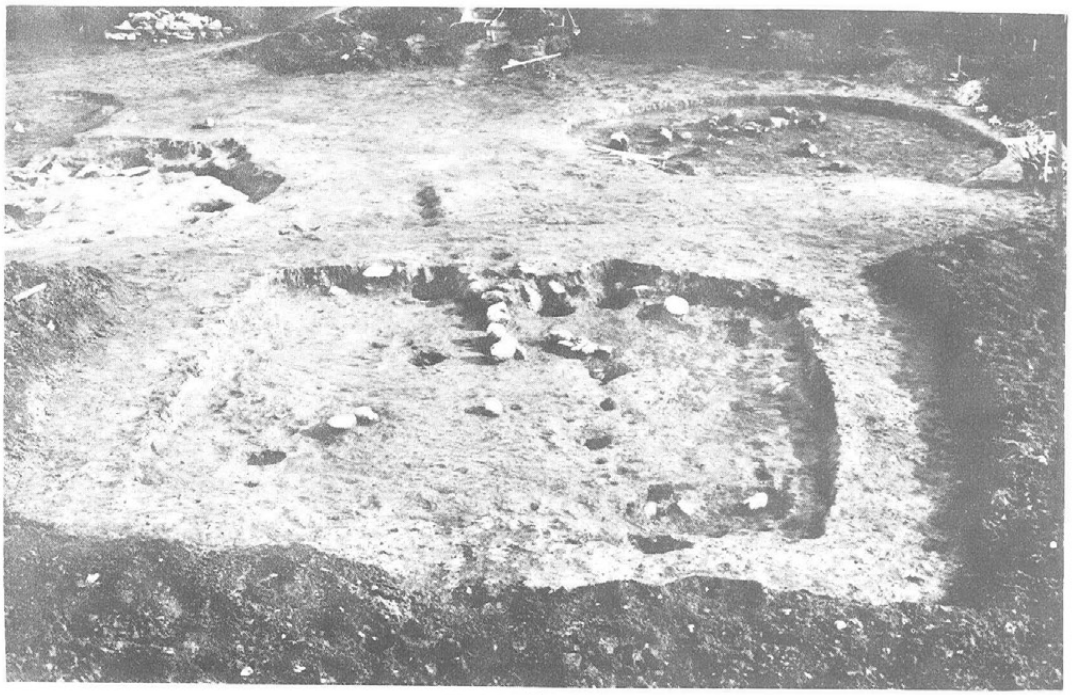


図版 5　出土石器

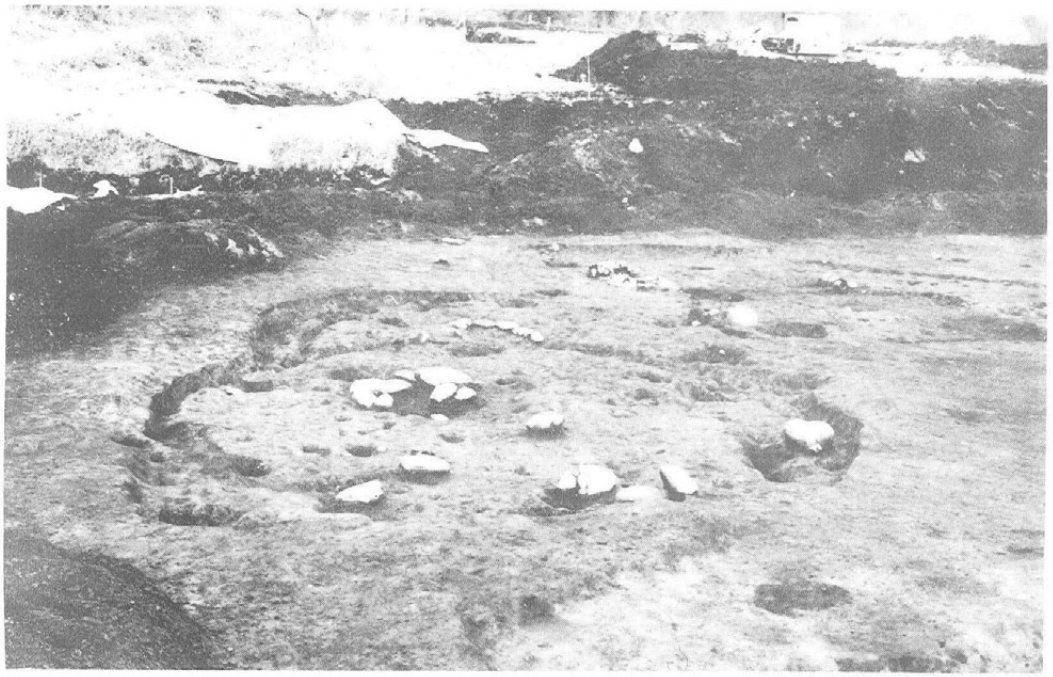
東側より遺跡地を眺む

北側より遺跡地を眺む

図版 6　遺跡全景

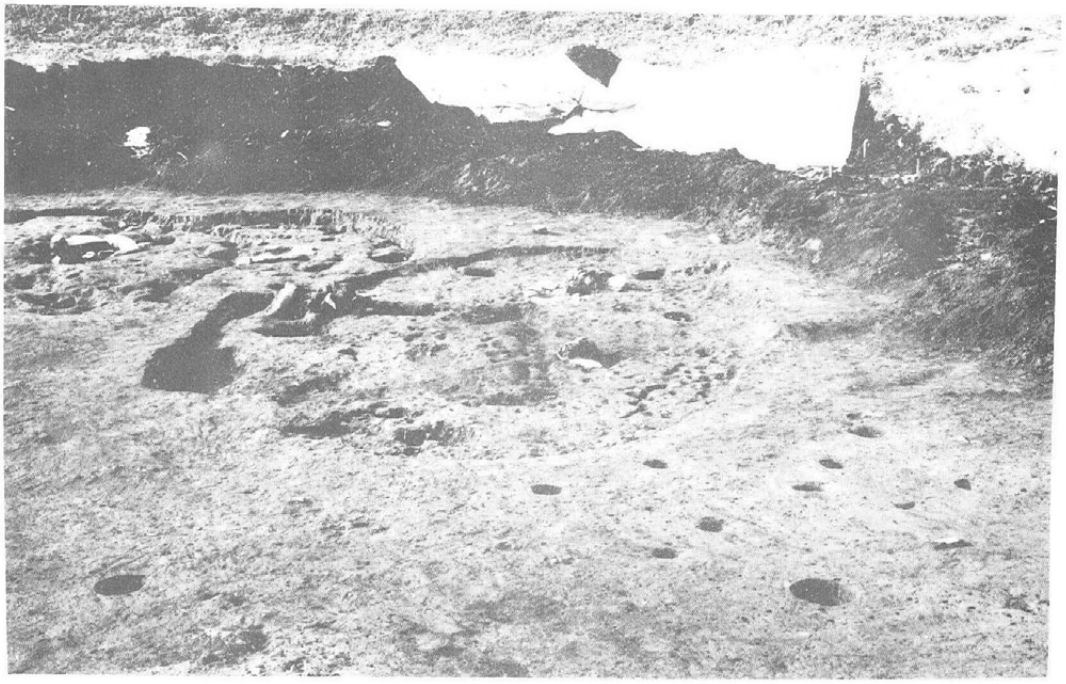


第１号住居址

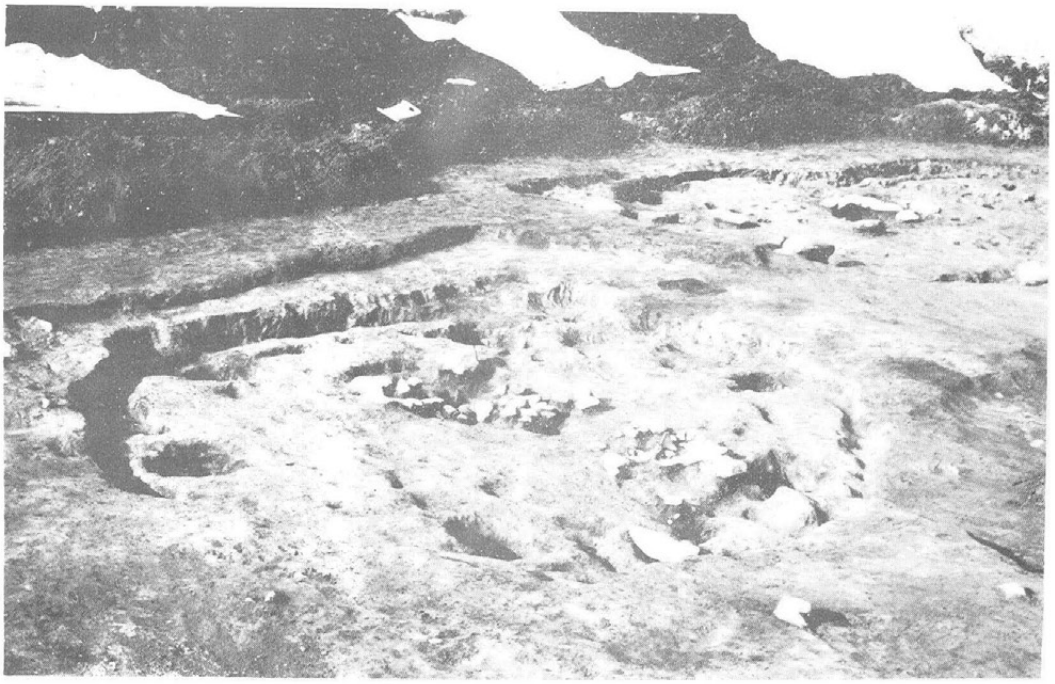


第２，５，６号住居址

図版７　遺構（住居址）

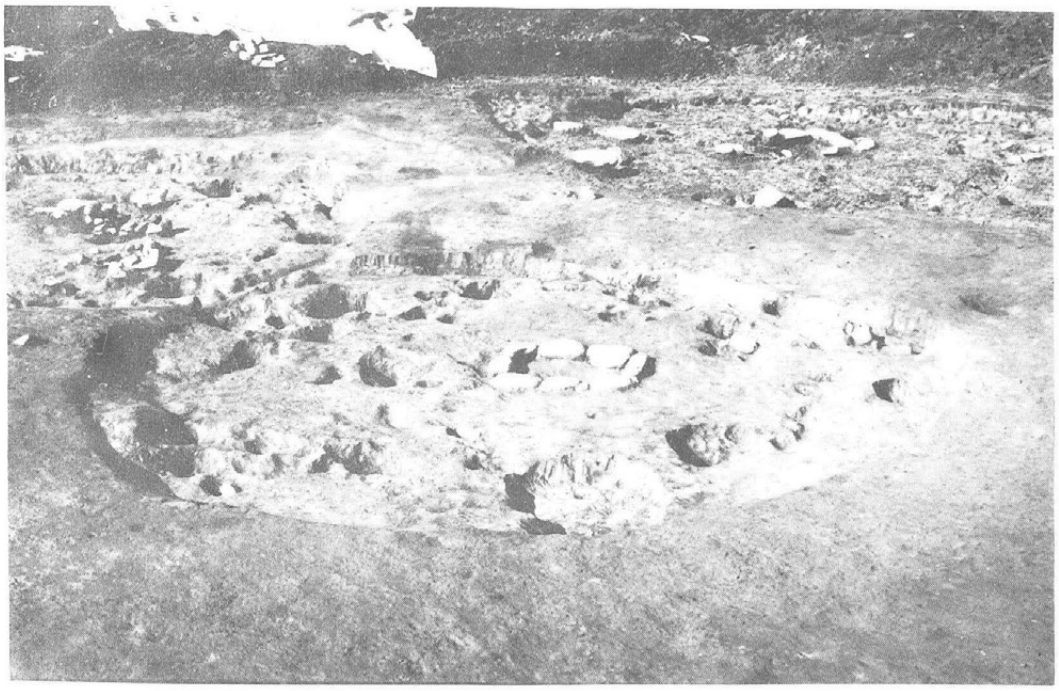


第 3， 4， 11号住居址

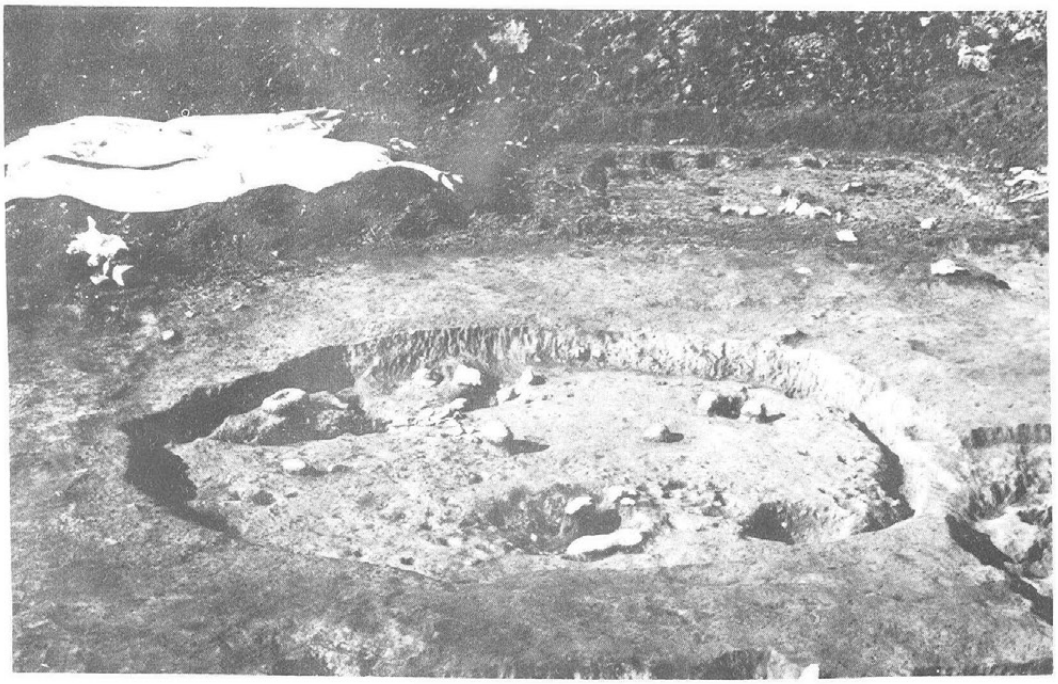


第 7 号住居址

図版 8　遺構（住居址）

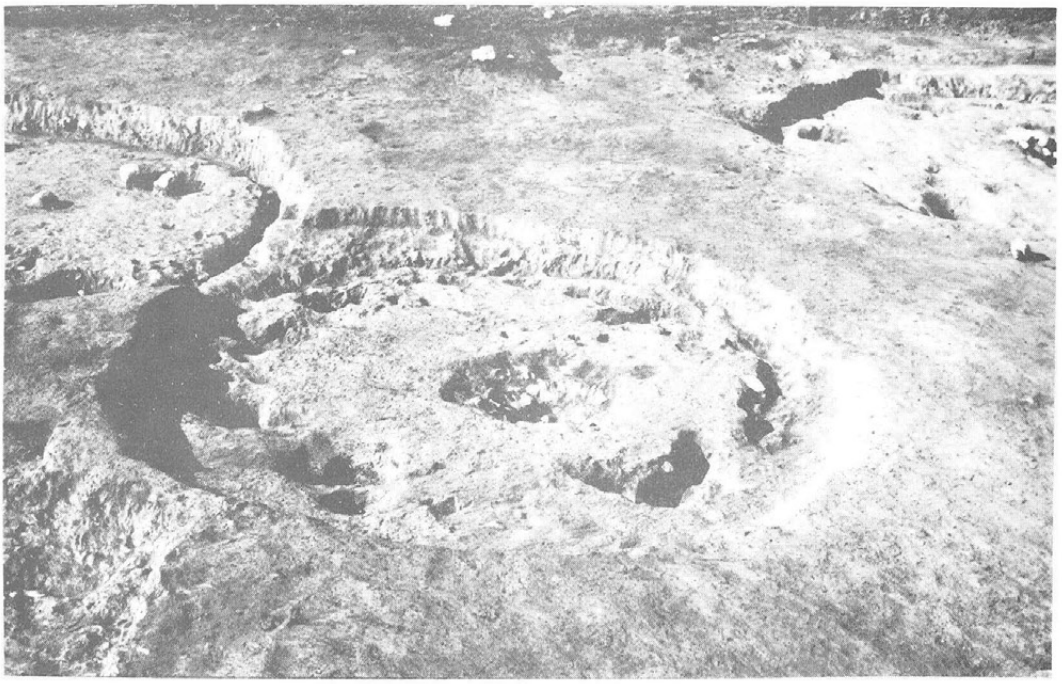


第 8 号住居址

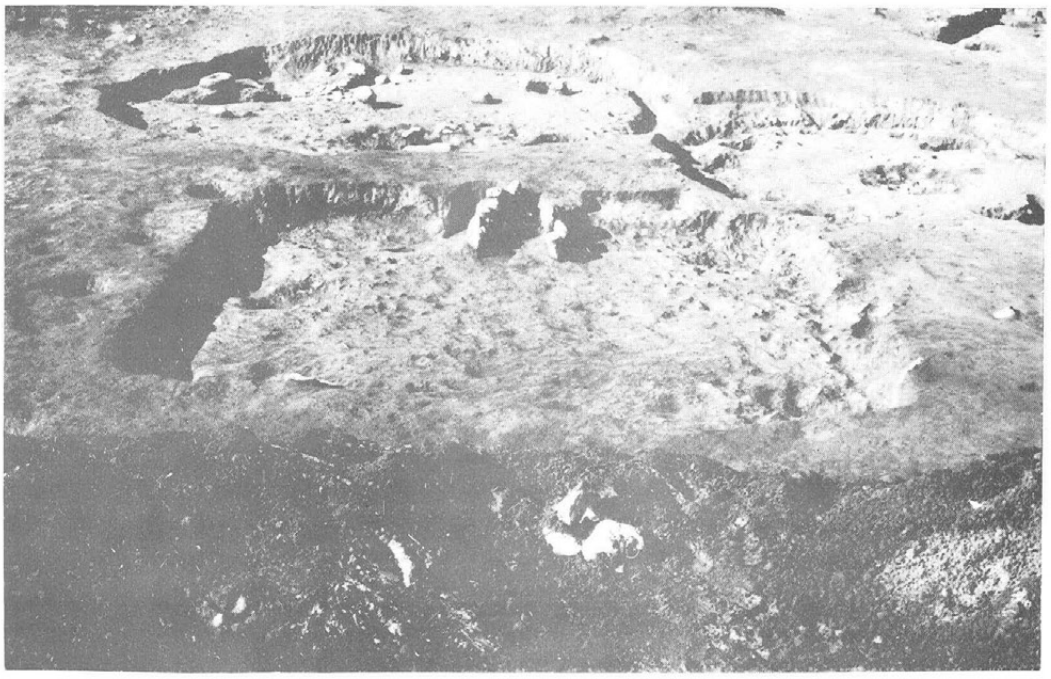


第 9 号住居址

図版 9　遺構（住居址）

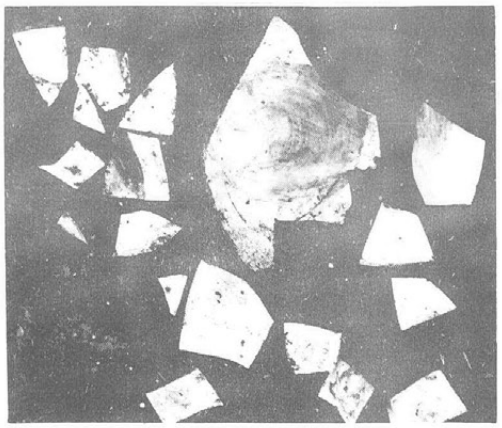


第10号住居址

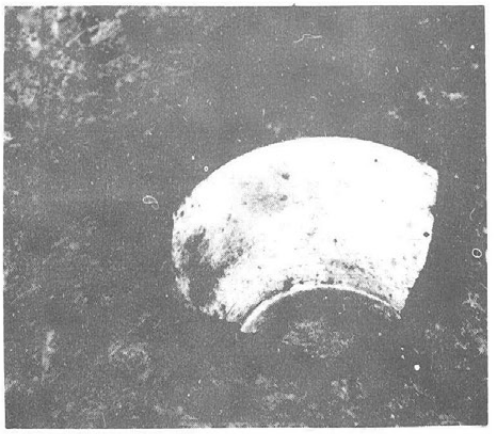


第12号住居址

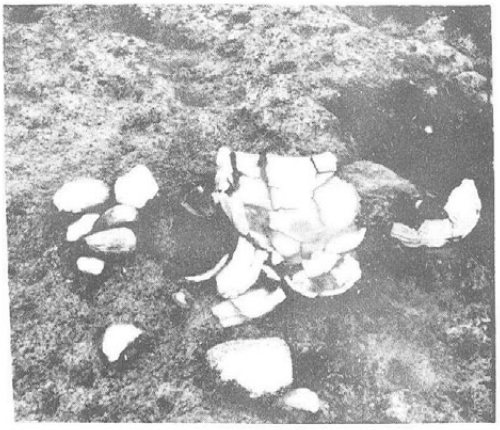
図版10　遺構（住居址）



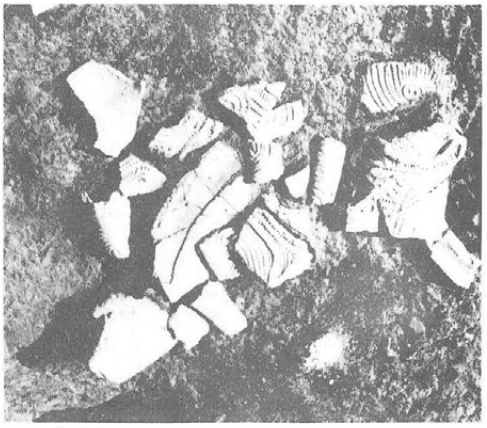
土器出土状況



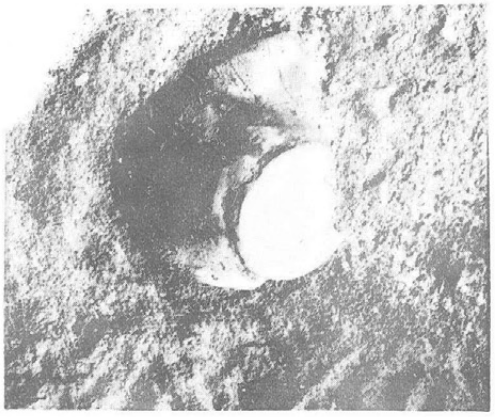
土器出土状況



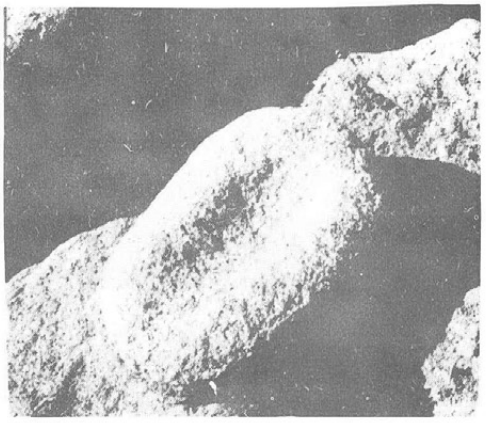
土器出土状況



土器出土状況

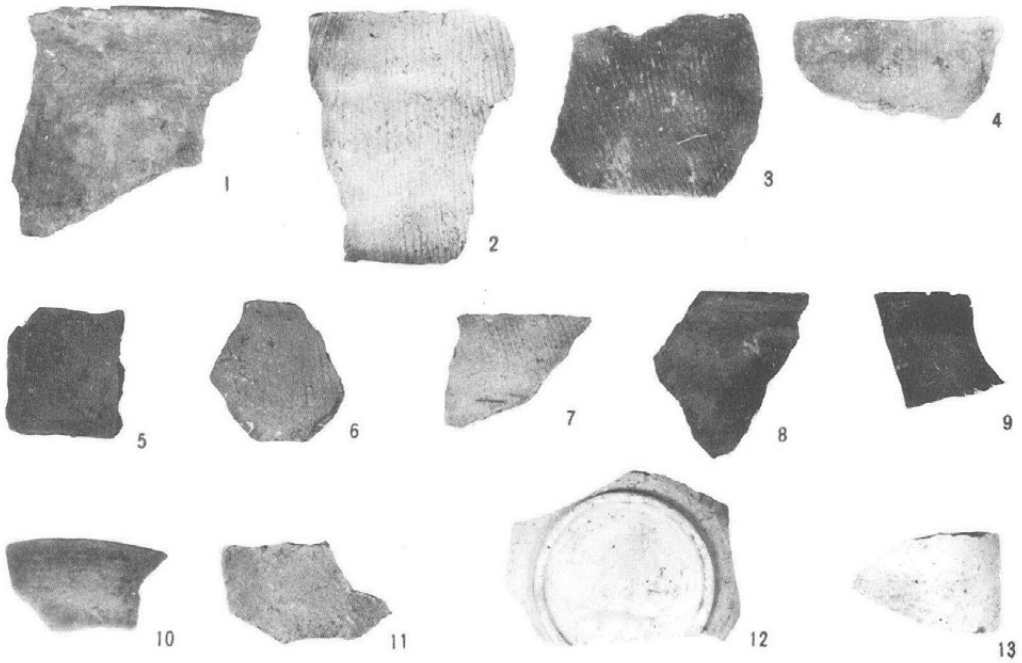


土器出土状況

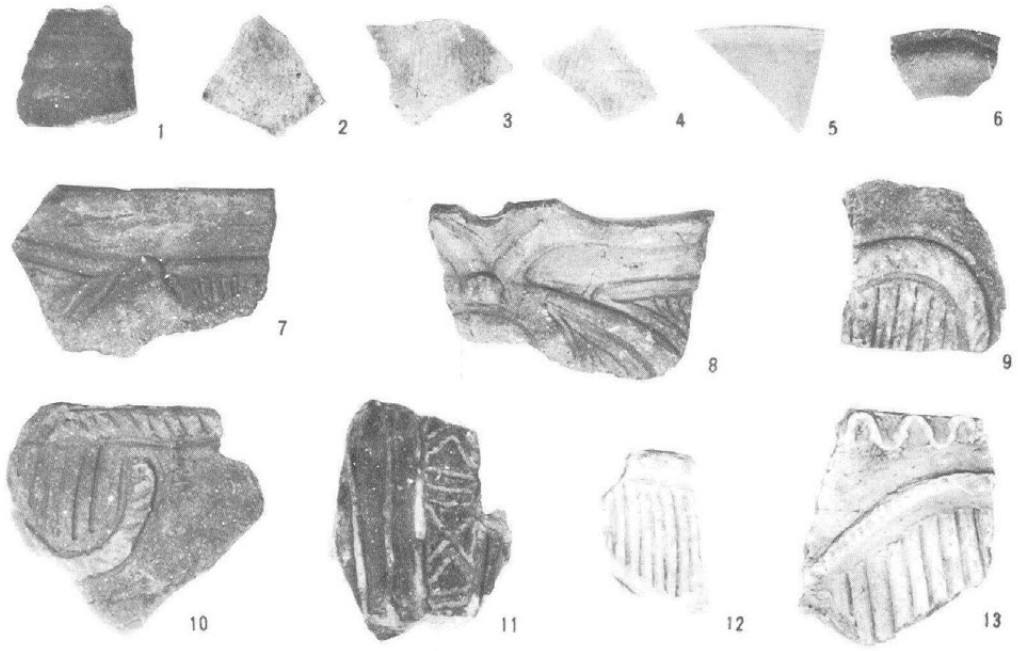


石皿出土状況

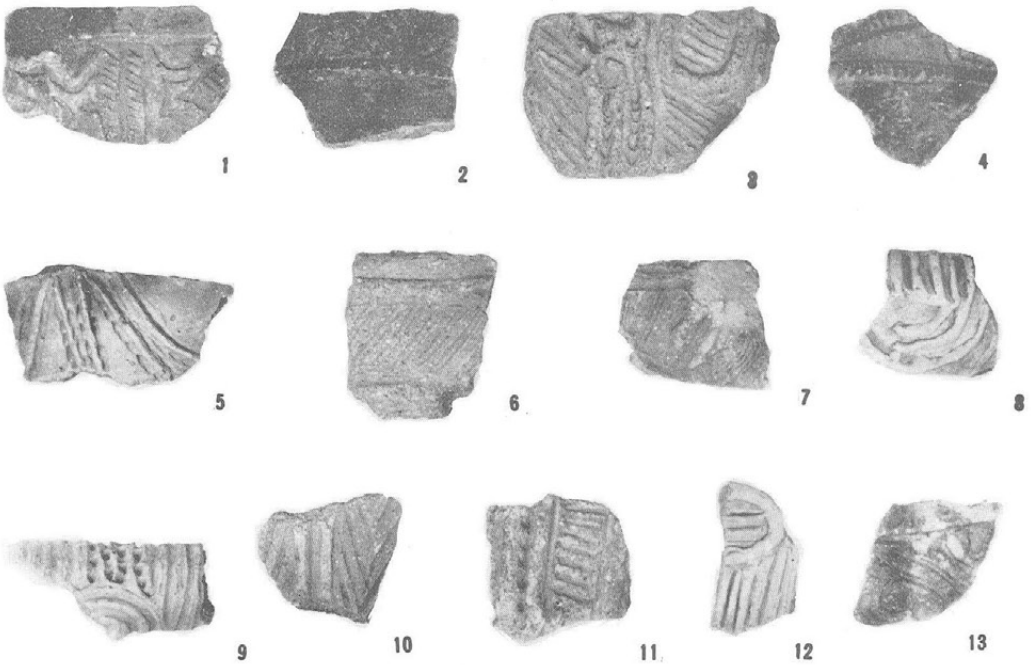
図版11　遺物出土状況



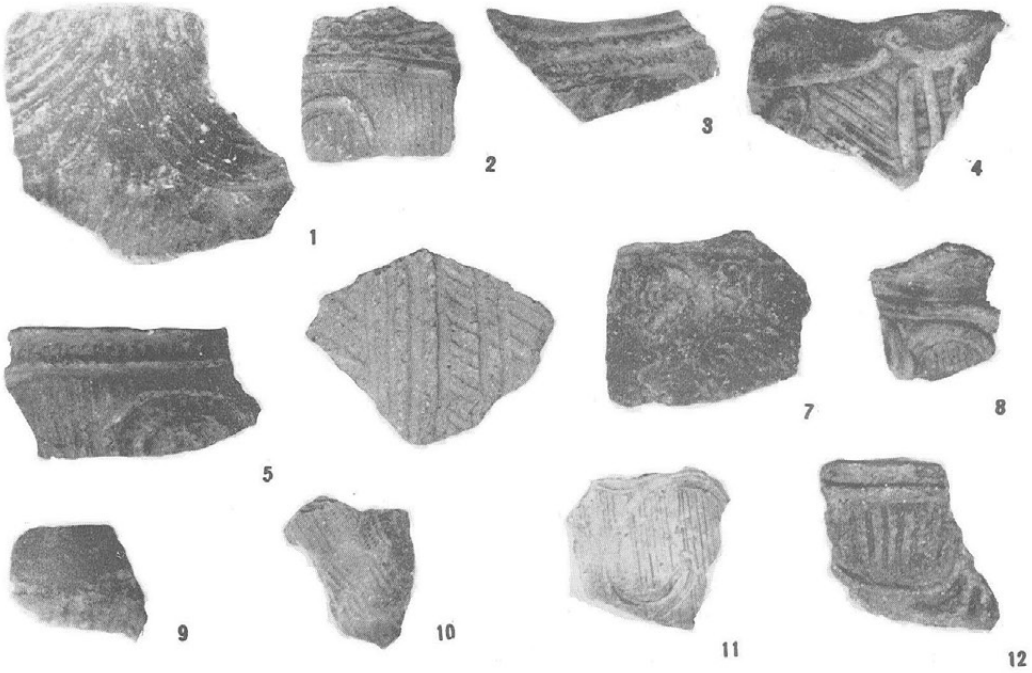
図版12　出土土器



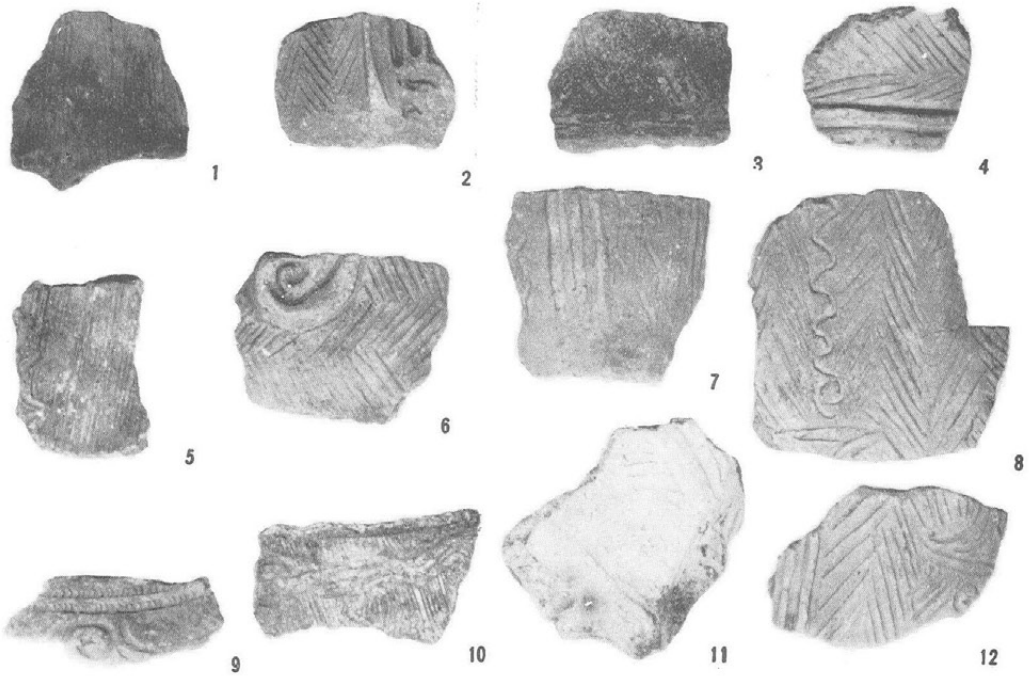
図版13　出土土器



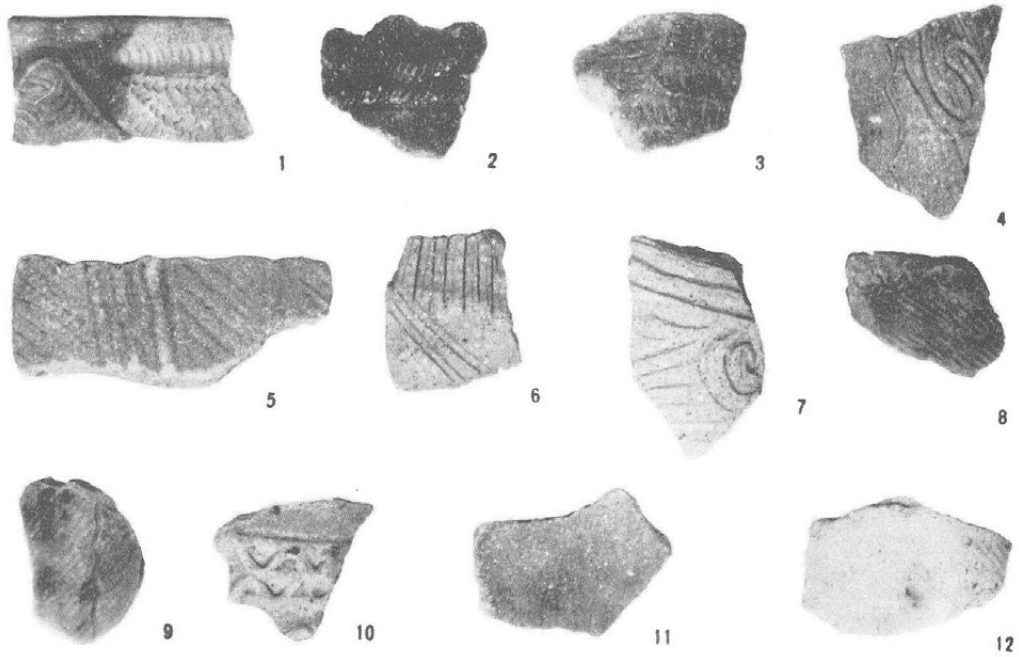
図版14　出土土器



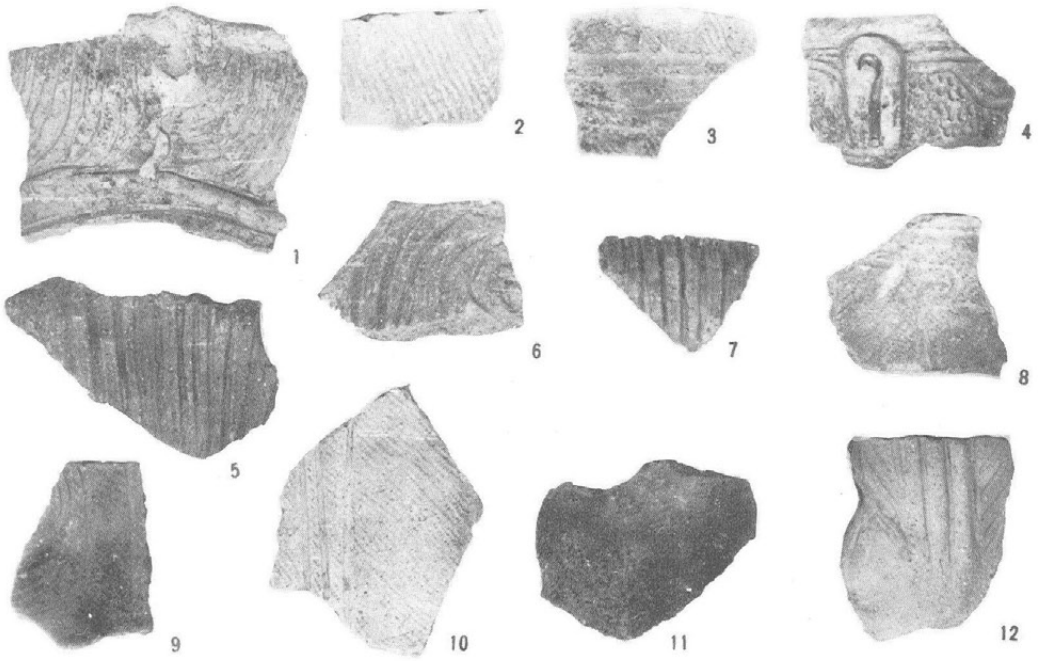
図版15　出土土器



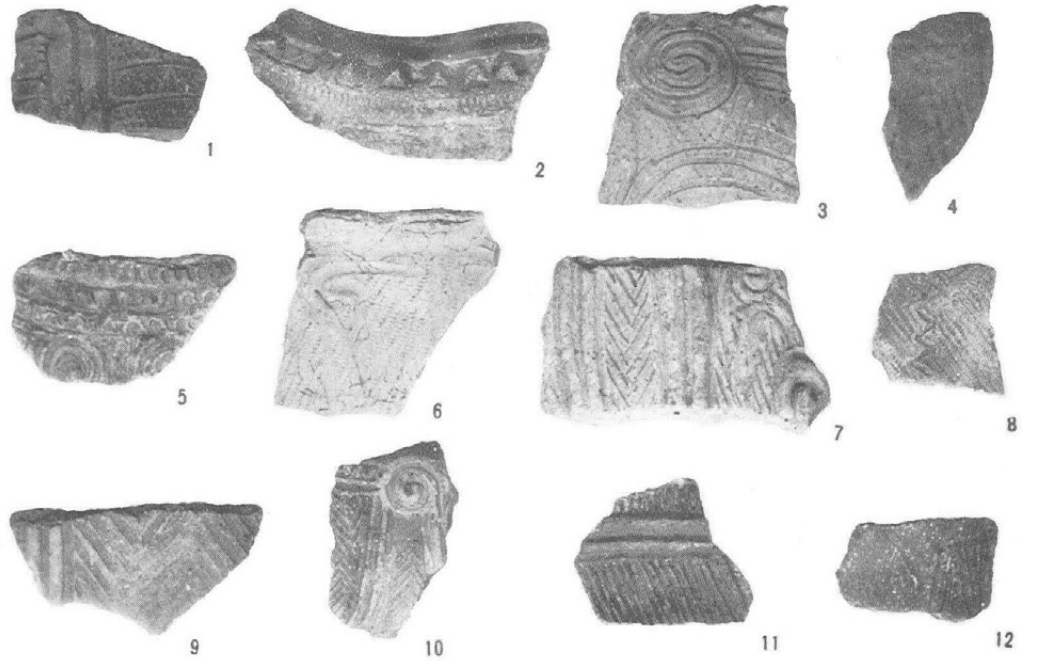
図版16　出土土器



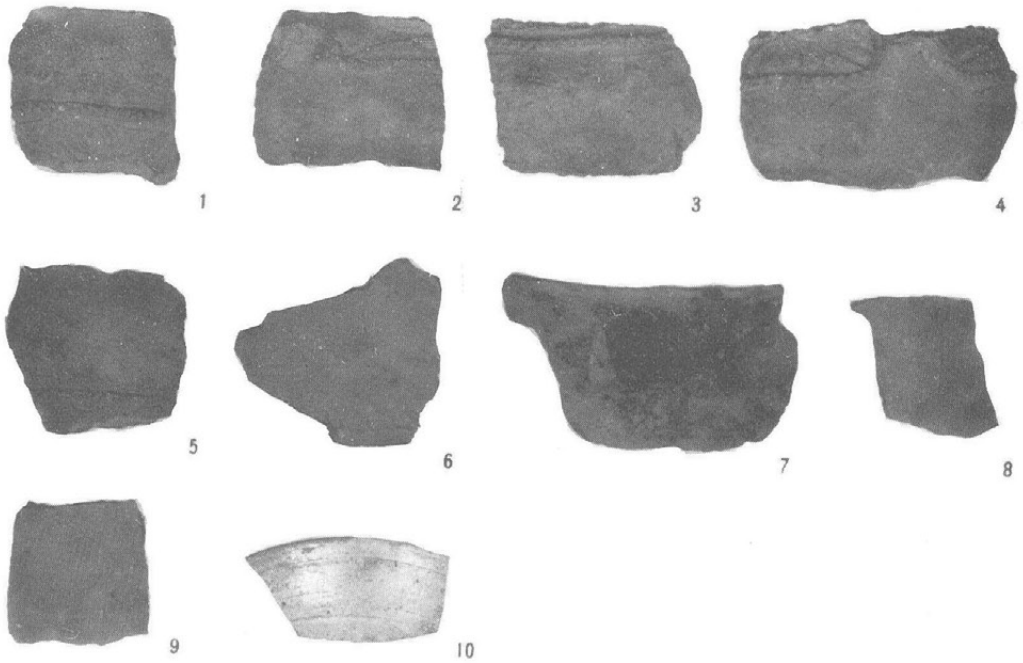
図版17　出土土器



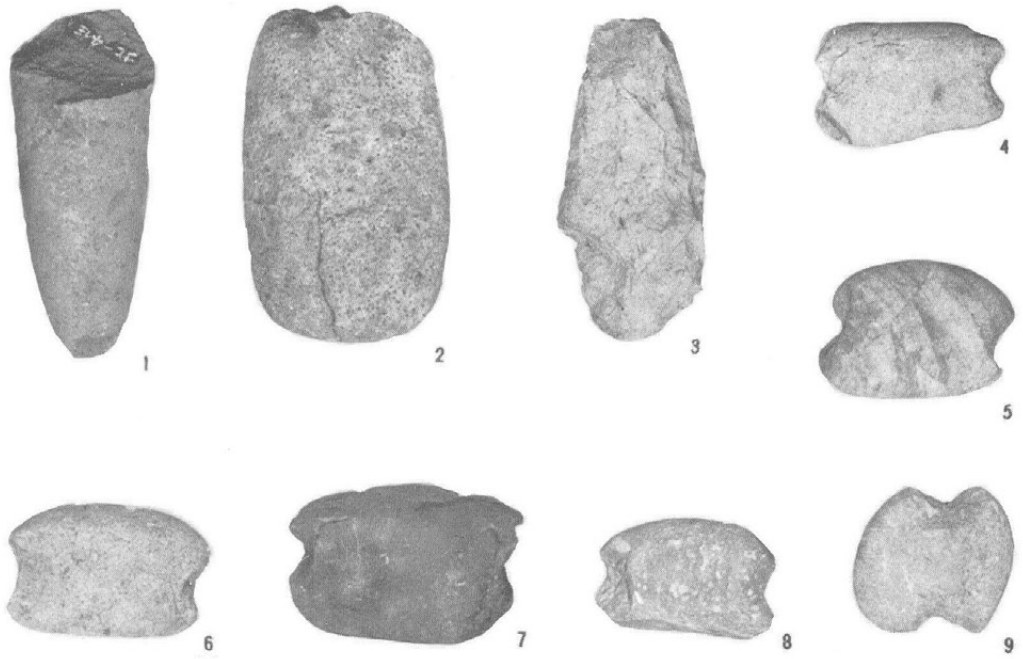
図版18　出土土器



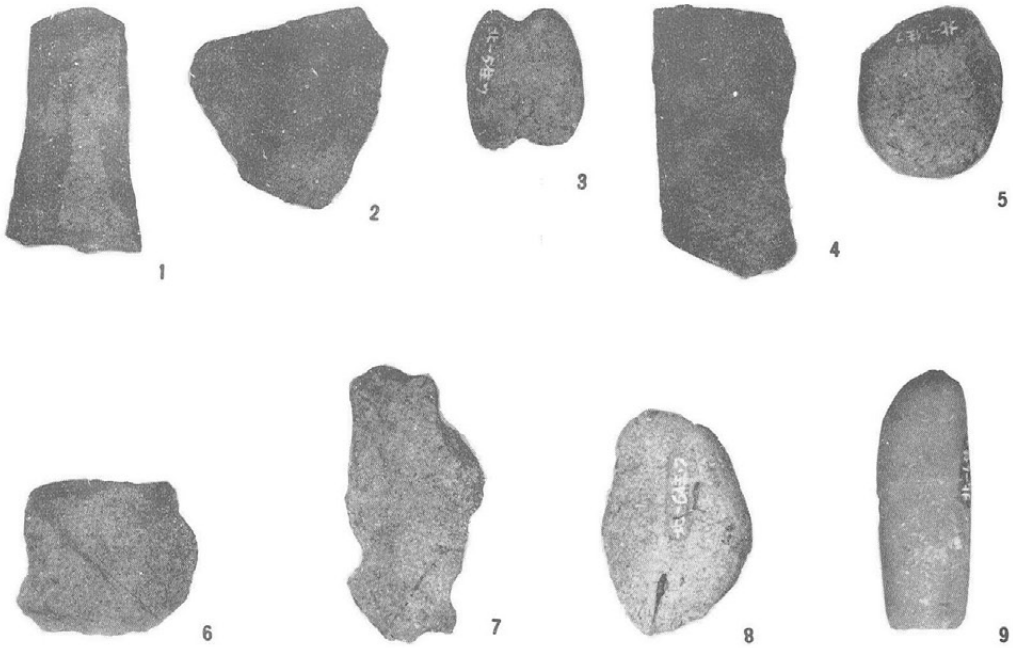
図版19　出土土器



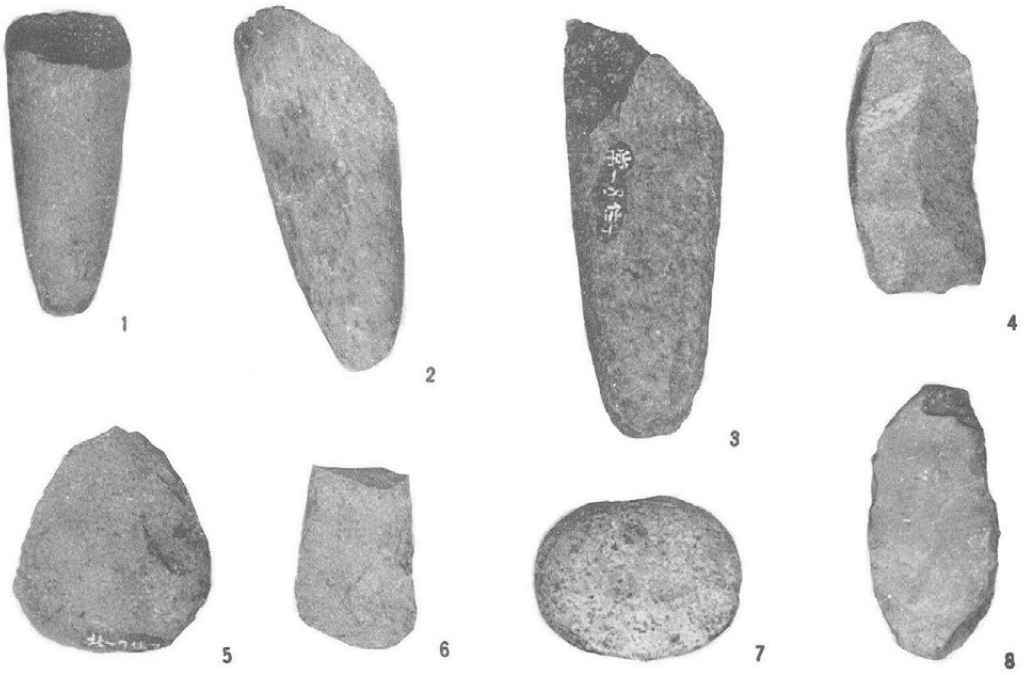
図版20　出土土器



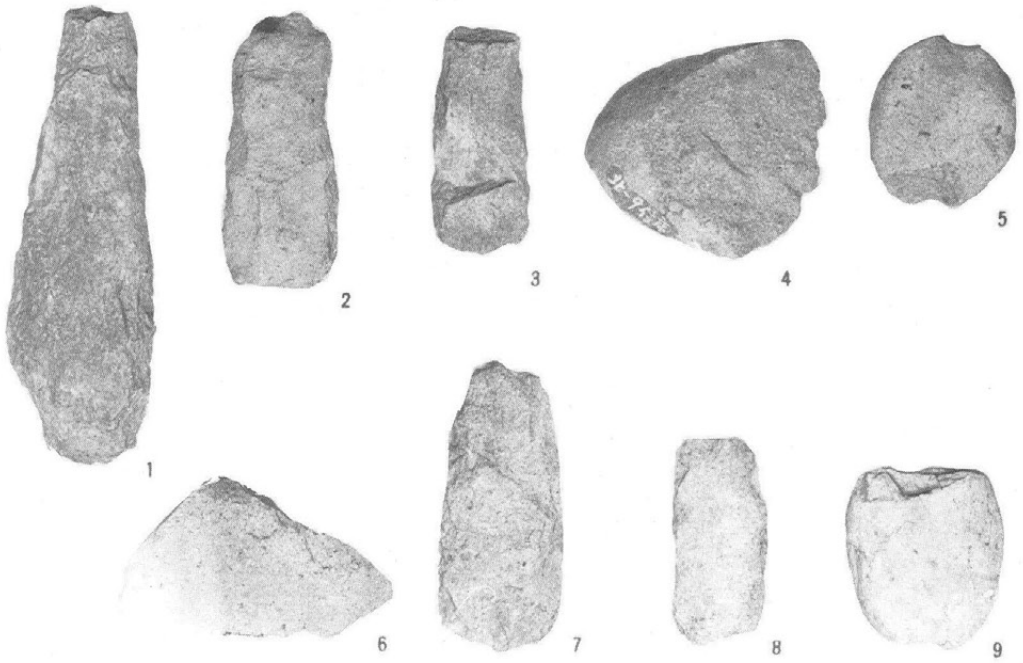
図版21　出土石器



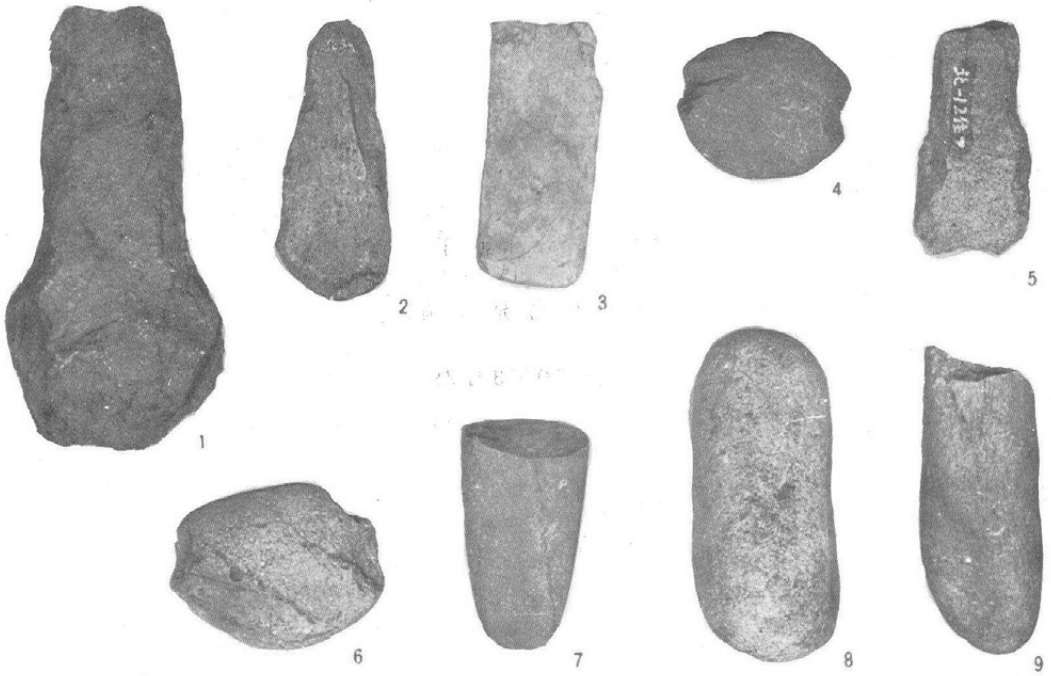
図版22　出土石器



図版23　出土石器



図版24　出土石器



図版25　出土石器

村岡南・常輪寺下・北条遺跡

——緊急発掘調査報告——

昭和50年3月29日　印刷

昭和50年3月31日　発行

発行所　長野県伊那市教育委員会

印刷所　長野県伊那市美すず上大島
みすず創美社